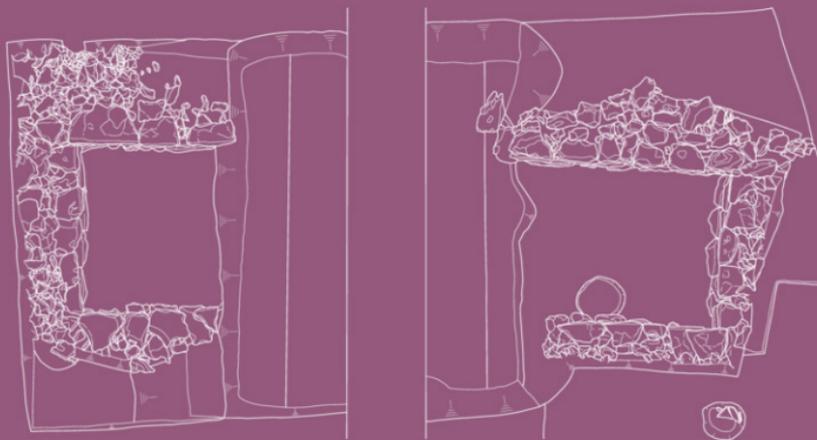


首 里 城 跡

— 銭蔵地区発掘調査報告書 —

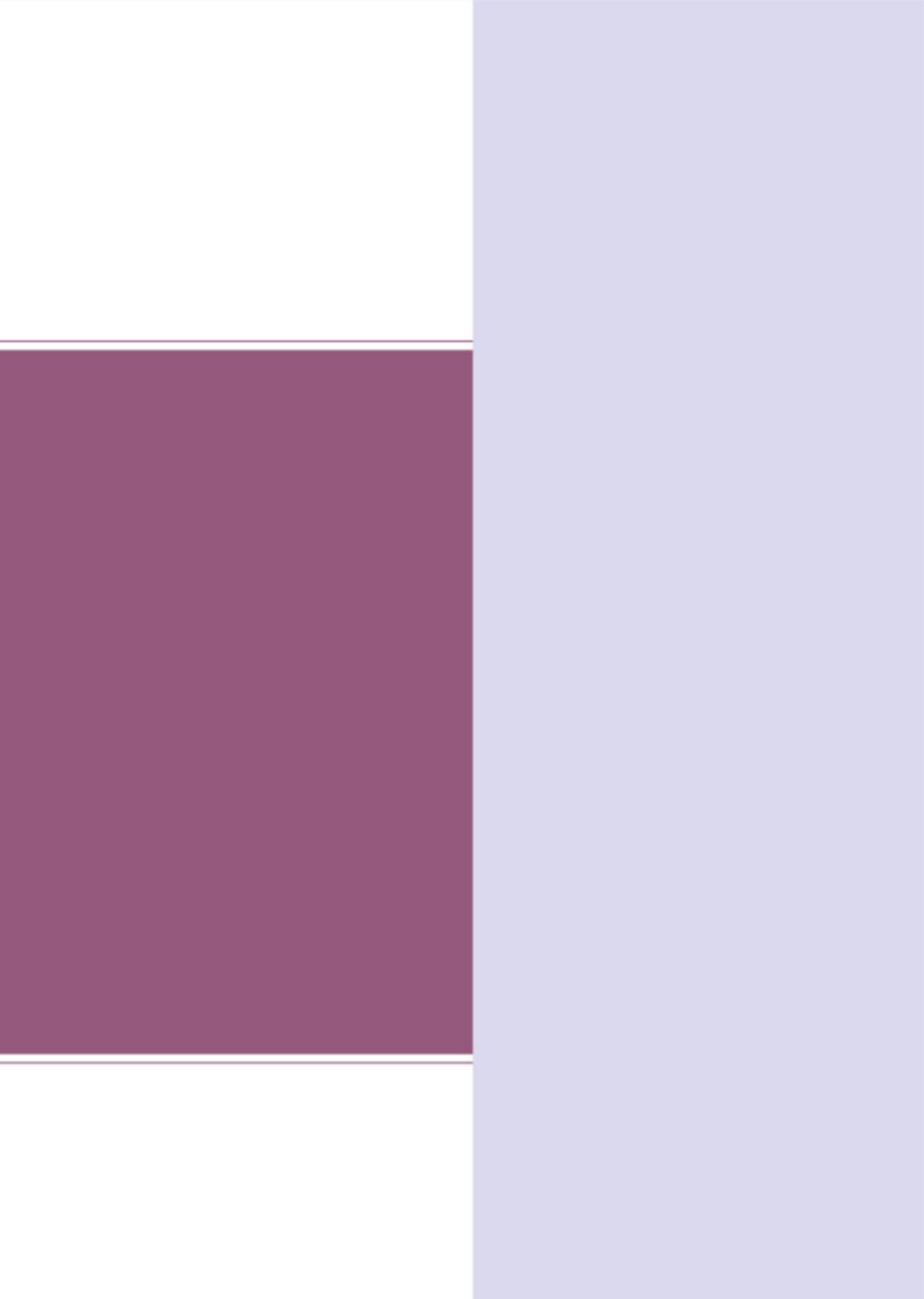
— 銭蔵地区発掘調査報告書 —

平成二十七年(二〇一五年)三月 沖縄県立埋蔵文化財センター



平成27(2015)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



首里城跡

— 銭蔵地区発掘調査報告書 —

平成27（2015）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、首里城跡の復元整備に伴い、内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが、平成 18（2007）年度～平成 20（2009）年度に行った発掘調査成果をまとめたものです。

調査地点は、首里城の北側外郭に位置する銭蔵と称される建物が存在した区域で、酒や米などの物資を納めていた蔵や厩（うまや）が設置された場所にあたります。

発掘調査の結果、首里城外郭拡張の際に行われた造成の痕跡や、16 世紀前後の方形石組・石畳等の石造遺構のほか、17 世紀前半の石造製品加工場跡、さらに近代になって当該地に設置された「首里至聖廟」のものと考えられる遺構が確認されました。

出土遺物として、中国をはじめ、タイ・ベトナム・朝鮮半島等の琉球の周辺諸国や、本土・地元沖縄産など、古くは 13 世紀代～近代に至る各地で生産された陶磁器類や金属製品等の人工遺物が得られています。また、食料とした動物の骨や貝類等の自然遺物も多く出土しており、当該地の変遷を物語るとともに、往事の生活を偲ばせています。

これらの成果をまとめた本報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について、関心を持っていただくきっかけとなれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成 27（2015）年 3 月

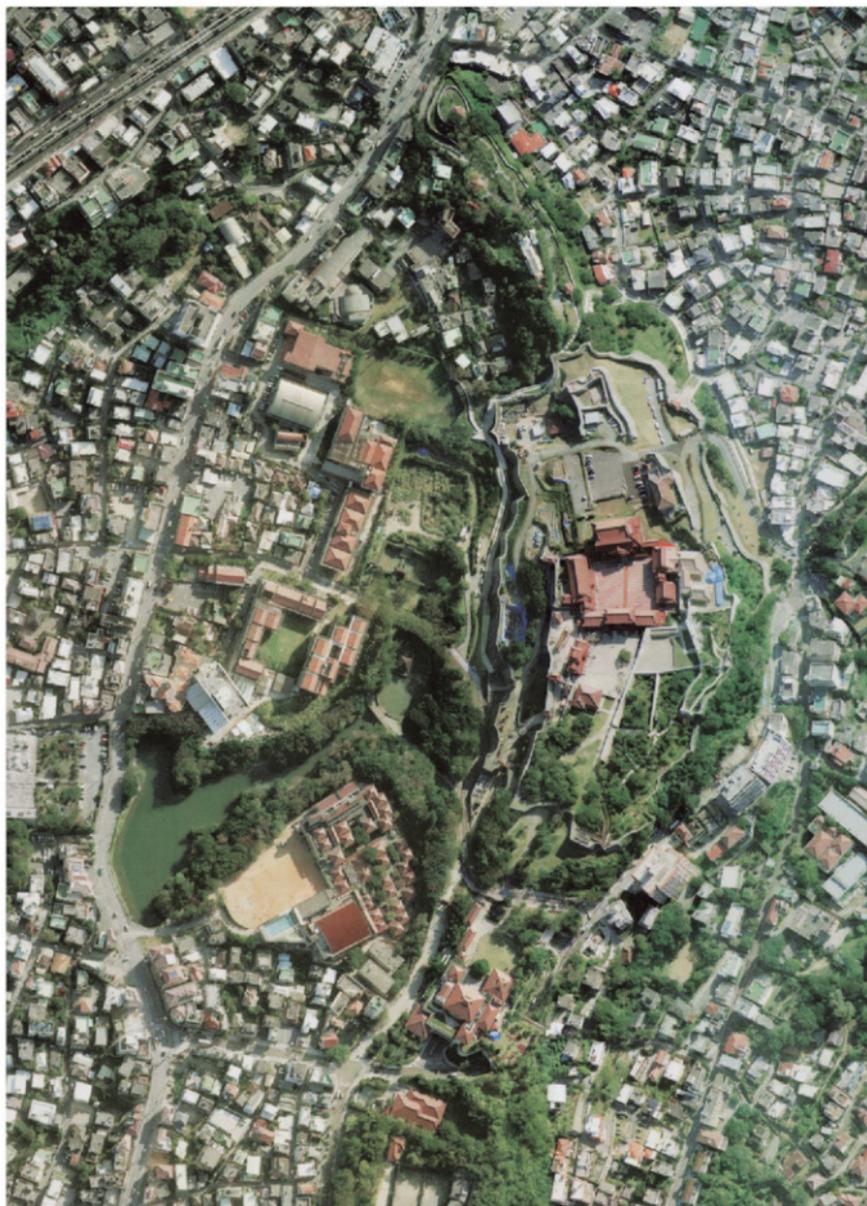
沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 下 地 英 輝



巻頭図版 1 調査区遠景（東から）



巻頭図版 2 調査区遠景（北東から）



卷頭図版3 航空写真(2009年)



卷頭図版4 航空写真（1945年・米軍撮影）



巻頭図版 5 C-2 造成土 青磁・マキガイ集中部検出状況



巻頭図版 6 C-4 新造成土 貝匙検出状況

例 言

1. 本報告書は、国営沖縄記念公園首里城地区の整備に伴い、平成 18（2007）年度～平成 20（2009）年度に実施した銭蔵地区の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 18（2007）年度～平成 20（2009）年度に実施し、資料整理作業は同センターが平成 25（2013）年度～平成 26（2014）年度に実施した。両事業とも内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より委託を受けての実施である。
3. 資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々々に資料の同定・整理指導をいただいた。記して謝意を表したい。
4. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図を使用した。
5. 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、遺構図は日本測地系、それ以外は世界測地系に基づくものである。
6. 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々々の協力のもと仲座久宜が行い、各章の執筆は次のとおり行った。

仲 座 久 宜	第 1 章・2 章、第 3 章第 1～4 節・第 5 節 6・17～19・21・24、第 5 章
宮 城 淳 一	第 3 章第 5 節 1～5
具 志 堅 清 大	第 3 章第 5 節 11～14・16
亀 島 慎 吾	第 3 章第 5 節 7・9・10・20・22・23
宮 里 知 恵	第 4 章第 5 節 8・15
保 久 盛 陽	第 4 章第 5 節 9・10
波 木 基 真	第 3 章第 5 節 27
パリー・サーヴェイ	第 4 章第 1・2 節

7. 本書に掲載した調査時の写真撮影は仲座久宜が行い、出土遺物の撮影は矢舟章浩、島袋久美子が行った。
8. 発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序	
巻頭図版	
例言	
第1章 調査に至る経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査方法と調査区の設定	10
第2節 発掘調査の経過	12
第3節 資料整理作業の経過	14
第4節 層序と遺構	
1 層序	15
2 遺構	22
第5節 遺物	
1 中国産青磁	46
2 中国産白磁	58
3 中国産青花	64
4 中国産褐釉陶器	72
5 その他の中国産陶磁器・土器	80
6 その他の輸入陶磁器・土器	84
7 本土産陶磁器	90
8 沖縄産施釉陶器	96
9 初期沖縄産無釉陶器	104
10 沖縄産無釉陶器	118
11 陶質土器	128
12 瓦質土器・土器・カムイヤキ・土製品	132
13 円盤状製品	136
14 煙管	140
15 金属製品	142
16 銭貨	156
17 漆製品	166
18 石製品・石造物	167
19 玉・ガラス製品	178
20 骨製品・貝製品	182
21 壁面材	186
22 瓦	187
23 埴	214
24 その他の遺物	229
25 貝類遺体・微小貝	231
27 脊椎動物遺体	238
第4章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定・樹種同定	299
第2節 漆塗膜の分析	303
第5章 総括	305
引用・参考文献	312
報告書抄録	319

目次

第 1 図	沖縄本島の位置図	5	第 52 図	簪の部位名称	143
第 2 図	首里城跡の位置及び周辺の遺跡	7	第 53 図	金属製品 1	148
第 3 図	調査区域図	8	第 54 図	金属製品 2	150
第 4 図	旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図	8	第 55 図	金属製品 3	152
第 5 図	旧首里城図	9	第 56 図	金属製品 4	154
第 6 図	旧琉球大学校舎配置図	9	第 57 図	銭貨 1	158
第 7 図	グリッド設定図	10	第 58 図	銭貨 2	160
第 8 図	C-2 層序	16	第 59 図	銭貨 3	162
第 9 図	C-3 層序	17	第 60 図	銭貨 4	164
第 10 図	C-4 層序	19	第 61 図	種別出土状況	168
第 11 図	B-9 トレンチ層序	21	第 62 図	グリッド別出土状況	168
第 12 図	遺構配置図	23	第 63 図	層別出土状況	168
第 13 図	遺構 1 (石畳遺構、集石遺構)	25	第 64 図	石碑の法量	169
第 14 図	遺構 2 (方形石組遺構)	26	第 65 図	石製品・石造物 1	172
第 15 図	遺構 3 (方形石組遺構)	27	第 66 図	石製品・石造物 2	174
第 16 図	石列 1	32	第 67 図	石碑	176
第 17 図	石列 2・散石遺構	33	第 68 図	玉・ガラス製品	180
第 18 図	礎石跡	34	第 69 図	貝製品	183
第 19 図	ピット状遺構 1	36	第 70 図	貝製品	184
第 20 図	ピット状遺構 2	37	第 71 図	雁振瓦の分類	188
第 21 図	石造製品加工場跡 1	38	第 72 図	ヘラ描き印の位置	190
第 22 図	石造製品加工場跡 2	39	第 73 図	高麗系丸瓦・平瓦 大和系軒平瓦・雁振瓦	196
第 23 図	マガキガイ集中検出状況	45	第 74 図	大和系丸瓦・平瓦	198
第 24 図	中国産青磁 1	52	第 75 図	明朝系軒丸瓦 1	200
第 25 図	中国産青磁 2	54	第 76 図	明朝系軒丸瓦 2	202
第 26 図	中国産青磁 3	56	第 77 図	明朝系軒平瓦 1	204
第 27 図	中国産白磁	62	第 78 図	明朝系軒平瓦 2	206
第 28 図	中国産青花 1	68	第 79 図	明朝系丸瓦 1	208
第 29 図	中国産青花 2	70	第 80 図	明朝系丸瓦 2	210
第 30 図	中国産褐釉陶器 1	76	第 81 図	明朝系平瓦	212
第 31 図	中国産褐釉陶器 2	78	第 82 図	埴の刻印位置	215
第 32 図	その他の中国産陶磁器	82	第 83 図	埴 1	218
第 33 図	その他の輸入陶磁器・土器	88	第 84 図	埴 2	220
第 34 図	本土産陶磁器	94	第 85 図	埴 3	222
第 35 図	沖縄産施釉陶器 1	100	第 86 図	埴 4	224
第 36 図	沖縄産施釉陶器 2	102	第 87 図	埴 5	226
第 37 図	初期沖縄産無釉陶器 1	110	第 88 図	埴 6	228
第 38 図	初期沖縄産無釉陶器 2	112	第 89 図	その他の遺物	230
第 39 図	初期沖縄産無釉陶器 3	114	第 90 図	貝類遺体種別検出状況	233
第 40 図	初期沖縄産無釉陶器 4	116	第 91 図	貝類遺体層別検出状況	233
第 41 図	沖縄産無釉陶器 1	122	第 92 図	貝類遺体生息場所類型組成	233
第 42 図	沖縄産無釉陶器 2	124	第 93 図	脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の組成 (NISP 比)	240
第 43 図	沖縄産無釉陶器 3	126	第 94 図	魚類遺体 (ピックアップ資料) の組成 (NISP 比)	241
第 44 図	陶質土器	130	第 95 図	魚類遺体 (水洗選別資料) の組成 (NISP 比)	241
第 45 図	瓦質土器	133	第 96 図	鳥獣類遺体 (ピックアップ資料) の組成 (NISP 比)	241
第 46 図	土器・カムイヤキ・土製品	134			
第 47 図	円盤状製品の最大径と数量の相関	136			
第 48 図	円盤状製品	138			
第 49 図	煙管の部位名称	140			
第 50 図	煙管	141			
第 51 図	釘の部位名称	142			

第 97 図	Py-GC/MS 分析結果 (下地層込み) ……	304
第 98 図	Py-GC/MS 分析結果 (赤色塗膜のみ) ……	304
第 99 図	クロスセクション分析結果 ……	304
第 100 図	横内家資料平面図 (部分) ……	305
第 101 図	旧首里城熊本鎮台沖繩分遣隊 配置図 (部分) ……	305
第 102 図	旧首里城図 (部分) ……	305
第 103 図	旧琉球大学校舎配置図 (部分) ……	305

第 104 図	首里旧城之図 ……	306
第 105 図	首里城内の眺望 ……	306
第 106 図	横内家平面図と遺構平面図の重ね図 ……	308
第 107 図	米軍撮影航空写真と横内家資料 平面図の重ね図 ……	309
第 108 図	米軍撮影航空写真と 遺構平面図の重ね図 ……	309

図 版 目 次

図版 1	調査区全景 ……	11
図版 2	発掘調査経過画像 ……	13
図版 3	資料整理経過画像 ……	14
図版 4	C2・3 層序 ……	18
図版 5	C3・4 層序 ……	20
図版 6	B9 トレンチ層序 ……	21
図版 7	調査区全景 ……	22
図版 8	平成 4 年度検出遺構 1 ……	24
図版 9	平成 4 年度検出遺構 2 ……	24
図版 10	石畳遺構・礎石跡 ……	28
図版 11	方形石組遺構 1 ……	29
図版 12	方形石組遺構 2 ……	30
図版 13	方形石組遺構 3 ……	31
図版 14	石列 1 ……	32
図版 15	石列 2・敷石遺構 ……	33
図版 16	礎石跡 5 ……	34
図版 17	礎石跡 ……	35
図版 18	ビット状遺構 1 ……	36
図版 19	ビット状遺構 2 ……	37
図版 20	石造製品加工場跡 ……	40
図版 21	集石遺構検出状況 ……	40
図版 22	遺物出土状況 1 ……	42
図版 23	遺物出土状況 2 ……	43
図版 24	遺物出土状況 3 ……	44
図版 25	中国産青磁 1 ……	53
図版 26	中国産青磁 2 ……	55
図版 27	中国産青磁 3 ……	57
図版 28	中国産白磁 ……	63
図版 29	中国産青花 1 ……	69
図版 30	中国産青花 2 ……	71
図版 31	中国産褐釉陶器 1 ……	77
図版 32	中国産褐釉陶器 2 ……	79
図版 33	その他の中国産陶磁器 ……	83
図版 34	その他の輸入陶磁器・土器 ……	89
図版 35	本土産陶磁器 ……	95
図版 36	沖縄産施釉陶器 1 ……	101
図版 37	沖縄産施釉陶器 2 ……	103
図版 38	初期沖縄産無軸陶器 1 ……	111
図版 39	初期沖縄産無軸陶器 2 ……	113
図版 40	初期沖縄産無軸陶器 3 ……	115
図版 41	初期沖縄産無軸陶器 4 ……	117
図版 42	沖縄産無軸陶器 1 ……	123
図版 43	沖縄産無軸陶器 2 ……	125

図版 44	沖縄産無軸陶器 3 ……	127
図版 45	陶質土器 ……	131
図版 46	瓦質土器 ……	133
図版 47	土器・カムイヤキ・土製品 ……	135
図版 48	円盤状製品 ……	139
図版 49	煙管 ……	141
図版 50	金属製品 1 ……	149
図版 51	金属製品 2 ……	151
図版 52	金属製品 3 ……	153
図版 53	金属製品 4 ……	155
図版 54	銭貨 1 ……	159
図版 55	銭貨 2 ……	161
図版 56	銭貨 3 ……	163
図版 57	銭貨 4 ……	165
図版 58	塗漆膜出土状況 ……	166
図版 59	石材剥片関係画像 ……	168
図版 60	石碑関係画像 ……	169
図版 61	石製品・石造物 1 ……	173
図版 62	石製品・石造物 2 ……	175
図版 63	石碑 ……	177
図版 64	玉・ガラス製品 ……	181
図版 65	骨製品 ……	183
図版 66	貝製品 ……	185
図版 67	壁面材 ……	186
図版 68	高麗系丸瓦・平瓦 大和系軒平瓦・ 雁振瓦 ……	197
図版 69	大和系丸瓦・平瓦 ……	199
図版 70	明朝系軒丸瓦 1 ……	201
図版 71	明朝系軒丸瓦 2 ……	203
図版 72	明朝系軒平瓦 1 ……	205
図版 73	明朝系軒平瓦 2 ……	207
図版 74	明朝系丸瓦 1 ……	209
図版 75	明朝系丸瓦 2 ……	211
図版 76	明朝系平瓦 ……	213
図版 77	埴 1 ……	219
図版 78	埴 2 ……	221
図版 79	埴 3 ……	223
図版 80	埴 4 ……	225
図版 81	埴 5 ……	227
図版 82	埴 6 ……	228
図版 83	その他の遺物 ……	230
図版 84	貝類遺体 1 巻貝 ……	234
図版 85	貝類遺体 2 巻貝 ……	235

図版 86	貝類遺体 3 二枚貝	236
図版 87	貝類遺体 4 微小貝	237
図版 88	脊椎動物遺体 1 魚 (1)	251
図版 89	脊椎動物遺体 2 魚 (2)	252
図版 90	脊椎動物遺体 3 獣骨 (1)	253
図版 91	脊椎動物遺体 4 獣骨 (2)	254

図版 92	脊椎動物遺体 5 獣骨 (3)	255
図版 93	炭化材・木材	302
図版 94	土様式	306
図版 95	至聖廟	306

表 目 次

第 1 表	銭蔵地区層序と年代	15
第 2 表	中国産青磁観察一覽 1	47
第 2 表	中国産青磁観察一覽 2	48
第 2 表	中国産青磁観察一覽 3	49
第 2 表	中国産青磁観察一覽 4	50
第 2 表	中国産青磁観察一覽 5	51
第 3 表	中国産白磁観察一覽 1	59
第 3 表	中国産白磁観察一覽 2	60
第 3 表	中国産白磁観察一覽 3	61
第 4 表	中国産青花観察一覽 1	65
第 4 表	中国産青花観察一覽 2	66
第 4 表	中国産青花観察一覽 3	67
第 5 表	中国産褐釉陶器観察一覽 1	73
第 5 表	中国産褐釉陶器観察一覽 2	74
第 5 表	中国産褐釉陶器観察一覽 3	75
第 6 表	その他の中国産陶磁器・土器観察一覽	81
第 7 表	その他の輸入陶磁器・土器観察一覽 1	85
第 7 表	その他の輸入陶磁器・土器観察一覽 2	86
第 7 表	その他の輸入陶磁器・土器観察一覽 3	87
第 8 表	本土産陶磁器観察一覽 1	91
第 8 表	本土産陶磁器観察一覽 2	92
第 8 表	本土産陶磁器観察一覽 3	93
第 9 表	沖縄産施釉陶器観察一覽 1	97
第 9 表	沖縄産施釉陶器観察一覽 2	98
第 9 表	沖縄産施釉陶器観察一覽 3	99
第 10 表	初期沖縄産無釉陶器観察一覽 1	105
第 10 表	初期沖縄産無釉陶器観察一覽 2	106
第 10 表	初期沖縄産無釉陶器観察一覽 3	107
第 10 表	初期沖縄産無釉陶器観察一覽 4	108
第 10 表	初期沖縄産無釉陶器観察一覽 5	109
第 11 表	沖縄産無釉陶器観察一覽 1	119
第 11 表	沖縄産無釉陶器観察一覽 2	120
第 11 表	沖縄産無釉陶器観察一覽 3	121
第 12 表	陶質土器観察一覽 1	128
第 12 表	陶質土器観察一覽 2	129
第 13 表	瓦質土器・土器・カムイヤキ・土製品観察一覽	132
第 14 表	円盤状製品観察一覽	137
第 15 表	煙管観察一覽	140
第 16 表	金属製品観察一覽 1	144
第 16 表	金属製品観察一覽 2	145
第 16 表	金属製品観察一覽 3	146
第 16 表	金属製品観察一覽 4	147
第 17 表	銭貨観察一覽 1	156
第 17 表	銭貨観察一覽 2	157

第 18 表	漆出土状況一覽	166
第 19 表	石製品・石遺物観察一覽	171
第 20 表	玉製品観察一覽	178
第 20 表	ガラス製品観察一覽	179
第 21 表	骨製品観察一覽	182
第 22 表	貝製品観察一覽	182
第 23 表	大和系平瓦側面部の種類と説明	187
第 24 表	軒丸瓦分類表	189
第 25 表	軒平瓦分類表	190
第 26 表	丸瓦のヘラ描の種類と説明	190
第 27 表	丸瓦の色調とヘラ描 1	191
第 27 表	丸瓦の色調とヘラ描 2	191
第 28 表	明朝系丸瓦	191
第 29 表	瓦観察一覽 1	192
第 29 表	瓦観察一覽 2	193
第 29 表	瓦観察一覽 3	194
第 29 表	瓦観察一覽 4	195
第 30 表	埴の刻印・ヘラ描の種類と説明	215
第 31 表	埴の色調と刻印・ヘラ描	215
第 32 表	埴観察一覽 1	216
第 32 表	埴観察一覽 2	217
第 33 表	その他の遺物観察一覽	229
第 34 表	貝類遺体の分類と生息場所類型 1	231
第 34 表	貝類遺体の分類と生息場所類型 2	232
第 35 表	貝類遺体の生息場所類型表 (黒住 1987)	232
第 36 表	脊椎動物遺体出土分類群一覽	240
第 37 表	水洗選別堆積物サンプルの一覽	240
第 38 表	魚類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 1	242
第 38 表	魚類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 2	243
第 38 表	魚類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 3	244
第 38 表	魚類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 4	245
第 38 表	魚類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 5	246
第 39 表	魚類遺体 (水洗選別資料)	
	出土状況一覽	247
第 40 表	両爬・鳥獣類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 1	248
第 40 表	両爬・鳥獣類遺体 (ピックアップ資料)	
	出土状況一覽 2	249
第 41 表	両爬・鳥獣類遺体 (水洗選別資料)	
	出土状況一覽	249

第42表	NISP・MNI組成一覧	250	第70表	大和系雁振瓦出土状況一覧	279
第43表	中国産青磁出土状況一覧1	257	第71表	大和系役瓦出土状況一覧	279
第43表	中国産青磁出土状況一覧2	257	第72表	近代大和系瓦出土状況一覧	279
第44表	中国産白磁出土状況一覧1	258	第73表	明朝系軒丸瓦出土状況一覧1	281
第44表	中国産白磁出土状況一覧2	258	第73表	明朝系軒丸瓦出土状況一覧2	281
第45表	中国産青花出土状況一覧1	259	第74表	明朝系軒平瓦出土状況一覧1	282
第45表	中国産青花出土状況一覧2	259	第74表	明朝系軒平瓦出土状況一覧2	282
第46表	中国産褐釉陶器出土状況一覧1	260	第75表	明朝系丸瓦出土状況一覧1	283
第46表	中国産褐釉陶器出土状況一覧2	260	第75表	明朝系丸瓦出土状況一覧2	284
第46表	中国産褐釉陶器出土状況一覧3	260	第75表	明朝系丸瓦出土状況一覧3	285
第47表	その他の中国産陶磁器・土器		第76表	明朝系平瓦出土状況一覧1	286
	出土状況一覧1	261	第76表	明朝系平瓦出土状況一覧2	286
第47表	その他の中国産陶磁器・土器		第77表	埴出土状況一覧1	287
	出土状況一覧2	261	第77表	埴出土状況一覧2	288
第48表	その他の輸入陶磁器・土器		第78表	その他の遺物出土状況一覧	277
	出土状況一覧1	262	第79表	貝類(巻貝等・ビッカアップ)	
第48表	その他の輸入陶磁器・土器			出土状況一覧1	289
	出土状況一覧2	262	第79表	貝類(巻貝等・ビッカアップ)	
第48表	その他の輸入陶磁器・土器			出土状況一覧2	290
	出土状況一覧3	262	第79表	貝類(巻貝等・ビッカアップ)	
第49表	本土産陶磁器出土状況一覧	263		出土状況一覧3	291
第50表	沖繩産施釉陶器出土状況一覧1	265	第79表	貝類(巻貝等・ビッカアップ)	
第50表	沖繩産施釉陶器出土状況一覧2	266		出土状況一覧4	292
第51表	初期沖繩産無釉陶器出土状況一覧1	267	第79表	貝類(巻貝等・ビッカアップ)	
第51表	初期沖繩産無釉陶器出土状況一覧2	268		出土状況一覧5	293
第52表	沖繩産無釉陶器出土状況一覧1	269	第79表	貝類(巻貝等・ビッカアップ)	
第52表	沖繩産無釉陶器出土状況一覧2	269		出土状況一覧6	294
第53表	陶質土器出土状況一覧1	264	第80表	貝類(二枚貝等・ビッカアップ)	
第53表	陶質土器出土状況一覧2	264		出土状況一覧1	295
第54表	瓦質土器出土状況一覧	270	第80表	貝類(二枚貝等・ビッカアップ)	
第55表	土器・カムイヤキ・埴埴出土状況一覧	270		出土状況一覧2	295
第56表	土製品出土状況一覧	270	第80表	貝類(二枚貝等・ビッカアップ)	
第57表	円盤状製品出土状況一覧	270		出土状況一覧3	296
第58表	煙管出土状況一覧	270	第80表	貝類(二枚貝等・ビッカアップ)	
第59表	金属製品出土状況一覧1	271		出土状況一覧4	296
第59表	金属製品出土状況一覧2	271	第80表	貝類(二枚貝等・ビッカアップ)	
第59表	金属製品出土状況一覧3	272		出土状況一覧5	297
第59表	金属製品出土状況一覧4	272	第80表	貝類(二枚貝等・ビッカアップ)	
第60表	銭貨出土状況一覧1	273		出土状況一覧6	297
第60表	銭貨出土状況一覧2	274	第81表	貝類(巻貝等・水洗選別)	
第60表	銭貨出土状況一覧3	275		出土状況一覧	298
第60表	銭貨出土状況一覧4	276	第82表	貝類(二枚貝等・水洗選別)	
第61表	石製品・石遺物出土状況一覧	277		出土状況一覧	298
第62表	玉出土状況一覧	277	第83表	微小貝出土一覧1(陸産・淡水産)	298
第63表	ガラス製品出土状況一覧	277	第83表	微小貝出土一覧2(海産)	298
第64表	骨製品出土状況一覧	278	第84表	放射性炭素年代測定結果	300
第65表	貝製品出土状況一覧	278	第85表	暦年較正結果	300
第66表	壁面材出土状況一覧1	278	第86表	樹種同定結果	301
第66表	壁面材出土状況一覧2	278	第87表	XRF一覧表	303
第66表	壁面材出土状況一覧3	278			
第67表	高麗系瓦出土状況一覧	279			
第68表	大和系軒平瓦出土状況一覧	279			
第69表	大和系丸瓦・平瓦出土状況一覧	280			

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

かつての首里には、国宝を含む多くの文化財が残されていたが、先の沖縄戦により、その殆どが灰燼に帰すことになる。終戦後発足した琉球政府文化財保護委員会は、戦災により破壊された文化財の復元整備として、昭和32（1957）年に國比屋武御嶽を嚆矢に、守礼門、円覚寺総門などの整備を開始する。その後、同委員会は昭和45（1970）年に首里城跡及び周辺の戦災文化財復元計画を策定し、同年、日本政府は第一次沖縄復帰対策要綱を閣議決定した。その中で戦災文化財の復元修理を推進する旨を明らかにし、翌年にはその調査費が計上されている。

そして沖縄は、昭和47（1972）年に本土復帰を果たす。その一環で、同年策定された第一次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づき、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が開始されることになる。

首里城内郭地区の整備は、昭和61（1986）年度に国営沖縄記念公園首里城地区として整備されることが閣議決定されたことにより始まる。それ以降、年次的に発掘による遺構確認調査が実施され、その調査成果及び、昭和59（1984）年度に沖縄県により策定された、首里城公園基本計画及び、首里城跡を中心とした首里の街づくりの方向性を示した首里杜（スイムイ）構想の理念に基づき、今日まで多くの建造物の復元整備が行われ、一般に公開されている。今回報告の対象となる調査はこれまでの経緯をふまえ、国営沖縄記念公園事務所の委託により、沖縄県立埋蔵文化財センターにより実施された。

調査にあたっては、各年度とも過年度に委託元である内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所と調整した上で予算要求を行った。その翌年の調査開始前には、文化財保護法第125条第1項の規定により、遺跡を所轄する那覇市教育委員会を経由し、沖縄県教育庁文化課へ文化庁長官あて現状変更許可申請の進達を依頼し、その後、那覇市教育委員会を経由し、文化庁長官から現状変更許可の通知を受けた上で調査を開始した。

また調査終了後には、沖縄県教育庁文化課へ発見された埋蔵文化財（出土品）の内訳・数量の報告を行い、業務完了報告を提出することで年度ごとに事業を終えた。

第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成18（2007）年度～平成20（2009）年度に実施し、資料整理作業は平成25（2013）年度～平成26（2014）年度に実施した。その体制は次のとおりである（職名は当時のもの）。

平成18（2006）年度（発掘調査）

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 仲宗根用英

事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 千木良芳範、課長補佐 島袋 洋
記念物係 主幹兼係長 盛本 勲、専門員 新垣 力

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 田場清志
副所長兼庶務課長 瑞慶覧康博、庶務課主査 玉寄秀人、山田恵美子、
主任 城間奈津子
調査課長 岸本義彦、主任 仲座久宜、専門員（臨） 小橋川 剛

発掘調査作業 調査課主任 仲座久宜

文化財調査嘱託員 比嘉優子、天久瑞香

発掘調査作業員 安次富マサ子、石川栄有、大嶺愛子、川上益子、國吉長輝、栗山盛義、
比嘉賀商、高江洲君子、玉城 洋、仲宗根 孝、仲間長祥、西島本成子、松門 孝、
宮城悦子

平成19(2007)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 仲村守和

事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 千木良芳範、記念物班班長 鳥袋 洋、専門員 瀬戸哲也

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 名嘉政修
総務課長 瑞慶寛康博、主査 玉寄秀人、山田恵美子、主任 村吉由美子
調査課長 岸本義彦、主任 仲座久宜

発掘調査作業 調査課主任 仲座久宜
文化財調査嘱託員 天久瑞香、伊集ゆきの、岸本竹美、小橋川 剛、玉城照美、比嘉優子、
山田浩久、矢舟章浩
発掘調査作業員 安次富マサ子、石川栄有、浦添美知子、大嶺愛子、川上益子、
栗山盛義、崎濱スエ子、比嘉賀商、比嘉洋子、比嘉 覚、樋口光子、松門 孝、
又吉康和、宮城悦子、安村重保

平成20(2008)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 仲村守和

事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 千木良芳範、記念物班班長 鳥袋 洋、指導主事 久高 健

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 名嘉政修
総務班長 嘉手苺 勤、総務班主査 山田恵美子、主任 村吉由美子
調査班長 岸本義彦、主任 仲座久宜

発掘調査作業 調査班主任 仲座久宜
文化財調査嘱託員 岸本竹美、大堀皓平
発掘調査作業員 安次富マサ子、大嶺愛子、川上益子、栗山盛義、高江渕君子、比嘉賀商、
比嘉麻智子、樋口光子、松門 孝、宮城悦子、安村重保、又吉志麻子

平成25(2013)年度(資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 諸見里 明

事業所管 沖縄県教育庁文化財課 課長 新垣悦男、記念物班班長 盛本 勲、主任専門員 山本正昭

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 下地英輝、副参事 鳥袋 洋
総務班長 新垣勝弘、主査 西島康二
調査班長 金城亀信、主任 新垣 力

資料整理作業 調査班主任専門員 仲座久宜
資料整理嘱託員 赤嶺恵子、伊佐えりな、上原美穂子、大村由美子、小渡直子、久保田有美、
後田多昌代、鳥袋久美子、高良三千代、玉寄千恵子、仲里由利、野村知子、譜久村泰子、
又吉志麻子、又吉純子、宮里絵理、屋我尚子、吉村綾子

資料整理協力者 調査班専門員 具志堅清大

資料整理指導 大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)

平成26(2014)年度(資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 諸見里 明

事業所管 沖縄県教育庁文化財課 課長 嘉数卓、記念物班長 金城亀信、主任専門員 長嶺 均

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 下地英輝、副参事 島袋 洋
総務班長 新垣勝弘、主査 比嘉 睦
調査班長 盛本 勲、主任 新垣 力

資料整理作業 調査班主任専門員 仲座久宜

資料整理嘱託員 赤嶺雅子、安里綾子、池原直美、石嶺敏子、伊藤恵美利、上田麻紀子、
喜屋武朋子、具志みどり、慶田秀美、瑞慶覧尚美、野村知子、東仲千夏、譜久村泰子、
又吉志麻子、又吉利文、宮里絵理、山城由紀子

資料整理協力者・協力機関

調査班主任 新垣 力

専門員 具志堅清大、宮城淳一、亀島慎吾、専門員(臨) 宮里知恵

文化財調査嘱託員 波本基真、保久盛 陽、仲程勝哉

資料整理嘱託員 新垣利津代、小渡直子、久保田有美、市川里恵

沖縄県教育庁文化財課 史料編集班 指導主事 小野まさ子、主任専門員 外間みどり

坂元秀平(パリオ・サーヴェイ株式会社)

沖縄県立博物館・美術館

那覇市歴史博物館

資料整理指導 黒住耐二(千葉県立中央博物館)

樋泉岳二(早稲田大学)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

首里城跡は、北緯 26° 13'、東経 127° 43' 付近、那覇市首里当蔵 3 丁目 1 番に位置している（第 1・2 図）。標高は最高で 136 m を測り、那覇市内では弁ヶ嶽に次いで高所に位置するグスク時代（中世）～近代にかけての城跡である。

この首里城の基盤を構成するのは、地質時代区分により第四紀更新世（180 - 160 万年前～1 万年前）に区分される琉球石灰岩で、その下位には、鮮新世（500 万年前～160 万年前）から中新世（2,300 万年前～500 万年前）に区分される島尻層群が堆積している。表層の透水性が高い琉球石灰岩層に浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）でせき止められ、両者の境界から泉として湧き出すこととなる。この湧水を利用した井泉・樋川は首里の各地に点在し、今日も豊富な湧水量を誇っている。

次に景観をみると、首里城の物見台である東西のアザナ、京の内南側からは、北に座喜味城、浦添城、東に久高島、大里城、糸数城、南に多々名グスク、具志頭グスク、西に渡名喜島、粟国島等の各所島々を遠方まで見渡すことができる。また、この首里城から周辺を見渡せるということは、換言すれば市街地や海城等の周辺各所からも首里城を仰ぎ見ることができる。このことは遠近を見通せることによる軍事的優位のみならず、貿易船等の船舶入港の確認なども期待でき、国家首都として格好の立地と言える。そしてその存在は、琉球王国の象徴的なモノメントとしての役割を十分に果たしていたものと思われる。

また首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲラ川、南に安里川を擁して立地している。1713 年、蔡温はこの立地に関し「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し」（『球陽』巻 10・尚敬王 1 年、688 号 球陽研究会編 1974）と遺している。なお、この立地を風水地理学的観点から見ると、弁ヶ岳は発祖としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は屏扉という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小禄・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れ出る気を隅々まで巡らせることにより、国王の安泰を願ったのである（都築昌子 2005）。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

第2節 歴史的環境

首里城

首里城の創建について、現時点で明確な記録は確認されていないが、文献上最初に表れるのは、1427 年建立の安国山樹華木碑記においてである。碑文の概要は、首里城周辺に池（龍潭）を掘り、山を築いて華木を植えたことが記され、今日という都市計画・環境整備がすでに行われていたことを示している。この碑文の年代から推して、首里城は尚巴志王代（1422 - 1439）にはすでに王城としての構えを確立していたと考えられている。その後、1879（明治 12）年の首里城明け渡しまで何世紀にもわたり、歴代の王により幾度も拡張工事が行われるとともに、数回に及ぶ焼失・重修を経て、現在の首里城のフォルムが完成したとされている（第 3 図）。

このように首里城は、15 世紀前半とされる築城から、約 500 年間のながきにわたり、琉球王国の王城として栄華を誇ってきた。この王国の崩壊後、正殿をはじめとするこれらの建造物群は、1879（明治 12）年から 1896（明治 29）年まで、熊本鎮台沖繩分遣隊の兵舎として使用されたほか（第 4 図）、その後は首里市立女子工芸学校、県立工業徒弟学校、首里尋常高等小学校などの校舎としても転用され（第 5 図）、各所がその都度改変された。その間に建物も老朽化により解体される危機を乗り越え、中心的建造物数件については、沖繩独自の歴史や意匠から、1925（大正 14）年に特別保護建造物に指定される。また、その 3 年後の 1927（昭和 2）年には解体修理が行われ、1929（昭和 4）年には正殿や付随する主要な城門についても国宝となった。



第1図 沖縄本島の位置図

しかし、これらの建造物群も、太平洋戦争に伴い日本軍第32軍司令部の陣地壕が首里城の地下深くに構築されたことで、1945（昭和20）年4月に米軍の集中砲火を浴び、その一帯は焦土と化すことになる。

終戦後は、米国琉球軍政本部教育部の計画により、1950（昭和25）年に琉球大学が創設され（第6図）、校舎等施設の造成・建設工事で首里城の遺構はさらなるダメージを受けることとなる。しかし、このような状況下においても首里城の威容は衰えることなく、規模・内容ともに沖縄を代表するに相応しい城跡として、1972（昭和47）年の日本復帰と同時に国の史跡として指定され、その後2000（平成12）年12月には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一遺産として、世界遺産（文化遺産）に登録された。今日では年間約235万人（平成25年度入園者数）もの観光客が訪れる沖縄の一大観光地として、常に賑わいを見せている。

銭蔵地区

銭蔵の創建に関する記録はみつからないが、正殿の北西側、北側外郭内に位置することから、外郭の拡張が行われたとされる尚真王在位期間（1477～1526）か、それ以降の建造であることが考えられる。

銭蔵地区には首里城が機能していた当時、銭蔵及び厩（うまや）が存在していたとされる（第3図）。現存する絵図として最古の資料は、1700年製作とされる首里古地図で、それ以降1772（乾隆37）年頃製作とされる「首里那覇全景図屏風（首里城鳥瞰図）」や、1839（道光19）年とする「図帳（当方・勢頭方）」、明治初年（1868）とされる「琉球王府首里那覇之図」において、2階建て瓦葺きの建物と、平面L字状の厩と思われる建物が描かれており、17世紀段階には存在していたことが想定できる。

琉球王国時代の銭蔵は、首里王府の物奉行に属する役座（役所）の一部門で、銭御蔵（ジンウングウ）とも呼ばれた。その機能としては、官銭の収納、夫役銭（租税）と買い上げ品との収支、御用酒の出納をつかさどっていた。王国の正史「球陽」巻13に記載された1733（高敬21・享保18）年の記事には、「金御蔵を銭御蔵と改め、銭御蔵を御用酒御蔵に改称する」と記載されるが（「球陽」巻13高敬王21年、990号球陽研究会編1974）、その後、元の名称に改めたとされている（沖縄大百科事典刊行事務局編1983）。

なお、銭蔵の「ぜに」は、王府編纂の歌謡集「おもろさうし」において、「せに」「せの」「ぜん」にあたることとされ、酒を表すという（仲原善忠・外間守善1978）。この語意からすると、銭蔵は酒を収める蔵と解することができる。

1879（明治12）年には、廃藩置県により首里城が明治政府により接収され、時の国王尚泰は王城を追われることになる。明治期に作成された平面図によると、正殿ほか主要施設は熊本鎮台沖縄分遣隊の兵舎として使用されるが、「旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」によると、既存の建物をそのまま使用したと思われ、銭蔵の建物には「炊事」、その西側の正方形の区画には「浴」と表記がされることから、分遣隊が撤退する1896（明治29）年まで、炊事場と浴場として使用されていたことがわかる（第4図）。

熊本鎮台が退去したのちは、首里城の敷地は各種学校として使用されるが、1931（昭和6）年作成の「旧首里城図（阪谷図）」によると、御座部分は首里第一尋常高等小学校として使用されていたとみられる（第5図）。この時点で銭蔵のエリアには、畑地の中に2か所の区画が破線で示され、西側の区画には「銭蔵」、東側区画には「係員詰所」の表記が確認できるが、絵図中の凡例で破線は「旧建物」としていることから、この時点で建物は撤去されており、畑地として使用していた可能性がある。

このような中、1933（昭和8）年には、首里桃園町の浦添家にあった首里聖廟が、県道工事に伴う拡張工事のために移転を迫られることになる。この件がマスコミ報道後、世論が喚起されたことにより、龍潭同窓会を中心とする有志による要請により銭蔵跡への移転が決まり、1934（昭和9）年11月に着工、翌年5月19日に竣工した。この建設にあたっては、9,458円43銭の寄付金が充てられ、のべ6,152人の学徒による労力奉仕によって行われたとされる（沖縄県師範学校校友会1937、沖縄大百科事典刊行事務局編1983）。しかし、この竣工から10年後、首里聖廟は正殿などの建物とともに沖縄戦により破壊されることになる。

戦後は、1950（昭和25）年に琉球大学が開学し、銭蔵周辺には5階建ての第1理学校舎や教養教室が建設される（第6図）。

琉球大学は1984（昭和59）年までに西原町へ移転を終えるが、その後、大学跡地は昭和61（1986）年度に国営沖縄記念公園首里城地区として整備されることが閣議決定され、それ以降、年次的に発掘による遺構確認調査が実施される。その調査成果から周辺で多くの建造物の復元整備が行われる中、銭蔵地区は今後の整備を待つ状況である。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査方法と調査区の設定

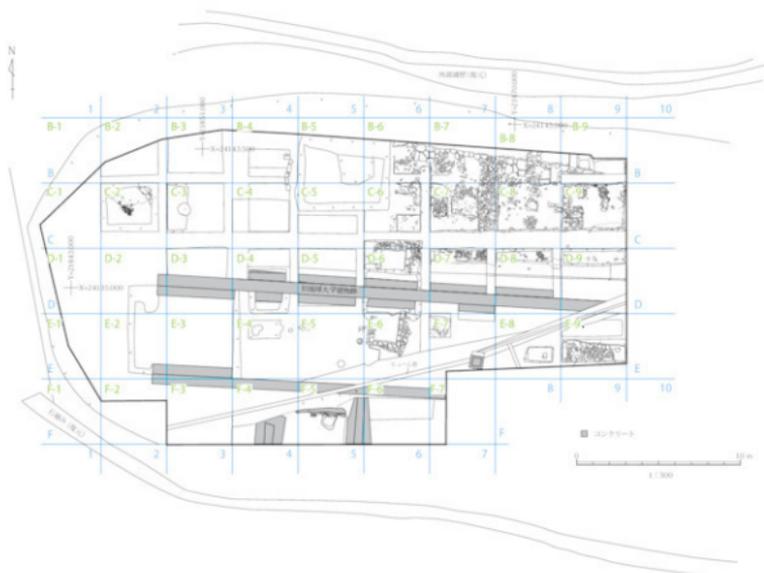
首里城跡の発掘調査は、内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所による整備・復元計画に沿って計画される。本報告の対象となる調査区は、外郭北東地区の一角として正殿の北西側に位置しており、首里城が機能していた当時、銭蔵と称する2階建ての建物や厩が存在していたとされる(第3図)。そこで、当初は調査区名称を銭蔵跡発掘調査として開始した。

次に、本調査区は東西に長い形状を有することから、表土除去後に実施したグリッド設定においては、調査区北西角付近を起点とし、磁北に沿って北から南にA～F、西から東に1～10まで4m四方のグリッドを組み、調査区の設定を行った(第7図)。

本調査は、銭蔵の遺構を確認する目的で実施するが、首里城の復元方針として復元年代の設定がなされている。首里城は沖縄戦で破壊されるまでの約500年の間に焼失、再建、重修(修理)を繰り返してきた。その中でも、火災と再建の記録が確かで、その後も重修は行われるものの、基本的に再建時のコンセプトを保持したまま推移したと考えられる点、さらには史料や写真・図面類、古老からの情報が多く残る点から、1709年の火災後1712年に再建され、1925年に国宝指定になった正殿の復元(1933年解体修理工事竣工)を基本とする方針が確認されている。したがって、発掘調査もこの方針に沿った時期の遺構を検出することを目的として行われる。

しかしながら、戦災や開発などにより遺構が改変された箇所に関しては、遺構を残しつつ、その断面を用いて堆積の状況や遺構の切り合いを確認することにより、先後関係や変遷を読み取る手法をとっている。

次に、発掘調査及び資料整理作業経過、調査成果について報告を行う。



第7図 グリッド設定図



図版1 調査区全景

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成18(2007)年度～平成20(2009)年度の3か年かけて実施した。次に年度ごとの経過を記す。

平成18(2006)年度

平成18(2006)年度の調査は、平成18(2006)年9月1日～平成19(2007)年3月9日までの約6か月間実施した。調査に際しては、各年とも事前に文化庁長官あてに現状変更申請を行い、許可後に調査を開始した。

調査区は外郭北東地区の一角として正殿の北西側に位置するが、外郭及び内郭の石積みはすでに復元を終えており、調査予定箇所は復元された石積みに囲われた状態で、園内の樹木を仮移植する場所として使用されていた(図版2-1)。そのため調査に先立ち、樹木の移植作業から行った。

その後、重機による表土掘削を行い(図版2-2)、沖縄戦時の不発弾探査を目的とした磁気探査を実施し(図版2-3)、安全を確保した上でグリッド設定後に調査を開始した。

当地には戦後、琉球大学の第1理学校舎や教養教室が建設されたことにより(第6図)、表土除去時には、校舎の基礎と思われる断面凸状の鉄筋コンクリートが、調査区を東西方向に横断する状況が確認できた。そのため、建物基礎の施工時には周囲を広めに掘削したとみられ、その埋め土(攪乱層)と表土直下に残る外郭拡張時のものと考えられる造成土とを平面上明らかにすることができた。

調査はこの基礎工事に付随する攪乱層を除去しつつ、遺構検出を行った。その結果、石畳や石列等の遺構のほか、石造物を加工したと思われる痕跡が確認されている。次年度(平成19年度)はこの西側及び南側を拡張して調査する計画にしていることから、調査区全面をシートで覆った状態で養生を終えた。

平成19(2007)年度

平成19(2007)年度は、当初の計画では過年度に調査した地区の西及び南側について調査を実施する計画で準備を進めていたが、計画の最中に沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より、今後の復元整備エリアの優先順から、調査区の変更について調整の依頼があった。そこで沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所、教育庁文化課、埋蔵文化財センターの三者で調整した結果、正殿の北東側に位置する御内原北地区を調査することで計画変更が行われた。

これにより、平成19(2007)年9月3日～10月28日までの約2か月間は銭蔵跡において表土除去及び平面清掃のみを行い、養生後は10月29日～平成20(2008)年2月29日まで、御内原北地区において調査を実施した。この成果は平成20(2008)・21(2009)年度に資料整理作業を行い、平成22(2010)年3月に調査報告書を刊行した(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)。

平成20(2008)年度

平成20(2008)年度調査は、平成20(2008)年9月1日～平成21(2009)年2月28日までの6か月間実施した。前年度に表土除去を終えたエリアを中心に、平成18(2006)年度調査区検出遺構との連続性を確認しながら調査を行った。

まずはじめに、沖縄戦時の不発弾探査を目的とした磁気探査を行い(図版2-3)、数点の異常点が確認された。掘削により異常点を確認したところ、このうち1点は米国製5インチ艦砲弾であった。確認の直後には警察に通報を行い、確認・見分後は自衛隊に通報するという所定の措置を行い、不発弾は自衛隊の処理隊により適切に回収が行われた(図版2-4)。このように安全性を確保した上で調査を開始した。

その結果、造成土及び地山を長方形に掘り込み、壁面に石を積んだ方形石組遺構が検出された。また、その周辺からはビット状のくぼみが数点検出された。これらは半載し堆積の状況を確認しながら調査を行った(図版2-6)。また、外郭の造成土と考えられる面を数か所掘り下げ、新旧2時期の造成を確認することができた(図版2-8)。なお、雨天や台風後のぬかるみにより調査ができなかった日には、出土遺物の洗浄を行い資料整理に備えた(図版2-7)。



1. 調査前の状況



2. 表土除去作業状況



3. 磁気探査作業状況



4. 不発弾撤去作業状況



5. 調査開始直後の状況



6. 遺構検出状況



7. 遺物洗浄作業状況



8. 造成土断面図作成作業状況

図版 2 発掘調査経過画像

第3節 資料整理作業の経過

資料整理作業は、平成25(2013)年度・平成26(2014)年度に実施した。遺物洗浄作業は、雨天時の現場事務所内ではほぼ終了していたことから、層序や遺構名を統一後、注記作業から開始した。その後、分類・接合作業を経て、実測対象遺物の抜き出しを行い、陶磁器及び金属製品に関しては随時、有識者を招聘して年代や産地等について所見をいただいたほか、自然遺物の分析も依頼した(図版3-1・2)。

続いて実測作業を行い、並行して写真撮影を行う。また、遺物・遺構ともに実測図トレース後に図版を作成し、文章や観察表などとおわせて編集作業を行った(図版3-3~6)。

その後、印刷製本費執行に係る積算・起案を行い、決裁後は指名競争入札により落札した印刷業者と契約を交わし、印刷・製本が行われ本報告書を刊行した。



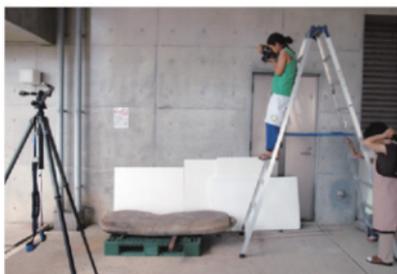
1. 陶磁器整理指導状況



2. 脊椎動物遺体整理指導状況



3. 石碑拓本採取作業状況



4. 石碑写真撮影状況

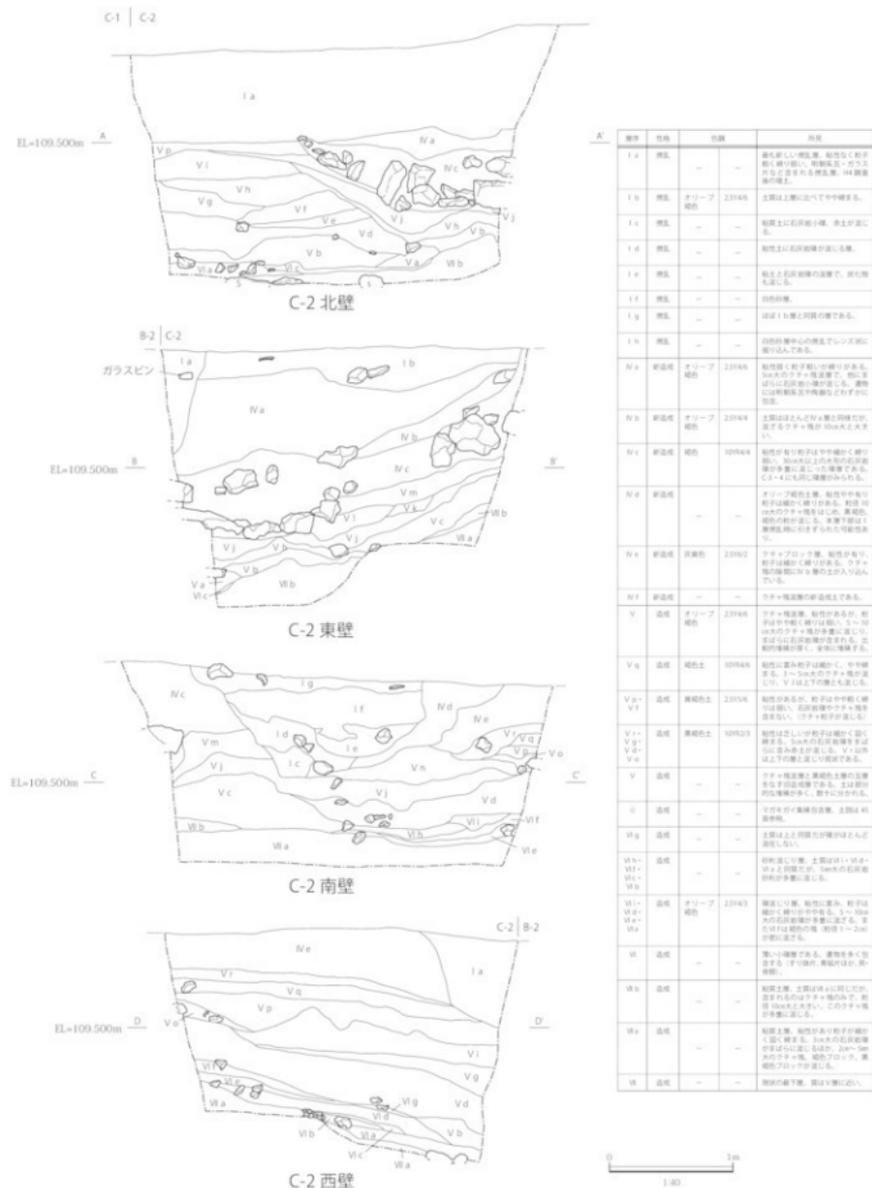


5. 遺物実測作業状況



6. 遺物実測・トレース作業状況

図版3 資料整理経過画像



第8図 C-2層序



第9図 C-3 階序



1. C-2 西壁



2. C-2 東壁



3. C-2 南壁



4. C-2 北壁



5. C-3 西壁



6. C-3 東壁



7. C-3 南壁

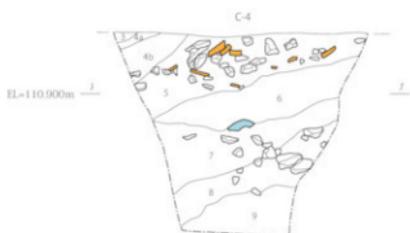


8. C-3 北壁

図版4 C-2・3層序



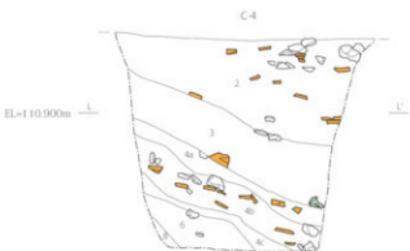
C-4北壁



C-4東壁



C-4南壁



C-4西壁

■ 瓦・埴
■ 具
■ 陶器

層序	地味	土質	内容
1	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、砂鉄粒、赤鉄粒、土子・塊状土入、10～30cmの礫が混在する。
2	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、5cm未満の礫を含む。遺物：陶製瓦の破片・瓦片。
3	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、1～3cmの小礫及び土子・塊状土を含む。緑川段赤鉄粒、赤土層も混在する。
4a	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、砂鉄粒、5cm未満の小礫が混在する。遺物：漆片。
4b	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、赤土層以下の小礫が混在する。遺物も混在している。
5	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、砂鉄粒、赤鉄粒が混在する。遺物：10～30cmの礫が混在する。遺物には陶製瓦の破片・瓦片も混在している。
6	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、1～3cmの小礫及び土子・塊状土を含む。緑川段赤鉄粒、赤土層も混在する。遺物：陶製瓦の破片・瓦片、漆片。
7	新渡流	黄砂土層	緑川段礫、砂鉄粒が混在する。遺物：陶製瓦の破片・瓦片、漆片。
8	新渡流	黄砂土層	緑川段礫・砂鉄粒、10～30cmの礫が混在する。遺物：漆片。
9	新渡流	黄砂土層	緑川段礫・砂鉄粒、1～3cmの小礫及び土子・塊状土を含む。砂鉄粒、赤鉄粒、土子・塊状土も混在する。

0 1m
1:40

第10図 C-4層序



1. C-4 西壁



2. C-4 南壁



3. C-4 東壁

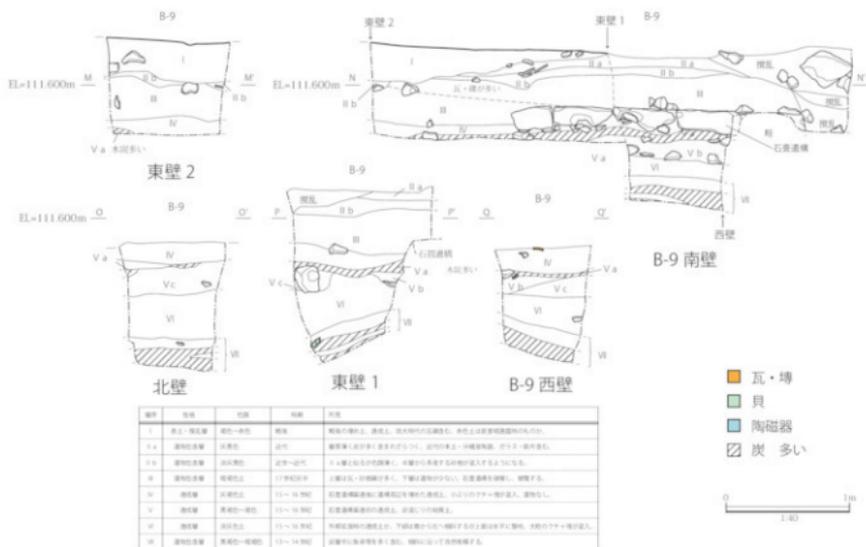


4. C-4 北壁



5. C-3・4 南壁

図版5 C-3・4 層序



第11図 B-9トレンチ層序



1. B-9トレンチ炭層(南より)



2. B-9トレンチ東壁



3. B-9トレンチ西壁



4. B-9トレンチ北壁

図版6 B-9トレンチ層序

2 遺構

銭蔵地区の調査では、層序の項で示したように3期に区分できる遺構及び堆積が確認されている。この変遷を以下に概略する。

第1期は外郭造成と同時期に築造されたと考えられる方形石組遺構や石畳遺構で、陶磁器等の共伴遺物から16世紀代と考えられる。

次に第2期は、礎石の下部に施工される根固め石と考えられる遺構である。本遺構は第1期の石敷き遺構を外して築造されていることから、築造の先後関係を読むことができる。築造時期は、共伴遺物から17世紀前半と考えられる。なお、本遺構周辺からは、石造物に使用される細粒砂岩の石材片が大量に出土している。この中には石造物の未成品も含まれていることから、当該地で何らかの製品を加工したことが考えられる。

第3期は近代の遺構が検出されている。首里城は1879（明治12）年の琉球処分により明治政府に接収され、主に熊本鎮台沖縄分遣隊の施設として各所の建物が使用された。当時の平面図によると、建物の配置は銭蔵のままであるが、「炊事」及び「浴」とする表記がされることから、炊事場及び浴場として改変された可能性がある（第4図）。当時の遺物として、近代に製作された陶磁器類と、分遣隊が使用したと考えられる銃の葉莖及び関連部品が出土している。

1896（明治29）年に分遣隊が撤退したのち、首里城内には各種学校が設置されるが、昭和初期の平面図によると、銭蔵跡は畑として使用されており（第5図）、この時点で銭蔵の建物は撤去されていたことが想定できる。その後当地には、1935（昭和10）年に首里至聖廟が建造される。第3期の遺構としては、この廟の石積み根石と考えられる石列等が検出されているほか、関連する遺物として廟の再建を記念して建立された石碑や壁面材が出土している。至聖廟はその後、1945（昭和20）年の沖縄戦により、首里城とともに焼失した。次に、遺構ごとの報告を行う。



図版7 調査区全景（東から）

石畳遺構

調査区の北端、B-6～9グリッドにかけて緑石を有する石畳遺構が検出されている。遺構は東西方向に長く、北端に緑石を有する。東側は調査区外のため不明であるが、西及び南側は破壊されている。東西の遺構軸は、磁北から10°南へ振る。

残存するサイズは、東西に最大13m、南北に最大1.2mで、緑石に長方形の琉球石灰岩を造成土上に1～2段、約50cm高で積み、緑石に接するように石畳を構成する。遺構は約160cm間隔で緑石部分を約120cm幅で弧状にくぼませて築造し、北へ傾斜する構造に造られていることから、排水を考慮した機能が考えられる。しかし、残存が小規模であること、当時の絵図や平面図とも符合しないことから、その機能・性格については判然としない。

年代は、近接する箇所から採取した木炭の放射性炭素年代測定から15世紀中葉～17世紀前半とする結果が得られるが（第4章第1節参照）、外郭の構築年代は16世紀中頃とされており、それ以降の築造であること、遺構下部から沖縄産陶器が出土していない点から、17世紀以前であることが考えられる。

また後述するが、この石畳を破壊して作られた2時期の遺構が存在することからも、先後関係を理解することができる。

なお、本遺構は平成4（1992）年度に実施された城郭整備に伴う発掘調査で一部が検出されているが、詳細については不明である（図版8・9）。



図版8 平成4年度検出遺構1



図版9 平成4年度検出遺構2

方形石組遺構

D・E-6グリッドにおいて、南北方向に長辺を持つ石組遺構が検出されている。中央を約3m幅で旧琉球大学の建物基礎工事により分断されているが、一連の遺構になるものと思われる。サイズは南北に約580cm、東西に約150cmの長方形で、深さは天端が破壊されているが、最大110cmを測る。

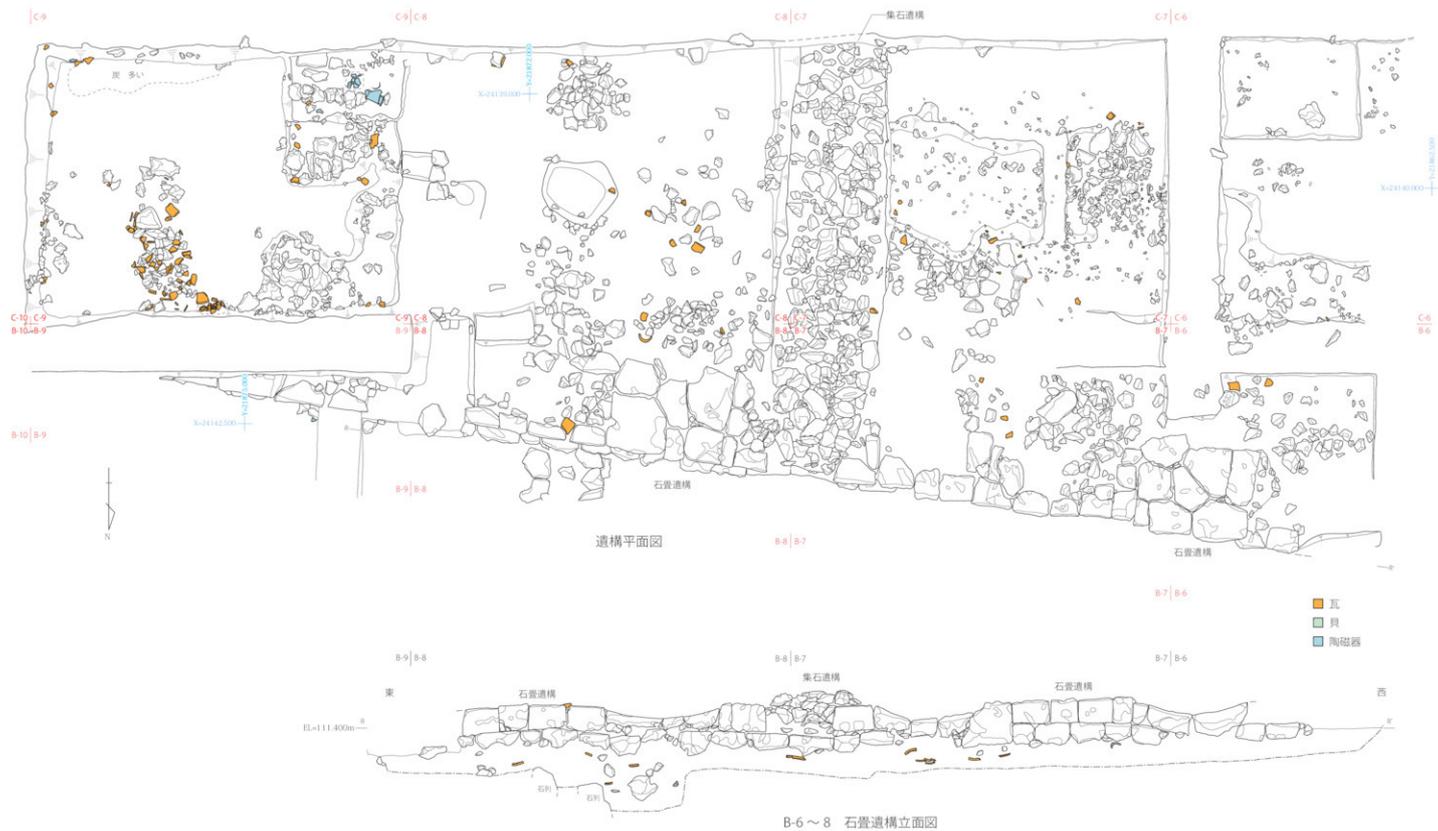
遺構南側はクチャ（地山層）を掘り込み、北側は造成層とクチャを掘り込んで底面を削平し、その直上に石積みをも4面に配する。石積みを用いられる石は、幅20～40cm大、控えが30cm程度の粗加工された琉球石灰岩で、不規則な布目～相方積みにより築造される。南北の遺構軸は磁北に沿わず、7°東へ振る。石積みの傾斜角は、東西壁で6～8°、南北壁で直立～8°で、裏込めは20～50cm幅で石灰岩礫と造成土を投入している。

検出時には内部の堆積状況を把握するため、南北とも土層断面図を作成した。この遺構内部には、壁面から崩落したと思われる切石が多量に落ち込む状況が確認される点と、その隙間の堆積土の分層が不明瞭であることから、遺構は短時間のうちに破壊され、土砂で埋められた可能性がある。

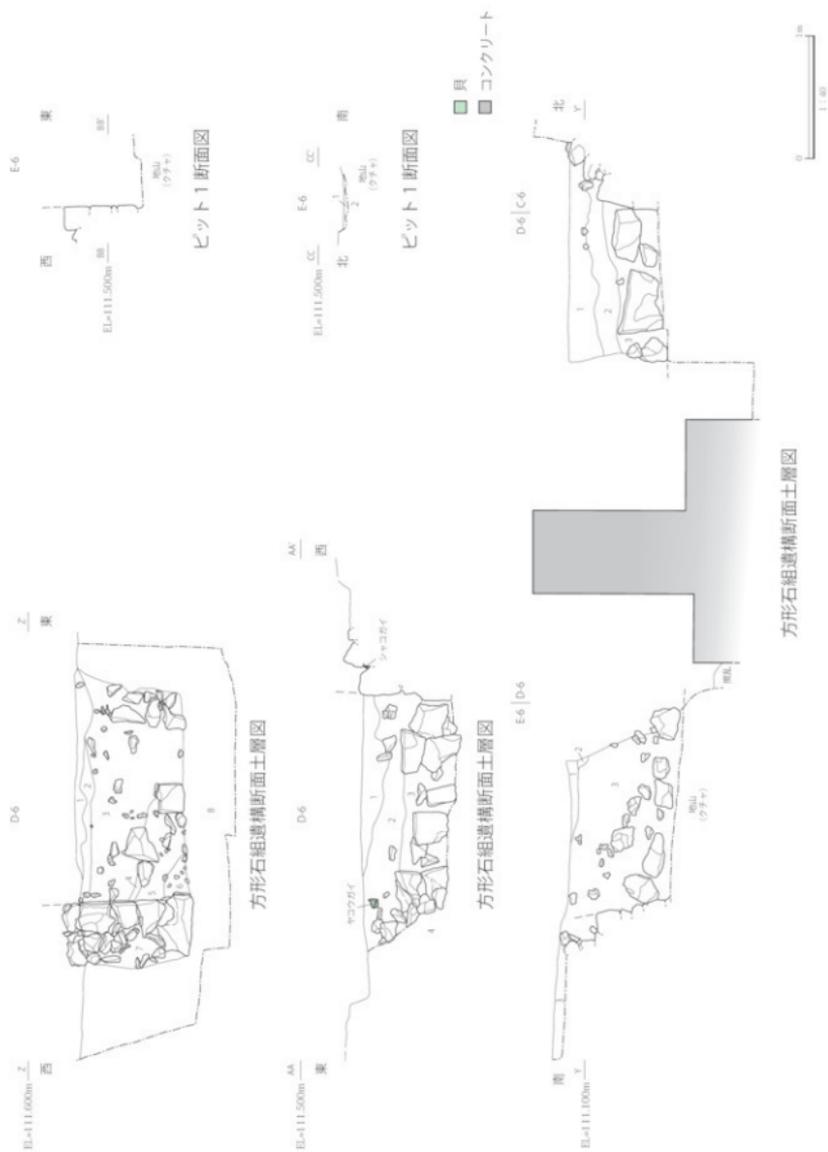
遺構の底面には直径約45cm、深さ約6cmの浅いピットが確認されているが、1点のみであるため性格は不明である。

遺構内部の堆積土は大きく上層と下層とに分けることができ、中国産陶磁器や武具、釘等の金属製品、漆塗膜がわずかに含まれる。陶磁器による年代は、下層が16～17世紀（中国産色絵皿入れ）、上層が17～18世紀（中国産青磁・青花）であることから、下層が遺構廃棄前の堆積で、上層がその後の造成による堆積であることが考えられる。

この石組遺構に関しては、類例が正殿跡（沖縄県教育庁文化課1992）や御内原（沖縄県立埋蔵文化財センター2007）ほかで確認されており、いずれも建物の床下に位置していたことが考えられるが、現時点で性格については判然としない。



第13図 遺構1 (石置遺構、集石遺構)



第15図 遺構3 (方形石組遺構)



1. C6～9 遺構平面



2. B6～9 石畳立面（北東より）

図版 10 石畳遺構・礎石跡



1. C～E-6 方形石組遺構



2. C～E-6 方形石組遺構完掘状況(南から)



3. C～E-6 方形石組遺構完掘状況(北から)

図版 11 方形石組遺構 1



1. E-6 方形石組遺構(南側)



2. E-6 方形石組遺構(南壁)



3. E-6 方形石組遺構(東壁)



4. E-6 方形石組遺構(西壁)



5. 方形石組遺構完掘状況(南側)



6. E-6 方形石組遺構底面ビット半載状況(東から)



7. D-6 方形石組遺構(北側)



8. D-6 方形石組遺構(北壁)

図版 12 方形石組遺構 2



1. E-5 方形石組遺構断面（北東から）



2. E-6 方形石組遺構（内部南壁）



3. E-5 方形石組遺構半截作業状況



4. E-6 方形石組遺構（内部東壁）



5. D-6 方形石組遺構（内部北壁）



6. D-6 方形石組遺構（内部西壁）



7. D-6 方形石組遺構（内部西壁）

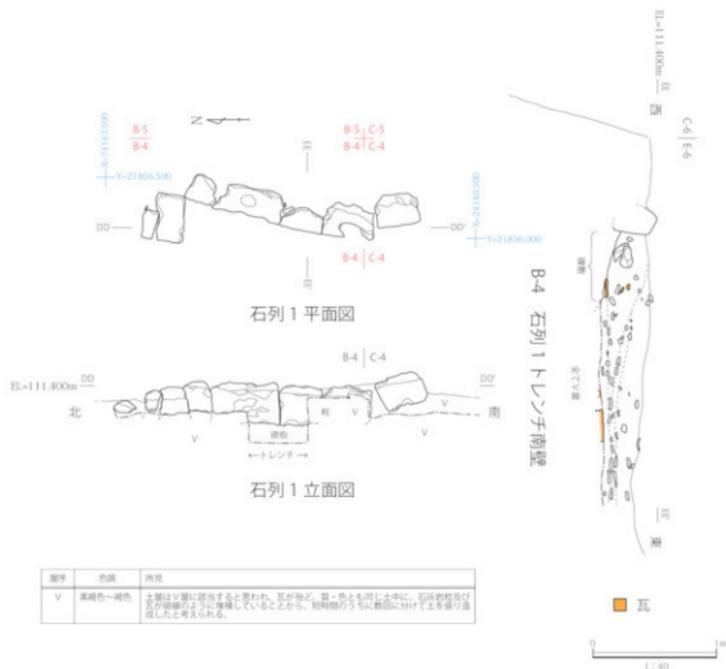


8. D-6 方形石組遺構（内部南壁）

図版 13 方形石組遺構 3

石列1

石列1はB・C-4グリッドから検出されている。遺構はほぼ南北に配置された切石により構成されるが、一部歪んでいる。幅30～60cm、高さ及び控えが約30cmの琉球石灰岩を用い、L字状に配する。石列のサイズは南北に約230cm、東西に約60cmとなっており、周辺につながりは確認できない。本遺構は、下半部が第V層中に埋め込まれた状態であることから、17世紀前半に位置づけられるが、性格は不明である。



第16図 石列1



1. B-4-5 石列1 検出状況



2. 石列1 前面堆積状況

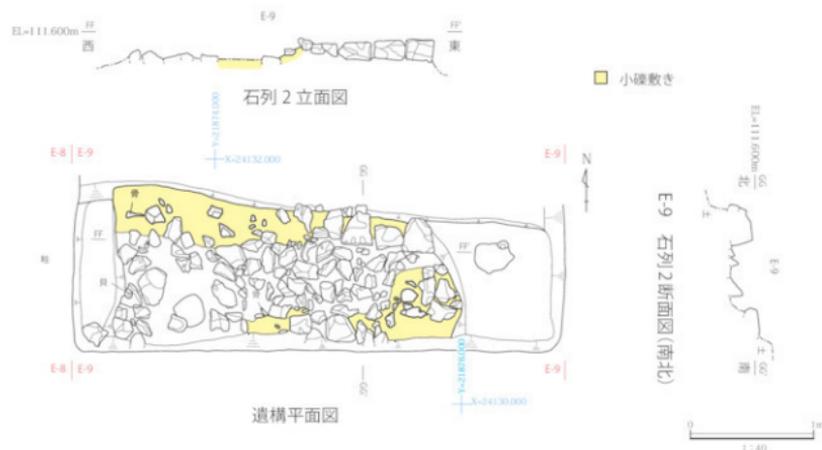
図版14 石列1

石列2・敷石遺構

石列2としたのは、E-9 グリッドから検出された遺構で、その前面（南側）には敷石が配されている。

石列は4点の琉球石灰岩を南面させて東西1列の1段、約20cm高が配置される。サイズは、東西方向に約1mの長さで、概ね長方形の30cm以内の切石を用いており、裏込め石は確認されなかった。

この石列2の南側には、大小の自然礫を敷き詰められたと思われる遺構が検出されている。これらの遺構直上は攪乱されており、検出範囲も小規模であることから、年代及び性格については不明である。



第17図 石列2・敷石遺構



1. E-9石列2・敷石遺構検出状況(南より)



2. E-9石列2・敷石遺構検出状況(南東より)

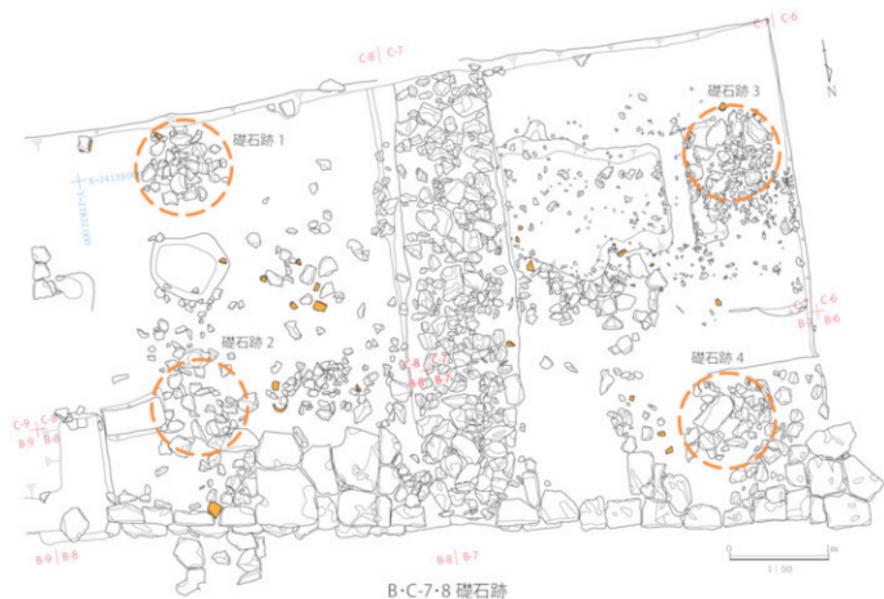
図版 15 石列2・敷石遺構

礎石跡

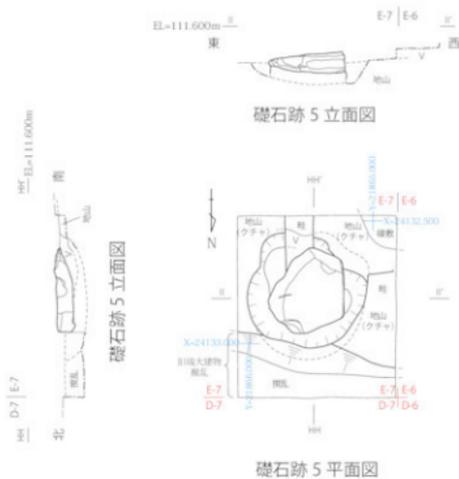
礎石と礎石が配置されていた可能性がある痕跡が確認されている。礎石跡・5はE-7グリッド地山直上から1点が検出されている。細粒砂岩を粗割りした状態で、平面観は五角形、側面観は砲弾状で、上面が平坦になるように配置される。配置に際しては、地山のクチャを礎石平面より広めに掘り、配置後周辺を埋める。この埋め土内からは鉄釘等が出土する。礎石はこの1点のみで建物のプランは判然としない。

次に礎石跡と思われる痕跡は、B・C-7・8グリッドから4基されている。この内、北側の2基は石畳遺構を破壊して配置される。遺構は細粒砂岩や琉球石灰岩を約1mの円形に配した状態のものや、石畳を直径約1mの円形に外した痕跡から、礎石を配置する根固め石の可能性を想定している。

遺構の間隔は、東西が約6m、南北が約3mである。この東西の遺構間には、近代の石列遺構が掘り込まれて縦断することから、当初は更に2基が存在していた可能性がある。この類推から、当地には3m間隔の礎石建物が存在していたことが考えられるが、残存状態が悪く判然としない。年代は共存遺物から17世紀前半を考察することができる。



図版16 礎石跡5



第18図 礎石跡



1. B・C・7・8 礎石跡



2. 礎石跡 1



3. 礎石跡 2



4. 礎石跡 3



5. 礎石跡 4

図版 17 礎石跡

ビット状遺構

ビットが数か所から検出されている。集中するのはE・F-3～5グリッドで、すべて地山(クチャ)を円形・楕円形に掘りくぼめて作られている。中には碟や陶片が出土する例もあり、概ねの時期を特定することができる。なお、これらのビットの配置に規則性はみられず、柱穴か否かの判断はつかない。

次に、F-4グリッドから植栽痕と思われるビットが確認されている。ビットはセメントが付着する石列に接しており、内部からはランプのホヤ等の遺物が出土することから、近代の遺構と考えられる。



第19図 ビット状遺構1



1. E-5ビット2平面検出状況(南から)



2. E-5ビット3 平面検出状況

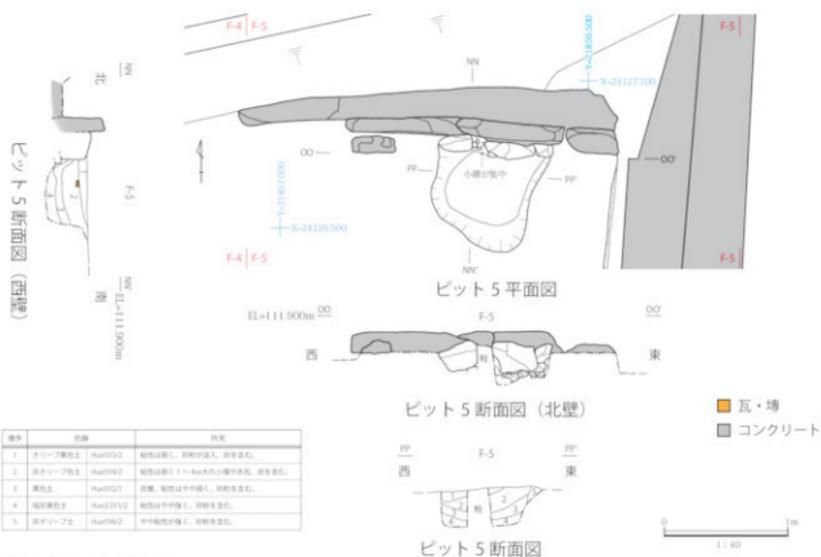


3. E-5ビット2 半截状況



4. E-5ビット4 半截状況

図版18 ビット状遺構1



第20図 ピット状遺構 2



1. F-5ピット状遺構 平面検出状況



2. F-5ピット状遺構 半截西壁



3. F-5ピット状遺構 半截東壁



4. F-5ピット状遺構完掘状況(南から)

図版 19 ピット状遺構 2

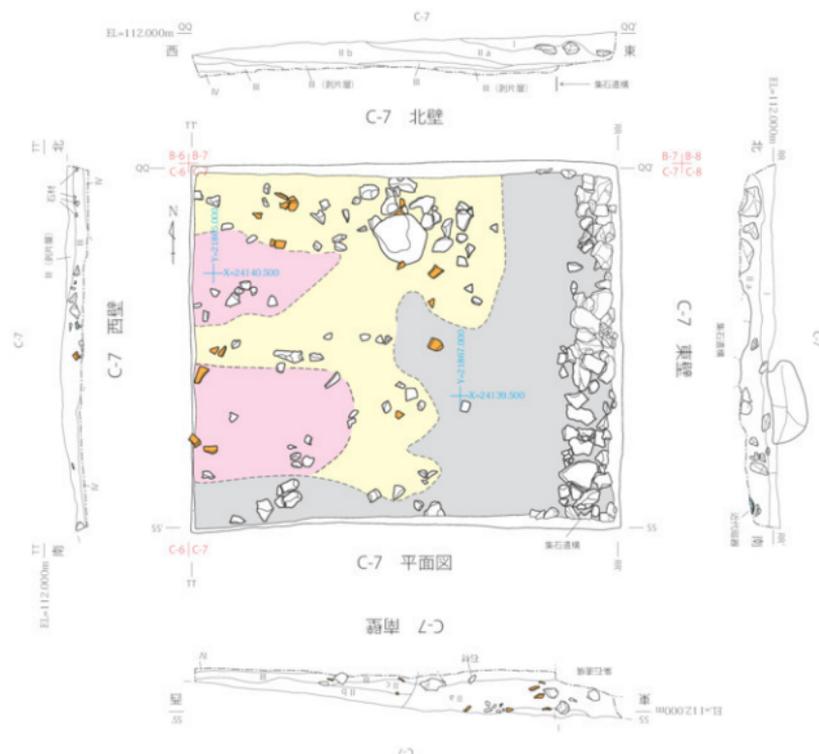
石造製品加工場跡

第Ⅱ層下部～第Ⅲ層にかけて、多量の砂岩片が面的に広がる状況が確認できた。

砂岩片は打割られて大小の破片が混在し、鋭い角を有する。破片の表面には、打割痕及び表面調整の際の線状痕や盤痕等の加工痕がみられ、その中に石造物の未成品と思われる資料が含まれる。

現地を確認できる状況として、大きめの破片が集中する箇所が下層にあり、その上層に細かい破片が堆積している。このことから、石造製品を製作する際に、はじめに粗加工として原石を粗割りし、その後、彫刻や微調整のために打ち欠いた剥片が堆積したことが考えられる。この剥片の詳細については、第3章18の遺物の項で報告する。

一帯からは、初期沖縄産無軸陶器や、中国産青花片が出土しており、この年代から17世紀前半の時期を想定できる。



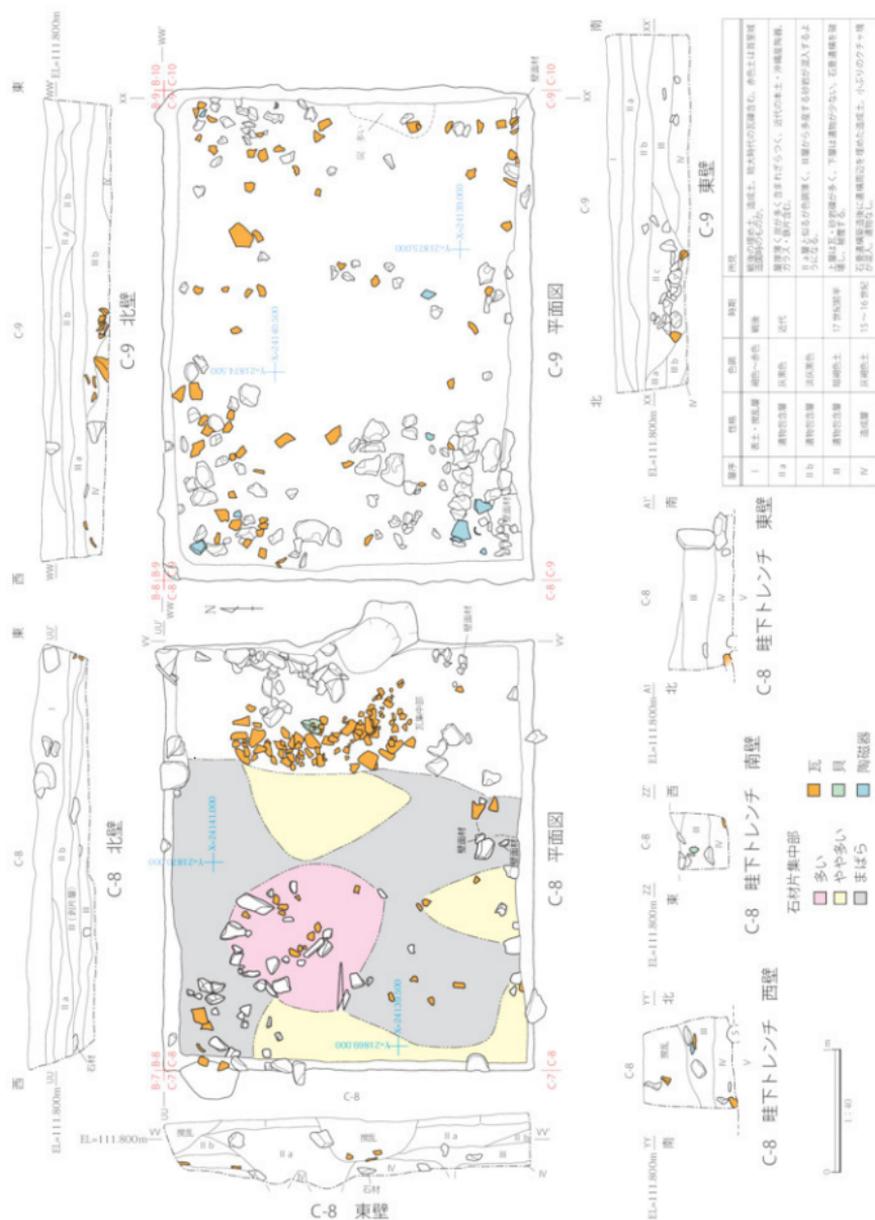
層号	性格	色相	時期	所産
I	表土・埋込層	褐色～赤色	戦後	戦後の埋め土、造成土。戦大時代の瓦礫含む。赤色土は喜望峯遺跡のものか。
II a	遺物包含層	灰黒色	近代	層厚深く炭が多く含まれざつ。近代の本土・沖縄産陶器、ガラス、鉄片含む。
II b	遺物包含層	淡灰黒色		II a層と似たが色調薄く、II層から多量する砂岩が混入するようになる。
III	遺物包含層	暗褐色土	17世紀前半	上層は瓦・砂岩が多く、下層は遺物が少ない。石造遺物を産出し、被覆する。
IV	造成層	灰褐色土	15～16世紀	石造遺物築造後に遺構跡を埋めた造成土。小ぶりのクッキー種が混入。遺物なし。

石片片集中部

- 多い
- やや多い
- まばら
- 瓦
- 陶磁器

0 2m
1:40

第21図 石造製品加工場跡1



第22図 石造製品加工場跡 2



1. C-7 III層石材剥片検出状況



2. C-7 III層石材剥片検出状況

図版 20 石造製品加工場跡

集石遺構

B・C-6グリッドにかけ、南北方向に帯状の集石遺構が検出されている。遺構は石畳遺構を破壊して石灰岩礫が埋め込まれる。検出サイズは南北に約6.5m、幅約2mである(第13図)。

検出当初は、礫を詰めた暗渠を想定したが、米軍撮影による航空写真と重ねると、首里至聖廟の敷地を区画する石積みが存在していた地点と重なることが判明した(第108図)。この石積みは、首里至聖廟の景観を写した古写真によると、瓦石塀であることがわかる(図版95)。

また、遺構の表面と内部には、廟施設のものと思われる壁面材(第5節21)が含まれる点と、近代の遺物が含まれることから、本遺構は首里至聖廟の瓦石塀の基礎となる根固め石の可能性が考えられる。



1. B・C-7・8集石遺構(北から)



2. B・C-7・8集石遺構検出状況(西から)

図版 21 集石遺構検出状況

第5節 遺物

はじめに

本報告の対象となる銭蔵地区の調査は、平成18(2006)年度～平成20(2008)年度までの3か年にわたり実施し、出土遺物は人工遺物で総数23,310点、自然遺物を含む遺物収納用コンテナ数は266箱におよぶ。その種別は、各地で焼成された陶磁器類のほか、金属製品、石製品及び石造製品、貝・骨製品、ガラス製品、獣骨片、貝類など多岐にわたる。これらの年代や種別から、当地区の遺構や堆積土の概ねの年代を特定するとともに、性格を把握するための手掛かりとしている。

本節では、遺物の種別ごとに概要、観察表、実測図、写真の順に報告を行い、脊椎動物以外の集計表は本節の末尾(256頁～)にまとめて掲載した。

なお、これら遺物の写真は、その特性をより詳細に見せる目的から、実測図の傾きと異なる場合があり、適宜展開を追加した資料がある。また、その縮尺は実測図と同尺の場合はスケールを記載しないが、同一頁に各種の縮尺が存在する場合や、極度に大型・小型の遺物に関しては適宜縮小・拡大を行い、対象となる遺物のみ縮尺を示した。

次に、遺物の出土状況について概観し、遺物の種別ごとの報告を行う。

遺物の出土状況

首里城は、1879(明治12)年の廃藩置県以降から、沖縄戦の破壊を経て琉球大学の建設工事・移転までの約1世紀にわたり改変が繰り返されてきた。そのため、調査区によっては開発時の厚い攪乱層(表土)が堆積しているため、調査に先立ち重機による表土掘削が行われる。陶磁器などの遺物は、この表土中にも多くみられることから、表土掘削中も調査員が常に常駐し、遺物を回収しつつ立会いを行った。

この表土除去中に遺構や遺物包含層が確認されると、人力による清掃・発掘に切り替え、遺構検出作業を行う。遺構検出に際しては、遺構周辺の土砂を掘り下げていくが、遺構の年代や特徴を把握するうえで必要と思われる遺物が出土した場合は、遺物を原位置で露出させ、写真撮影等の記録を行った。次に、表土から造成層までの遺物出土状況を概観する。

攪乱層となる表土・第1層は、戦後の開発による造成土が主体となる。旧琉球大学建設時及び解体後の瓦礫を多く含むが、その中に王府時代の陶磁器類も多く含まれる。今回は多くの陶磁器類と石碑を1点回収した(図版22-1)。続く第2層は近代に相当し、本土産陶磁器や沖縄産陶器のほか、熊本鎮台のものと思われる兵器類の部品が出土している。

次に第2層下部から第3層にかけては、灰色瓦や初期沖縄産無軸陶器が出土する点と、共存する中国産陶磁器から17世紀代に位置づけることができる。青銅製の輪銭のほか、細粒砂岩の剥片が多量に出土していることから、石造物等の加工を行っていた可能性が考えられる(図版22-2～4)。

この第3層とほぼ同時期と思われる堆積層として、新造成層とした堆積土がある。本層は、外郭拡張時の造成土を断ち割るように入り込むという先後関係と、遺物の種別から新旧を分けることができる。本層には、初期沖縄産無軸陶器と15世紀前後の中国産陶磁器類が混在していることから、城内で生じた土砂を造成土として用いている可能性がある(図版23-1・2・7・8)。

新造成土の下に位置する堆積土は、外郭拡張時の造成土と思われる層で、石置遺構や方形石組遺構はこの造成後に築造されたことが考えられる。本層からは15世紀後半～16世紀前半を中心とする中国産陶磁器類が出土しているが(図版23-3・5・6、図版24-2)、その中にマガキガイを主体とする自然遺物が集中して出土する状況が確認されている(第23図、図版23-3、図版24-6～8)。この出土状況から、造成中の一時期に廃棄された可能性が考えられたため記録作成を行った。また、本層からは漆塗膜が出土しており(図版24-5)、その一部について成分分析を実施した(第4章第2節)。



1. 表土・掘乱層 石碑出土状況



2. D-8 II層 輪銭出土状況



3. C-8 III層 石造製品出土状況



4. C-8 III層 石造製品未成品出土状況



5. C-8 III層 皿出土状況



6. C-4 新造成層 瓶口縁部出土状況



7. C-8 III層 ヘビ骨出土状況



8. B-9 中央畦西壁V層 (造成層) 青花片出土状況

図版 22 遺物出土状況 1



1. C-3 新造成層内 軒丸瓦当出土状況



2. C-3 新造成層表面 軒平瓦当出土状況



3. C-3 造成層 青磁片・マキガイ集中部出土状況



4. C-4 新造成層 貝匙出土状況



5. C-2 造成層(蹠層) 挿鉢片出土状況



6. C-2 造成層 青磁・マガキガイ集積出土状況



7. C-4 新造成層 青磁皿出土状況



8. C-4 新造成層 青磁片出土状況

図版 23 遺物出土状況 2



1. C-2 造成層 プタ下顎骨出土状況



2. C-3 造成層西壁 青磁盤口縁部出土状況



3. C-2 造成層 開元通寶出土状況



4. E-6 方形石組遺構下部 色絵鳥餌入れ出土状況



5. C-3 造成層内 漆片出土状況



6. C-2 造成層 マガキガイ集中部検出状況



7. C-2 造成層 マガキガイ集中部検出状況



8. C-2 造成層マガキガイ集積 半截①

図版 24 遺物出土状況 3

1 中国産青磁（第2表、第24～26図、図版25～27）

中国産の青磁は総数806点出土しており、器種は碗・小碗・鉢・皿・小皿・盤・壺・酒会壺・高足杯・香炉・置物が確認されており、碗が大半を占める。このうち特徴的な75点を図化した

①碗（1～40）

碗は口縁部の形状（Ⅰ～Ⅲ）及び外底面の軸刺ぎの方法（1～4）で分類し、また文様があるものについては細分類とした。

Ⅰ類：口縁部が外反となるもの（2～7・11・14～16）

Ⅱ類：口縁部が玉縁となるもの（9・10）

Ⅲ類：口縁部が直口となるもの（17～24・27～32・38）

1類：外底面が蛇の目軸刺ぎされるもの（8・25）

2類：外底面が軸刺ぎされ露胎のもの（33・34・37・39・40）

3類：見込が軸刺ぎされるもの（12・13）

4類：畳付が軸刺ぎするもの（1）

文様は無文（a）や蓮弁文（b）、雷文（c）が施される。蓮弁文は線刻蓮弁文が主体となっており、鎗蓮弁文も確認されている（1）。

②皿・小皿（43～60）

皿は口縁部及び腰部の形状で分類した。

1類：直口口縁となるもの（47・49・50・58）

2類：口折れとなるもの（51～54）

3類：腰折れとなるもの（稜花、八角含む）（55・56・59・60）

文様は蓮弁文や草花文、雷文が施される。

③その他（41・61～75）

小碗は外面に線刻蓮弁文、内面に捻花文が施されており、底部には「井」が墨書で書かれている（41）。

盤は口縁が厚い罅縁となるもの（62）や稜花状となるもの（64）が、また底部は高台（65）・碁筒底ともに確認された。また文様は内面や外面に蓮弁文が、見込に刷毛目の蓮弁文や草花文が施される。

壺は外面に蓮弁文が施された蓋と、外面に陽刻の草花文が施された身がそれぞれ確認された。

酒会壺は断面形が方形となる底部が確認されている。

瓶は芭蕉文が施された口縁部（70）と蓮弁文が施された底部（71）が確認された。

高足杯は無文で高台が軸刺ぎされている。（73）

香炉は無文で内面が露胎となる。（74）

75は牛の置物と思われ、新安沈没船に類例（国立光州博物館蔵）がある。

第2表 中国産青磁観察一覧1

図・図版 番号	器 種	部 位	分 類		産 地	法量 (cm)			観察事項		グリッド ・層		
						口径	器高	底径	釉 (色・範囲・貫入)	表地 (色・質・ 混和材)		文 様 等	
第24図 図版25	1	碗	底 部	4	型付 軸割ぎ	龍泉	—	—	4.6	明緑灰釉で厚く施 軸。貫入あり。	灰白色で 整緻。	高連弁文が施され、型付は軸割ぎ される。14c 後。	C2 造成 (粘土)
	2	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	17.4	—	—	暗オリーブ色釉で 厚く施軸される。 貫入なし。	灰白色で 整緻。	大振りの碗。無文。14c 後～15c 中。	C3 新造成
	3	碗	口 縁部	1	外反	福建・ 広東か	15.2	—	—	オリーブ灰色釉で 薄く施軸される。 貫入あり。	灰白色で 整緻。	頸部下に二条の濃緑が施される。 14c 末～15c。	C2 造成
	4	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	14.6	—	—	オリーブ灰色釉。 ところどころ表地 が露出。貫入なし。	灰白色で 整緻。	無文。軸が厚く施軸される。14c 後～15c 中。	C2 造成(片)
	5	碗	口 縁部	1	外反	福建・ 広東	15.0	—	—	オリーブ灰色釉で 薄く施軸。頸部ま で軸垂れがみられ る。	灰白色で 整緻。	輪軸目が顕著。15c 頃。	C6 粗乱
	6	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	—	—	—	オリーブ褐色釉で 厚めに施軸。貫入 あり。	赤褐色で 整緻。	焼成が不良のためか全体的に赤色 となる。口縁は強引外反。内面に 印花文を施す。14c 後～15c 中。	C2 造成
	7	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	14.0	—	—	オリーブ灰色釉で 薄く施軸。	灰白色で 整緻。	口縁部は外反。頸部下に陽刻の沈 線を施す。被熱のためか表面が劣 化している。14c 後～15c 中。	C2 造成 (粘土)
	8	碗	底 部	1	外底 蛇目 軸割ぎ	龍泉	—	—	5.6	明オリーブ灰色。 貫入あり。	灰白色で 整緻。	外底面の型付より軸割ぎ。見込に 溝文が施される粗製。14c 後～ 15c 中。	C9 IV層
	9	碗	口 縁部	II	玉縁	龍泉	17.4	—	—	明オリーブ灰色釉。 貫入あり。	灰白色で 整緻。	厚手。口縁が外反し、口唇部は玉 縁状。口唇部下に明確な稜を持つ。 14c 後～15c 中。	C3 新造成
	10	碗	口 縁部	II	玉縁	龍泉	17.6	—	—	明オリーブ灰色釉。 貫入あり。	灰白色で 整緻。	口唇部下に明確な稜を持つ。無文 14c 後～15c 中。	B-9 東北IV層
	11	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	16.6	—	—	明オリーブ灰色釉。 貫入あり。	灰白色で 整緻。	外面は無文。内面に印花文を施す。 14c 後～15c 中。	C2 造成
	12	碗	底 部	2-3	外底 軸割ぎ + 見込 軸割ぎ	龍泉	—	—	6.2	暗オリーブ釉。 貫入なし。	灰白色で 整緻。軸 割ぎされ る箇所は 赤褐色。	見込を軸割ぎし、印花文を施す。 外底面を型付より軸割ぎ。14c 末 ～15c 中。	C3 新造成
	13	碗	底 部	2-3	外底 軸割ぎ + 見込 軸割ぎ	龍泉 か	—	—	5.8	明オリーブ灰色。 貫入あり。	灰白色で 整緻。軸 割ぎされ る箇所は 赤褐色。	見込み及び外底面を型付より軸割 ぎ。高台外面に二条の濃緑が施さ れる。15c。	C8 粗乱2
	14	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	17.0	—	—	明オリーブ灰色釉 を厚く施軸。貫入 なし。ややガラス 質。	灰白色で 整緻。	口縁部はゆるい外反。頸部が軸割 ぎされ、露出。14c 後～15c 中。	C4 新造成
	15	碗	口 縁部	1	外反	龍泉	—	—	—	明オリーブ灰色釉 を厚く施軸。貫入 あり。	灰白色で 整緻。	内外面にヘラ描きの草花文が施さ れる。14c 後～15c 中。	粗乱
	16	碗	口 ・ 底	1-2	外反	龍泉	17.4	8.5	6.3	明オリーブ灰色釉。 貫入あり。被熱を 受けたのかやや劣 化している。	—	大振りの碗。内外面にヘラ描きの 草文。見込に濃緑と印花文が施さ れる。外底の一部が露出。15c 後 ～16c 中。	C6 V層 + C6 粗乱 + C2 造成

第2表 中国産青磁観察一覧2

図・図版番号	番号	器種	部位	分類	産地	法量 (cm)			軸 (色・範囲・貫入)	観察事項		グリッド ・層	
						口径	器高	底径		素地 (色・質・ 混和材)	文様等		
第24回国版25	17	碗	口縁部	Ⅲ a	直口	龍泉	16.6	—	—	暗オリーブ灰色軸が厚く施軸。貫入なし。	明灰色で堅緻。	軸はガラス質で口縁部下より均質に施軸される。14c後～15c中。	D・E 4～6 視凡
	18	碗	口縁部	Ⅲ a	直口	龍泉	—	—	—	明オリーブ灰色軸。貫入無し。	—	外面口縁部下に圈線を施す。被熱のためか表面が劣化している。15c。	E-6 方形石組 東側下層
	19	碗	口縁部	Ⅲ a	直口	龍泉	13.6	—	—	暗オリーブ灰色軸。大きめの貫入がみられる。	明灰色で堅緻。	外面口縁部下に圈線が施される。15c。	C-6 視凡2
	20	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	龍泉	15.2	—	—	明緑軸で厚く施軸。貫入無し。	灰白色で堅緻。	外面にヘラ描き蓮弁文、内面の口縁部下に圈線を施す。14c後～15c中。	C-4 新造成
	21	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	龍泉	12.4	—	—	明緑灰色で厚く施軸。貫入あり。	明白色で堅緻。	口縁部下に二重圈線、その下にヘラ描きの蓮弁文が、内面にヘラ描きの草花文が施される。14c後～15c前。	C-2 造成(14)
	22	碗	口縁部	Ⅲ c	直口	龍泉	—	—	—	ガラス質のオリーブ灰色軸が厚く施軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面にヘラ描きの雷文と草文が、内面に草花文が施される。14c後～15c中。	C-4 視凡
	23	碗	口縁部	Ⅲ c	直口	龍泉	—	—	—	明オリーブ灰色軸。大きめの貫入がみられる。	灰白色で堅緻。	外面にヘラ描き雷文と蓮弁文が施される。14c後～15c中。	C-4 新造成
	24	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	龍泉	—	—	—	明オリーブ灰色軸で厚く施軸。貫入なし。	明灰色で堅緻。	外面に剣先蓮弁文、内面にヘラ描きの草花文が施される。15c前～中。	C-3 造成
	25	碗	底部	1	外底 蛇目 軸割ぎ	龍泉	—	—	6.2	明オリーブ灰色で厚く施軸。貫入なし。ややガラス質。	灰白色で堅緻。	外底面が蛇目軸割ぎされる。見込に圈線とその内側に印花文が施される。外面にヘラ描きの蓮弁文が。覆付の一部と外底面に砂が付着する。14c後～15c中。	C-4 新造成
	26	皿	底部	—	—	龍泉	—	—	5.4	明オリーブ灰色で厚く施軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。	外底面の覆付途中より露露。見込に圈線とその内側に印花文が施される。14c後～15c中。	視凡
第25回国版26	27	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	龍泉	—	—	—	オリーブ褐色で薄く施軸。細かい貫入が見られる。	灰褐色でやや軟質。	焼成が不良のためか全体的に赤色となる。外面に線刻の蓮弁文が施される。15c中～16c初。	B-9 IV層
	28	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	福建・広東	12.8	—	—	オリーブ灰色軸が薄く施軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。	外面に弁先が揃わない線刻の蓮弁文が施される。15c中～16c前。	C-3 新造成
	29	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	福建・広東	11.0	—	—	明緑灰色軸で薄く施軸。貫入なし。	明灰色で堅緻。	外面に弁先のそろわない線刻の蓮弁文が施される。15c後～16c前。	C-4 新造成
	30	碗	口縁部	Ⅲ c	直口	福建・広東	—	—	—	少しガラス質の明オリーブ灰色軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。	口縁部の少し肥厚する。外面に雷文が施される。15～16c。	C-3 新造成
	31	碗	口縁部	Ⅲ b	直口	福建・広東	13.6	—	—	オリーブ灰色軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。焼成が不良のためか一部分が赤色。	外面に雷文が施される。15c中～16c前。	C-4新造成 ・ C-4視凡

第2表 中国産青磁観察一覧3

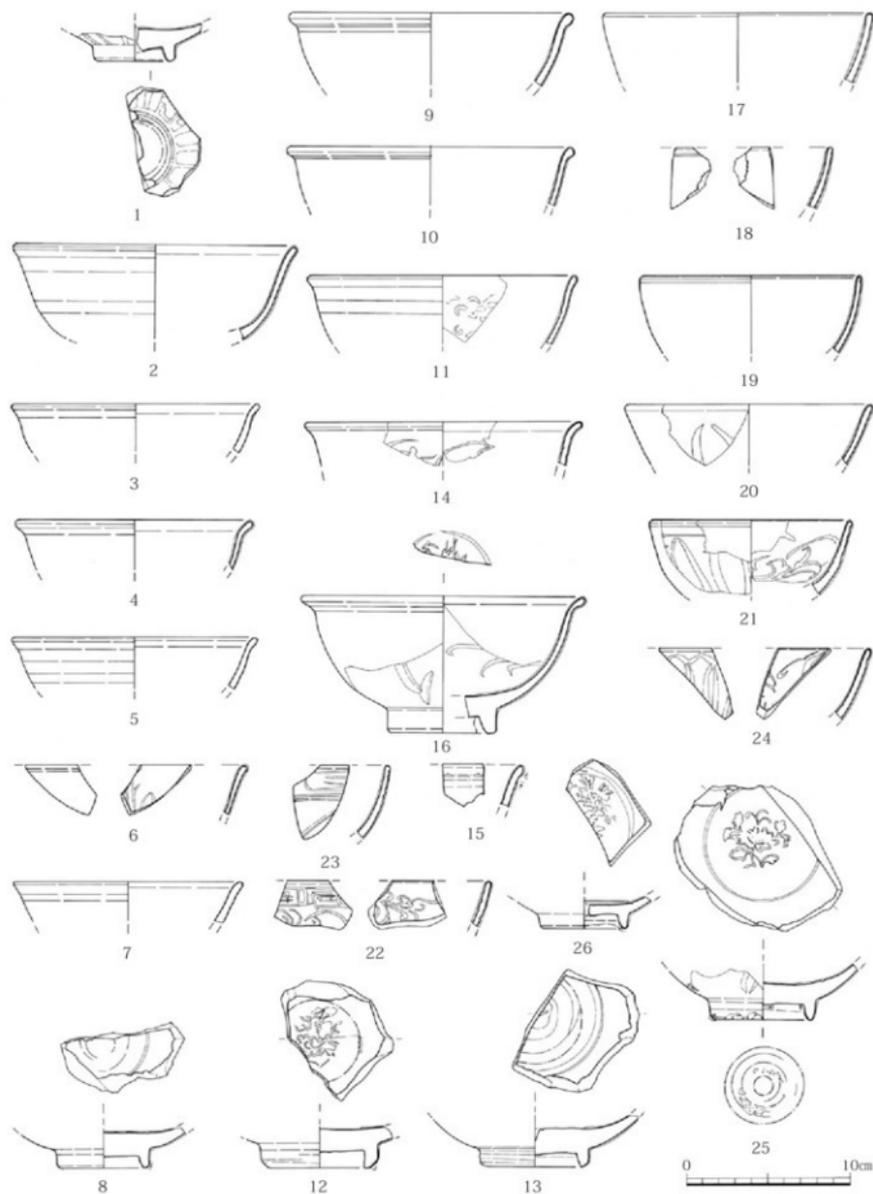
図・図版番号	番号	器種	部位	分類	産地	法量 (cm)			観察事項		グリッド・層		
						口径	器高	底径	軸 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)		文様等	
第25図 図版26	32	碗	口縁部	Ⅲ a	直口	福建・ 広東	14.0	—	—	明黄色釉。微細な貫入が見られる。	淡黄色で軟質。	焼成が不良のためか酸化気味。薄手。15～16c 前。	C3 新造成 +D6 方形石組 東側2層 +D6 方形 石組上面
	33	碗	底部	2	外底 軸削ぎ	龍泉	—	—	4.8	オリーブ灰色釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。	底径がやや小さい。外底面の高台途中より露出。見込に圈線とその内側に不明文字の印が施される。14c 後～15c 中。	C4 新造成
	34	碗	底部	2	外底 軸削ぎ	龍泉	—	—	5.2	暗オリーブ色釉。粗い貫入あり。	灰白色で堅緻。	外底面の高台途中より露出。見込にやや幅広い圈線とその内側に印花文が施される。14c 後～15c 中。	C4 粗丸
	35	碗	底部	—	—	龍泉	—	—	7.0	暗オリーブ灰色釉が厚く施軸。微細な貫入がみられる。	灰褐色でやや軟質。	外底面に貫付が軸削ぎされる。14c 後～15c 中。	C2 造成
	36	碗	底部	4	貫付 軸削ぎ	福建・ 広東か	—	—	5.0	オリーブ灰色釉を厚く施軸。貫入なし。	赤褐色でやや軟質。一部は灰黒色。	焼成が不良のためか釉の発色が悪い。貫付を軸削ぎ。また外底面の一部が露出する。胴部と高台。外底面の一部の軸葉が薄く、素地が見える。15c。	C4 新造成
	37	碗	底部	2	外底 軸削ぎ	龍泉	—	—	5.2	灰白色釉。	灰褐色で軟質。	焼成不良のため軸部に凹凸が目立ち、素地も軟質。外底面が露出。底径が小さい。15c。	E6 方形石組 上層・ E6 粗丸
	38	碗	口縁部	Ⅲ	直口	福建・ 広東	13.8	—	—	ガラス質のオリーブ灰色釉が厚く施軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	口縁部は直口。外面口縁部下に波濤文。その下部に圈線と弁先の無い蓮弁文が施される。表面に細かい気泡が多くみられる。16c。	B7 粗丸
	39	碗	底部	2	外底 軸削ぎ	龍泉	—	—	6.4	灰白色。貫入あり。	黄白色でやや軟質。	見込に圈線とその内側に印花文が施される。高台が「ハ」の字状に開く。外底面が貫付より露出。14c 後～15c 中。	C2 粗丸
	40	碗	底部	2	外底 軸削ぎ	中国	—	—	5.4	灰オリーブ釉。ガラス質。微細な貫入が見られる。	黄白色でやや軟質。	外底面が「ハ」の字状に開く。外底面の高台より露出。貫付に砂が付着。明代。	C3 造成
	41	小碗	口・底	—	—	龍泉	8.0	5.1	3.4	明オリーブ灰色釉。粗い貫入がみられる。	灰白色で堅緻。	外面に弁先の揃う欄刻蓮弁文、内面に捻花文が施される。外底面に墨書で「丹」の字がみられる。外底面露出。外底面に焼き具と思われる付着物あり。15c 中～末。	粗丸
	42	鉢か (or 盃)	底部	—	—	景德 鎮か	—	—	4.4	明緑釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外底面が露出し、鉄が付着している。清明の可能性。17c 末～18c。	E9 粗丸
	43	小皿	底部	—	—	龍泉	—	—	5.2	明オリーブ灰色で厚く施軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。露胎部分は赤褐色。	外面に無輪蓮弁文、見込に欄刻の圈線が施される。貫付を軸削ぎ。外底面無軸。14c 後～15c 初。	C3 新造成
	44	皿	底部	—	—	龍泉	—	—	6.4	明オリーブ灰色釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。露胎部分は赤褐色。	被熱のためか劣化している。外底面露出。14c 後～15c 中。	C3 造成
	45	皿	底部	—	—	龍泉	—	—	7.9	オリーブ灰色釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。一部が赤褐色。	外底面の貫付より露出。14c 末～15c。	C4 新造成

第2表 中国産青磁観察一覧4

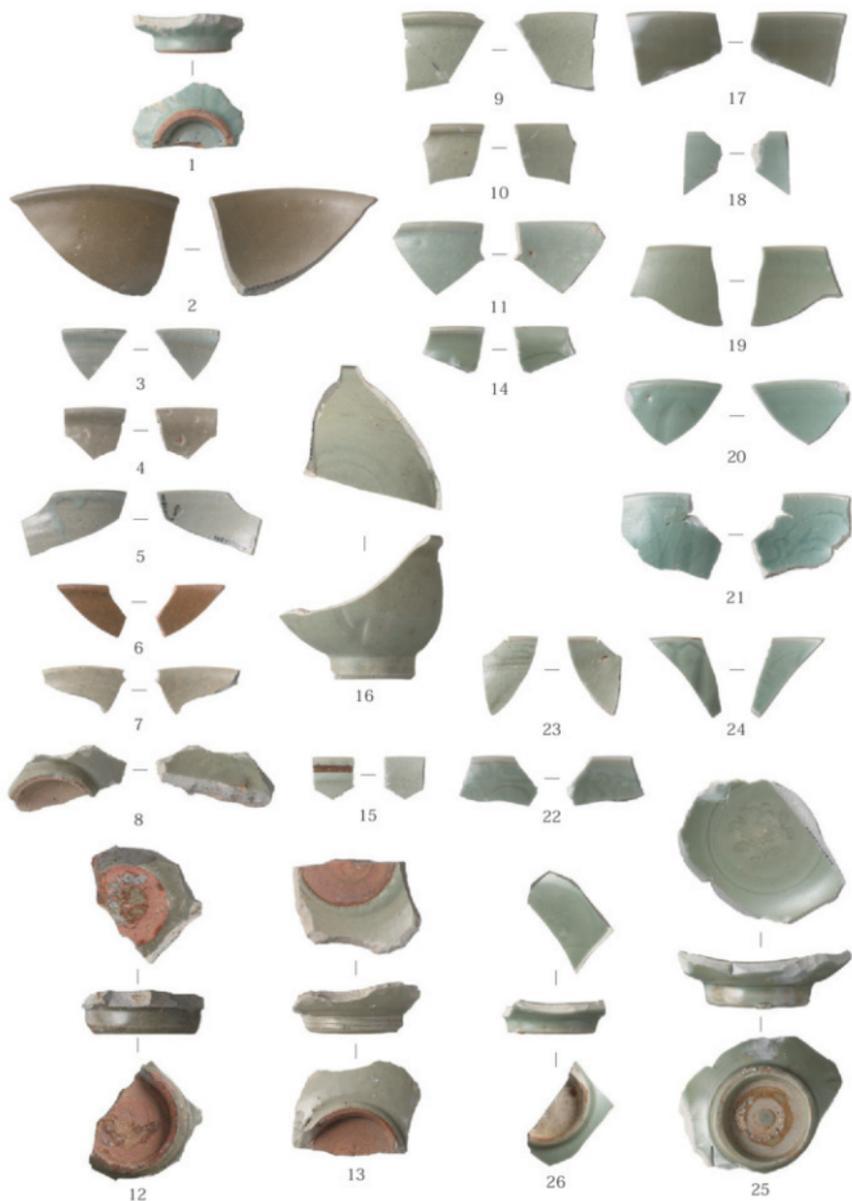
図・図版番号	番号	器種	部位	分類	産地	法量 (cm)			観察事項		グリッド・層		
						口径	器高	底径	釉 (色・範囲・貫入)	表地 (色・質・混和材)		文様等	
第25図 図版26	46	小皿	底部	—	龍泉	—	—	6.5	オリーブ灰色釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。一部が赤褐色。	見込に開刻の彫線が施される。見込及び外底面の中央部分が釉割ぎ。14c後～15c中。	C-2 複丸	
	47	小皿	口縁部	1	直口	龍泉	9.4	3.2	4.6	オリーブ灰色釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面に無銘蓮弁文が施される。被熱のためか劣化している。14c後～15c初。	C-3 新造成
	48	小皿	口縁部	—	—	龍泉	8.0	—	—	明オリーブ灰色釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面にへら描きの蓮弁文が施される。14c後～15c中。	表探
	49	小皿	口縁部	1	直口	龍泉か	—	—	—	明緑灰色釉。粗い貫入が見られる。	灰白色で堅緻。	無文。やや内湾する。15c。	C-9 IV層
	50	皿	口縁部	1	直口	龍泉	12.2	—	—	オリーブ灰色釉。	灰色で堅緻。	輪軸目が顕著。口縁部下に彫線が施される。14c後～15c中。	C-2 造成
	51	小皿	口縁部	2	口折	龍泉	—	—	—	暗オリーブ灰色釉で厚く施釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。	やや被熱を受けている。14c後～15c中。	C-4 新造成
	52	小皿	口縁部	2	口折	龍泉	11.8	—	—	明オリーブ灰色釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。	外面にへら描きの蓮弁文が施される。14c後～15c中。	C-2 複丸
	53	小皿	口縁部	2	口折	龍泉	12.0	—	—	オリーブ灰色釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面にへら描きの蓮弁文が施される。14c後～15c中。	E-8 複丸
	54	皿	口縁部	2	口折	龍泉	—	—	—	暗オリーブ灰色釉が厚く施釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面にへら描きの蓮弁文、内面に草花文が施される。口唇部は稜花状となる。15c。	C-7 II層
	55	皿	口縁部	3	腰折 (稜花含む)	龍泉	—	—	—	明オリーブ灰色釉を厚く施釉。貫入なし。ややガラス質。	灰白色で堅緻。	八角皿。内面に雷文帯と雲文、区兩線。14c後～15c中。	複丸
56	皿	口縁部	3	腰折 (稜花含む)	龍泉	12.2	—	—	明オリーブ灰色釉を厚く施釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	内外面にへら描きの草花文が施される。14c後～15c中。	D-8 複丸	
第26図 図版27	57	皿	底部	—	—	龍泉	—	—	12.6	オリーブ灰色釉を厚く施釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外底面が蛇目軸割ぎか、内面に蓮弁文と彫線が1条施される。14c後～15c中。	C-6 複丸
	58	小皿	口縁部	1	直口	龍泉	9.8	2.9	4.8	明緑釉。貫入あり。	灰白色でやや軟質。	見込に折枝文印文が施される。全面施釉後に外底面が蛇目軸割ぎされる。15c。	C-4 新造成
	59	皿	口縁部	3	腰折 (稜花含む)	福建・広東	12.2	—	—	灰色釉。口縁部付近に輪垂れあり。貫入なし。	灰色でやや軟質。	口唇部は稜花状となり、口縁部下に彫線が2～3条施される。弱い腰折れとなる。15c後～16c前。	C-4 新造成
	60	皿	口縁部	3	腰折 (稜花含む)	龍泉	—	—	—	暗オリーブ色釉。貫入なし。	灰色または赤褐色で軟質。	口唇部は弱い稜花状となり、内面腰部分に2条、外面口縁部下に1条の彫線が施される。弱い腰折れとなる。15c。	D-6 方形石皿 上面
	61	盤	底部	—	—	龍泉	—	—	24.0	オリーブ灰色釉を厚く施釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	被熱を受けたためか劣化している。内外面に蓮弁文が施される。外底面が釉割ぎされる。14c。	C-4 新造成

第2表 中国産青磁観察一覧5

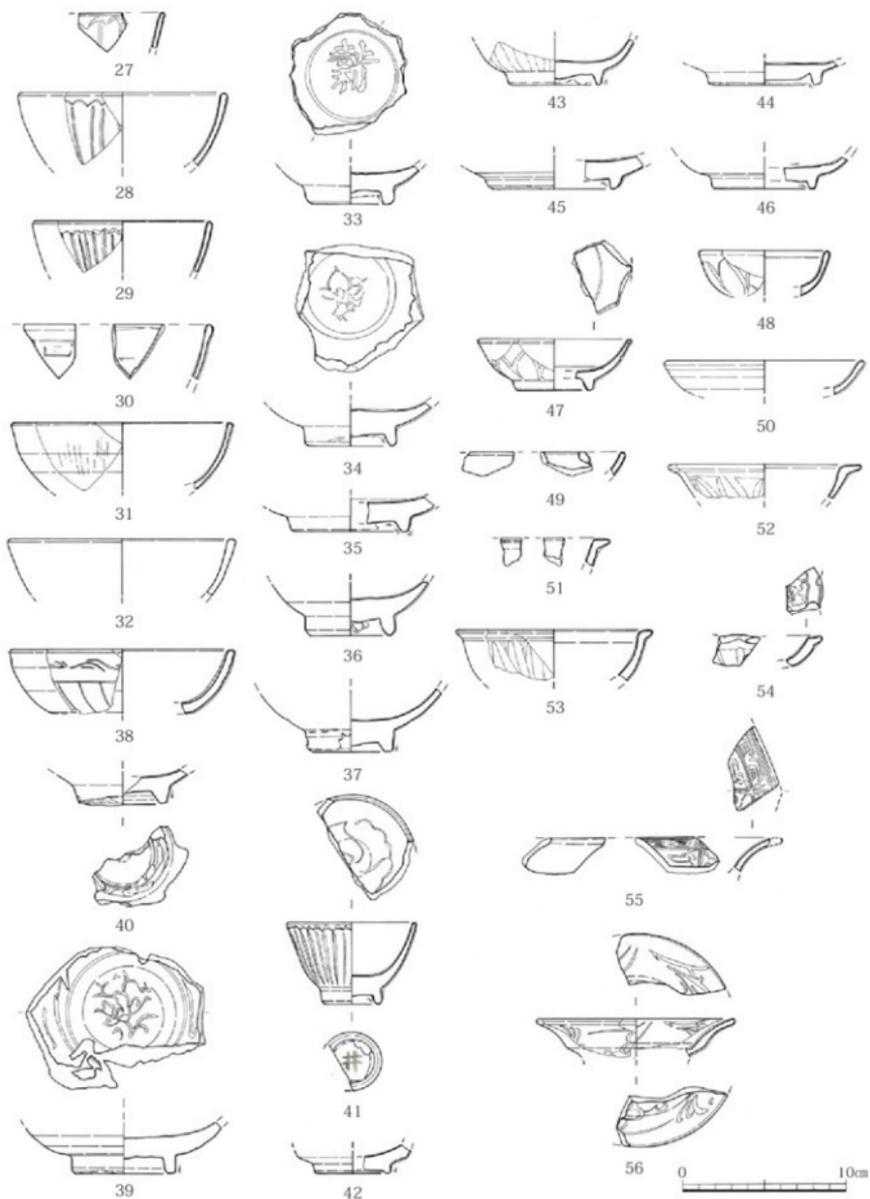
図・図版番号	番号	器種	部位	分類	産地	法量 (cm)			観察事項		グリッド・層	
						口径	器高	底径	軸 (色・範囲・貫入)	表地 (色・貫・混和材)		文様等
第26図 図版27	62	盤	口縁部	—	龍泉	26.0	—	—	オリーブ灰軸でややガラス質。貫入なし。	灰白色で堅緻。	口縁部が肥厚する筒縁状となる。内面に蓮弁文が施される。口縁部付近に耐火粘土が付着。14c後～15c中。	南朝瓦
	63	盤	口縁部	—	龍泉か	—	—	—	灰オリーブ色軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。	焼熱のためか劣化しており、表面がざらつく。口縁部が肥厚する筒縁状となる。内面に蓮弁文が施される。14c末～15c。	C2 造成
	64	盤	口縁部	—	龍泉	34.4	—	—	オリーブ灰色軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	口縁部が輪花状となり、内外面に稜花に沿った彫線が施される。内外面に蓮弁文が施され、外面には蓮弁文の上より彫線が施される。14c後～15c中。	C3 造成 (西原V層)
	65	盤	底部	—	龍泉	—	—	20.4	明オリーブ灰色軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外底面が縦軸割ぎされる。見込に刷毛目の蓮弁文、二重彫線の内にへら形の草花文が施される。14c後～15c中。	覆瓦
	66	盤	底部	—	龍泉	—	—	11.0	オリーブ灰色でややガラス質軸が厚く施軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外底面が縦軸割ぎされる。見込に文様が高台が内側に14c後～15c中。	覆瓦
	67	壺	胴部	—	龍泉	—	—	—	明緑灰色でガラス質の軸が厚く施軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面に間隔の草文が施される。断面に割と思われる金属片が付着。14c。	C7 覆瓦Ⅱ
	68	壺(蓋)	胴部	—	龍泉	—	—	—	オリーブ灰色軸。貫入あり。	灰白色で堅緻だが、一部が焼成不良のためか赤褐色でやや軟質。	外面にへら書きの蓮弁文が施される。14c後～15c初。	C3 新造成
	69	酒会壺	底部	—	龍泉	—	—	17.6	明オリーブ灰色でややガラス質。貫入なし。	灰白色で堅緻。	内外底面の高台下半が顕著。貫付には石灰と思われる塊が付着。14c後～15c初。	覆瓦
	70	瓶	口縁部	—	龍泉	6.0	—	—	オリーブ灰色でガラス質の軸が厚く施軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面の口縁部下に芭蕉文が施される。14c後～15c中。	C4 新造成
	71	瓶	底部	—	龍泉	—	—	7.8	オリーブ灰色軸でガラス質。貫入なし。内底面まで施軸。	灰白色で堅緻。	外面の高台に蓮弁文とその下に彫線が施される。外面胴部に蓮弁文が。外底面は軸割ぎされる。14c後～15c中。	D6 方形石胆 西側2層
	72	瓶	底部	—	龍泉	—	—	7.0	明緑色軸でガラス質軸が厚く施軸。内底面は顕著。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面の高台付近に蓮弁文が施される。外底面は軸割ぎされる。高台は「ハ」の字状に開く。14c後～15c中。	C3 新造成
	73	高足杯	底部	—	龍泉	—	—	3.4	明オリーブ灰軸でややガラス質。貫入なし。	灰白色で堅緻。	貫付を軸割ぎし、外面高台の一部が顕著。胴部に1条の彫線が施される。15c。	C9 Ⅱ層
	74	香炉	口縁部	—	龍泉	—	—	—	オリーブ灰色軸が厚く施軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	口縁部は直口。内面の一部が顕著。14c後～15c中。	C9 東比Ⅲ層
	75	置物か	—	—	龍泉	—	—	—	明オリーブ灰色軸でガラス質。貫入なし。	—	牛形。型押し成形。外底面は顕著し、布目が見られる。14c後～15c。	C4 新造成



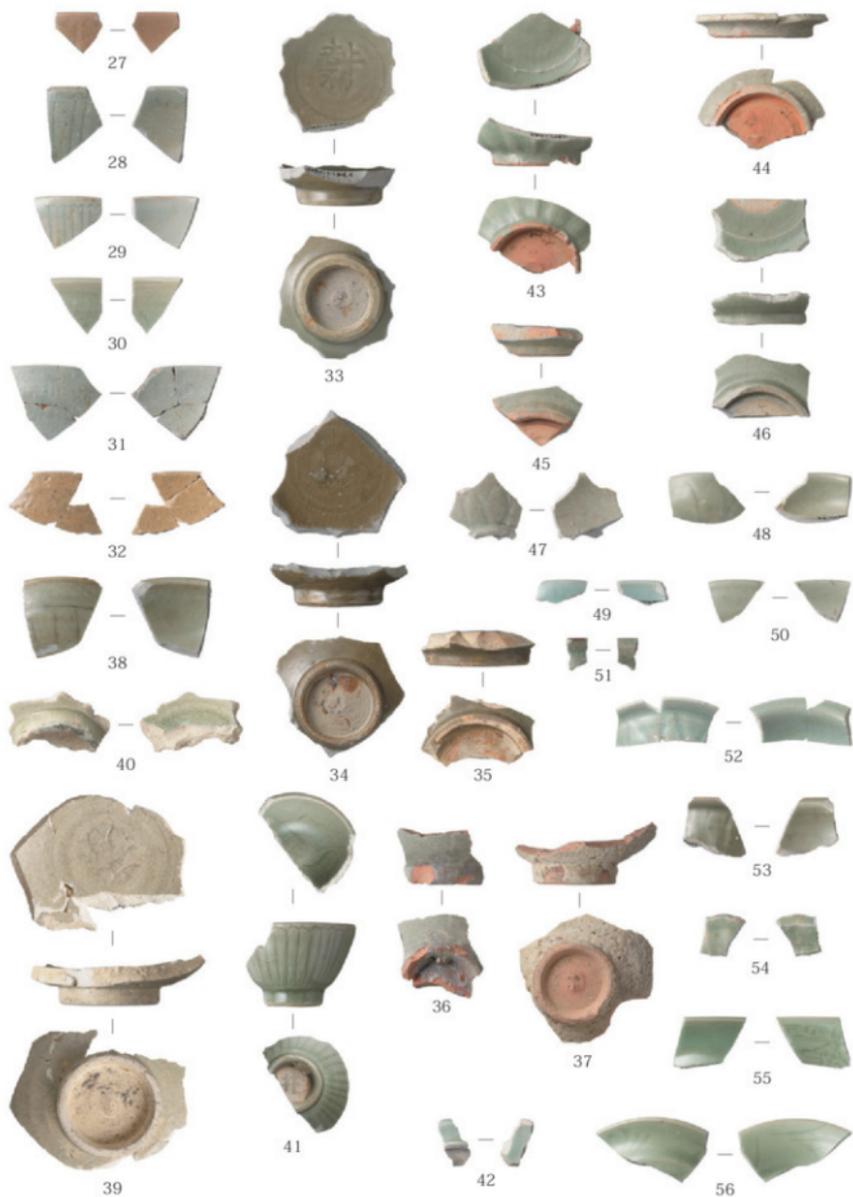
第24図 中国産青磁1



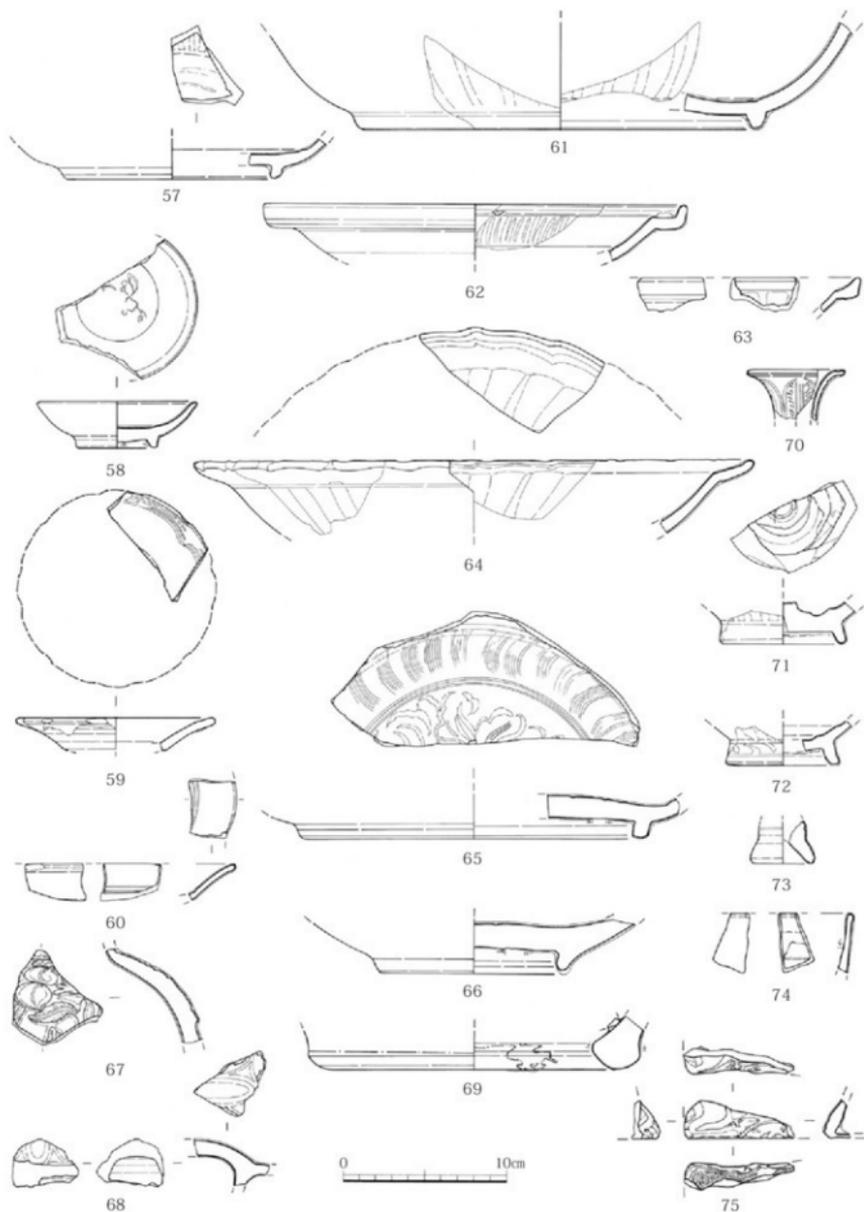
图版 25 中国産青磁 1



第25図 中国産青磁2



図版 26 中国産青磁 2



第26図 中国産青磁3



図版 27 中国産青磁 3

2 中国産白磁（第3表、第27図、図版28）

中国産の白磁は総数189点出土している。器種は碗・小碗・杯・小杯・皿・小皿・壺・瓶・レンゲが確認されている。器種は小杯が最も多い。産地は福建産、景德鎮産、徳化窯系、福建・広東系が確認でき、福建産が多くを占める。このうち特徴的な32点を図化した。

①碗（1・2）

碗は福建産が大半を占め、景德鎮産、福建・広東系の順に多い。1は福建・広東系の直口で外面に波濤文と蓮弁文が施される。

②小碗（3～6）

徳化窯産の資料が確認されており、主に型成形で口禿となる資料が確認されている。

③小杯（7～14）

小杯は白磁の器種中最も多く、景德鎮産、徳化窯産が確認されている。福建産では八角皿（7）が、景德鎮産では口縁部が直行し、やや腰折れのもの（8）、また徳化窯系では型造り成形の資料が多い傾向にある。

④皿・小皿（15～29）

皿は福建産、景德鎮産、福建・広東系が確認されている。福建産は口縁部が内湾するもの（16）や無文で外反するもの（15）、口縁部が内湾し胴部下半が露胎するもの（27・28）、挟り高台となるもの（26）が確認されている。また景德鎮産は釉が青白色で口縁部がやや玉緑となるもの（21）、薄手で口縁部が外反となるもの（22・23）が確認されている。福建・広東系は見込が蛇目釉刺ぎされ外面下半が露胎となるもの（17）、口唇部及び口縁部内外に稜をもつもの（18）、畳付が平坦で外面を削るもの（20）が確認されている。また29は腰折れ皿で、胎土や釉調から福建産と考えられる。

⑤壺・瓶（30・31）

壺は福建産のアンピン壺（30）が確認されている。また31は景德鎮産の瓶と考えられ、外面に蓮弁文が施され畳付が釉刺ぎされている（31）。

⑥その他（32）

32は徳化窯系のレンゲで、外面の一部が露胎している。

第3表 中国産白磁観察一覧1

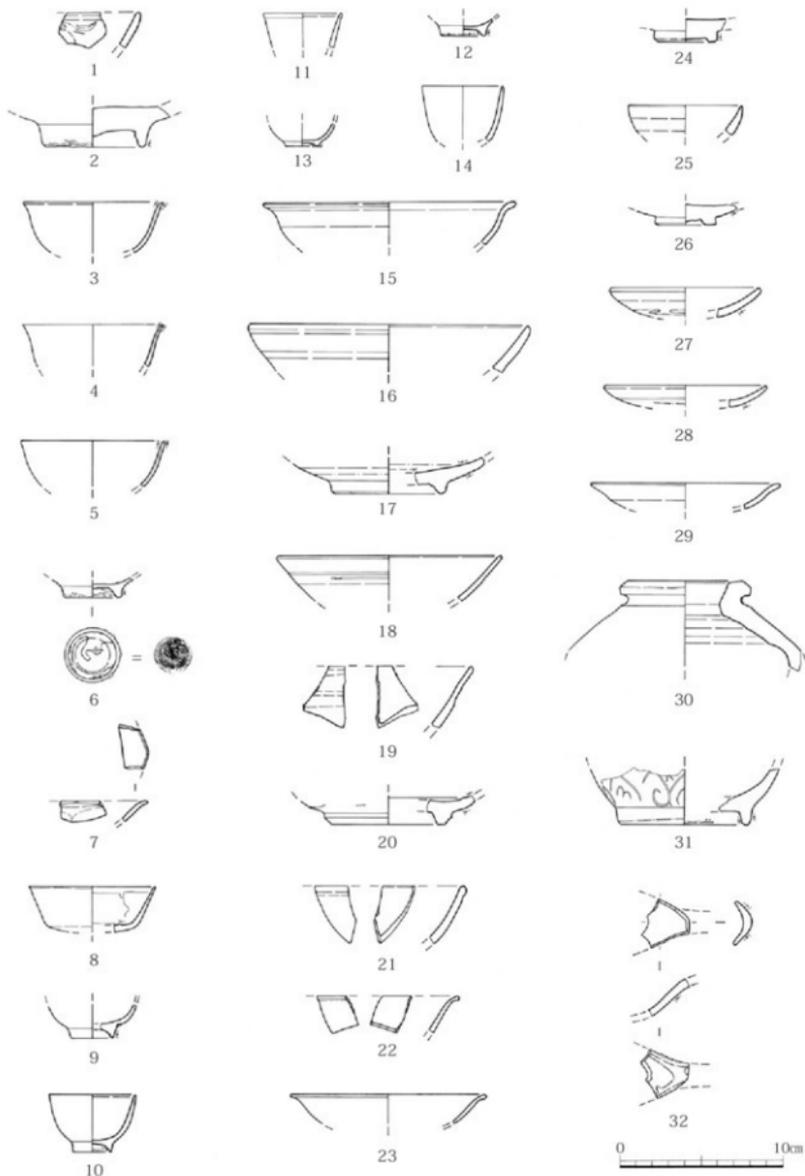
図・図版番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			観察事項			グリッド層
					口径	器高	底径	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第27回国版28	1	碗	口縁部	福建・広東	—	—	—	やや赤みを帯びた失透明釉。貫入あり。	灰色でやや軟質。	直口口縁。口縁部下波濺文と垂片文が施される。16c。	C-4 新造成
	2	碗	底部	福建・広東	—	—	6.0	明緑灰色釉でガラス質。貫入なし。	灰色で堅緻。	見込に1条の溝線が施される。垂付を軸割ぎし、外底面露胎。底に褥地の痕あり。	B-7 覆瓦
	3	小碗	口縁部	徳化	8.6	—	—	ガラス質の透明釉。	白色で堅緻。	口先、弱い環状口縁。胴部の一部にアバタあり。型造り成形。18～19c中。	B-8 南ア II a層
	4	小碗	口縁部	徳化	8.6	—	—	ガラス質の透明釉。	黄白色で堅緻。	口先、弱い環状口縁で突る。型造り成形。18～19c中。	覆瓦 + C-3覆瓦
	5	小碗	口縁部	徳化	8.9	—	—	ガラス質の透明釉。	白色で堅緻。	口先、直口口縁。型造り成形。18～19c中。	C-9 II層 D-9 II層
	6	小碗	底部	徳化	—	—	3.4	ガラス質の透明釉。	白色で堅緻。	型造り成形。外底面は露胎。垂付が軸割ぎされ砂が付着。外底に「+」の刻印。18～19c中。	D-9 覆瓦2
	7	小杯	口縁部	福建	—	—	—	失透明釉。貫入あり。	乳白色でやや軟質。	八角小杯。外反口縁。15～16c前。	E-7 礎石周辺
	8	小杯	口縁部	景徳鎮	7.7	—	—	失透明釉。	灰白色で堅緻。	腰折れ。視熱のためかやや劣化している。見込は蛇目軸割ぎされる。16c後。	C-4 新造成
	9	小杯	底部	景徳鎮	—	—	2.6	ガラス質でやや灰色の透明釉を厚く施釉。	灰白色で堅緻。	垂付を軸割ぎし、外底面露胎。16～17cか。	C-4 新造成
	10	小杯	口底	徳化	5.3	3.55	2.4	ガラス質の透明釉。貫入あり。	白色で堅緻。	直口口縁。全面施釉される。高台部分に砂が付着。18～19c中。	C-9 II層下部
	11	小杯	口縁部	徳化	4.8	—	—	ガラス質の透明釉。貫入なし。	白色で堅緻。	弱い外反口縁。17～18cか。	C-9 II層

第3表 中国産白磁観察一覧2

図・図版番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			観察事項			グリッド層
					口径	器高	底径	軸 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第27回国版28	12	小杯	底部	徳化	—	—	2.7	ガラス質の透明軸。貫入なし。	白色で堅緻。	型造り成形。貫付に砂が付着。18～19c中。	D9 視見2
	13	小杯	底部	徳化	—	—	2.0	やや青みがあったガラス質の透明軸。	灰白色で堅緻。	型造り成形。貫付を軸割ぎ。貫付と外底面に砂が付着。18～19c中。	C9 II層 + D8 II層
	14	小杯	口縁部	中徳国化か	5.0	—	—	失透明軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	直口口縁。外面は轆轤目が顕著。19c。	B9 視見
	15	皿	口縁部	福建	15.4	—	—	ガラス質オリーブ灰色の透明軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外反口縁。無文。軸は光沢が強い。14c。	視見
	16	皿	口縁部	福建	17.0	—	—	ガラス質の透明軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	内湾口縁。厚手で轆轤目が顕著。14～15c。	D8 視見
	17	皿	底部	福建・広東	—	—	7.0	灰色の失透明軸。貫入なし。	乳白色でやや軟質。	内底面を蛇口軸割ぎ。外面下半が真胎し。貫付は内側のみが接地する。16～17cか。	C8 東片II層
	18	皿	口縁部	福建・広東	13.8	—	—	ガラス質の透明軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。	口唇部が突り、口縁内外に明瞭な稜が見られる。16～17cか。	C8 III層
	19	皿	口縁部	福建・広東	—	—	—	緑色の透明軸。	灰白色で堅緻。	口縁部は直口で、外面の轆轤目が顕著。16～17c。	C7 III層
	20	皿	底部	福建・広東	—	—	7.0	乳白色の透明軸。微細な貫入がみられる。	乳白色でやや軟質。	内面を軸割ぎか。外面下半が真胎。貫付は平用となり、高台外面にケズリあり。明代か。	視見
	21	皿	口縁部	景德鎮	—	—	—	青白色の透明軸を厚く施軸。貫入あり。	灰白色で堅緻。	内湾する狭い玉縁口縁。14c頃。	C4 新造成
	22	皿	口縁部	景德鎮	—	—	—	灰白色の失透明軸。	灰色で堅緻。	外反口縁。薄手で口縁部下がやや玉縁状。16c。	C6 視見

第3表 中国産白磁観察一覧3

図・図版 番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			観察事項			グリッド ・層
					口径	器高	底径	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第27図 図版28	23	皿	口縁部	景徳鎮	12.0	—	—	灰白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	外反口縁。薄手でやや浅い。16c。	C-4 新造成
	24	小皿	底部	福建	—	—	3.4	乳白色の透明釉。微細な貫入がみられる。	黄白色でやや軟質。	外面高台の一部及び外表面が露胎。高台はやや厚い。14～15c前。	損乱
	25	小皿	口縁部	福建・広東	7.0	—	—	ややオリブがかかった白色の透明釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。褐色粒を多く含む。	外面は釉層白が顕著で、全体的に気泡が目立つ。14～15c。	損乱
	26	小皿	底部	福建	—	—	3.5	乳白色の透明釉。貫入なし。	黄白色でやや軟質。	外表面は露胎。袂り高台。15c。	C-4 新造成
	27	小皿	口縁部	福建	9.3	—	—	灰白色の透明釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。	外面胴部下半より露胎。15～16c前。	C-4 新造成
	28	小皿	口縁部	福建	9.8	—	—	ややオリブがかかった白色の透明釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。	外面下半より露胎。外面は釉層白が顕著。15～16c前。	C-2 造成(片)
	29	小皿	口縁部	福建か	11.6	—	—	透明釉。貫入なし。	白色で堅緻。	腰折れ皿。15～16c前。	D-3 損乱
	30	蓋 (<small>ハアツビ</small>)	口縁部	福建	8.0	—	—	オリブ灰色の透明釉。貫入あり。	灰白色で堅緻。	アンピン造。17c頃。	損乱
	31	瓶 か	底部	景徳鎮	7.8	—	—	灰白色の失透明釉。貫入なし。	灰白色で堅緻。	外面高台付近に線刻蓮弁文を描く。貫付を袖削ぎ。内面貫付付近に砂が付着。14c後～15c。	B-8 損乱
32	レンゲ	—	徳化	—	—	—	灰白色の失透明釉。	灰白色で堅緻。	型造り成形。外面の一部が露胎。17c末～19c中。	南損乱	



第27図 中国産白磁



図版 28 中国産白磁

3 中国産青花(第4表、第28・29図、図版29・30)

中国産の青花は総数455点出土している。器種は碗・小碗・鉢・皿・小皿・小杯・小壺・袋物・瓶などがあり、碗が大半を占める。産地は景德鎮窯、福建窯、福建・広東系、徳化窯系が確認でき、景德鎮窯産が多くを占める。ここでは産地ごとに概要を示し、特徴的な43点を図化した。

・景德鎮窯(1～31)

景德鎮産の資料は碗・小碗・皿・小皿・小杯・小壺・瓶・袋物が確認されている。碗が多くを占める。

①碗(1～11)

碗は口縁が直口、端反の資料が確認されており、このほか蓮子碗(4)、饅頭心(8)やなども見られる。文様は外面口縁部に四方禪文(1・12)や雷文(3・5)、波濤文(6)、外面胴部に宝珠唐草文(5)、牡丹唐草文(11)、などが施される。2は見込に捻花文、4は外面に如意頭唐草文と見込に蓮、7の外面は梅樹文と考えられ、8は役人と思われる人物が描かれている。

②鉢(12)

鉢は1点確認されており、口縁部は外反し外面に鳥文、内面に四方禪文が施され上手物と考えられる。

③小碗(13～18)

小碗は口縁が直口するタイプが多く、外反する資料も見られる(18)。文様は外面に菊花唐草文と腰部に蓮弁文(14・15)、梵字文(13)、靈芝文(17)、菊花文(18)が施される。

④皿・小皿(19～27)

皿・小皿は口縁部が端反や直口となるものが確認されており、特に19は口縁部が稜花状となる資料である。また底部が高台をもつタイプや碁筒底となるタイプが確認されている。24は直口する薄手の皿で、外面には波濤文と思われる文様が施される。文様は外面に花唐草文(19・26)、草花文(21)、雷文(23)、蓮弁文(27)、内面口縁部に四方禪文(19)、見込にアラベスク文(20)、菊花文(22)が施される。

⑤小杯(28)

小杯は口縁部が直口し腰折となる資料が確認されており、外面に点文が施され、畳付から外底面までが釉剥ぎされる。

⑥小壺・瓶・袋物(29～31)

小壺(29)は頸部より窄まる器形で、外面頸部に蓮弁文が施される。袋物(30)も頸部よりやや窄まる器形で、口唇部が釉剥ぎされ、外面に山水文と思われる文様が施されている。31は瓶の底部と考えられる資料で、高台に太い圏線が施される。

⑦福建・広東系・徳化窯・その他(32～43)

福建窯産と徳化窯系、福建・広東系は碗・鉢・小碗・皿・小杯が確認されており、碗が多くを占めている。

碗(32～38)は高台が釉剥ぎされ、見込が蛇目釉剥ぎされるもの(33・34)、内面胴部が露胎するもの(37)が見られる。文様は外面に寿字文(36)、スタンプの菊花文(37)、腰部に蓮弁文(33・35)が見られる。

鉢(39)は外反口縁の資料で、乳白色の釉調となる。

小碗(41)は口禿の直口口縁となるもので、外面胴部に四方禪文が施される。

皿(40)は底部が確認されており、畳付が釉剥ぎされ見込に草花文が施される。

小杯(42)は口縁部は口禿で直口、やや腰の折れる器形で、外面に梵字文が施される。

43は外反する鉢で、胎土は灰色で呉須で文様が描かれる。産地を特定できなかったためその他とした。

第4表 中国産青花観察一覧1

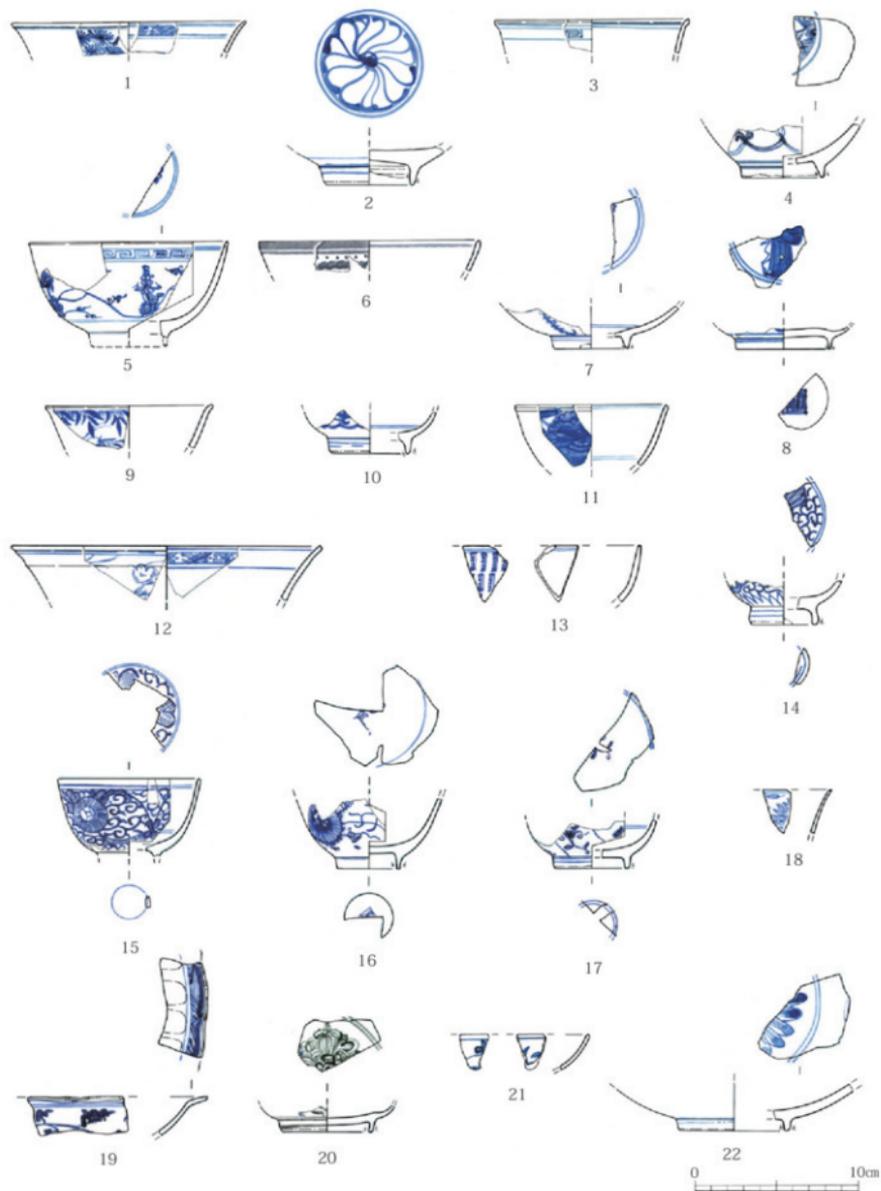
国・図版番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			釉 (色・範囲・貫入)	観察事項		グリッド・層
					口径	器高	底径		素地 (色・貫・混和材)	文様等	
第28回国 図版29	1	碗	口縁部	景德鎮	14.4	—	—	内外青白色の半透明釉。	灰白色で堅緻	端反口縁。外面に口縁下に松葉文、内面口縁部下に四方禪文が施される。15c末～16c中。	C-4 新造成
	2	碗	底部	景德鎮	—	—	5.3	内外青白色の透明釉。 内外高台から貫付、 外底面を蛇目輪割ぎ。	灰白色で堅緻。	高台は高く、高台外面に二重圈線が、見込に松葉文が施される。15c末～16c前。	視乱
	3	碗	口縁部	景德鎮	12.0	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻	端反口縁。外面口縁部下に雷文、内面口縁部下に二重圈線が施される。15c末～16c中。	B9 Ⅲ層
	4	碗	底部	景德鎮	—	—	4.9	内外青白色に透明釉。 貫付を輪割ぎ。	灰白色で堅緻。	蓮子碗。外面に如意頭唐草文？、見込に松葉文。16c前～中。	視乱
	5	碗	口縁部	景德鎮	12.2	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻	直口口縁。外面の口縁部下に雷文、宝珠唐草、見込には二重圈線とその内に文様が施されるが不明。16c頃。	視乱
	6	碗	口縁部	景德鎮か	13.6	—	—	内外青灰色の透明釉。	灰色で堅緻。	口縁は内湾する。外面口縁部下に二重圈線と波濤文が施される。16c。	B-4 V層・ C-4 視乱2
	7	碗	底部	景德鎮	—	—	4.6	内外青白色の透明釉。 貫付を輪割ぎ。	灰白色で緻密。	外面に梅葉文？、見込に二重圈線が施される。貫付にもみぎら状痕跡。16c中。	視乱
	8	碗	底部	景德鎮	—	—	5.8	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	隠涌心。見込に段人が描かれ、外底面に銘あり。16c第4四半期。	視乱
	9	碗	口縁部	景德鎮	10.2	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	端反口縁。外面に竹文？が施される。17c。	B9 視乱
	10	碗	底部	景德鎮	—	—	4.6	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	外面に簡略化された如意頭唐草文、見込に二重圈線が施される。貫付が輪割ぎされる。17～18c前。	E6 方形 石皿上層
	11	碗	口縁部	景德鎮	9.4	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻	直口口縁。外面に牡丹唐草文が施される。	視乱
	12	鉢	口縁部	景德鎮	19.0	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻	端反口縁。外面口縁部下に二重圈線と鳥文が、内面口縁部下に四方禪文が施される。上手物。15c後～16c前。	C-4 新造成
	13	小碗	口縁部	景德鎮	—	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	直口口縁。内外面の口縁下に二重圈線。外面に梵字文が施される。18c後～19c初。	南朝乱
	14	小碗	底部	景德鎮	—	—	4.2	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	高台が高く貫付が輪割ぎされる。外面に菊花唐草文と臍部に蓮弁文、見込に花唐草文が施される。18c後～19c初。	視乱

第4表 中国産青花観察一覧2

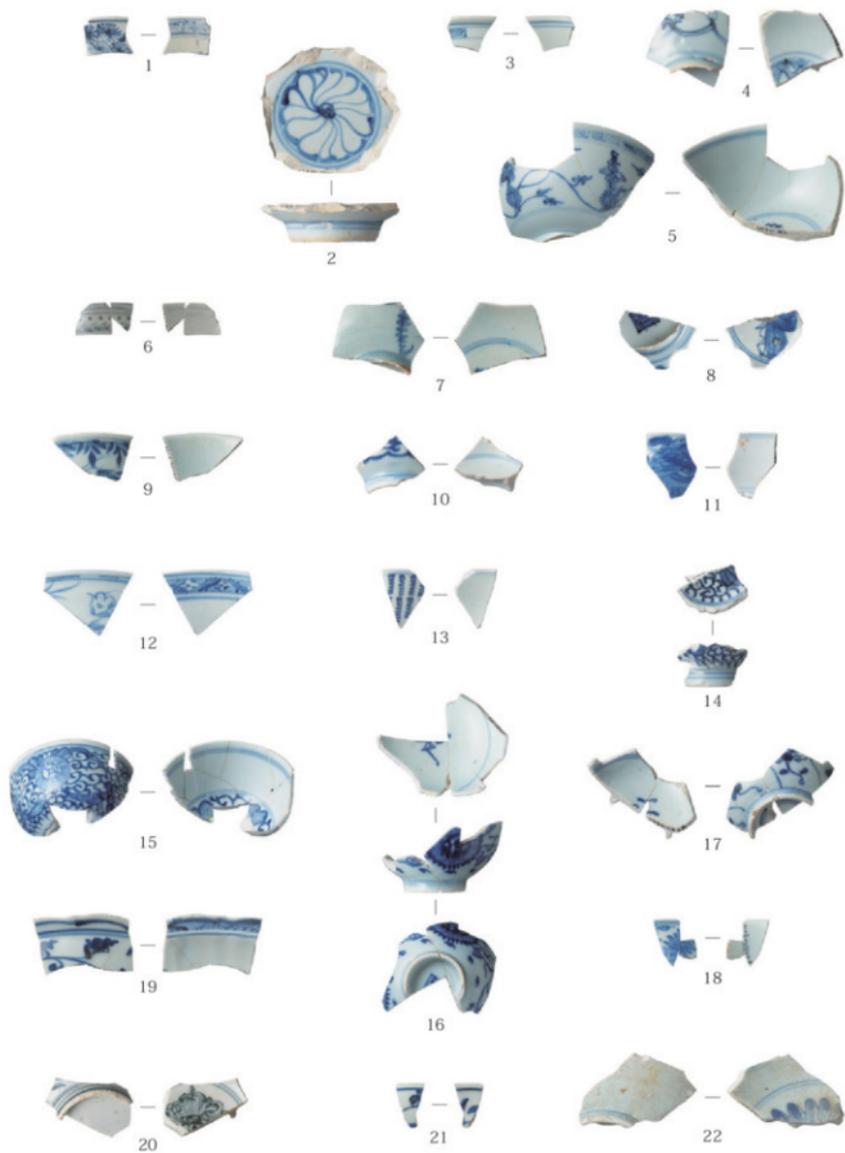
図・図版番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			釉 (色・範囲・貫入)	観察事項		グリッド・層
					口径	器高	底径		素地 (色・質・混和材)	文様等	
第28図 図版29	15	小碗	口縁部	景德鎮	8.8	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で緻密。	直口口縁。外面に菊花唐草文と腰部に蓮弁文。見込に二重圈線と唐草文が施される。18c 後～19c 前。	C9 II層 + C9 III層
	16	小碗	底部	景德鎮	—	—	3.8	内外青白色の透明釉。高台が釉割ぎされる。	灰白色で堅緻。	外面に菊花唐草文。見込に折枝文が施される。外底面に銘あり。18c 後～19c 前。	覆瓦・ 南朝瓦
	17	小碗	底部	景德鎮	—	—	4.5	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	外面に蓮文。見込に草文が施される。18c 後～19c 前。	C9 II層
	18	小碗	口縁部	景德鎮	—	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	端反口縁。外面に牡丹唐草文か。18c 後～19c 前。	C9 II層
	19	皿	口縁部	景德鎮	—	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	口縁は端反て輪花状となる。外面は蓮文。内面口縁下に四方唐文が施される。16c。	C3 新造成 貝集中土 セグ4
	20	皿	底部	景德鎮	—	—	5.4	内外乳白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	外面腰部に蓮弁文。高台外面に二重圈線。見込にアラベスク文が施される。16c 前～中。	覆瓦
	21	皿	口縁部	景德鎮	—	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	直口口縁。内外面の口縁下に一条の圈線と唐草文が施される。16c 後～17c 初。	C7 II層
	22	皿	底部	景德鎮	—	—	6.8	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	被熱のため劣化している。見込に二重圈線と菊花文が施される。17c 前。	B3 覆瓦
第29図 図版30	23	皿	口縁部	景德鎮	—	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	端反口縁。内面口縁部下に四方唐文。外面口縁部下に二重圈線文が施される。	C4 新造成
	24	皿	口縁部	景德鎮	—	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	端反口縁。内外面の口縁下に波濤文か。17c 末～18c 前。	覆瓦
	25	皿	底部	景德鎮	—	—	5.6	内外青白色の透明釉。器付が釉割ぎされる。	灰白色で堅緻。	見込に松葉文?。外底面に二重圈線が施される。17c 末～18c 中。	D6 覆瓦
	26	小皿	底部	景德鎮	—	—	7.0	内外青白色の透明釉。器付が釉割ぎされ、外底面の一部が露出。	灰白色で堅緻。	外面に宝相草唐草文。見込に玉環獅子文か。15c 末～16c 中。	C4 新造成
	27	小皿	底部	景德鎮	—	—	4.7	内外青白色の透明釉。	灰白色で堅緻。	唇筒底。高台が釉割ぎされる。外面に蓮弁文。見込に二重圈線が施される。17～18c 前。	C4 新造成
	28	小杯	口縁部	景德鎮	6.0	3.2	2.4	内外青白色の透明釉。高台内面から器付まで釉割ぎされる。	灰白色で堅緻。	内面の口縁下と見込に一条の圈線。外面に点文?が施される。16c 末～17c 前。	C5 覆瓦2

第4表 中国産青花観察一覧3

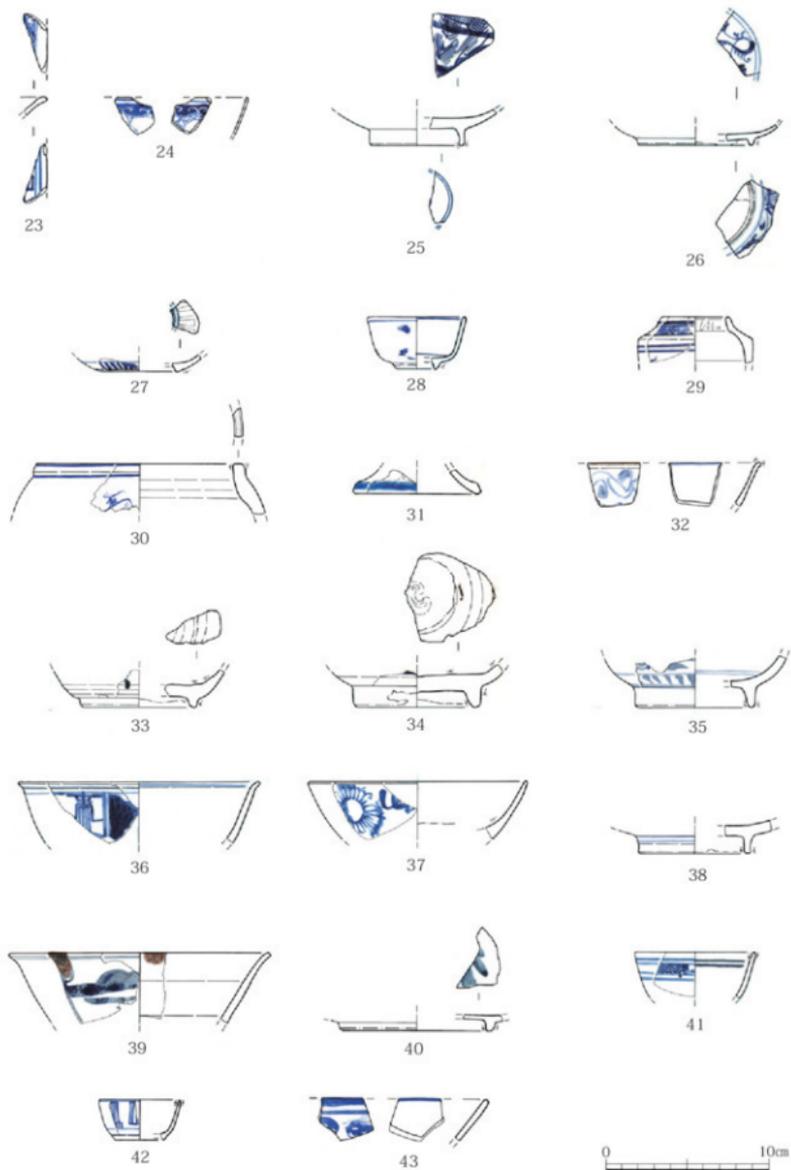
国・図版番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			釉 (色・範囲・貫入)	観察事項		グリッド ・層
					口径	器高	底径		素地 (色・質・混和材)	文様等	
第29回 図版30	29	小点	口縁部	景德鎮	3.9	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	被熱のため劣化している。口縁部から胴部にかけて蓮弁文。胴部に二重圈線が施される。16～17c。	南図乱
	30	袋物	頸部・胴部	景德鎮	12.6	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	胴接ぎ部分で破損。山水文か。18c。	視乱
	31	瓶	底部	景德鎮	—	—	7.8	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	高台に圈線が施される。17cか。	C7 皿層
	32	碗	口縁部	福建・広東	—	—	—	内外乳白色の透明釉。	灰白色で密織。	端反口縁。外面に筆書きの草花文。内面口縁下に一条の圈線を施す。17～18c前。	E9 視乱
	33	碗	底部	福建・広東	—	—	6.7	内外乳白色の透明釉。高台内面から脛付まで、見込を蛇目輪割ぎ。	乳白色でやや軟質。	外面高台近くには蓮弁文か。輪軸目蓋若。17c後～18c中。	視乱
	34	碗	底部	福建・広東	—	—	7.2	内外青白色の透明釉。	乳白色でやや軟質。	内底面を蛇目、高台外面から脛付を輪割ぎ。17c末～18c中。	D9 視乱2
	35	碗	底部	福建	—	—	7.0	内外青白色の透明釉。光沢あり。	灰白色で密織。	外面腰部に蓮弁文が施される。18c。	C9 皿層
	36	碗	口縁部	福建	14.8	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	端反口縁。外面に草字文。内面口縁下に一条の圈線が施される。18c。	視乱
	37	碗	口縁部	福建・広東	13.4	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	直口口縁。外面にスタンプの草花文と唐草文が施される。18c。	C9 皿層 瓦面
	38	碗	底部	福建	—	—	6.8	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	高台外面に二重圈線が施される。見込は無文。18c。	D9 視乱2
	39	鉢	口縁部	福建・広東	16.0	—	—	内外乳白色の透明釉。	黄白色でやや軟質。	端反口縁。外面に筆書きの草花文か。18cか。	C9 皿層
	40	皿	底部	福建	—	—	9.4	内外青白色の透明釉。脛付が輪割ぎされる。	灰白色で密織。	見込に草花文か。18c。	B9 束帛 IIa層
	41	小碗	口縁部	徳化	7.4	—	—	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	直口の口縁。外面に四方禪文。内面口縁下にやや異形の発色の悪い二重圈線が施される。18c。	C9 皿層
	42	小杯	口・底部	徳化	4.8	2.5	3.0	内外青白色の透明釉。	灰白色で密織。	口縁は直口し、口壳となる。型造り。外面に梵字文が施される。18c。	C9 皿層下部
	43	鉢	口縁部	中国か	—	—	—	内外青灰色の透明釉。	灰色で密織。	直口口縁。口唇部を輪軸し、外面に一条の圈線及び草花文か。近代。	視乱



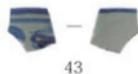
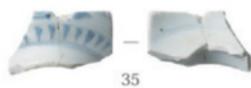
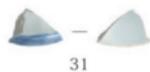
第28図 中国産青花1



図版 29 中国産青花 1



第29図 中国産青花2



図版 30 中国産青花 2

4 中国産褐釉陶器（第5表、第30・31図、図版31・32）

中国産の褐釉陶器は総数2,199点出土しており、器種は壺・瓶・鉢が確認されているが、壺が圧倒的多数を占める。このうち特徴的な28点を図化した。

①壺・小壺（1～20）

壺はA～Cの3類に分類した。

A類：分類中最も多く確認されている。断面方形形状の口縁部をもち、大きく肩部が張り、下半は窄まり上げ底状の底部となる無耳の大型壺。

B類：白色釉を施す薄手の壺。口縁部は玉縁状となるものが多い。釉は高台まで施釉されず下半は露胎となる。

C類：上記以外の壺をC類とした。口縁部が断面三角形状となるものが多い。

②鉢・擂鉢（21～27）

鉢は口縁部の資料が確認されており、玉縁状で内湾するもの（22）、玉縁状の口縁部で直口するもの（23～27）が確認されている。27は黄褐色の釉が施釉され、口縁部下に連続する円文が施される。

21は擂鉢で器形や軸調が22に類似している。

③水注（28）

水注の口縁部と思われる資料で、失透明釉が施釉される。

第5表 中国産褐釉陶器観察一覧1

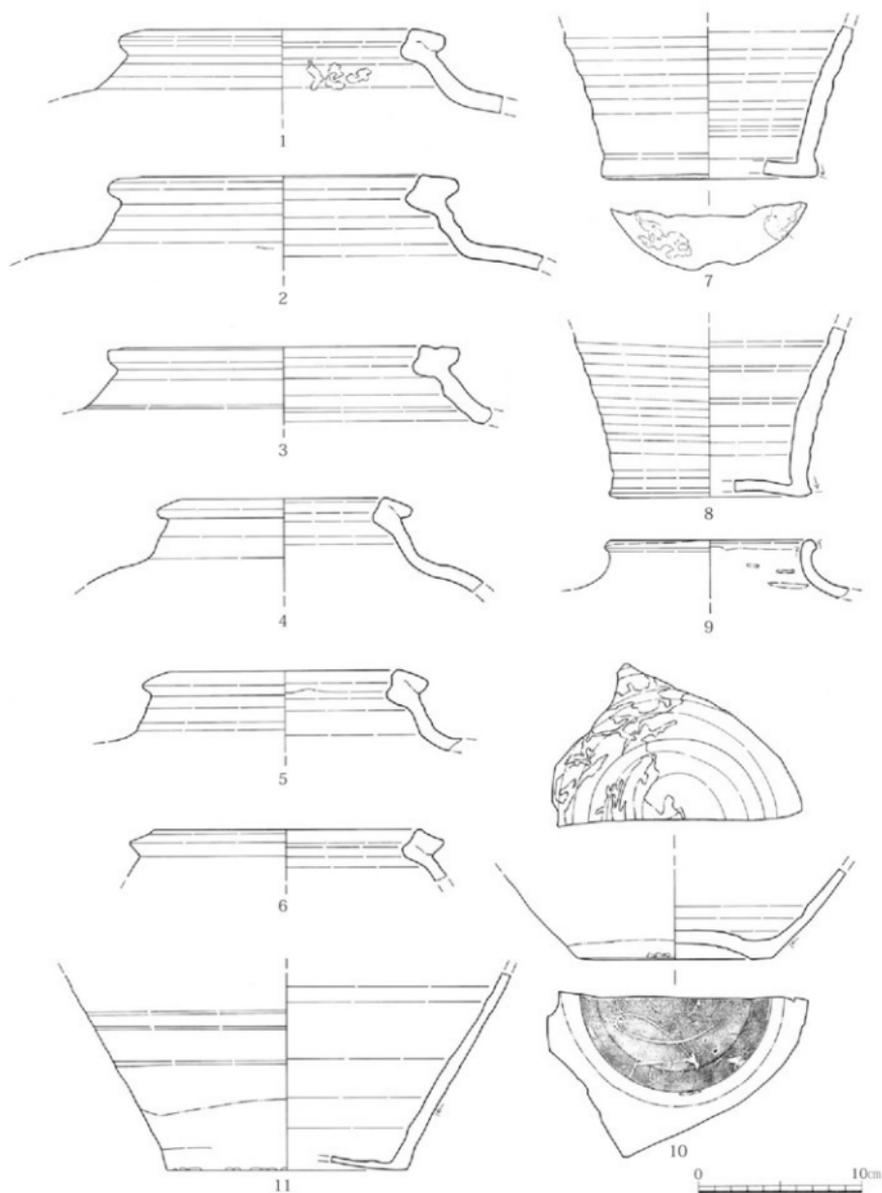
国・ 民版 番号	番 号	器 種	部 位	分 類	法量 (cm)			釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	文 様 等	グリッド ・ 層
					口径	器高	底径				
第30回 図版31	1	壺	口 縁 部	A	20.0	—	—	オリーブ褐色釉を内外面に 施釉。内面に肩部部分あり、 被熱のため表面が劣化して いる。	灰色でやや濃い、大きめ暗 褐色粒、白色粒、石英多く 含む。	口縁部は断面方形形状となり、 頸部「ハ」の字状に広がる。 15～16c。明代。	擾乱
	2	壺	口 縁 部	A	21.6	—	—	暗褐色釉を内外面に施釉。 被熱のため表面が劣化して いる。	黄灰色で緻密、暗褐色、白色、 石英粒を少量含む。	口縁部は断面方形形状となり、 頸部は「ハ」の字状、肩が 広くなる。頸部に二重の圈 線が施される。明代。	B-9 IV層
	3	壺	口 縁 部	A	21.6	—	—	褐色釉を内外面に施釉。	赤褐色～褐色で緻密、白色 粒、石英を含む。	口縁部は断面が方形形状とな る。口唇部に圈線が施され る。明代。	C-9 擾乱2
	4	壺	口 縁 部	A	15.6	—	—	黄褐色釉を内外面に施釉。 被熱のため表面が劣化して いる。	黄白色で緻密、暗褐色、白 色粒を含む。	口縁部の断面が方形形状とな り、外側がやや下がる。肩 が広くなる。明代。	E-6 方形石相 上層
	5	壺	口 縁 部	A	17.4	—	—	暗オリーブ褐色釉を内外面 に施釉。	灰～灰白色で緻密、灰色、 白色粒、石英を含む。	口縁部は断面が方形形状とな る。頸部は「ハ」の字状に なり、二重の圈線が施され る。明代。	C-4 新造成
	6	壺	口 縁 部	A	19.2	—	—	オリーブ灰色釉を内外面に 施釉。	灰褐色で緻密、暗褐色、白 色粒、石英を含む。	口縁部の断面が方形形状とな る。口縁部は方形形状となる。 明代。	擾乱
	7	壺	底 部	A	—	—	13.2	オリーブ釉を施釉。	灰色でやや濃い、赤褐色、 白色、石英を含む。	外底面は無釉で上げ底とな り、粘土痕がみられる。轆 轤目顕著。明代。	C-2 擾乱
	8	壺	底 部	A	—	—	14.2	暗オリーブ釉を施釉。内面 はオリーブ色となる。	灰色で緻密、赤褐色、灰色粒、 石英を含む。	外底面は無釉で上げ底とな る。轆轤目顕著。明代。	C-3 新造成 + C-4 新造成
	9	壺	口 縁 部	B	13.0	—	—	灰オリーブ色釉を施釉。	赤褐色で緻密、暗褐色、灰 色粒、石英を含む。	口縁部は玉縁状となり、口 唇部が輪割ぎされる。明代。	C-4 新造成
	10	壺	底 部	B	—	—	11.8	黄オリーブ色釉が外面に施 釉され、内面は無釉。	灰白色で緻密、暗褐色粒を 含む。	外底面は上げ底となり、釉 剥ぎされる。外底面に泥、 茶色。明代。	C-3 新造成 + C-4 新造成

第5表 中国産褐釉陶器観察一覧2

図・図版番号	番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			軸 (色・範囲)	表地 (色・質・混和材)	文 様 等	グリッド ・層
					口径	器高	口径				
第30図 図版31	11	壺	底部	B	—	—	14.8	灰白色軸が軸軸される。貫入あり。	明褐色で緻密。白色、赤褐色粒、石英を含む。	底部付近から底部にかけて無軸。軸軸目顕著。底部は薄く上円底となる。	E-8 損乱
	12	壺	口縁部	C	—	—	—	暗褐色軸が外面に軸軸される。	暗灰色で緻密。暗褐色粒を含む。	口縁部は玉縁状となり、頸部は短く、その下に横耳が付く。明代。	B・C 5・6 損乱
	13	壺	口縁部	A	19.0	—	—	灰オリーブ色軸を外面に軸軸。	暗灰色で緻密。暗褐色粒を含む。白色粒、石英を含む。	口縁部の断面が方形状となり、口内面を軸軸する。頸部はやや「ハ」の字状となり、凹線を施す。明代。	損乱
	14	壺	口縁部	C	12.0	—	—	灰オリーブ色軸を施す。被熱のため劣化している。	灰赤色で荒い。赤色、白色粒、石英を含む。	口縁部は玉縁状となり、頸部は短く「ハ」の字状に開く。明代。	C-8 東比 II層 瓦集中
	15	壺	口縁部	C	—	—	—	外面に暗褐色軸を軸軸する。	赤褐色で荒い。白色粒を多く含む。	口縁部は断面が三角形となる。頸部は短く軸軸目が顕著。明代。	E-9 損乱
	16	小壺	口縁部	C	—	—	—	外オリーブ軸を軸軸する。	赤褐色で緻密。白色のスジが混じり、赤褐色粒を含む。	口縁部は断面が三角形となり、頸部は短い。明代。	C-4 損乱
	17	壺	口縁部	C	11.0	—	—	黒褐色軸を外面に軸軸。	灰黒色で緻密。白色	口縁部は断面が三角形となり、頸部は短い。明代。	損乱
	18	壺	口縁部	C	7.3	—	—	赤褐色の軸を軸軸。内面は凹削する箇所がある。	暗褐色で緻密。赤褐色、白色粒を含む。	口縁部は断面が三角形となり、計は短い。軸軸目が顕著。明代。	D-7 損乱2
	19	壺	口縁部	C	10.0	—	—	暗褐色の軸を軸軸。	灰色で緻密。暗褐色、白色粒を含む。	口縁部は断面が三角形となり、計は短い。頸部は軸軸ぎされ、内面は口縁部下より凹削。明代。	損乱

第5表 中国産褐釉陶器観察一覧3

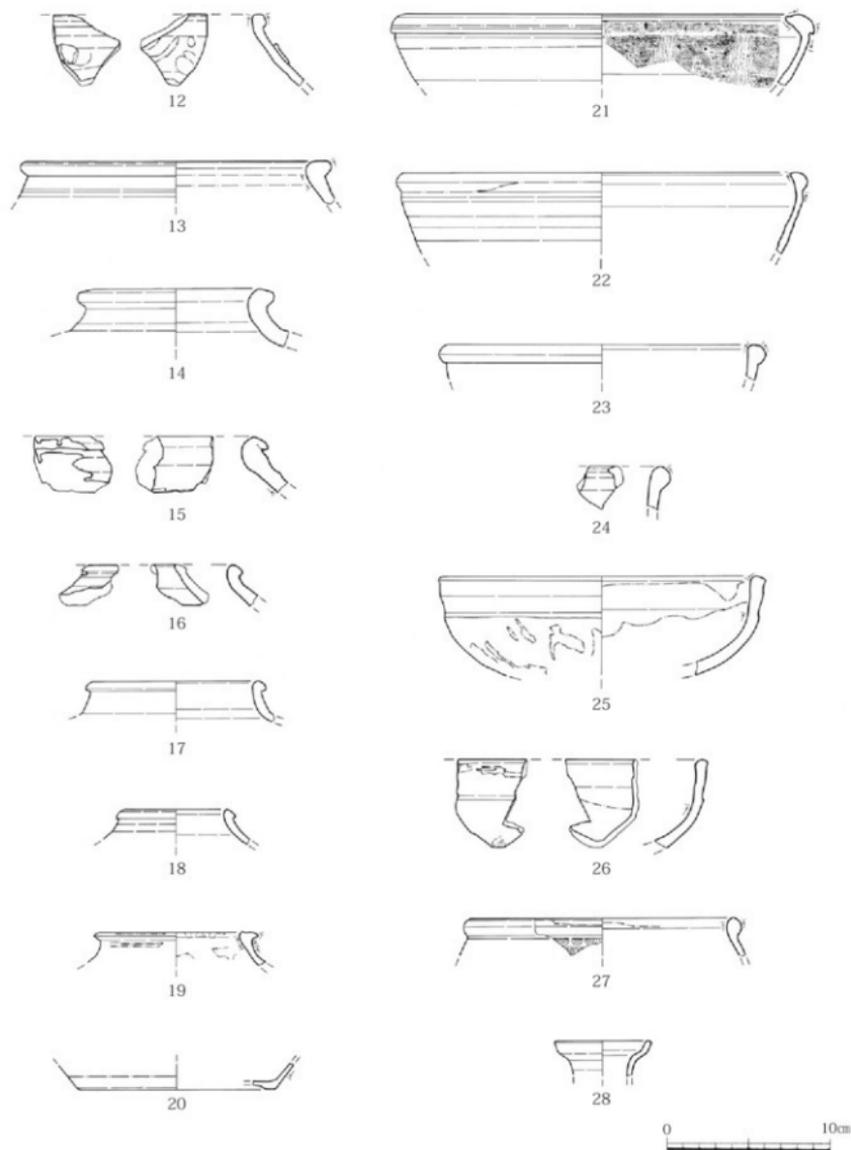
図・図版番号	番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	文様等	グリッド ・層
					口径	器高	底径				
第31図 図版32	20	壺	底部	C	—	—	12.0	黄褐色釉を施釉。	黄灰色で緻密。	底面は薄く、高台から外底面は露胎。型押し成形。明代。	掘丸
	21	鉢鉢	口縁部	A	24.0	—	—	暗オリーブ釉を口縁に施釉。	赤褐色で緻密。赤褐色、白色粒を含む。	口縁部が内湾し玉縁状となり釉割ぎされる。内面は露胎。福建・広東。明代。	C2 造成
	22	鉢	口縁部	A	24.2	—	—	暗褐色釉を施釉。	暗褐色で緻密。暗褐色粒を含む。	口縁部が内湾し玉縁状となり、釉割ぎされる。轆轤目が顕著。中京か。明代。	C7 II層 + C7 III層 + C9 III層
	23	鉢	口縁部	C	20.0	—	—	灰オリーブ釉を施釉し口縁のみ黒褐色となる。	灰黒色で緻密。	口縁は玉縁状となり、口唇部が釉割ぎされる。明代。	掘丸
	24	鉢	口縁部	A	—	—	—	暗褐色釉を外面に施釉。	赤褐色でやや荒い。赤褐色、白色粒を含む。	口縁は玉縁状となり、頸部は細くなる。福建・広東。明代。	C4 掘丸
	25	鉢	口縁部	A	20.0	—	—	暗褐色釉を施釉。内面口縁下を釉割ぎ。	赤褐色で緻密。暗褐色、白色粒を含む。	内湾口縁。粘土登り上げて形成され、轆轤目なし。胴部に團扇状に段あり。福建・広東。明代。16c前後～17c前。	C4 新造成
	26	鉢	口縁部	A	20.0	—	—	灰色釉を内面に施釉。外面露胎。	赤褐色で緻密。暗褐色、白色粒を含む。	内湾口縁。粘土登り上げて形成され、轆轤目なし。胴部に團扇状に段あり。福建・広東。明代。16c前後～18c前。	C4 新造成 + E6 方形 石組内
	27	鉢	口縁部	C	16.0	—	—	黄褐色釉を施釉。	黄灰色で緻密。	型押し成形。口縁は玉縁状となる。外面口縁下に凹文が連続して施される。口唇を釉割ぎし、鉄が付着している。明代。	D6 掘丸
	28	水注	口縁部	C	6.0	—	—	暗オリーブ色釉を施釉内外面に露胎する箇所あり。	褐色で緻密。赤色粒を含む。	明末～清 (17～18c)。	C8 III層



第30図 中国産褐釉陶器1



図版 31 中国産褐釉陶器 1



第31図 中国産褐釉陶器2



図版 32 中国産褐釉陶器 2

5 その他の中国産陶磁器・土器（第6表、第32図、図版33）

その他の中国産陶磁器として、色絵・天目・法花・緑釉陶器・鉄絵・土器をまとめた。
以下に種類別に記載する。

①色絵（1・2）

色絵は景德鎮産、徳化窯産が確認されている。1は徳化窯系の資料で、口禿で口縁の下に釉の跡が確認でき、外面に草花文が施される。また2は景德鎮産で、桃の形を模した鳥の餌入と考えられ、赤色の釉が一部に残っている。

②黒釉陶器（3）

黒釉陶器は口縁部が「く」の字に折れる天目碗が確認されている。

③緑釉陶器（4）

緑釉陶器は鉢か盤と考えられ、口縁が肥厚する鈎縁口縁となっている。

④鉄絵陶器（5）

鉄絵陶器は磁州窯系の壺が確認されており、内面が黒釉で施釉され、外面に灰白色の釉の上に鉄絵で文様が施される。

⑤法花（6）

法花は壺の蓋が確認されており、藍釉が主体で内面には緑釉が施釉され、外面に波濤や鶴が陽刻により施されている。

⑥泉州窯系磁器（7）

7は中国の泉州窯系磁器と思われる皿で、1点が得られている。灰白色の胎土に黒色粒子が確認でき、外面は無釉。内面に濁ったオリーブ色の釉が薄くかかる。

⑦施釉陶器（8）

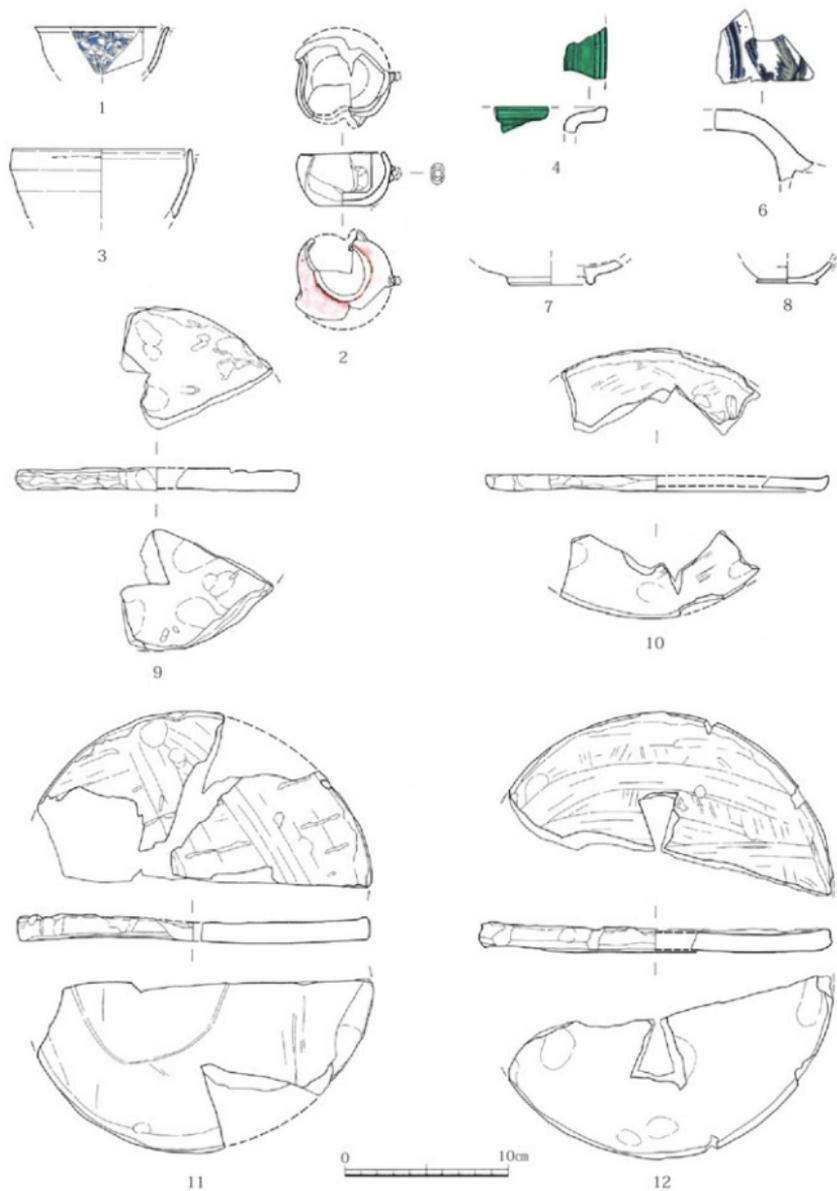
施釉陶器は小壺が確認されており、白色釉が外面の胴部途中まで施釉され、露胎部分は赤褐色となっている。

⑧土器（9～12）

円盤状の蓋で、撮みや袴を持たない。軟質であばたが多い。中国産褐釉陶器の壺A類に対応すると考えられる。

第6表 その他の中国産陶磁器・土器観察一覧

図・図版番号	番号	種別	器種	部位	産地	法量 (cm)			軸 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	文様構成	観察事項	グリッド ・層
						口径	器高	底径					
第32図 図版33	1	色絵	小碗	口縁部	徳化	8.2	—	—	透明軸。貫入なし。	白色で堅緻。	外面に草花文が施される。	口壳。内面が被熱のためか劣化。18後～19c中。	D9 粗乱
	2	色絵	鳥の頭入	口縁部	景徳鎮	5.2	3.3	2.7	明青灰軸の失透明軸。貫入なし。	灰白色で堅緻。	—	概要。外面は露筋で一部が赤色。16前後～17c前。	E6 方形石組 西側下部 -E6 方形石組 西側下部
	3	天目	碗	口縁部	中国	11.0	—	—	褐色軸。	灰青色で堅緻。	無文。	天目茶碗。口縁や「く」の字に折れる。口唇断面突出。14～15c。	粗乱
	4	緑軸	鉢か盤	口縁部	景徳鎮	—	—	—	緑軸。	灰白色で堅緻。	—	肥厚する青緑口縁。15～16c。	C3 粗乱
図版33	5	鉄絵	壺	胴部	福州窯系	—	—	—	外面は灰白色、内面に黒軸。	灰色で堅緻。	—	外面に鉄軸で文様が施されるが詳細は不明。13～14c。	D8 粗乱2
第32図 図版33	6	法花	蓋	胴部	景徳鎮	—	—	—	外面に藍軸、内面に緑軸。	灰色土。盛上げ。生地に白化粧土。	外面に開刻の波瀾文、鶴が施される。	軸軸成形の蓋の蓋か。内面に緑軸が施される。15～16c。	E9粗乱・ C7皿層 (接点なし 破片・C8 皿層)
	7	藍軸 磁器	皿	底部	中国 差か(泉州窯系)	—	—	5.0	無文で内面に薄くオリブ軸施軸。	やや粗い硬質の灰色素地に黒色粒子混入。	—	外面は胴上部のみ藍軸の製品か。14～15cか。	D3 粗乱
	8	藍軸	小壺	底部	中国	—	—	3.6	白色軸か。	灰色で堅緻。	—	外面胴部迄まで施軸か。胴部は赤褐色となる。明代。	C8 B7 II a層
	9	土器	蓋	口縁部	中国	17.4	1.4	—	—	赤褐色で軟質。	—	円盤状の蓋。	E6 方形石組 西側2層
	10	土器	蓋	口縁部	中国	20.1	1.0	—	—	赤褐色で軟質。	—	円盤状の蓋。	C4 新造成
	11	土器	蓋	口縁部	中国	21.6	1.7 (2.0)	—	—	赤褐色で軟質。	—	円盤状の蓋。	C4 新造成
	12	土器	蓋	口縁部	中国	21.5	1.4	—	—	赤褐色で軟質。	—	円盤状の蓋。	C4 新造成



第32図 その他の中国産陶磁器



図版 33 その他の中国産陶磁器

6 その他の輸入陶磁器・土器（第7表、第33図、図版34）

ここではベトナム、タイ、朝鮮半島産ならびに産地不明の陶磁器・土器を、その他の輸入陶磁器としてまとめて報告する。次に産地ごとの傾向を示し、それぞれの器種について概要を記す。遺物個々の特徴は観察表に示す。

・タイ産（1～18）

タイ産陶磁器の出土総数は552点で、この内510点は黒褐釉陶器が占める。黒褐釉陶器以外の種別は、褐釉双耳壺や鉄絵合子、青磁皿のほか、土器としてハンネラ蓋、ランプーン土器がある。概要は以下のとおりである。

①壺（1～12）

壺は口縁部をラッパ状に強く外反させ、端部を「T」字状に成形するシーサッチャナライ産四耳壺（1～5・11）と、口縁部の外反が弱く、端部を玉縁状に成形するメナムノイ産四耳壺（6～10・12）の2つの産地の製品が存在する。器厚や施釉、胎土の違いから破片資料を産地ごとに分けた結果、シーサッチャナライ産290点、メナムノイ産220点となり、破片数だけでみるとシーサッチャナライ産が若干多い結果となっている。

②瓶（13）

褐釉陶器の双耳瓶になるとと思われる破片が8点得られている。13は瓶の肩～胴部で、肩部には横位に数条の沈線が巡らす。

③合子（14）

14は鉄絵合子の蓋で、1点が出土している。外面に鉄絵による圏線が5条引かれ、透明釉をかける。

④土器（15～18）

ハンネラとも称される硬質の土器で、蓋は29点が得られ、叩き目のある壺の胴部片1点が得られている。16～18は蓋の破片で、16は撮み部分、17・18は底部分である。直径は12～13cmで、褐釉陶器の大～中型壺に対応すると考えられる。

その他特殊な土器として、ランプーン土器の破片4点が出土している。15は瓶かケンディーの肩部になるとと思われる製品である。赤褐色でやや軟質、表面は丁寧に磨かれる。

・ベトナム産（19～22）

ベトナム産の陶磁器は、色絵1点、青花5点の合計6点が得られている。ここでは観察が可能な青花4点の概要を報告する。19は瓶の胴部である。文様は縦位の区画内に唐草文。裏面に胴接ぎ痕が明瞭にみられ、製作工程の参考になる。他3点は図版34に示した。20・21は碗か鉢の胴部片、22は壺胴部片で粗製。この22以外は丁寧に造りであることから、官窯クラスの製品といえ、製作年代は15～16世紀と考えられる。

・朝鮮半島産（23）

23に示した青磁皿底部1点が得られている。見込に白土の圏線2条が象嵌される。置付は釉剥ぎで砂目付着。見込には、焼成時の窯割れにより生じたヒビに沿って破損した痕跡が確認できる。14世紀頃の製品か。

・産地不明（24～29）

産地不明製品としたのは、杯状、皿状の2種の製品である。27～30は杯状製品で4点が出土している。砲弾状と小杯状の形状があり、前者が多い。製品は緻密で硬質・薄手の作りとなっている。首里城内では、金属等の溶解物が付着した出土例もあることから、増場としての機能が考えられるが、不明な点が多い（沖縄県立埋蔵文化財センター2001ほか）。なお、今報告資料中、29は斑状に変色することから被熱している可能性があるが、付着物はみられない。

この杯状製品に関しては、沖縄県外では長崎遺跡群や大阪の難波宮、大阪城跡、大分県の大友府内町跡で出土例があるが、いずれも産地不明品として報告されている（財大大阪市文化財協会1992、續伸一郎2003、川口洋平2003）。

25・26は皿状の製品で2点が出土している。杯状同様に薄手で硬質の製品であるが、機能は判然としない。

第7表 その他の輸入陶磁器・土器観察一覧1

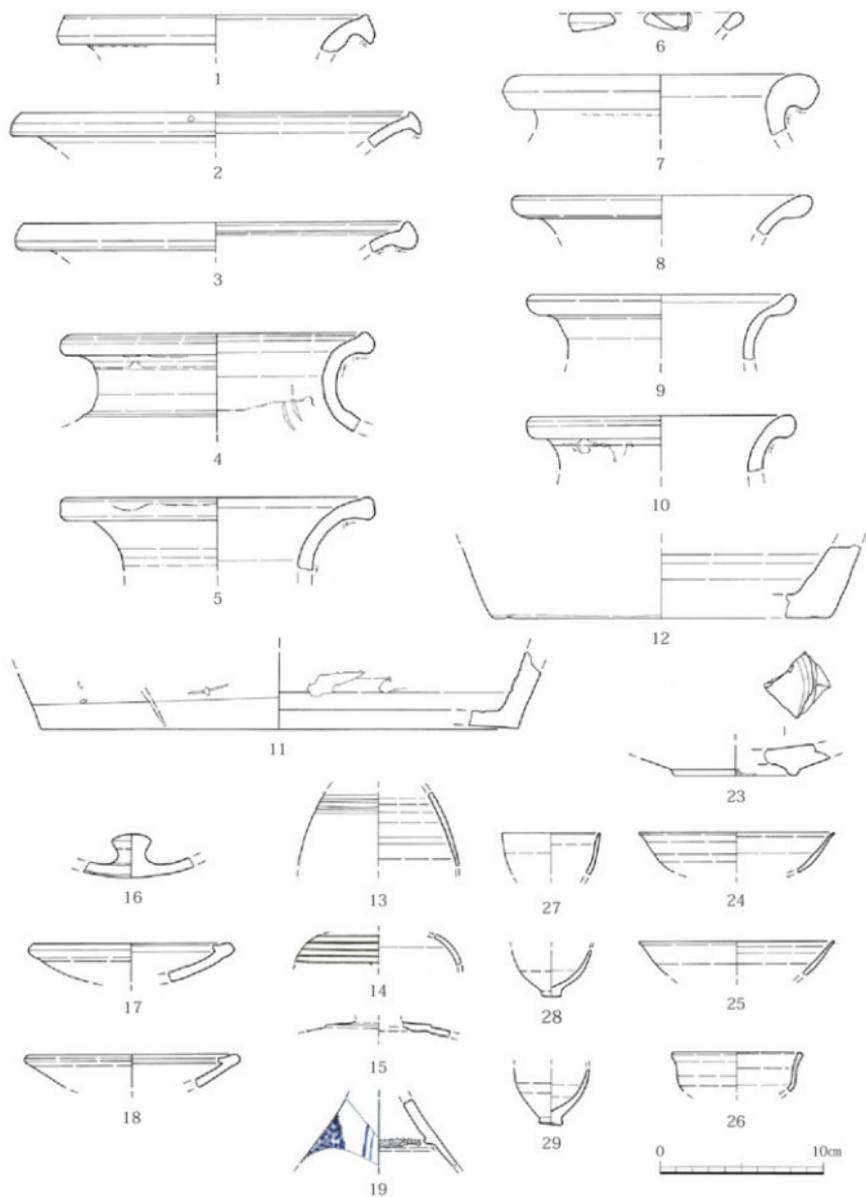
図・図版番号	番号	器種	部位	産地	種別	法量 (cm)			軸・文様 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	グリッド ・層
						口径	器高	底径				
第33図 図版34	1	壺	口縁部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	褐 軸	19.4	—	—	茶褐色軸を薄く内面と口縁縁に施軸。	暗赤褐色で細かく、オリブ色のガラス質粒子混入。	口縁ラッパ状に開く壺。口縁外面上下に突出し側面に平坦面形成。15c。	B・C 5・6 覆瓦
	2	壺	口縁部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	褐 軸	25.2	—	—	藁灰軸状の斑の軸が内面と口唇に施軸。	暗赤褐色で細かく、石英粒子混入。	轆轤成形で口縁ラッパ状に開く。口縁外面上下に突出し側面に平坦面形成。15c。	C4 新造成 + E6 地山直上
	3	壺	口縁部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	褐 軸	24.6	—	—	黒褐色～オリブ褐色軸を口縁外面以外に施軸。	灰褐色で細かい、黒・赤色粒子混入。	ラッパ状に開くが、口唇下部を丸く成形。15c後半～16c前半。	C2 覆瓦
	4	壺	口縁部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	褐 軸	19.2	—	—	頸部下に1条の凸部置らせ、光沢ある黒褐色軸を口縁内面と外面に施軸。	赤褐色でやや粗い、素地に石英・赤色粒子混入。	書き跡、壺口縁部。口唇やや丸く成形。15c後半～16c前半。	C3 新造成
	5	壺	口縁部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	褐 軸	19.2	—	—	黒褐色～茶褐色軸を口縁内面中心に施軸。	暗赤褐色でやや粗い、素地に石英・赤色粒子混入。	口縁ラッパ状に開く壺。口縁外面上下に弱く突出す。15c後半～16c前半。	覆瓦
	6	壺	口縁部	タイ産 (メナムノイ)	褐 軸	—	—	—	黒褐色～茶褐色軸を施軸。	鈍い赤褐色で緻密。石英・赤色粒子混入。	口縁ややラッパ状に開く小壺。口唇断面丸い。15c後半～16c。	C2造成 (二枚貝形)
	7	壺	口縁部	タイ産 (メナムノイ)	褐 軸	19.3	—	—	やや光沢ある茶褐色軸を施軸。	暗赤褐色でやや粗い、素地に石英・赤色粒子混入。	轆轤成形で口縁部は玉縁上に内面に折り返して成形。15c後半～16c。	C3 新造成
	8	壺	口縁部	タイ産 (メナムノイ)	褐 軸	18.4	—	—	黒褐色～茶褐色軸を施軸。	鈍い赤褐色で緻密。石英・赤色粒子混入。	口縁ラッパ状に開く壺。口縁外面弱く肥厚させる。15c後半～16c。	覆瓦
	9	壺	口縁部	タイ産 (メナムノイ)	褐 軸	16.4	—	—	光沢ある黒褐色軸を施軸。	暗赤褐色でやや粗い、素地に石英・赤色粒子混入。	口縁開く壺。口縁外面弱く肥厚させる。15c後半～16c。	C4 新造成
	10	壺	口縁部	タイ産 (メナムノイ)	褐 軸	16.4	—	—	黒褐色～茶褐色軸を施軸。	鈍い赤褐色で緻密。石英・赤色粒子混入。	口縁開く壺。口唇丸く成形。15c後半～16c。	C3造成 + C3覆瓦

第7表 その他の輸入陶磁器・土器観察一覧2

図・図版番号	番号	器種	部位	産地	種別	法量 (cm)			軸・文様 (色・彫り)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	グリッド ・層
						口径	器高	底径				
第33回国版34	11	壺	底部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	羯 軸	—	—	29.4	黒化した黒褐色軸がわずかに付着する。	暗赤褐色でやや粗い素地に石英・赤色粒子混入。	轆轤成形で外面角深く内面角は丸く成形。底面に砂目と胎上目か。15c か。	C-4 新造成
	12	壺	底部	タイ産 (メナムノイ)	羯 軸	—	—	20.6	内面の一部に灰褐色軸付着。	鈍い橙褐色で粗い素地に粗い石英・赤色粒子混入。	轆轤成形で外面削り調整。全体に厚手。16c ~ 17c。	C-4 新造成
	13	瓶	胴部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	陶 器	—	—	—	胴部に数本の沈線巡らせ、暗褐色軸施軸。	灰褐色地に半透明の石英・黒色粒混入。	双耳形になると思われる資料。全体に薄手で硬質。素地は27~29製品と類似する。16c。	C-7 東比田層 + C-9 田層
	14	合子蓋	胴部	タイ産 (シーサッチャ ナライ)	鉄 輪	—	—	—	外面に数本の沈線による凹線巡らせ、やや白濁した透明軸施軸。	灰褐色地に半透明の石英・黒色粒混入。	鉄給合子の蓋。薄手で丁寧な造り。16c。	B-7 視乱
	15	瓶	胴部	タイ産 (ランブーン)	土 器	—	—	6.4	表面は丁寧に磨かれ、一部に施文か。	赤褐色の素地に微細な黒・白色粒子わずかに混入。	ランブーン土器。内面に轆轤痕。	C-9 田層
	16	蓋	胴部	タイ産	平 縁	—	—	—	—	にぶい橙褐色で内部は灰色。赤・白の石英粒混入。	幅みがボタン状の蓋。上面轆轤痕、下面削り痕。	C-5 視乱
	17	蓋	底	タイ産	平 縁	12.6	—	—	—	にぶい橙褐色で内部は灰色。赤・白の石英粒混入。	底面は内側へ折り返して成形。	E-6 方形石組 東側下層 + E-6 方形石組 西側2層
	18	蓋	底	タイ産	平 縁	13.2	—	—	—	にぶい橙褐色で内部は灰色。赤・白の石英粒混入。	底面は内側へ折り返して成形。	C-4 新造成
	19	瓶	胴部	ベトナム産	青 花	—	—	—	縦糸の区画内に花唐草文がくすんだ貝殻で絵付けされ、透明軸を施す。内面は下部のみ透明軸施軸。	緻密で粉っぽい灰白色の素地。	瓶の一部か。内面に彫接ぎ痕。彫接ぎ接合面は糊目を入れて接合を強化し、境界をへら状工具で成形。15c。	E-6 方形 石組上層
図版34	20	碗か鉢	胴部	ベトナム産	青 花	—	—	—	薄い吸須で二重凹線と濃い吸須で唐草文か。内面とも青白色の透明軸。	緻密で粉っぽい灰白色の素地。	表裏面施軸のため、碗か鉢と思われる資料。地肌により表面異なる。15c。	C-2 視乱

第7表 その他の輸入陶磁器・土器観察一覧3

図・図版番号	番号	器種	部位	産地	種別	法量 (cm)			軸・文様 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	グリッド ・層
						口径	器高	底径				
図版34	21	碗 鉢	胴 部	ベトナム産	青花	—	—	—	薄い呉須で二重圈線と 濃い呉須で雲文か。内 面とも青白色の透明釉。	緻密で粉っぽい灰白 色の素地。	表裏面釉施のため、 碗か鉢と思われる資 料。15c。	C-2 覆瓦
	22	壺	胴 部	ベトナム産	青花	—	—	—	にじむ呉須で二重圈線 と花文か。内面とも黄 白色の透明釉。	緻密で粉っぽい灰白 色の素地。	大型の壺か。被熱し 発色・貫入多い。15 ～16c。	C-4 新造成
第33図 図版34	23	皿	底 部	朝鮮平島産	青 磁	—	—	7.4	見込に白土による象嵌 で二重圈線引き、畳付 以外に青磁釉施。	緻密な灰色素地。	見込に窯割れの痕跡。 畳付に砂目痕。14c。	C-4 覆瓦
	24	皿 状	口 縁 部	不明	陶 器	120	—	—	—	桃締の橙褐色～暗灰 色地に石英粒多く混 入。	薄手の皿状製品。 内外面轆轤痕跡。	C-8 皿層
	25	皿 状	口 縁 部	不明	陶 器	120	—	—	—	桃締の橙褐色～暗灰 色地に石英粒多く混 入。	薄手の皿状製品。 内外面轆轤痕跡。	C-8 皿層
	26	杯 状	口 縁 部	不明	陶 器	8.0	—	—	—	表裏面鈍い褐色。胎土 は灰褐色で石英、黒色 粒子混入。	口唇断面丸くやや外 反する小碗か杯状の 資料。内面に鉄錆 様の飛沫あり。口縁 内面被熱か。15～ 16c。	C-8 皿層
	27	杯 状	口 縁 部	不明	陶 器	6.0	—	—	—	表裏面、胎土ともに灰 白色で硬質。黒色粒子 混入。	28・29の口縁部に なると思われる資料 で断面は尖る。付着 物なし。	C-9 II層
	28	杯 状	底 部	不明	陶 器	—	—	1.2	—	表裏面頂の灰色。胎土 は灰白色で硬質。石英 粒混入。	27の底部になると思 われる資料。轆轤成 形でくびれ平底の砲 弾状。底面は糸切り か。全面が被熱によ り変色する。付着物 なし。	C-9 II層 ・ C-9 III層 瓦面
	29	杯 状	底 部	不明	陶 器	—	—	1.4	—	表裏面、胎土ともに灰 白色で硬質。	27の底部になると思 われる資料。轆轤成 形でくびれ平底の砲 弾状。底面は糸切り か。付着物なし。	C-8 東トレ II層



第33図 その他の輸入陶磁器・土器



図版 34 その他の輸入陶磁器・土器

7 本土産陶磁器（第8表、第34図、図版35）

今回の調査で得られた本土産陶磁器は磁器（染付・青磁・白磁）と陶器に大別され、産地は肥前（肥前系含む）・関西・四国・瀬戸・薩摩（苗代川系ほか）などが確認されている。時期・産地別にみると、肥前で17世紀～18世紀後半の間に焼成された碗、皿、蓋の一群がある。薩摩系の製品は17世紀後半～19世紀までの製品が見られる。そのほかは近世～近代にかけて各地で焼成された製品が数多く出土している。以下にそれぞれの概要を記し、個々の観察所見は観察表に記載する。

1 肥前系（肥前・内野山か）

肥前系の製品は17世紀～18世紀までの資料が出土している。ここでは肥前・内野山ほか肥前系の製品をまとめた。

① 碗（1～3・5・6・8）

磁器と陶器があり、磁器製は18世紀後半の資料（1～3）で、くらわんか碗（1）や筒型碗（2）と呼ばれる製品がある。

陶器製は17世紀末～18世紀前半の資料（5～6・8）がある。内野山産の銅緑釉が施された製品（5）がある。そのほかには内底面に刷毛目文を施す製品（5）や京焼風陶器（8）がある。

② 皿（7）・蓋（4）

蓋は染付で、底と袴を有する特徴から鉢付蓋（4）で17世紀後半の製品である。皿（7）は陶器製で内野山産の鉄釉が施された17世紀後半～18世紀前半の製品である。

2 薩摩産

薩摩系と考えられる染付皿や鉢や瓶類の陶器が出土している。瓶類は製品の特徴から苗代川系と龍門司系に分類可能な製品がある。

① 皿（9）・鉢（10）

浅い皿と考えられる製品（9）で外面高台脇に闊線が1本ある。年代は不明。鉢は口唇部を平坦にする製品（10）がある。

② 瓶（11・12）

オリーブ黒色鉄釉を施した製品（11）で苗代川系と考えられる。底部が上げ底になり、脚がつく製品。暗オリーブ色の釉を施す製品（12）で龍門司系と考えられる。高台がつく製品である。

3 関西・四国系

関西系、砥部産をまとめた。19世紀以降の製品が出土している。

① 碗（15）

砥部産の型紙摺りの碗と考えられる製品である。

② 土瓶（13）

関西系と考えられる土瓶で、外底中央にかけて上げ底になる製品である。

4 近代陶磁器

近代陶磁器としてあげたのは、明治以降に生産された製品である。近代陶磁器は多く出土しており、肥前系と瀬戸・美濃系の製品が出土している。

① 肥前系 碗 (17)・皿 (21)・蓋物 (24)

17 は型紙刷りの碗の底部資料である。21 は型紙刷りの皿の底部で、高台内に段を設ける製品である。24 は型紙刷りの蓋物で、2枚の型紙を使用している製品である。

② 瀬戸・美濃系 碗 (16)・小碗 (18～20)・皿 (22)・蓋 (23)・その他 (25・26)

16 は碗の底部資料で、外面にはクロム青磁釉が施釉されている。18 は口縁直下にクロム釉で二重圏線がある。19 はクロム青磁釉がかかる製品である。20 は口唇部に口錆が施される製品である。22 は銅版転写を行う製品で、高台内に鋳込み成形時のシワが残る。23 は底と袴を有する蓋で、文様が一部途切れる部分がある。25 は器種不明の製品で、底部に「・城」字がある。内部が空洞になる造りをしている。26 はパレット状製品の破片である。

第8表 本土産陶磁器観察一覧1

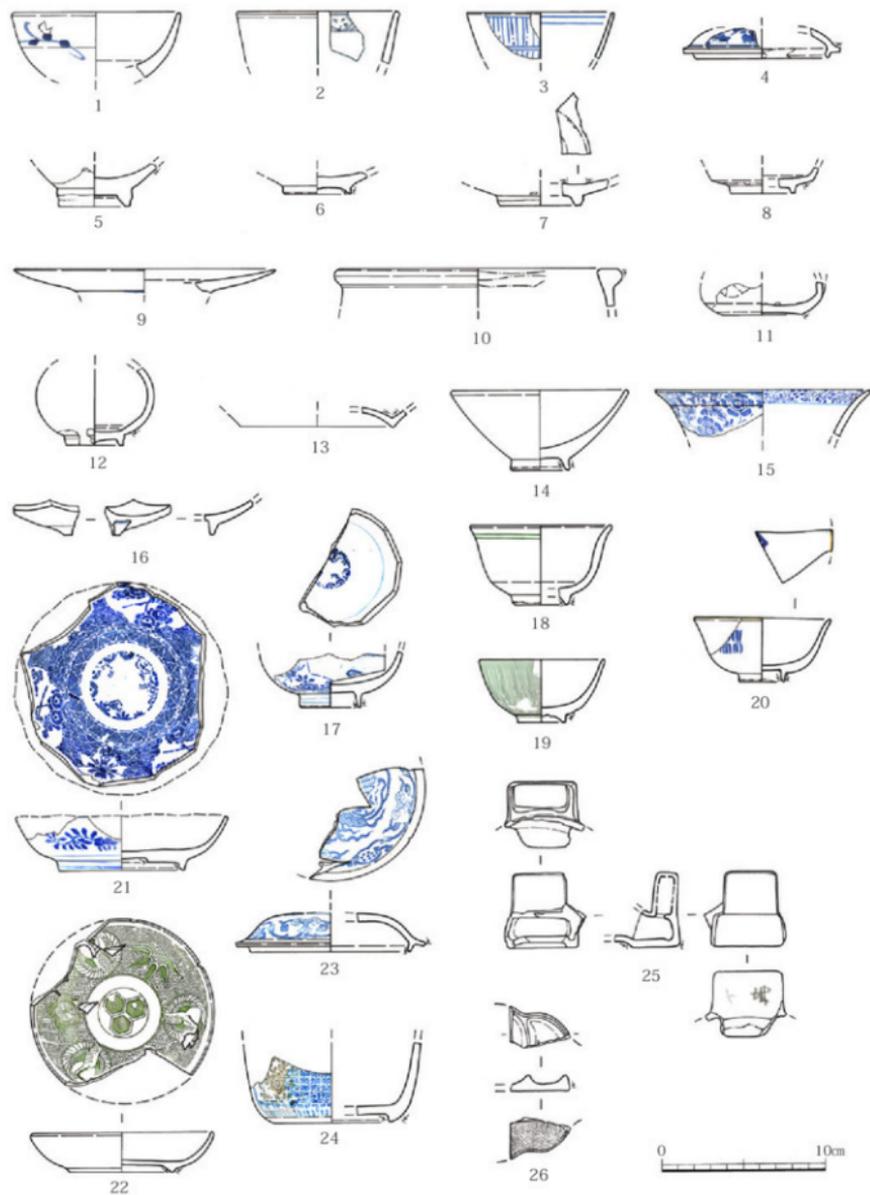
図・図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量 (cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見	グリッド・層
						口径	器高	底径				
第34図 図版35	1	碗	肥前 (佐賀)	染付	口縁部	9.4	—	—	外面口縁で唐草文(折枝梅文)。灰白色の釉を全面に施釉。	灰白色で細かい。	輪軸成形。くらわんか碗。18c後。	C9 II層
	2	碗	肥前	青磁染付	口縁部	10.0	—	—	内面口縁部に四方薄文。外面明オリーブ灰色。内面灰白色釉を施釉。	灰白色で細かい。	筒形碗。18c後。	南瀬戸
	3	碗	肥前	染付	口縁部	9.0	—	—	外面2本の横線(両)の中に、南縮文。内面2本の圏線がめぐる。灰白色の釉を全面に施釉。	灰白色で細かい。	外面に粗い貫入あり。1780年～19c前半。	南瀬戸
	4	蓋	肥前	染付	底・袴	(底) 9.6	—	(袴) 8.2	外面に細い、密線と太い、密線をめぐらせ、その内部に草花文。外面灰白色の釉を施釉。内面底から袴外面部分は無釉。袴内面から内面は灰白色の釉を施釉。	灰白色で細かい。	鉢蓋の蓋と考えられる。底と袴を有する蓋。1670～1690年代。	C9 Ⅱ層2
	5	碗	肥前 (内野山)	陶器	底部	—	—	4.4	内面銅緑釉を施釉。外面胴下半部まで施釉。胴下半部以下は露胎。	灰白色で細かい。	輪軸成形で費付部に重ね積みの砂目付着。17c第4四半期～18c前。	C2 Ⅱ層
	6	碗	肥前	陶器	底部	—	—	4.2	内底面に刷毛目文あり。透明釉が全面施釉され、費付は輪割ぎを行う。	灰黄色～浅灰色で細かい。	輪軸成形。17c末～18c前。	D8 Ⅱ層 直上
	7	皿	肥前 (内野山)	陶器	底部	—	—	5.0	内面に鉄釉(波線か)施釉後、蛇目輪割ぎを行う。細かい貫入あり。外面無釉で一部に釉がはねて付着。	灰白色で細かく、黒色微粒子が混入。	輪軸成形。17c第4四半期～18c前。	Ⅱ層

第8表 本土産陶磁器観察一覧2

図・図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量 (cm)			軸・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第34図 図版35	8	碗	肥前	陶器	底部	—	—	4.0	内面淡黄色釉を施軸。外面腰部以下から高台部分の間まで薄淡黄色釉を施文。	灰白色で細かく、黒色微粒子粒、赤色微粒子粒が混入。	轆轤成形。腰部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。京焼風陶器。1670～1690年代。	E4 視乱
	9	皿	薩摩か	染付	口縁部	16.0	—	—	全面灰白色釉を施軸。細かい貫入が入る。外面に1条の磨線。	灰白色で細かい。	内面に砂目跡?付着。被熱。	視乱
	10	鉢	薩摩	陶器	口縁部	17.0	—	—	口唇部無釉。外面口縁部以下にオリーブ灰色釉を施軸。内面口唇部直下にオリーブ灰色釉を施軸。約0.5mmあけてオリーブ灰色釉を施軸。	褐色。白色鉱物、赤褐色鉱物混入。	轆轤成形。口唇部が平坦で口縁部は丸みを帯びている。17c後～18c。	視乱
	11	瓶	薩摩 (前代川原系)	陶器	底部	—	—	5.0	外面底部までオリーブ黒色鉄釉を施軸。貫入あり。内底にも施軸されるが、外面全体に比べると発色悪い。重む焼きの影響か?底部に砂目跡み跡が残る。内面には施軸なし。	灰褐色。白色鉱物混入。	底部は中央部で上げ底になり、へら状工具で調整された細かへた痕がある。腰部に一部跡みあり。18～19c。	C8 II層
	12	瓶	薩摩 (龍門司系)	陶器	底部	—	—	3.5	暗オリーブ色の釉を腰部まで施軸。一部釉がたれ、高台貫付部まで釉がかかる部分がある。内面は露胎。龍門司系。	にぶい赤褐色。白色鉱物。暗褐色鉱物が少量混入。	轆轤成形で、外面高台内は丁寧に削られている。内面に轆轤痕が残る。18～19c。	C9 II層 + C9 東B II層
	13	土瓶	関西系	陶器	底部	—	—	9.4	外面は焼成の影響でにぶい褐色を呈している部分がある。内面の一部に灰白色の釉を施軸。それ以外の部分にはにぶい黄褐色の砂?が付着。	灰白色。黒色鉱物が混入。	轆轤成形で外底中央部にかけてあげ底になっている。高台付近に灰白色の釉が微量付着。重む焼きの際についたものか? 19c。	C9 視乱2
	14	碗	瀬戸・美濃	磁器	口縁部	10.8	4.95	3.6	青緑色の釉を施軸。貫付部と高台の一部のみ露胎。	灰白色。	轆轤成形。現代(昭和)。	B9視乱 + B9 東B II a層 + C9 II層
	15	碗	砥部	磁器	口縁部	13.2	—	—	型紙刷りの染付で外面草花文、口縁内面草花文に磨線。	灰白色・ガラス質で磨線。	轆轤成形。近現代(明治～大正)。	南視乱
16	碗	瀬戸・美濃	クロム青磁	底部	—	—	3.0	外面貫付部までクロム青磁釉を施軸。外底高台内底にコバルト磨線。内面に灰白色の釉を施軸。	灰白色で黒色鉱物を若干含む。ガラス質で磨線。	轆轤成形。近代。	D3 視乱	
17	碗	肥前系	磁器	底部	—	—	3.8	全面灰白色の釉を施軸。貫付部釉。外面に鳥羽文、草花文、菱形連続磨線(中に菊花文)。内底に菊花文。内面胴部に磨線。	灰白色・ガラス質で磨線。	轆轤成形で内底に轆轤痕が残る。近現代(明治～大正)。	C8 東A7 II b層	

第8表 本土産陶磁器観察一覧3

図・図版 番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量 (cm)			軸・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド ・層
						口径	器高	底径				
第34図 図版35	18	小 碗	瀬戸・美濃	磁器	口 底	8.6	4.9	3.4	灰白色の釉を全面に施軸。費付部は無釉で、重ね焼き痕あり。外面口縁部にクロム釉で二重圏線あり。軸下彩。	灰白色・ガラス質で堅緻。	近現代 (昭和)。	視見 ・ C2 層
	19	小 碗	瀬戸・美濃	クロム青磁	口 底	7.7	3.9	3.0	高台胎部までクロム青磁釉で施軸。崩れた編織弁文状の文様あり。	灰白色・ガラス質で堅緻。	内底部に削りあり。「大正二年のせともの屋」の浴津商品に類似あり。近現代 (明治～昭和前半)。	C7 II 層
	20	小 碗	瀬戸・美濃	磁器	口 底	8.4	3.95	2.8	外面胎部にコバルトで染色体文。見込みにも文様あり。全面透明釉で施軸し、費付軸割ぎ。口縁あり。	灰白色・ガラス質で堅緻。	軸輪成形。近現代 (明治～大正)。	C9 II 層
	21	皿	肥前系	磁器	口 底	13.0	3.35	7.7	型紙刷り製品。外面に花唐草文、腰部に圏線。高台胎～高台にかけて二重圏線。内面に、青海波文の間に二種類の菊花文、腰部に楡垣文、内底に二種類の菊花文と梅花文。	灰白色・ガラス質で堅緻。	外底部中央が最も窪み、高台にかけて段を設ける二段外底になる。中央部は施軸されるが、それ以外の部分は釉割ぎされ、費付部に砂目付着。内底にハリササエ跡が1か所残存。近現代 (明治～大正)。	視見
	22	皿	瀬戸・美濃	磁器	口 底	11.35	2.5	6.5	銅版転写を行う。内面のみ文様がある。口縁から胎部にかけて菱形文の間に鶴文が3か所、梅文(中心の望れる)が2か所、竹文が1か所ある。見込に亀甲文があり、中心に三点花文あり。	灰白色・ガラス質で堅緻。	踏込み成形。高台内にしわか残る。費付部無軸。近現代 (明治後半～大正)。	C9 II 層
	23	蓋	瀬戸・美濃か	磁器	底 部	(底) 11.6	—	(高) 9.8	銅版転写を行う。鳳凰文を施す。その周りに唐草文あり。一部文様がつかない部分がある。内面は部分は無軸。	灰白色・ガラス質で堅緻。	近現代 (明治～大正)。	C9 II 層 + 視見 + D・E・F2 視見 + F5 ビ・H内
	24	蓋 物	肥前系	磁器	底 部	—	—	7.4	軸下彩・型紙。文様がコバルトと緑色で施されるため、2枚の型紙を使用している。意杯のある格子状文を透らせ、意杯に草花文あり。	灰白色で堅緻。	軸輪成形。内面に軸輪痕残る。高台胎～費付部軸割ぎ。重ね焼きの砂目付着。近現代。	視見
	25	器種 不明	瀬戸・美濃	施軸陶器	不 明	—	—	—	薄い緑色釉を施軸。底部に「・城」墨書あり。内面まで施軸あり。	灰白色で黒色黏物を若干含む。	踏込み成形。底部は中央部でくぼむ。突起部と本体部は別で製作され、貼付を行う。灰加か。明治～昭和前半。	B9 東底 II a 層
26	パレット	瀬戸・美濃	磁器	不 明	13.6	1.0	13.9	外面に灰白色釉を施軸。底部露胎。	灰白色で堅緻。	底部に布目痕残る。給具入れなどに使用か？近現代 (明治～大正)。	視見	



第34図 本土産陶磁器



図版 35 本土産陶磁器

8 沖繩産施釉陶器（第9表、第35・36図、図版36・37）

沖繩産施釉陶器とは、「上焼（ジョウヤチ）」と呼ばれる、器面に釉及び絵付けを施す焼き物である。当該地区では2,330点が出土しており、器種としては、碗・小碗・皿・小杯・鉢・火炉・火取・香炉・瓶・急須・酒器などが得られている。ここでは特徴的な52点を図示した。以下に概要を記すが、詳細は観察表を参照されたい。

①碗（1～13）

碗は逆「ハ」字に立ち上がる資料（1～3）と胴部に丸みを持つ器形（4～13）に大別できる。後者には、白化粧を施す資料中、呉須で外面胴部に文様を施す資料（8・9）、高台を高く成形する資料（12）がある。

②小碗・小杯（14～24）

小碗は胴部に丸みを持つ資料（14～20）と外面が面取りされる資料（21・22）、筒状に立ち上がる資料（23）がみられる。筒状に立ち上がる資料は内外面ともに施釉されており、胎土に白色粒を含む。

小杯は丸みを帯び内外面ともに施釉される。畳付には白土が付着する。

③皿（25～28）

皿は外反口縁で口縁部から底部まで残る資料（25）と、波状口縁（26）、底部のみの資料が得られた。26・28は内面に沈線が施される。前者は沈線を施した後白化粧がされ、後者は白化粧の後沈線が施される。

④鉢（29～32）

鉢はいずれも口縁部資料で、逆「L」字状口縁（29・30）と内湾口縁（31・32）に大別できる。

⑤急須・酒器・蓋（33～37）

急須は蓋受け部分を残す。胴部に丸みを帯び、外面のみ鉄軸を施し口唇部を平坦に作る。

酒器は注ぎ口部分を残す。

蓋は外面のみ施釉される資料（35・36）と内外面ともに施釉される資料（37）が得られた。

⑥瓶・袋物（38～43）

瓶は口縁部が逆「ハ」字状に開き内外面に施釉される資料（38）と削るように高台を作る資料（39）が得られた。

袋物はベタ底の資料（40）と胴部が逆「ハ」字状に立ち上がる資料（41）、胴部に丸みを帯びる資料（42・43）がある。40は全体的に作りが雑で内面の轆轤痕が明瞭である。42は外面のみ施釉され、内部に砂目がつく。

⑦火取・火炉・香炉（44～52）

火取は口唇部が舌状でストレートに立ち上がるもの（44・45）、口唇部を平坦に作り内側を肥厚させるもの（46）がある。44は外面口縁部下から内面にかけ白化粧を行い、外面胴部下半に暗オリーブ色の釉を施す。また、外面口縁部から内面口縁部下まで黄褐色の釉薬が施される。

火炉は胴部が筒状（47・48）、胴部に丸みを帯びる資料（49・50）、外耳部分のみ（51）の資料が得られた。51は外耳部分のみで内面上部に釉薬が施された跡があるため、火炉と考えられる資料である。

香炉は内外面ともに施釉される。釉は白化しているが、一部緑色釉が残る。器面に獸面と考えられる耳がつく。

第9表 沖縄産施釉陶器観察一覧1

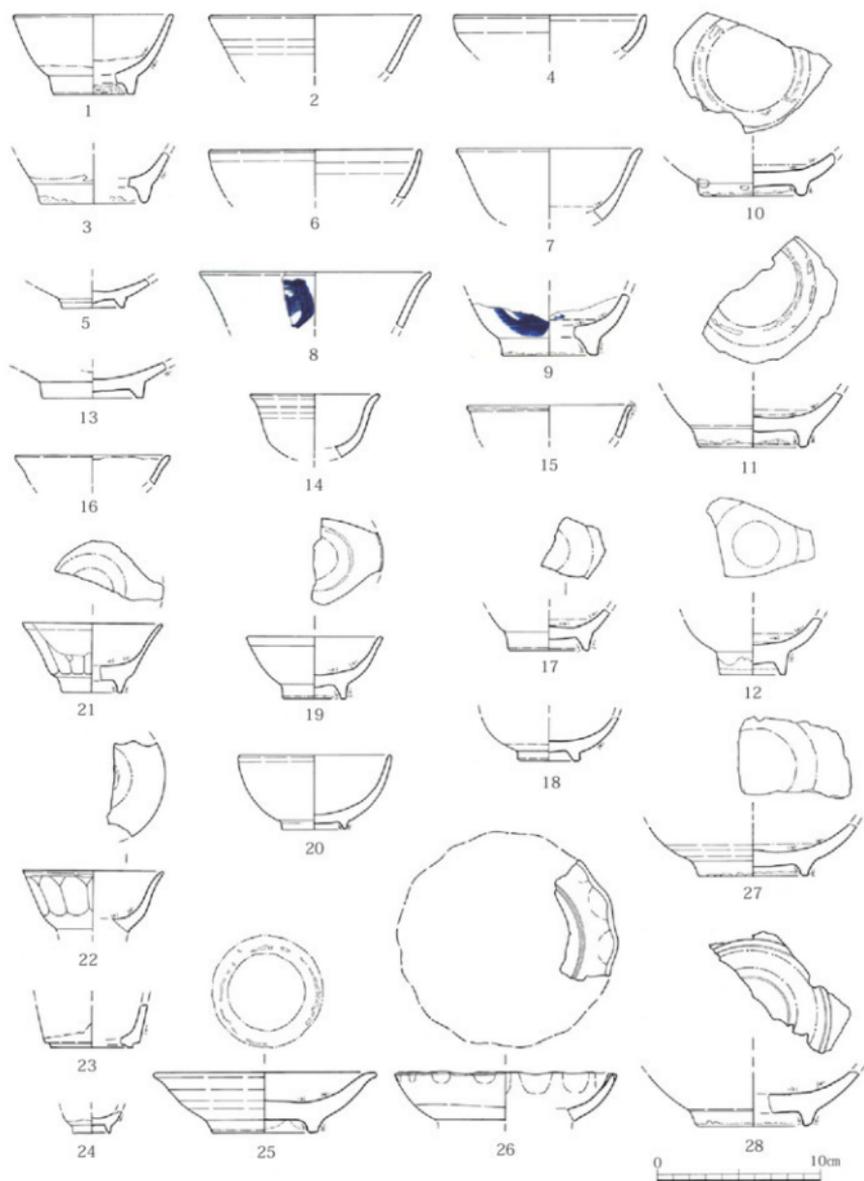
図・図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			釉・文様 (種類・色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	成形・調整等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第35図 図版36	1	碗	口 底	9.8	4.95	4.9	灰釉 緑灰色の透明釉を内外面 胴下部まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形の碗。見込に窯 積み痕跡。高台に砂目痕。	B-9 覆乱
	2	碗	口 縁部	13.0	—	—	灰釉 緑灰色の透明釉を全面に 施釉。	灰白色で緻密。細かい黒 色粒を含む。	轆轤成形の碗。口縁断面 舌状。	B-7 覆乱
	3	碗	底 部	—	—	6.6	灰釉 オリーブ黒色釉を高台脇 まで施釉。	にぶい黄橙へにぶい橙。	費付に砂目痕。	B-9 II層
	4	碗	口 縁部	11.8	—	—	灰釉 灰黄色の釉を内外面に施 釉。	灰白色で緻密。	直江口縁の碗。轆轤成形。	C-9 II層
	5	碗	底 部	—	—	3.8	灰釉 内面に黄褐色釉を施釉。	淡黄色で緻密。	轆轤成形の碗。高台の轆 轤痕が明瞭。高台断面三 角。	E-9 覆乱
	6	碗	口 縁部	13.0	—	—	鉄釉 内外面に鉄釉を施釉。	灰白色で緻密。	直江口縁の碗。轆轤成形。	C-8 II層
	7	碗	口 縁部	11.4	—	—	白釉 白化粧した後、上から透 明釉を施釉。	淡黄色で細かい。	外反口縁の碗。轆轤成形。	南覆乱
	8	碗	口 縁部	14.2	—	—	染付 白化粧した後、呉須で文 様を描き、上から透明釉 を施釉。	淡黄色で緻密。	外反口縁の碗。轆轤成形。	D・E・F-2 覆乱
	9	碗	底 部	—	—	5.6	染付 白化粧した後、呉須で文 様を描き、上から透明釉 を施釉。蛇目輪割ぎ。見 込に呉須の飛文。費付輪 割ぎ。	やや黄色の強い灰白色。 緻密。	轆轤成形の碗。見込に窯 積み痕跡。高台に白土付 着。	南覆乱
	10	碗	底 部	—	—	6.4	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。蛇目輪割ぎ。費付 輪割ぎ。	にぶい黄橙で緻密。細か い白色粒を僅かに含む。	見込に窯積み痕跡。	C-9 II層
	11	碗	底 部	—	—	6.5	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。蛇目輪割ぎ。費付 輪割ぎ。	にぶい黄橙～黄灰色で細 かい。	見込に窯積み痕跡。高台 裏に砂目あり。	B-9 東趾 II a層
	12	碗	底 部	—	—	4.0	(外) 鉄釉 (内) 透明 高台まで浸しかける。蛇 目輪割ぎ。	にぶい橙で軟質。	高台及び高台裏に白土を 施し、費付割ぎ。	B-9 東趾 II a層
	13	碗	底 部	—	—	6.2	鉄釉 内面及び外面費付脇まで 施釉。	灰色～にぶい、橙色で緻密。 細かい白色粒及び黒色粒 を僅かに含む。	轆轤成形の碗。底部のつ くりが丁寧。	B-9 覆乱
	14	小 碗	口 縁部	7.9	—	—	灰釉 全面白化粧、上から透明 釉を施釉。口縁下を浅く 削り、圈線を3条巡らせ る。	黄灰色～にぶい黄橙で緻 密。	外反口縁の小碗。胴下部 の膨らみが強い。	B-9 II層 ・ B-9覆乱
	15	小 碗	口 縁部	10.1	—	—	掛分 内面から口唇まで灰釉。 外面鉄釉を掛け分ける。	灰白色で緻密。	玉縁状口縁の小碗。	C-9 II層
	16	小 碗	口 縁部	9.4	—	—	掛分 内面灰釉。外面黒褐色釉 を掛け分ける。	灰白色で緻密。	口縁部下でやや屈折する。 口縁断面舌状。	C-8 東I II層 ・ C-8 II層
	17	小 碗	底 部	—	—	5.0	掛分 内面灰釉。外面鉄釉を全 面に施釉。見込蛇目輪割 ぎ。費付輪割ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形の小碗。高台裏 に砂目付着。	覆乱
	18	小 碗	底 部	—	—	3.8	鉄釉 黒褐色釉を内面及び外面 胴下部まで施釉。	灰色～にぶい、橙色で緻密。 細かい白色粒を僅かに含 む。	轆轤成形の小碗。高台の つくりが丁寧。	B-9 II層

第9表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

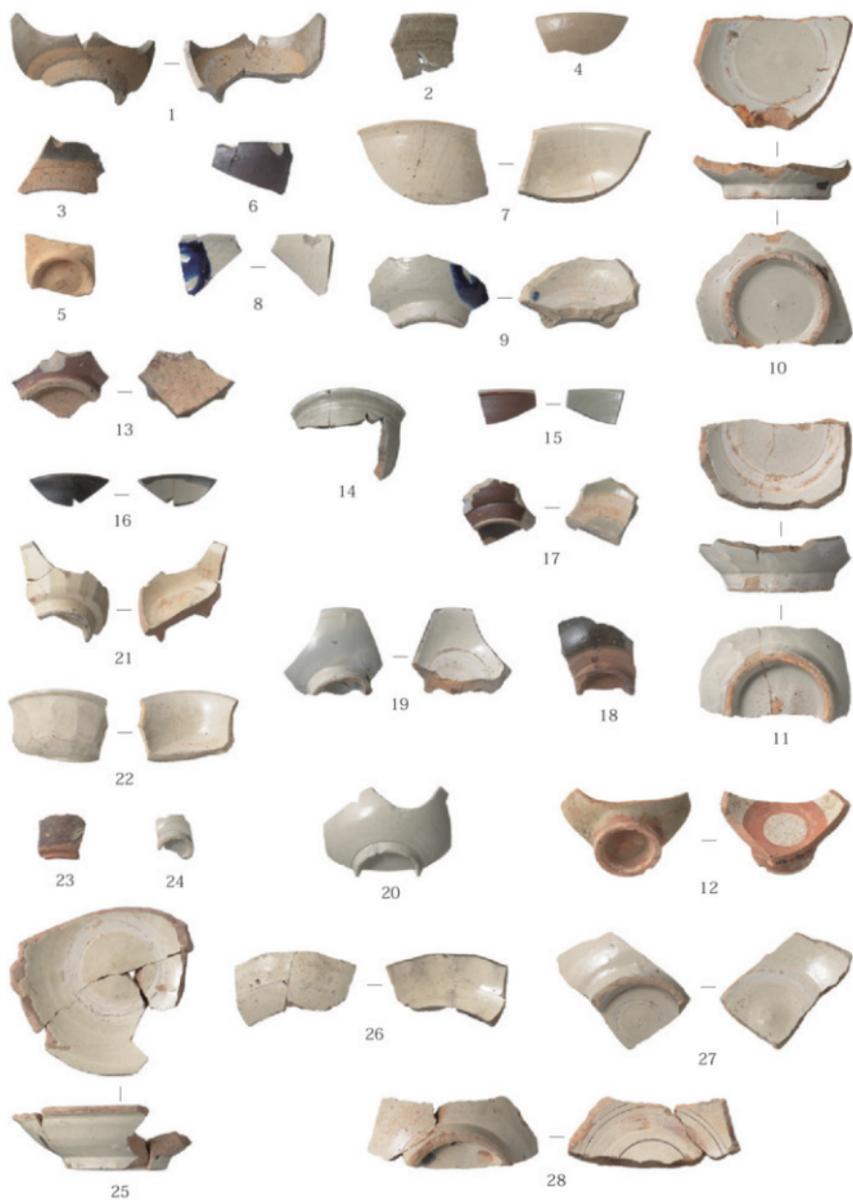
図・図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			釉・文様 (種類・色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	成形・調整等	グリッド・層
				口径	器高	底径				
第35回 図版36	19	小碗	口 底	8.4	3.9	4.0	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。見込蛇口輪割ぎ。	黄灰色～橙で緻密。	見込に窯積み痕。外成に 窯割れの痕。	南視乱
	20	小碗	口 底	9.4	4.6	3.9	白釉 透明釉を内外面全面に施 釉。畳付輪割ぎ。	灰白色。緻密。	轆轤成形の小碗。高台端 の削りかぼち。高台断面 三角。	南視乱
	21	小碗	口 底	8.6	4.3	3.8	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。見込蛇口輪割ぎ。	鈍い褐色で緻密。	外反口縁の小碗。外面面 取り。	C-9 II層
	22	小碗	口 縁部	8.6	—	—	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。見込蛇口輪割ぎ。	淡黄色で緻密。	外反口縁の小碗。外面面 取り。	視乱
	23	小碗 か	底 部	—	—	5.0	鉄釉 内面及び外面畳付輪まで 施釉。	赤色でやや細かい。粗め の白色粒を含む。	轆轤成形。腰折れ高状に のびる。畳付平坦。	南視乱
	24	小杯	底 部	—	—	2.3	白釉 白化粧した後、内面及び 外面胴下部まで透明釉を 施釉。	灰白色で緻密。細かい茶 褐色及び白色粒を僅かに 含む。	高台のつくりが丁寧。畳 付に白土を残す。	視乱
	25	皿	口 底	13.7	3.75	6.4	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。見込蛇口輪割ぎ。 畳付輪割ぎ、白土のこす。	にぶい褐色。	轆轤成形の皿。見込に窯 積み痕の痕跡。	C-9 II層
	26	皿	口 縁部	13.8	—	—	白釉 内外面に施釉。見込に2 条の沈線をはらせる。	淡黄色で細かい。	波縁の皿。口唇平坦。	C-9 II層
第36回 図版37	27	皿	底 部	—	—	6.8	白釉 白化粧した後、上から透 明釉を施釉。見込蛇口輪 割ぎ。畳付輪割ぎ。	淡黄色で細かい。	轆轤成形の皿。見込に窯 積み痕の痕跡。	B-9 東Ⅱa層
	28	皿	底 部	—	—	6.6	白釉 白化粧した後、透明釉を 施釉。見込蛇口輪割ぎ。 畳付輪割ぎ。見込に1条 と2条の沈線をはらせる。	にぶい橙でやや細かい。	轆轤成形の皿。高台に一 部白土が残る。	C-7視乱2 + D-8視乱2
	29	鉢	口 縁部	—	—	—	両釉 内外面に暗オリーブ褐色 の釉を施釉。内面胴下部 に2条の圈線。その間に 1条の沈線をはらせる。	淡黄色でやや軟質。細か い赤色粒を僅かに含む。	逆「L」字状口縁の鉢。轆 轤成形。	C-8東ⅡB層 +C-8Ⅱ層 瓦集中 +C-8東Ⅱ B層瓦集中
	30	鉢	口 縁部	—	—	—	摺分 内面緑灰色。外面黒褐色 の釉を施釉。	灰白色で緻密。	口縁が外に下がる形状の 鉢。	視乱
	31	鉢	口 縁部	—	—	—	摺分 内面緑灰色。外面黒褐色 の釉を施釉。口縁直下、 胴部に只貫で文様を描く。	灰黄色～淡黄色で軟質。	轆轤成形の鉢。ナデ調整 丁寧。	視乱
	32	鉢	口 縁部	—	—	—	両釉 内面口縁下から外面に施 釉。	灰白色～淡黄色で軟質。	内湾する鉢。轆轤成形。 内面口縁を平らに成形。	D・E・F-1 視乱
	33	急須	口 縁部	6.8	—	—	鉄釉 外面に鉄釉を施釉。口唇 輪割ぎ。	灰色で緻密。	轆轤成形の急須。口唇平 坦。内面轆轤痕跡。	D-8 視乱
	34	酒盞 (カラカス)	注ぎ 口	—	—	—	両釉 暗オリーブ褐色の釉を 外面全面に流しかける。	灰白色で緻密。	轆轤成形。注ぎ口陥りつ け。外面のナデ調整明瞭。	D-9 視乱
35	急須 (蓋)	底 の 袴	(此) 5.1	—	(袴) 4.0	色釉 緑釉、赤釉で文様を描き 上から透明釉を施釉。外 面口縁部まで施釉。	灰白色で緻密。	掘欠損し傷に孔。内面轆 轤痕跡。	南視乱	

第9表 沖縄産施釉陶器観察一覧3

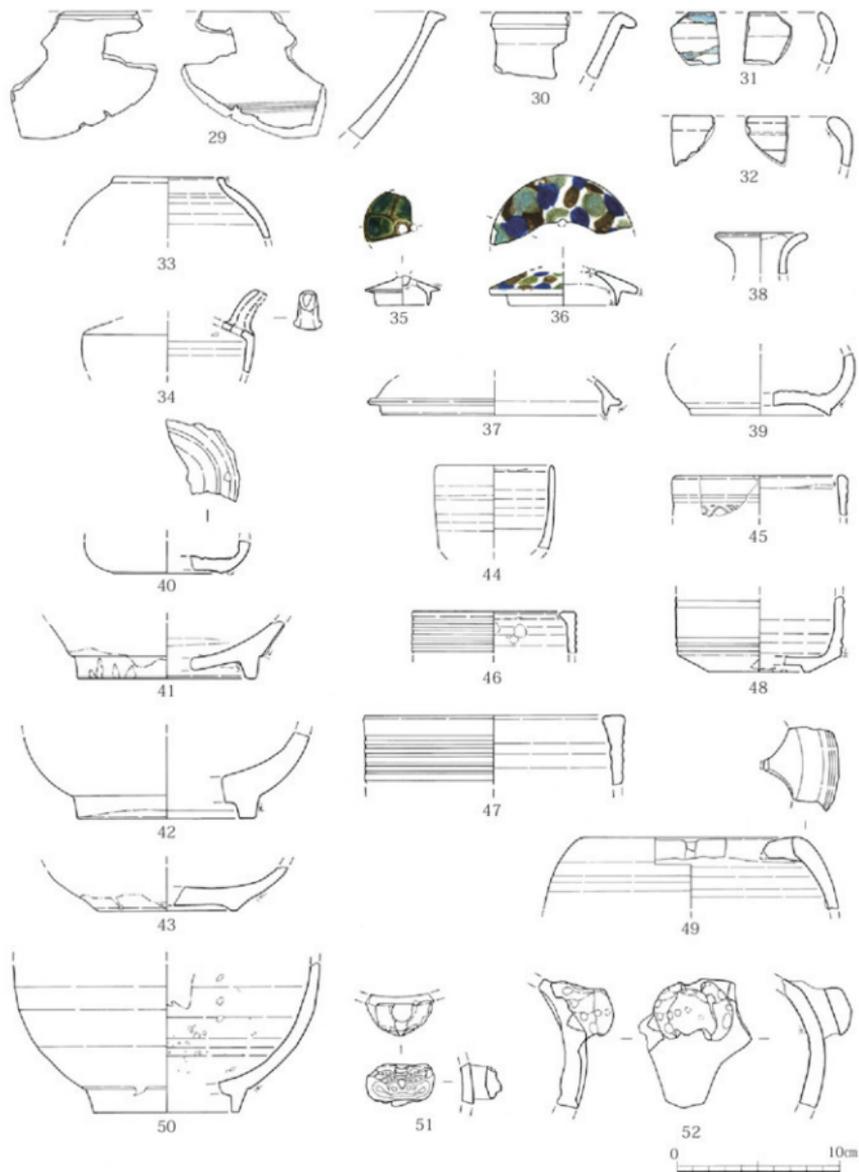
図・図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			釉・文様 (種類・色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	成形・調整等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第36図 図版37	36	急(蓋須)	底ノ持	(底) 9.1	—	(持) 6.6	色絵 白化粧した後、呉須、褐釉、緑釉で文様を描き、上から透明釉を施し、覆付釉剥ぎ。	黄灰色で緻密。	掘欠損し指に孔。	南視丸
	37	急(蓋須)	底ノ持	(底) 15.6	—	(持) 13.8	灰釉 内面覆付、外面口縁部まで施釉。	灰白色で緻密。	底端部を玉縁状に成形。	覆丸
	38	瓶	口縁部	5.4	—	—	灰釉 黄灰色の釉を全面に施釉。	青灰色で緻密。	外反口縁の彫。	C-8 II層
	39	瓶	底部	—	—	8.6	黒釉 外面高台脇まで施釉。	浅黄～青灰色で緻密。	底部は棒笥状の彫。見込の轆轤直は明瞭。	C-9 II層
	40	袋物	底部	—	—	6.8	黒釉 外面底部脇まで施釉。	灰赤色で粗い。粗めの白色粒を含む。	底部のつくりが雑。内面轆轤直が明瞭。内面、黒釉の飛斑。	覆丸
	41	袋物	底部	—	—	11.0	黒釉 内面には薄く、外面には厚くオリブ黒色釉を施釉。外面高台脇まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形の袋物。内面、轆轤直明瞭。	C-9 II層
	42	袋物	底部	—	—	11.0	黒釉 外面覆付脇まで施釉。	灰白色で細かい、粗い白色粒及び黒色粒を含む。	轆轤成形の彫。見込に砂目あり。高台のつくりが丁寧。	C-9 II層
	43	袋物	底部	—	—	8.4	褐釉 内面及び外面下部まで浸しかける。	灰白色で緻密。	轆轤成形。底部は棒笥状になっている。	D・E・F-3 覆丸
	44	火取	口縁部	7.0	—	—	拵分 内面及び外面口縁下まで白化粧を施す。内面口縁下から外面口縁に黄褐色、外面胴部に暗オリブ色の釉を施釉。	褐色で軟質。	直口の火取。轆轤成形。	C-9 II層
	45	火取	口縁部	10.7	—	—	褐釉 内面口縁下から外面に黒褐色の釉を施釉。外面に横位沈線2条、その下に斜位沈線を巡らせる。	にぶい黄褐色で軟質。	筒状の火取。轆轤成形。	D-3 覆丸
	46	火取	口縁部	10.0	—	—	褐釉 内面口縁下から外面に施釉。胴部に沈線を巡らせる。	浅黄色で緻密。	筒状の火取。轆轤成形。口唇断面三角。	南視丸
	47	火取	口縁部	16.0	—	—	鉄釉 内外面に施釉。胴部に沈線を巡らせる。	灰白色で緻密。	内面口縁部を肥厚させる。口唇平坦。	C-9 II層
	48	火取	底部	—	—	6.2	褐釉 外面にオリブ褐色の釉を施釉。胴部中央及び下部に沈線を巡らせる。	にぶい赤褐色で緻密。	筒状の火取。底部を斜位に形成。	C-9 II層
	49	火取	口縁部	13.4	—	—	黒釉 内外面黒色釉を施釉。	灰色で緻密。	内湾する火取。内側に突起を貼りつける。	覆丸
	50	火取	底部	—	—	9.0	鉄釉 褐釉を高台脇まで、高台に鉄釉を薄く施釉。	浅黄色で軟質。	轆轤成形の火取。高台のつくりが丁寧。	C-8 II層 + C-8 東II II層 + C-8 II層 瓦集中
	51	火取	耳	—	—	—	褐釉 外面全面に施釉。	にぶい黄で細かい。	断面をもつ耳。	表探
	52	香取?	胴部	—	—	—	緑釉 内面胴上部、外面に施釉。釉の大半が白化しているが耳の傍に緑釉が残る。	灰白色で緻密。	轆轤成形。断面を持つ耳か。	C-7 覆丸 2



第35図 沖縄産施釉陶器1



図版 36 沖縄産施釉陶器 1



第36図 沖縄産施釉陶器2



図版 37 沖縄産施釉陶器 2

9 初期沖縄産無釉陶器（第10表、第37～40図、図版38～41）

ここで扱う初期沖縄産無釉陶器とは、近年の研究成果により17世紀前半～中葉の製品と考えられる資料である（新垣2013）。次に報告する沖縄産無釉陶器と明確に区別され、成形方法や窯詰め方法等が異なる。これらの特徴は、現在のところ湧田古窯跡で焼成された製品にのみ認められ、薩摩との窯業技術の交流を示すとされる。

本地区では総計2,163点出土し、そのうち特徴的な81点を図示した。器種としては、碗類・皿・瓶・火炉・急須・蓋・壺・播鉢がある。これらの資料には泥釉を施軸する資料、無釉の資料、そして施軸が無釉か判然としない資料がみられる。また、硬く焼き締められる資料もあれば、焼きが軟質な資料も見られる。以下に各器種の概要を述べる。個々の詳細については、観察表に譲る。

①碗類（1～15）

碗は全体的に轆轤使用の調整痕が明瞭に残る例が多い。また、初期沖縄産無釉陶器の特徴として高台の作り方が2種類あり、どちらも確認できた。1は全形が残る資料で、口縁がやや直線的に開く資料である。初期沖縄産無釉陶器の成形方法の特徴の1つである輪状の粘土紐を貼り付けて高台状に成形する資料である。2は口唇部内面から外側にやや開く口縁を持ち、外面口縁周辺にナゲ調整を施す資料である。口唇部に窯クソの付着がみられる。3～8は直口碗となる。中でも、7・8は腰部からゆるやかに立ち上がる資料である。9は外反口縁の碗で、胴部に丸みを帯びる。10～13は底部資料である。10～12は底部に円盤状の粘土を貼り付けた後に内削りを削り出すもので、13は1と同様に輪状の粘土紐を貼り付けて高台状に成形する資料である。14は小碗の直口碗である。口唇断面丸く、丁寧に調整される。15は杯の端反の口縁資料でこちらも丁寧に調整が施されている。

②皿（16～31）

明確に皿と考えられる資料は11点図示しており（16～26）、直口口縁の資料（17・18・20・24～26）と外反口縁の資料（16・19）が得られている。底部は高台を持つもの（16）と脚を持つもの（17）、ベタ底になるもの（18～23）がある。脚を持つものは3足になる可能性がある。ベタ底になるものは底部を平坦に成形するものと（18・19）、成形後にひっくり返してケズリを行うもの（20～23）がある。その内、21は灯明皿となる資料である。

27～31は皿か瓶か判然としない資料である。27～30は外反口縁の資料で、その内27・29は胴部から口縁部へと立ち上がる部分で明瞭な稜を持つ。31は口縁が直立するものである。

③瓶（32～40）

32～38は口縁が外側へ大きく開くものである。その内、32～35は口唇断面が丸くなる資料で、36は口唇部が舌状になる。37は口唇部を成形する際に外側に折り曲げて玉縁状にし、38は口縁を直口させる資料である。39・40は口縁を上方に立ち上げた資料である。39は口唇部を外側へ折り曲げ、40はゆるやかに外反する。

④火炉（41）

厚手で、内湾する口縁資料である。口縁部のみ残存しており、全形は不明である。

⑤急須（42）

釣手の接着部分と口縁部が残存する急須。釣手は別で製作した後、接着する。

⑥釣手（43）

43は釣手の破片である。42の様な急須と関連する資料と考えられるが、類例資料も非常に少ない為判然としない（沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。鹿児島県において、堂平窯跡出土資料の中で類似する資料が水注の釣手部分にみられる（鹿児島県立埋蔵文化財センター2006）。

⑦蓋（44～49）

蓋は袴が付くタイプ（44）と、円盤形のタイプ（45～48）、平坦な円盤の下面に高台状の滑り止めを有するタイプ（49）の3種類みられる。袴が付くタイプの44は、上方に摘みが付くものと考えられる。円盤形のタイプは概ね内外面共に平らになるか、内面中央部に内湾していく形となっている。中でも、48は外面中央に紐状の取手を貼付している資料である。49は次に紹介する沖繩産無軸陶器の蓋として多くの遺跡で普遍的にみられる資料である。初期沖繩産無軸陶器から製作され続けた形といえる。

⑧ 刻印・線刻資料（50～52）

50～52は拓本と写真のみの資料である。壺もしくは甕の胴部に文字や印が施された資料である。

⑨ 壺（53～75）

壺は口縁の作りから3タイプに分けられ、玉縁状になるタイプ（53～62）、口縁が開き断面方形になるタイプ（63）、やや直線的に上方に立ち上がるタイプ（64）がある。壺は口縁をつくる際に、外に1度折り曲げた後に内側に折り返して口縁を成形している。底部は内面に粘土の積み上げ痕が顕著に残るもの（65～67）、内面をナデなどの調整を経て積み上げ痕を消すもの（68～72）、底部に焼成時に生じた軸着部分のみられるものがある（73・74）。底部から胴部のつくりでは、胴部に丸みを帯びるもののみられる（68・70）。75は胴部資料で、雷文状に沈線が入る資料である。

⑩ 搦鉢（76～81）

搦鉢は口縁を外側に折り曲げて開く形状で、口縁下に明瞭な稜を2つ持つ例と（76～78）、明瞭な稜を一つ持つ例（79）、口縁から胴部まで明瞭な稜を持たず、ただらかに底部へと至る例（80）がある。口唇部の形状は断面方形の例と（76・77・79）、丸みを帯びる例がある（78・80）。全体の形状としては逆「ハ」の字状となる。81は底部資料で、外面は丁寧に調整を施している。

第10表 初期沖繩産無軸陶器観察一覧1

図・陶器番号	器型番号	部位	法量 (cm)			軸・顔色 (色・観形)	裏地 (色・質・痕跡材)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
			口径	器高	底径				
第37回 図版38	1	口 底	13.2	5.6	5.3	内外面に泥輪を巻く。外面は暗赤褐色～黒褐色で、内面は黒褐色を呈する。	暗赤褐色で緻密。白色の土が筋状にわずかに混ざる。石英をわずかに含む。	全面丁寧に輪成形する外反。高台は輪上の粘土線を折り付けて成形。口唇に合わせ口の垂れつき痕があり、伏せ残。外面全体に多量の灰が混る。	C7 II層・ C7 III層・ C7 III層
	2	口 縁部	13.2	—	—	内外面に泥輪を巻く。外面は黒褐色で、内面は灰赤～灰褐色を呈する。	暗赤褐色で緻密。石英をわずかに含む。	外面胴部上方～口縁にナデ調整が施される外反。口唇に合わせ口の垂れつき痕があり。口縁に灰ケソが付着する。	C3 Ⅷ層・ C3 Ⅷ層
	3	口 縁部	12.2	—	—	内外面に泥輪を巻く。灰赤色～暗赤褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	暗灰色で緻密。石英をわずかに含む。	口唇断面深い直口縁。外面胴部～口縁にナデ調整が施される。外面口縁～見込み部分に灰が混る。内面に火割れあり。	C8 III層・ D9 II層
	4	口 縁部	12.4	—	—	外面胴部～内面に泥輪を環状に巻く。巻輪部は黒褐色～暗赤褐色を呈し、無軸部は赤褐色を呈する。	明赤褐色～暗赤褐色でやや軟質。白色と赤色の土が筋状に混ざる。石英を含む。	丁寧につくりの直口縁。口唇断面丸く、外面胴部～口縁にナデ調整が施される。	Ⅷ層
	5	口 縁部	13.6	—	—	外面には、小赤褐色～暗赤褐色で、内面は灰褐色～暗赤褐色となる。	明赤褐色～暗灰色。白色と赤色の土が筋状に混ざる。石英と黒色粉を含む。	口唇断面深い直口縁。内外面に火割れあり。	B8 Ⅷ層・ II Ⅷ層
	6	口 縁部	13.0	—	—	内外面ともに褐色～明赤褐色。	褐色～明赤褐色で軟質。白色の土が筋状に混ざる。石英をわずかに含む。	口唇断面やや方形の直口縁。外面口縁下部に1本の沈線が混り、内面口縁下部はわずかに窪む。	Ⅷ層
	7	口 縁部	12.0	—	—	内外面に泥輪を巻く。外面には、小赤褐色～暗赤褐色で、内面は灰褐色～小赤褐色を呈する。	暗赤褐色で緻密。白色の土が筋状に混ざる。石英をわずかに含む。	内外面に大きな火割れがみられる外反。輪成形は丁寧に、胴部からゆるやかに立ち上がる。口唇に合わせ口の垂れつき痕あり。	C7 III層・ C8 III層・ C9 III層
	8	口 縁部	12.0	—	—	内外面に泥輪を巻く。外面は赤褐色～暗赤褐色で、内面は暗灰色を呈する。	暗赤褐色で緻密。石英をわずかに含む。	胴部からゆるやかに立ち上がる外反。口唇断面丸く、口縁から外側へ大きく開く。口唇に合わせ口の垂れつき痕あり。	C7 3層
	9	口 縁部	10.0	—	—	内外面に泥輪を巻く。外面は暗灰黄色～オリーブ黒色で、内面はオリーブ黒色を呈する。	灰色。	口縁から胴部にかけて丸みを帯びる外反。口唇に合わせ口の垂れつき痕あり。	Ⅷ層

第10表 初期沖繩産無釉陶器観察一覧2

図・図説番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			釉・器色 (色・期間)	素地 (色・質・混和材)	成形・調整・文様等	グリップ ・足
				口径	器高	底径				
第37回 図版38	10	底	底	-	-	6.8	外面は黒色で、内面側は明赤褐色を呈する。やや軟質。白色の土が器状に混ざる。石英と赤色粒を含む。	費付平円時、高台は直線的。胴部に1条の溝線が走る。底部は円筒状の粘土を聚り付けた後に内側を削り出して高台を形成。見込みに部分に元気あり。	C9 B層	
	11	底	底	-	-	6.8	黒褐色の自然釉が外面にわずかにみえる。内外面ともに褐色を呈する。	褐色の粘土で、軟質。石英をわずかに含む。	費付平円時、高台はやや丸みを帯びる。底部は円筒状の粘土を聚り付けた後に内側を削り出して高台を形成。移動した砂粒の痕跡から輪軸回りは反時計回りか。	C8 東段 B層
	12	底	底	-	-	6.0	黒褐色の自然釉が外面にわずかにみえる。外面は褐色～明赤褐色で、内面は黒褐色を呈する。	外面は褐色～明赤褐色で、内面が明赤褐色を呈する。やや軟質。白色の土が器状に混ざる。石英と黒色粒を含む。	費付部分是一部削削。底部は円筒状の粘土を聚り付けた後に内側を削り出して高台を形成。	C8 B層
	13	底	底	-	-	5.4	灰褐色～暗赤褐色で、内面は黒褐色を呈する。	明赤褐色で、やや軟質。白色と赤色の土が器状に混ざる。石英と黒色粒をわずかに含む。	高台内側及び底部部。底部は円筒状の粘土を聚り付けた後に内側を削り出して高台を形成。また、底部縁付近に高台跡を平明に成形。	B層
	14	小 皿	口 縁部	8.5	-	-	内外面に黒釉を塗布する。内外面ともに暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色。	口縁断面はV字口の浅碗。全体に焼成時の灰が付着する。特に見込部分に多く付着し、窯ケツも付着する。内外面共に大割れあり。	C8 B層
	15	杯	口 縁部	5.8	-	-	内外面ともに黒釉を塗布する。内外面ともに暗赤褐色を呈する。	濃い赤褐色。白色の土が器状にわずかに混ざる。石英を含む。	外面側部上方へ口縁にナテ調整が施される痕跡あり。	C9 B層
	16	皿	口 底	15.0	3.3	8.2	内外面ともに無釉。内外面ともに灰色を呈する。	灰色で、硬質。灰白色の土が器状に混ざる。	外反口縁の資料で、輪軸白。底部は円筒状の粘土を聚り付けた後に内側を削り出して高台を形成。内面に窯ケツが付着する。	C8 B層
	17	皿	口 底	14.0	2.8	11.2	内外面ともに黒釉を塗布し、外底は無釉。内外面ともに黒褐色で、外底は灰色を呈する。	暗赤褐色。白色の土が器状に混ざる。石英をわずかに含む。	口縁断面はV字口縁の皿。ベタ底の底部に焼付けの跡が1つ残っており、3割の皿と想定される。内面に焼成時の灰が付着し、元気あり。器部には窯ケツが付着する。内外面に大割れあり。	C7 B層
	18	皿	口 底	12.0	3.3	6.0	外面は無釉を塗布し、内面と外底は無釉。外面は暗赤褐色で、内面と外底は灰褐色を呈する。	暗赤褐色。赤色粒を含む。	外面側部に窪みのある直口縁の皿。見込部分は輪軸成形の痕が明確に残り、窪みあり。ベタ底で、底部は平円になる。外面に焼成時の灰が付着し、特に口縁部に多くみえる。口縁に合わせ口の重ね焼き痕あり。	C8 B層
	19	皿	口 底	12.8	3.0	9.0	外面は黒褐色で、内面は灰色。外底は無釉で、反時計回り。内面に自然釉がみえる。	暗赤褐色の粘土で、白色と赤褐色の土が器状に混ざる。石英をわずかに含む。	口縁断面が舌状になる外反口縁のベタ底の皿。底部は削り付けた成形か。底部下に2条の溝線がある。内面に焼成時の灰が付着し、元気あり。内底部分に重ね焼きの痕跡が残る。	C3 A層
	20	皿	口 底	13.8	-	-	外面口縁部は無釉で、外面側部と内面に黒釉を布拭きにて塗布し、黒褐色～暗赤褐色を呈し、内面はやや軟質。無釉部は明赤褐色を呈する。	灰色。白色の土が器状に混ざる。	口縁断面が舌状になるベタ底の皿。内面は直線的に立ち上がり、外面に輪軸による調整痕が明確に残る。外面口縁はナテ調整。底部は裏返しでケズリを行う。	B9 B層
	21	皿	口 縁部	9.2	-	-	内外面ともに黒釉を布拭きにて薄く塗布し、内外面ともに灰褐色を呈する。	暗赤褐色。やや軟質。赤褐色の土が器状に混ざる。石英と赤色粒の混入がみられる。	口縁断面が舌状になるベタ底の皿で焼成は悪い。内外面に輪軸による調整痕が明確に残る。ナテで全体を整え、底部は裏返しでケズリを行う。移動した砂粒の痕跡から輪軸回りは反時計回り。	C8 B層
	22	底	底	-	-	6.4	内外面ともに無釉で、灰色～黒褐色を呈する。	暗赤褐色～黒褐色。赤色粒と石英をわずかに含む。	ベタ底の皿。ナテで全体を整え、底部を裏返しでケズリを行う。移動した砂粒の痕跡から輪軸回りは反時計回り。	B7 南段 B層
	23	底	底	-	-	4.0	内外面ともに薄く黒釉を布拭きにて塗布し、内外面ともに暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色。赤褐色の土が器状に混ざる。石英と赤色粒の混入がみられる。	ベタ底の皿で焼成は悪い。ナテで全体を整え、底部はひっくり返してケズリを行う。移動した砂粒の痕跡から輪軸回りは時計回り。	C8 B層
	24	皿	口 縁部	9.4	-	-	内外面に黒釉を塗布する。内外面ともに暗赤褐色を呈する。口縁部～内面に焼成時の灰が付着し、元気あり。	灰色。石英をわずかに含む。	口縁断面がやや方形の外反口縁。胴部にくびれがある。内外面にわずかに大割れが見られる。	C8 B層
	25	皿	口 縁部	8.4	-	-	内外面ともに黒釉を塗布する。外面は灰色～暗赤褐色を呈し、口縁部～内面は暗赤褐色を呈する。	中心部暗赤褐色で、外側は灰色を呈する。白色の土が器状に混ざる。石英をわずかに含む。	口縁断面が舌状になる直口縁。ナテで全体を整え、底部は裏返しでケズリを行う。合わせ口の重ね焼き痕あり。	D8 B層
	26	皿	口 縁部	10.0	-	-	内外面ともに黒釉を塗布する。内外面ともに黒褐色を呈する。	暗赤褐色。灰質褐色の土が器状に混ざる。石英をわずかに含む。	口縁断面はV字口縁の皿。内面に焼成時の灰が付着する。	C8 B層
	27	皿 か 瓶	口 縁部	8.0	-	-	内外面ともに黒釉を塗布する。内外面ともに灰褐色～灰色を呈する。	暗赤褐色。石英をわずかに含む。	口縁部を外側へ折り返しつづつ、少し膨らませる。外面側下部に明確な段をもち、直線的に口縁へ立ち上げる。内外面に焼成時の灰が付着する。口縁に合わせ口の重ね焼き痕あり。	B8 南段 B層
	28	皿 か 瓶	口 縁部	8.6	-	-	内外面ともに無釉の資料。外面は暗赤褐色～暗赤褐色で、内面は灰色を呈する。	灰色が土体となり、部分的に暗赤褐色が見られる。石英をわずかに含む。	口縁断面が舌状になる資料。内面にナテ調整が施され、外面下部にはケズリの痕が残る。	B8 南段 B層

第10表 初期沖縄産無釉陶器観察一覧3

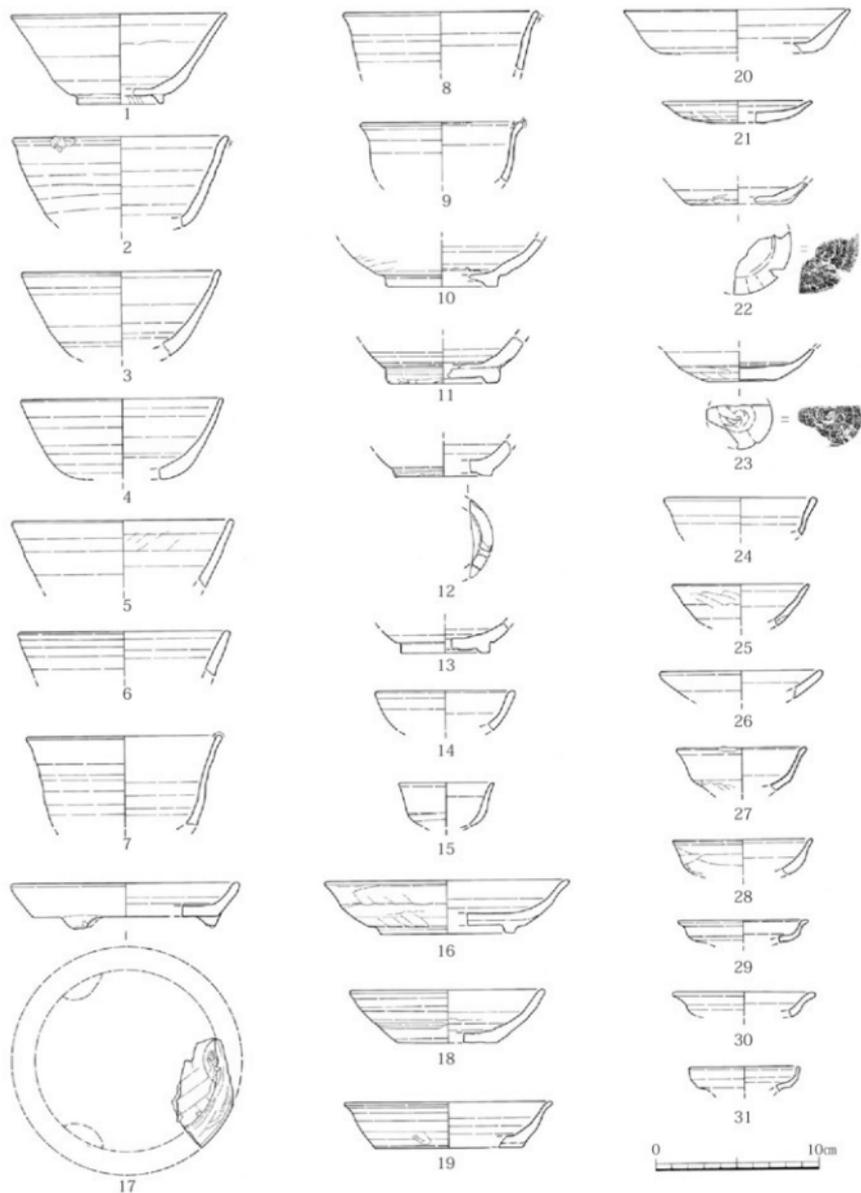
図・ 陶器 番号	番号	器種	形状	法量 (cm)			輪・部色 (色・範囲)	素地 (色・質・原料)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第37回 図版38	29	皿 か 瓶	口 縁 部	8.0	—	—	内外面とも灰色の資料。	灰色。	口縁が唇状に開く形状で、口縁上面はやや平坦。胴部から口縁は漸次的に立ち上げ、厚薄な輪をもつ。口縁部上面は外面に焼成時の灰が付着。	B-8 面PE 黒層
	30	皿 か 瓶	口 縁 部	8.8	—	—	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに灰黒～暗赤褐色を呈する。内面に自然釉が付着する。光沢あり。	灰色。	口唇断面に丸みを帯びる。外反口縁資料。口縁から胴部ははやや5字状を呈する。内面に黒クツが付着する。	C-8 黒層
	31	皿 か 瓶	口 縁 部	6.8	—	—	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに深い灰褐色～灰褐色を呈する。	灰色。	口唇断面丸みを帯びる資料で、口縁は胴部から垂直的に立ち上がる。また、外面は胴部～胴部にかけて明瞭な輪を2段もつ。	C-8 黒層
第38回 図版39	32	瓶	口 縁 部	8.6	—	—	内外面ともに底輪を強調する。内外面ともに暗赤褐色～暗褐色を呈する。	灰色～暗赤褐色で、褐色。白色の土が略円状に混ざる。石英を含む。	胴部から口縁部にかけて縦やかに開く資料で、口唇部は丁寧にナメ調整。口唇部分と外面にわずかに焼成時の灰が付着する。	C-4 新底成・ C-4黒丸
	33	瓶	口 縁 部	7.2	—	—	内外面ともに底輪を強調する。外面は灰褐色で、内面は暗灰色を呈する。	赤褐色～暗赤褐色。	胴部から口縁部にかけて縦やかに開く資料で、口唇断面は丸い。口唇部は丁寧に調整している。外面に焼成時の灰が付着する。	B-8 面PE 黒層
	34	瓶	口 縁 部	6.6	—	—	口唇部内面に底輪を強調する。口唇部は黒褐色。外面は灰褐色～暗褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	中心部分は暗赤褐色で、外側は黒色を呈する。褐色。黒褐色と赤褐色色の混入がわずかに見られる。	胴部から口縁部にかけて縦やかに開く資料で、口唇断面は丸い。口唇部は外側へ折れ曲げて成形しており、内面に輪使用の調整痕が確認出来る。	C-9 黒層
	35	瓶	口 縁 部	7.0	—	—	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに黒褐色となる。	暗赤褐色。石英の混入が多く見られる。	胴部から口縁部にかけて縦やかに開く資料で、口唇断面は丸い。口唇部分を外側へ折れ曲げて、胴部に接着してやや玉縁状に成形している。内面に焼成時の灰が付着する。	C-9 黒層
	36	瓶	口 縁 部	7.0	—	—	外面は無釉で、内面に自然釉がかかる。内外面ともに灰褐色となる。	暗赤褐色。石英の混入がわずかに見られる。	口唇断面古拙になる資料。口唇部を外側へ曲げて口を詰めた後に、胴部に横ナメを行い、小さな段を設ける。内面に焼成時の灰が付着する。	C-8 黒層
	37	瓶	口 縁 部	8.0	—	—	内外面ともに底輪を強調する。内外面ともに灰褐色を呈する。	灰色で、褐色。石英と黒色粒をわずかに含む。	口唇断面丸く、玉縁状になる資料で、口唇部分を外側へ折れ曲げて、胴部に接着して玉縁状に成形している。内面に火曜丸あり。	黒丸・ C-3黒丸
	38	瓶	口 縁 部	7.0	—	—	内外面ともに底輪を強調する。内外面ともに黒褐色を呈する。	灰褐色。石英をわずかに含む。	胴部から外側へ口を開く資料。口唇断面丸く、内外面に大彫あり。内面に焼成時の灰が付着し、光沢あり。	B-8 面PE 黒層
	39	瓶	口 縁 部	8.6	—	—	内外面ともに底輪を強調する。外面は赤褐色で、内面に深い赤褐色を呈する。外面に光沢あり。	暗赤褐色。石英をわずかに含む。	口縁を上方に立ち上げて、口唇部を外側へ折れ曲げて調整させる資料。口縁から胴部に至る部分を「く」の字状にし、外面には厚薄な輪をもつ。口唇上面に合わせた口の帯も混入。内外面に火曜丸あり。	C-8 面PE 黒層
	40	瓶	口 縁 部	7.5	—	—	内外面ともに無釉の資料で、外面に自然釉がかかる。外面は暗赤褐色で、内面は深い赤褐色～暗赤褐色となる。	暗赤褐色。石英と黒色粒をわずかに含む。	口縁を上方に立ち上げて、口唇部を外側へ折れ曲げて調整させる資料。口縁から胴部に至る部分をやや「く」の字状にする。内面に黒クツと火曜丸あり。	C-8 黒層
	41	火 鉢	口 縁 部	14.6	—	—	内外面ともに、灰色～黒褐色となる。	暗赤褐色で、褐色。石英をわずかに含む。	口唇部やや方形の資料。外面に胴下部に1条の副縁を有する。	B-2・3 黒丸
第39回 図版40	42	急 須 瓶	口 縁 部	10.4	—	—	外面に底輪を強調し、内面は無釉。外面は灰褐色～暗赤褐色で、内面は赤褐色を呈する。	暗赤褐色で、褐色。深い赤褐色の土が略円状に混ざる。赤褐色と黒色粒をわずかに含む。	口縁部を上方に折れ曲げて立ち上げ、口唇断面方形になる資料。口唇下部に2条の副縁を有する。約1cmで製作して、胴部を焼いた後に接着している。約1cmに焼成時の灰が混入する。外面に大彫丸あり。	C-8黒層・ C-9黒層 黒丸・ D-9黒層
	43	持 ち 手	口 縁 部	—	—	—	内外面ともに底輪を強調する。内外面ともに暗赤褐色～暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色。石英をわずかに含む。	胴部が台形形状になる資料で、外面は丁寧にナメ調整が施される。内面に少しぼみ、粗い調整を施される。	C-7 3層
	44	蓋 高 柄	底	9.9	—	7.4	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに灰褐色～黒褐色となる。	暗褐色。石英と赤褐色粒をわずかに含む。	両を削り出して製作される資料。全面を輪で成形。胴部の端部を鋭角にナメ調整して仕上げる。	C-8 黒層
	45	蓋 部	口 縁 部	9.8	—	—	上下ともに底輪を強調する。上面は暗赤褐色で、下面は黒褐色を呈する。	灰色。白色の土が略円状に混ざる。石英と赤褐色。4mm未満の黒色粒をわずかに含む。	口唇断面方形になる資料。下面に輪使用の調整痕が残る。上面に大彫丸あり。	C-8黒層・ C-9黒層
	46	蓋 部	口 縁 部	13.8	—	—	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに深い灰褐色～灰褐色を呈する。	暗赤褐色。白色と赤土が略円状に混ざる。また、約1cmの花房状の混入物がレン状に混入する。石灰質をわずかに含む。	口唇断面方形になる資料。上面に輪使用の調整痕が確認出来る。製作時に生じたボみあり。	C-7黒層 ・C-7 黒丸層
	47	蓋 部	口 縁 部	17.1	—	—	上下ともに底輪を強調する。上面は灰褐色で、口唇部以下は灰褐色を呈する。	灰色。白色の土が略円状に混ざる。石英をわずかに含む。	口唇断面方形になる資料。上面に輪使用の調整痕が確認出来る。表面にもうっすらと現れる。両面共に台形に製作される。上面には焼成時の灰が付着する。	C-5 黒丸
	48	蓋 部	口 縁 部	7.1	—	—	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに黒褐色を呈する。	暗赤褐色。	口唇断面方形になる資料。粘土板製作時の線状痕が上面に残る。胴下部に少しぼみが見られ、粘土板を輪使用の「へう」で切削。切削後、紐状の取手を削り付け。	C-8黒層・ B-8面PE 黒層

第10表 初期沖繩産無釉陶器観察一覧4

図・図版番号	番号	器種	部位	法則 (cm)			軸・器色 (色・範囲)	産地 (色・質・原料)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第38回 図版39	40	甕	口縁部	15.0	-	-	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに灰黄褐色を呈する。	中心部分は赤色で、外側部分は黒色を呈する。	端部断面方形の資料で、内面から端部にかけて丁寧な調整が施される。外面はほとんど調整が施されない。	ⅥA
	50	甕	胴部	-	-	-	外面は灰褐色を呈し、自然釉がかかる。内面は無釉を呈する。外面は黒褐色で、内面は黒褐色を呈する。	暗赤褐色。赤色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	外面に調査文が押印される。	C3 ⅥA
	51	甕	胴部	-	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、内面は縦状に施される。外面はにぶい黒褐色～灰黄褐色で、内面は黒褐色～灰黄褐色を呈する。	中心部分は暗赤褐色で、外側部分は黒色を呈する。縦密。白色と赤色の土が器底に凝る。石英を含む。	胴部に縦目文を施す。その下に調査文を施す。	C8 Ⅱ層 C8 Ⅲ層 C9 Ⅱ層
	52	甕	胴部	-	-	-	外面は灰褐色を呈し、自然釉がかかる。内面は無釉。外面は黒褐色で、内面は赤褐色を呈する。	灰赤色で、縦密。白色の土が器底に凝る。石英と赤色粒を含む。	胴部に1本の溝線が走り、外面に「春」及び不明文字の2文字が刻まれる。	C3 ⅥA
第39回 図版40	53	甕	口縁部	14.4	-	-	内外面ともに灰褐色を呈する。内外面ともに暗赤褐色～黒褐色を呈する。外面は所々、にぶい赤色が残る。	中心部分は暗赤褐色で、外側部分は黒色を呈する。縦密。白色の土と赤色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。頸部より上は別製作し、取り付けする。胴部には縦状の把手が2個残存し、その下に3本の溝線が走る。口縁部にサンゴ目話痕あり。内外面に大彫れあり。	C3 ⅥA C4 ⅥA C4 新造成
	54	甕	口縁部	12.4	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、内面は暗赤褐色～黒褐色を呈する。外面は所々、にぶい赤色が残る。	中心部分は暗赤褐色で、外側部分は灰赤色となる。縦密。白色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。胴部に縦状の把手を配し、その下に1本の溝線が走る。口縁部にサンゴ目話痕あり。内外面ともに大彫れがあり、外面に焼成時の灰と塗クが付着する。光沢あり。	B・2・3 ⅥA C3 ⅥA
	55	甕	口縁部	16.2	-	-	内外面ともに灰褐色を呈する。内外面ともに黒褐色を呈する。	暗赤褐色で、縦密。にぶい赤褐色の土が器底に凝る。赤色粒と石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。頸部外面の窪みが見られ、外面の胴部に焼成時の灰が付着する。	C3 ⅥA
	56	甕	口縁部	22.0	-	-	内外面に灰褐色を呈し、内面はにぶい赤褐色を呈する。内面は深く施される。	にぶい赤褐色。白色の土と赤色の土が器底に凝る。石英と赤色粒を含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げて外面と密着させた後に内側に折り返して成形。頸部外面の窪みが見られ、口縁部にサンゴ目話痕あり。	B8 Ⅱ層 IV～V層
	57	甕	口縁部	14.4	-	-	内外面ともに暗赤褐色～黒褐色の灰褐色を呈する。	暗赤褐色の粘土で、縦密。白色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げて外面と密着させた後に内側に折り返して成形。口縁部にサンゴ目話痕あり。内外面に大彫れあり。	C2 ⅥA
	58	甕	口縁部	16.5	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、外面は黒褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色。白色の土が器底に凝る。石英と赤色粒をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げて外面と密着させた後に内側に折り返して成形。口縁部にサンゴ目話痕あり。	B・2・3 ⅥA
	59	甕	口縁部	16.0	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、口縁部から外面は黒褐色～黒色で、内面は黒褐色を呈する。	暗赤褐色で、縦密。白色の土が器底に凝る。石英と赤色粒をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げて外面と密着させた後に内側に折り返して成形。口縁部に胸片を垂ね目として使用した痕が残る。	C8 Ⅱ層
	60	甕	口縁部	14.0	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、外面は暗赤褐色～黒褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色。白色と赤色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げて外面と密着させた後に内側に折り返して成形。口縁部にサンゴ目話痕あり。内外面に大彫れあり。	D・E・F2 ⅥA
61	甕	口縁部	14.6	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、外面は暗赤褐色～黒褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色で、縦密。白色と赤色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。口縁部にサンゴ目話痕あり。内外面に大彫れあり。	C9 Ⅱ層	
62	甕	口縁部	14.6	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、内面は暗赤褐色～黒褐色を呈する。	暗赤褐色で、縦密。赤色の土が器底に凝る。石英をわずかに含む。	玉縁状の口縁をもつ資料で、口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。内側に折り返した際に生じた窪みが見られ、外面の胴部に焼成時の灰が付着する。	C3 ⅥA	
63	甕	口縁部	12.0	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、内面は暗赤褐色～黒褐色を呈する。内外面ともに黒褐色を呈する。	暗赤褐色。白色の土と赤色の土が器底に凝る。石英を含む。	口縁が細く、口縁断面が方形になる資料。口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。	C5 ⅥA	
64	甕	口縁部	8.6	-	-	内外面ともに灰褐色を呈し、内外面ともに黒褐色を呈する。	暗赤褐色。石英と赤色粒をわずかに含む。	口縁がやや直線的に立ち上がる資料。口縁の厚みは薄い。外面下部に1本の溝線が走る。口縁は外に1度折り曲げた後に内側に折り返して成形。口縁部と外面下部間に焼成時の灰が付着し、口縁部にサンゴ目話痕あり。	ⅥA	
65	甕	底	-	-	15.8	外面は無釉を呈し、底面と内面は無釉の資料。外面は灰褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	灰色。白色の土が器底に凝る。石英を含む。	粘土粘土上層が明確に残る底部資料。内底には平坦にして高さの調整が可能な窪み。内底には、底面に向かって上方から灰褐色が流れ落ちている。内底は上方から落ちてきた灰が器底になっている。	C8 Ⅱ層	

第10表 初期沖繩産無釉陶器観察一覧5

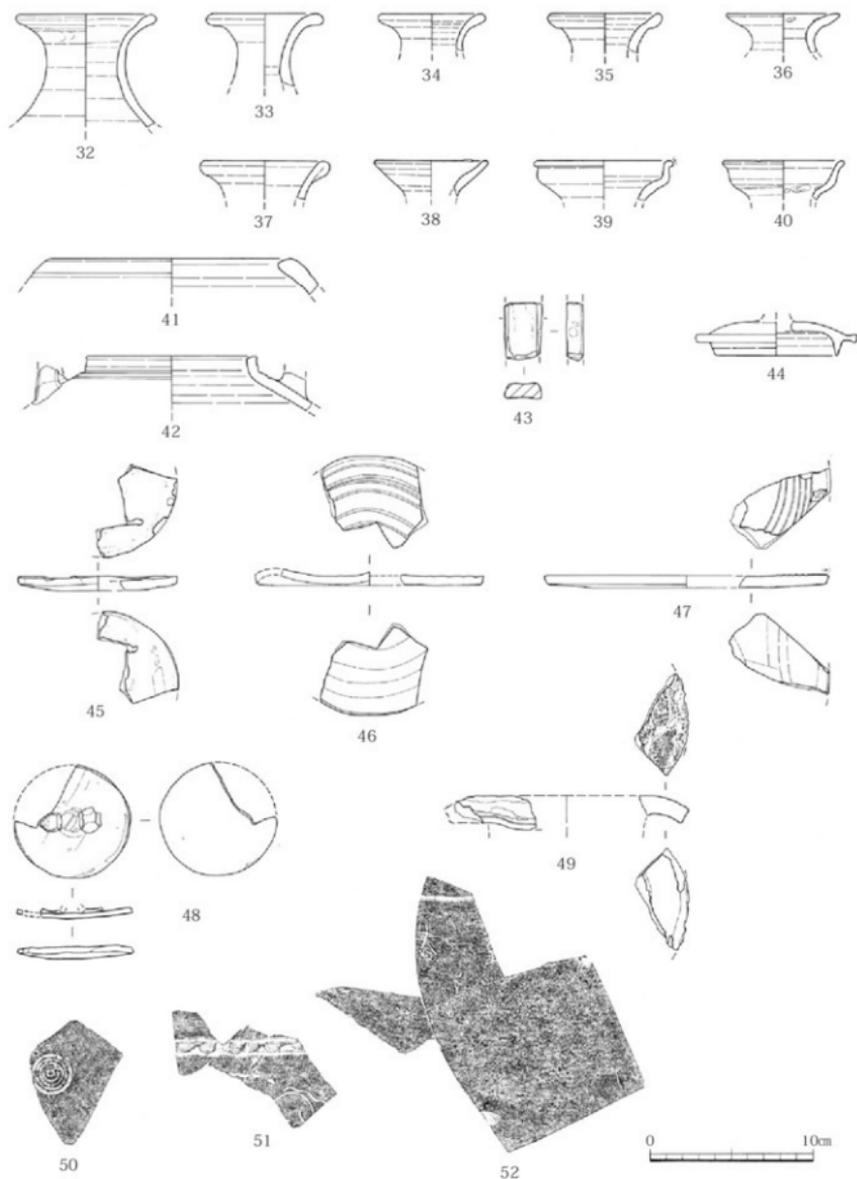
図・図版番号	番号	器種	部位	法器 (cm)			釉・顔色 (色・範囲)	素地 (色・質・原料)	成形・調整・文様等	グッド・星
				口径	器高	底径				
第39図 図版40	66	甕	底部	-	-	15.4	外面に灰釉を塗飾し、内面は無釉の資料。外面は暗赤褐色～黒褐色で、底部は暗赤褐色。内面は濃い赤褐色を呈する。	灰褐色で、緻密。白色の土が器底に混ざる。石英を他の資料より多めに含み、黒色粒をわずかに含む。	粘土積み上げ面が明確に残る底部資料。底部にヤンゴ目跡あり。	E9 短星
	67	甕	底部	-	-	-	外面に灰釉を塗飾し、自然釉がかかる。底部は無釉。内面は灰褐色を塗く塗飾か。外面は暗赤褐色～黒褐色で、底部は濃い赤褐色を呈する。内面は暗赤褐色を呈する。	中心部分は灰褐色で、外側は暗赤褐色を呈する。石英と赤色粒をわずかに含む。	粘土積み上げ面が明確に残る底部資料。内面の調整はほとんど行われていない。	B7 短円錐 星型
	68	甕	底部	-	-	9.2	内外面ともに無釉の資料。外面は灰褐色～黒褐色で、内面は灰黄褐色を呈する。	灰褐色が主となり、外側に暗赤褐色が見られる。緻密。白色の土が器底に混ざる。石英と黒色粒をわずかに含む。	内面と外面底部に指面圧痕が見られる資料。	B9 短星 + C8 星型
	69	甕	底部	-	-	16.0	外面に自然釉がかかる。外面は暗赤褐色～黒褐色で、内面は灰褐色を呈する。	暗赤褐色が主となり、底部の中心部分に黒色土がみられる。緻密。白色の土が器底に混ざる。石英をわずかに含む。	粘土積み上げ面が少く見られる。底部外面に結びが付着。内側に焼成時の灰が付着するため、口が開く資料か。	B7 短円錐 II b 層
第40図 図版41	70	甕	底部	-	-	15.2	外面に灰釉を塗飾し、内面は無釉。外面は暗赤褐色で、内面は濃い赤褐色を呈する。	暗赤褐色で、緻密。白色の土が器底に混ざる。石英と赤色粒を含む。	粘土積み上げ面があまり見られず、丁寧に調整を行っている。外面に1～5mm程度の穴が多数ある。外面側面に目輪が残り、口の開口資料に重なる状態で焼か。	E4 短星
	71	甕	底部	-	-	10.0	外面に灰釉を塗く塗飾し、外底と内面は無釉。無釉面には灰褐色を呈し、無釉面は灰褐色～黒褐色となる。	暗赤褐色で、緻密。白色の土が器底に混ざる。石英と赤色粒をわずかに含む。	土を塗く内外面は丁寧に調整が施される。外底部分には黒ケツが付着する。	C3 短星
	72	甕	底部	-	-	-	外面無釉の資料。外面は暗赤褐色で、内面は灰褐色の縦線が覆いぬき白色を呈する。	中心部分は灰褐色で、外側は暗赤褐色となる。白色の土が器底に混ざる。石英を外底に少量に含む。	底部内面まで丁寧に調整し、無釉。底部外面には、長さ2、2mmの穴輪が中央から端部に向かって引かれる。	C4 新造
	73	甕	底部	-	-	-	外面に灰釉を塗飾し、内面は無釉の資料。外面は黒褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	中心部分は黒褐色で、外側は暗赤褐色の粘土となる。白色と赤色の土が器底に混ざる。石英をわずかに含む。	底部内面まで丁寧に調整される。底部外面に黒褐色か黒土が付着する。内外面に大彫れあり。外底に焼成時の灰が付着する。	E4 短星
	74	甕	底部	-	-	9.0	外面に灰釉を塗飾し、内面は無釉の資料。外面は暗赤褐色～黒褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色。石英と赤色粒をわずかに含む。	底部内面まで調整されるが粗く、内外面に大彫れあり。外底に焼成時の灰が付着する。	C9 III期瓦面
	75	甕	胴部	-	-	-	外面を灰釉で塗飾する資料。外面は暗赤褐色～黒褐色で、内面は暗赤褐色となる。	暗赤褐色の粘土。部分的に黒土が黒色土となる。赤色粒がわずかにみられる。	雷文状に沈線が施される割製資料。外面に大彫れあり。	D6 短星
	76	口縁部	37.8	-	-	-	口縁部から外面に灰釉を塗飾し、内面は無釉の資料。外面は黒褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。	暗赤褐色で、緻密。白色の土が器底に混ざる。石英、赤色粒、黒色粒をわずかに含む。	口縁が器底に開く形状の資料。口縁は外側に折り曲がることで成形する。口縁で横ナデを行い、明瞭な線を2つ設ける。口縁内面下部から見込みむかつて唇目が施される。外面に大彫れあり。	E4 短星
	77	口縁部	21.0	-	-	-	内外面ともに灰釉を塗飾する。外面は灰褐色～暗赤褐色で、口縁部上面から内面は黒褐色を呈する。	暗赤褐色で、緻密。白色の土が器底に混ざる。石英と赤色粒を含む。	口縁は外側に折り曲がることで成形し、丸みをもって屈曲する。口唇断面は方形。口縁で横ナデを行い、明瞭な線を2つ設ける。口唇内面下部から見込みむかつて唇目を施す。口唇下部に灰が付着する。	C7 II 層 + 短星
	78	口縁部	15.0	-	-	-	内外面ともに無釉の資料。内外面ともに灰褐色を呈する。	暗赤褐色。石英と赤色粒をわずかに含む。	口縁は外側に折り曲がることで成形し、丸みをもって屈曲する。口唇断面は丸みをもつ。口縁で横ナデを行い、線を2つ設け、特に上部の線は明瞭である。口唇内面下部から見込みむかつて唇目を施す。内外面に大彫れあり。	C9 短星2
	79	口縁部	-	-	-	-	内面に灰釉を塗飾する資料。外面は灰黄褐色で、内面は黒褐色を呈する。	暗赤褐色で、緻密。石英と赤色粒を含む。	口縁は外側に折り曲がることで成形し、丸みをもって屈曲する。口唇断面はやや方形。口縁で横ナデを行い、明瞭な線を設ける。口縁上面に重なる焼きの目跡あり。	B9 東底 II a 層
80	口縁部	28.8	-	-	-	内外面ともに無釉の資料で、外面に自然釉がかかる。外面は灰褐色で、内面は濃い赤褐色を呈する。	濃い赤褐色で、緻密。白色の土が器底に混ざる。石英と赤色粒を含む。	口縁は外側に折り曲がることで成形し、丸みをもって屈曲する。口唇断面は丸みをもつ。口縁で横ナデを行い、明瞭な線を2つ設ける。口唇内面下部から見込みむかつて唇目を施される。唇目が施される箇所は広。口唇上面に重なる焼きの目跡が残り、外面全体に大彫れあり。	C8 星型	
81	甕	底部	-	-	11.0	内面に灰釉を塗飾する資料。外面は暗赤褐色で、部分的に黒色が入る。内面は黒褐色を呈する。	内面暗赤褐色で、外面黒褐色を呈する。白色の土が器底に混ざる。石英を含む。	ナデ調整の痕が明確に残る底部資料。唇目を施した後には塗飾する。大彫れあり。	C7 II 層	



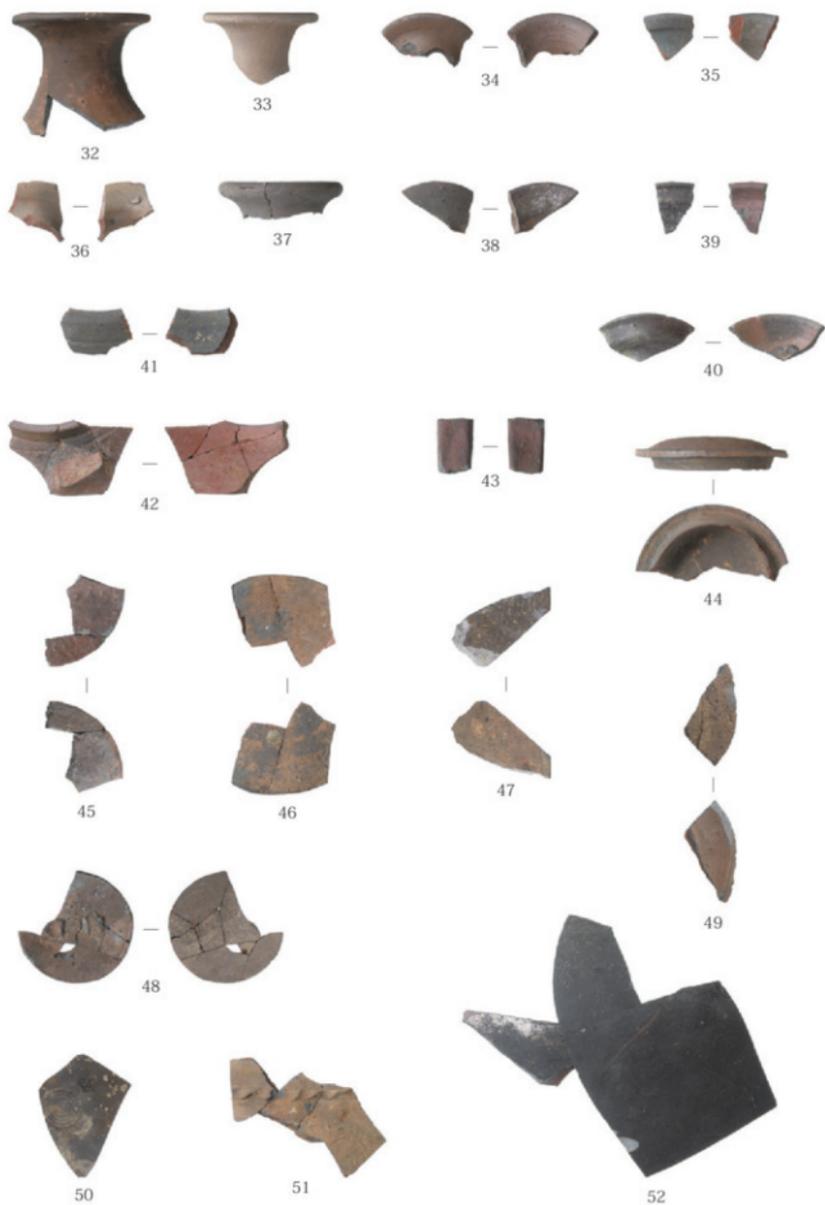
第37図 初期沖繩産無釉陶器 1



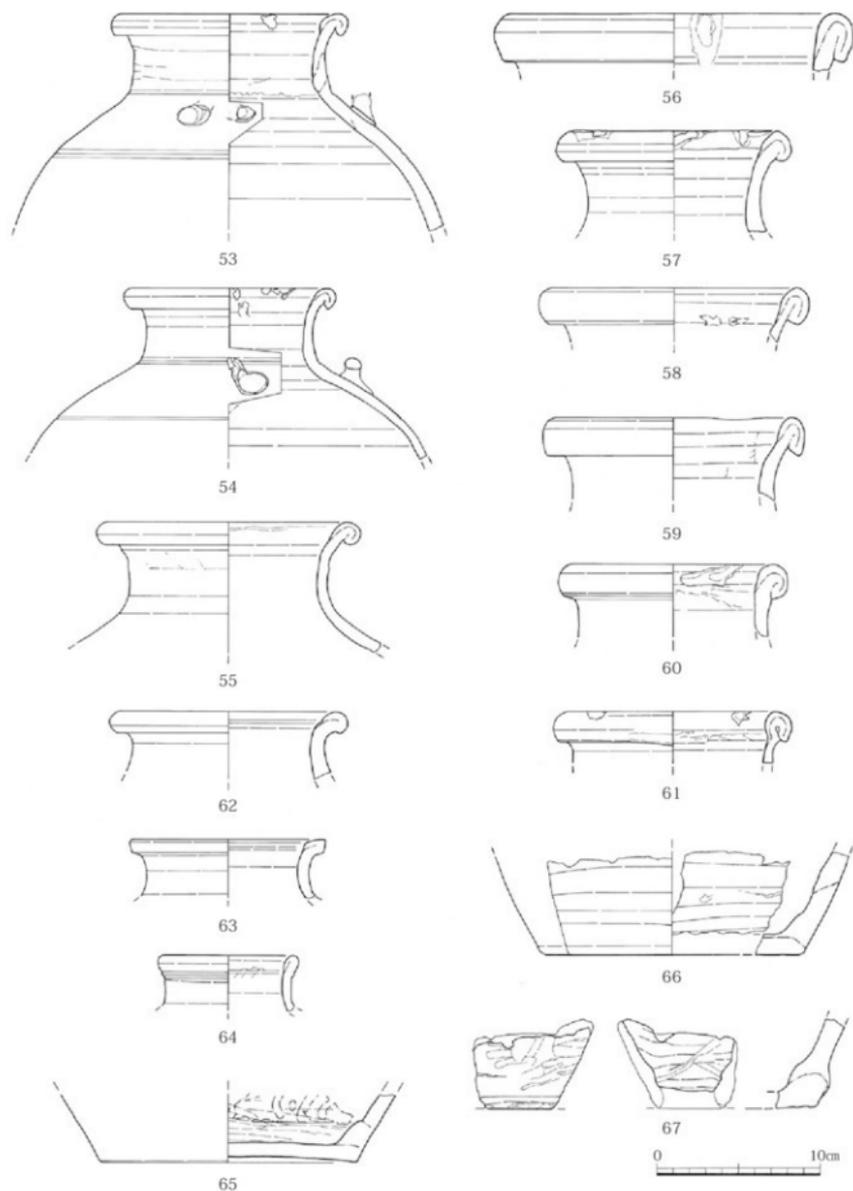
図版 38 初期沖繩産無釉陶器 1



第38図 初期沖繩産無釉陶器2



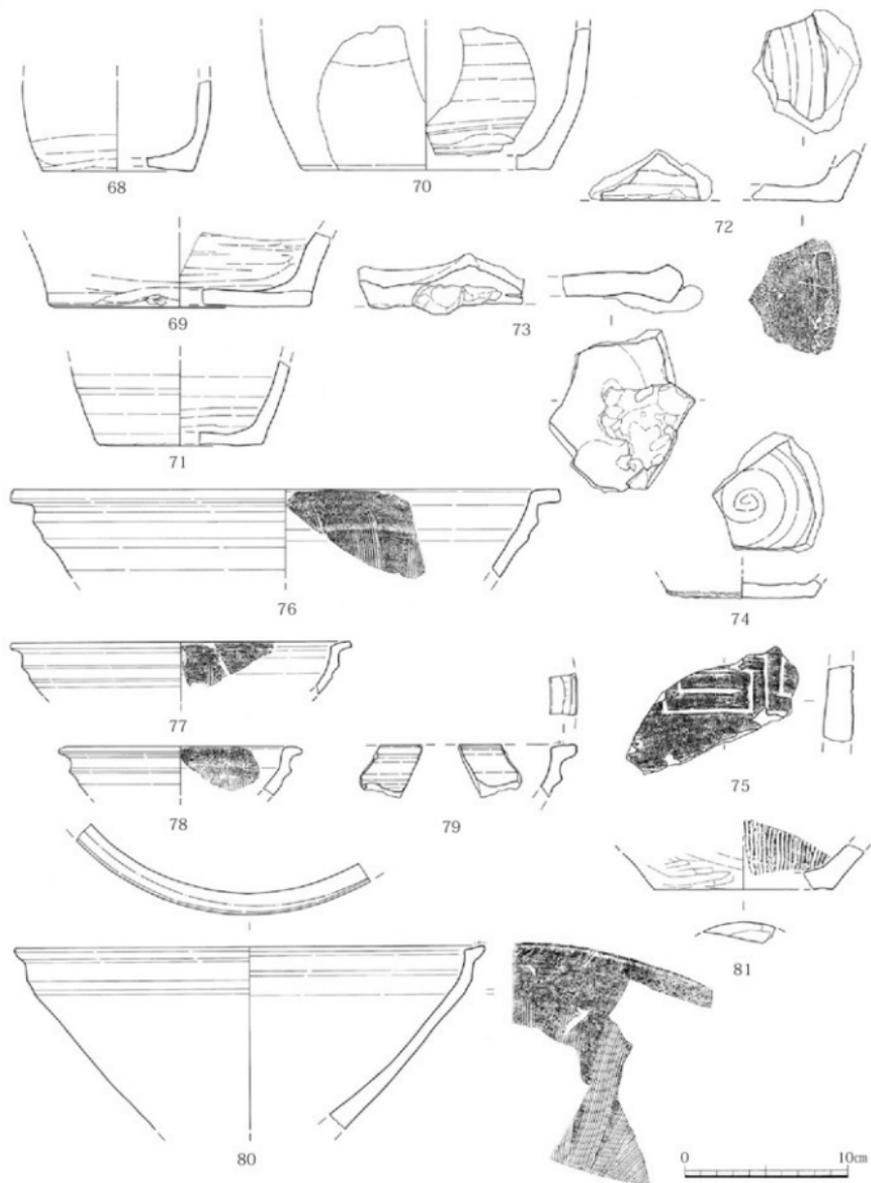
図版 39 初期沖繩産無釉陶器 2



第39図 初期沖繩産無軸陶器3



図版 40 初期沖繩産無釉陶器 3



第40図 初期縄文無釉陶器4



図版 41 初期沖繩産無釉陶器 4

10 沖縄産無釉陶器（第11表、第41～43図、図版42～44）

ここで扱う沖縄産無釉陶器とは、方言では「荒焼（あらやち）」と称し、先に報告した17世紀前半～中葉の製品と考えられる初期沖縄産無釉陶器と区別される17世紀後半以降に製作された製品を指す。概ね無釉陶器であるが、自然釉がかかるものもある。

本地区では総計1,400点出土し、そのうち特徴的な28点を図示した。器種としては、壺、甕、鉢、搦鉢、蓋、火炉、袋物がある。以下に各器種の概要を述べる。個々の詳細については、観察表に譲る。

①壺（1～9）

口縁形態を概観すると、玉縁状になるもの（1・2・4・5）と頸部から外側に若干開いた後にすぼまるもの（3）、外側に開くもの（6）がみられる。全体的に粘土積み上げ痕と轆轤使用の調整痕が明瞭に残る。7・8は線刻が施される胴部資料である。7はパショウと考えられる線刻が施されるが、8の意匠は不明である。9は外側に大きく開く壺の底部資料で、内外面に明瞭な調整痕がみられる。

②甕（10～14）

10・11は甕の口縁部にあたる資料で、口縁を肥厚させ、口唇部に段を3つ持つ。10は頸部から口唇部に大きく外へ開く資料であり、11は頸部からやや直線的に立ち上がる資料である。両者ともに、口縁上面はほぼ平坦である。12・13は甕、もしくは壺の底部と考えられる資料である。12は底部に焼成時に生じた歪みが見受けられ、13は内外面に明瞭な轆轤による成形の痕がみられる。14は壺もしくは甕の底部資料である。内底に重ね焼きの痕が明瞭に残る。

③鉢（15～18）

15は口唇部から口縁部にかけて逆「へ」の字状に成形される。16は口縁部を逆「L」字状に成形し、窪みを持つ。17は口縁部を肥厚させ、段をもつ資料である。18は底部資料でベタ底となるものである。底部から胴部まで丸みを帯び、内外面共に丁寧に調整を施す。

④搦鉢（19～23）

19・20は片口の搦鉢の資料である。19は口縁部から口唇部に至る部分が窪み、その下部に明瞭な稜を持たせ、その下にも稜を持つ資料である。概形は逆「ハ」字状の資料と考えられる。他の図化した搦鉢と比べ、摺目を施す間隔が離れる。20は口縁部が逆「L」字状になり、口唇部上面の幅が広い。また、胴部から口縁部まで稜を持たず立ち上がる。21は口縁部が外側に開く資料で、口唇部から胴部にかけてやや「S」字状を呈す。22・23はいずれも外面に明瞭な調整痕がみられるベタ底の底部資料である。

⑤蓋（24～25）

24は平坦な円盤の下面に高台状の滑り止めを有する資料である。内面には轆轤成形時に生じた渦巻状の痕が残る。25は袴が付き、上部に摘みを有すると考えられる資料。

⑥火炉（26～28）

26・27は口縁資料であり、26は外面の口縁を肥厚させ、27は内面の口縁を肥厚させる。28は脚を持つ底部資料で、3脚の火炉と考えられる。胴部下部に2条の沈線を巡らせる。

⑦袋物（29）

29は底部資料で、轆轤切り離し時の糸切り痕、焼成時の痕が底部に残る資料である。底部から胴部へと直線的に立ち上がり、胴部は丸みを帯びる。

第11表 沖縄産無釉陶器観察一覧1

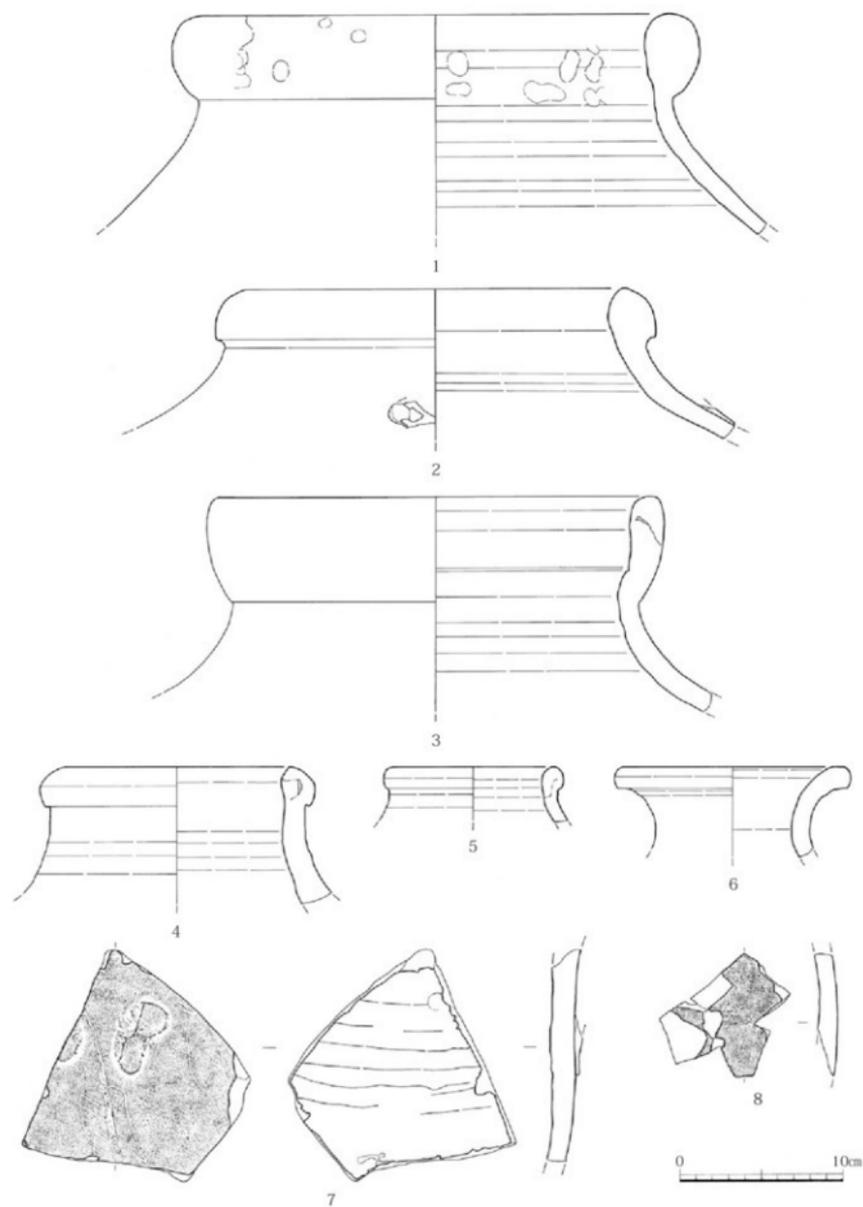
図・図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			器色	素地 (色・質・ 混和料)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第41図 図版42	1	壺	口縁部	32.4	—	—	外面にふい褐色で、内面褐色～明赤褐色。	外面側暗赤褐色～にふい赤褐色で、内面側明赤褐色。石英と石灰岩粒、赤色粒をわずかに含む。	口縁部が玉縁状になる資料で、口縁は外側に1度折り曲げて成形。口唇断面は丸く、内面に削製の破片が付着する。口縁部内外面に指紋が残る。また、直径6mmの円形の鉄製品の破片資料1点が胎土に混入する。	C-8 東アゼ II b層
	2	壺	口縁部	23.0	—	—	内外面灰褐色～暗赤褐色。	にふい赤褐色。赤色粒を含み、石英と黒色粒をわずかに含む。	口縁部が玉縁状になる資料で、口縁は外側に1度折り曲げて成形。口縁玉縁下部は調整し、段を明確にする。肩部に紐状の把手が1個残存する。	D・E ・F-3 覆乱
	3	壺	口縁部	27.0	—	—	外面暗赤褐色で、内面灰色。	にふい赤褐色。赤色粒を含む。	口縁部がやや直線的に立ち上がる資料で、頸部から少し外側に開いた後に内彎する。	覆乱
	4	壺	口縁部	16.8	—	—	口縁部内面から外面暗赤褐色で、内面にふい褐色。	にふい赤褐色。赤色粒を含む。	口縁部が玉縁状になる資料で、口縁は外側に1度折り曲げて成形。口縁玉縁下部を調整し、段を明確にする。口縁内面は指ナデ時の痕が明確に残る。	C-9 覆乱2
	5	壺	口縁部	11.0	—	—	外面暗赤褐色で、内面灰褐色～暗赤褐色。口唇部上部に焼成時の灰が付着。	暗赤褐色。石英と赤色粒を含む。	口縁部が玉縁状になる資料で、口縁は外側に1度折り曲げて成形。口縁玉縁下部は調整し、段はややある。口縁内面は輪軸使用の調整痕が明確に残る。	C-9 II層
	6	壺	口縁部	14.4	—	—	口縁部内面から外面は灰オリーブ色、内面は灰褐色～暗赤褐色。	暗赤褐色。	口縁部が外側に開く資料で、口唇断面はやや方形。頸部～口縁部にかけて指ナデ痕が残る。	C-9 II層 +C-9 覆乱2
	7	壺	胴部	—	—	—	外面褐色～明赤褐色で、内面灰褐色～黒褐色。	赤褐色。	肩部に紐状の把手が残存する資料。外面にバショウと考えられる線刻が施される。	C-9 II層
	8	壺	胴部	—	—	—	外面褐色～明赤褐色で、内面は灰褐色～暗赤褐色。	赤褐色。石英をわずかに含む。	意匠不明のデザインが施される胴部資料。	C-9 II層
第42図 図版43	9	壺	底部	—	—	16.4	外面褐色～明赤褐色で、内面灰褐色～赤褐色。内面底部は黒褐色。	にふい赤褐色。赤色粒を含み、石英と黒色粒をわずかに含む。	底部から外側へ大きく開く資料。外面の調整は底部～胴部途中までケズリを行い、次に胴部上位にナデを行う。外底端部に面取りを行う。内面に焼成時の灰が付着する。	C-9 II層
	10	甕	口縁部	31.4	—	—	外面はにふい赤褐色で、口縁上面から内面は灰褐色～黒褐色。	にふい赤褐色。赤色粒を含む。	口唇部を肥厚させ、外側へ開く資料。口唇上面は平坦。口縁外面には2条の線刻が走り、口縁内面上部では1条の線刻を巡らせ、段をつくる。外面頸部下には6mm程度の突帯を貼り付け巡らせる。	C-9 II層

第11表 沖縄産無釉陶器観察一覧2

図・図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			器色	素地 (色・質・ 混和材)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第42図 図版43	11	甕	口縁部	—	—	—	内外面にふい赤褐色～灰褐色。	にふい赤褐色。肥厚部分の中心は黒色。石英と赤色粒をわずかに含む。	口唇部を肥厚させ、口唇部断面をやや方形にする資料。口唇上面は平坦だが中央がわずかに窪む。口縁外面には、2条の圈線が巡る。	E9 北ア II層
	12	壺か甕	底部	—	—	25.8	内外面灰褐色～黒褐色。	にふい赤褐色～暗赤褐色。赤色粒を多く含む。石英をわずかに含む。	内外面に明瞭な輪轆使用の成形痕を残す資料。外底端部に面取りを行う。外底に焼成時に生じた歪みあり。	D5 掘丸
	13	壺か甕	底部	—	—	12.8	内外面ともに橙色～明赤褐色。	橙色～明赤褐色。石英・赤色粒・黒色粒を含む。	内外面に輪轆痕を残す資料。内面底部には工具によって付けられた多数の窪みか凹線に残る。底部の底には1条の圈線が巡る。また、底に輪轆使用時に敷いていた布目が残る。内底に残る工具による成形痕から輪轆回転は反時計回り。	B9 東披 II a層
図版43	14	壺か甕	底部	—	—	—	内外面ともに無釉で、外面は明赤褐色で、内面は褐灰色。内面には焼成時の灰が付着する。	灰色。石英と赤色粒をわずかに含む。	壺もしくは甕の底部の破片資料。外底は丁寧に調整され平坦。内底の調整は粗い。内底には重ね焼きの為に発生した灰が分からない部分が2カ所みられる。1カ所は直径9cmで、もう1カ所の大きさは破損の為不明。	C-2 掘丸
第42図 図版43	15	鉢	口縁部	—	—	—	内外面ともににふい赤褐色。	にふい赤褐色。石英と赤色粒をわずかに含む。	口唇部がやや肥厚する資料。口唇下部はややとがり気味で、その下位を少し窪ませる。口唇上面は平坦。	掘丸
	16	鉢	口縁部	29.4	—	—	内外面ともに橙色～名赤褐色。	明赤褐色。中心部分の胎土は黒色。石英を含む。	逆し字型の口縁資料で、口唇部を外側に折り曲げ、口縁下部を横ナデでくぼませる。口唇上面は平坦に成形後、端部を窪ませる。焼成はやや甘い。	D9 掘丸
	17	鉢	口縁部	36.0	—	—	内外面ともに橙色～明赤褐色。	明赤褐色。黒色粒を含む。	やや直線的な立ち上がりで、口縁を肥厚させる資料。口唇上面は平坦で、内面に横ナデによる明瞭な窪みをつける。口縁外面には3条の圈線が巡らせる。	D・E ・F2 掘丸
	18	鉢	底部	—	—	13.4	外面は灰褐色～暗赤褐色で、外面底部から内面は橙色～明赤褐色。	明赤褐色～赤褐色。黒色粒を含み、石英をわずかに含む。	全体的に丸みを帯びる底部資料。内外面共に丁寧に調整されるが、外底の調整は粗い。外底端部に面取りを行う。	C9 II層
第43図 図版44	19	搦鉢	口縁部	—	—	—	外面胴部は無釉で赤褐色。口縁部暗赤褐色。内面灰褐色。	暗赤褐色。赤色の土が筋状に混じる。	片口の搦鉢。口縁は外側に折り曲げることで成形し、口唇上面は平坦。口唇断面はやや丸みをもつ。口縁下部～胴部にかけて2度横ナデを行うことで、その間に明瞭な稜をもつ。また、その下位にも横ナデによって生じた稜をもつ。口縁内下部から見込にむかって欄目が施される。同じ高さから施される欄目の間に、1cm下位より施される欄目あり。	掘丸

第11表 沖縄産無釉陶器観察一覧3

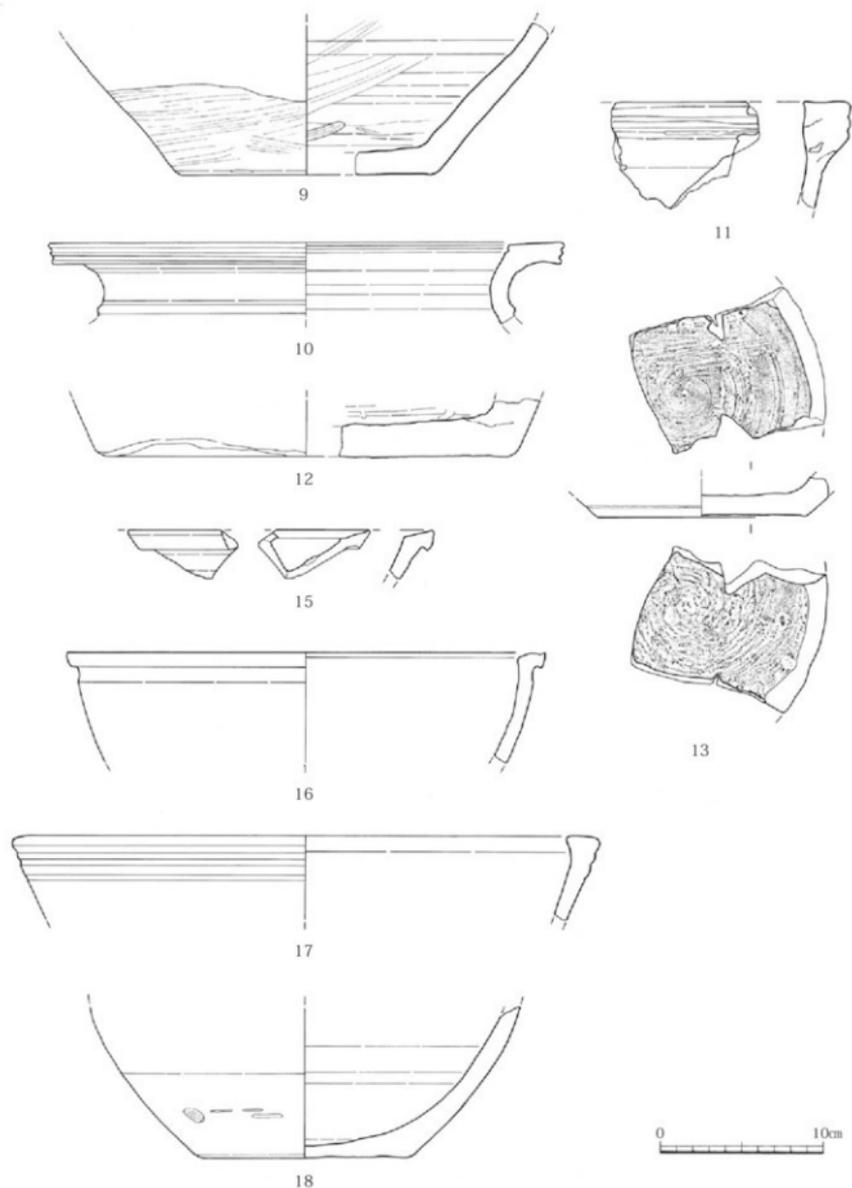
図・図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			器色	素地 (色・質・ 混和材)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
				口径	器高	底径				
第43図 図版44	20	擂鉢	口縁部	—	—	—	内外面に浅黄色～黄色の自然釉がかかる資料。内面には薄くかかる。	にぶい赤褐色。赤色粒をわずかに含む。	逆L字状の口縁を持つ片口の擂鉢。口縁は外側に折り曲げることで成形し、口唇上面は平坦。口唇断面は口唇下部に丸みをもち、片口部はあまり明瞭につくらない。口縁内面下部から見込に向かって柳目を密に施す。	C-9 II層
	21	擂鉢	口縁部	27.2	—	—	外面胴部赤褐色で、口縁部暗赤褐色。内面灰褐色。	暗赤褐色。	口唇部断面が方形になる資料で、口縁部は外に折り曲げることで成形。口縁内面下部から見込みに向かって柳目を密に施す。口の開く資料を重ねて焼成か。	C-9 II層
	22	擂鉢	底部	—	—	12.4	内外面ともに無釉で、明赤褐色。	明赤褐色。黒色粒を含む。	底部から外側へ大きく開く資料。胴部全体をナデた後に、底部を裏返してケズリにて調整か。柳目は密に施される。	南瓶乱
	23	擂鉢	底部	—	—	9.0	外面にぶい赤褐色で、内面灰褐色。	にぶい赤褐色。	底部から外側へ大きく開く資料。底部～胴部途中までケズリを行い、それより上はナデを施す。柳目は従位横位に密に施される。内面に窯クソ付着。	D・E・ F-2 瓶乱
	24	蓋	底ノ袴	14.2	—	—	内面橙色～明赤褐色で、外面明赤褐色～赤褐色。	橙色～明赤褐色。	内面に轆轤による調整痕が明瞭に残る。内面の調整と比べ、外面の調整は非常に粗い。	瓶乱
	25	蓋	底部	9.0	—	—	内外面ともににぶい橙色～にぶい赤褐色。	明赤褐色。	轆轤使用のナデ調整を行う。袴部は破損。	C-2 瓶乱
	26	火鉢	口縁部	—	—	—	内外面ともに明赤褐色。	明赤褐色。	口縁が内側にすぼまる資料。口唇断面は内面にやや丸みをもつ方形。口縁下部に浅い窪みをもつ。	C-5 瓶乱
	27	火鉢	口縁部	12.0	—	—	外面橙色～明赤褐色で、内面橙色。	橙色。	口縁内部をやや肥厚させ、玉縁状にする資料。口唇上面は平坦で、全体的に丁寧なナデ調整を施す。	瓶乱
	28	火鉢	底部	—	—	14.4	内外面ともに赤褐色。	赤褐色。	3脚の火鉢と考えられる資料で、脚の残存は1個。全面ナデ調整は施されるが、底部内面中央は施されない。底部の脇に2条の轆轤が施される。脚は底部成形後、最後に接着する。	C-9 瓶乱2
	29	袋物	底部	—	—	5.0	外面にぶい赤褐色～暗赤褐色で、内面灰褐色。	暗赤褐色。	底部から胴部に丸みをもつ資料。内面に粘土積み上げ痕と轆轤使用痕が明瞭に残る。底部は糸切り痕あり。轆轤回転方向は反時計回り。	C-9 II層



第41図 沖縄産無釉陶器1



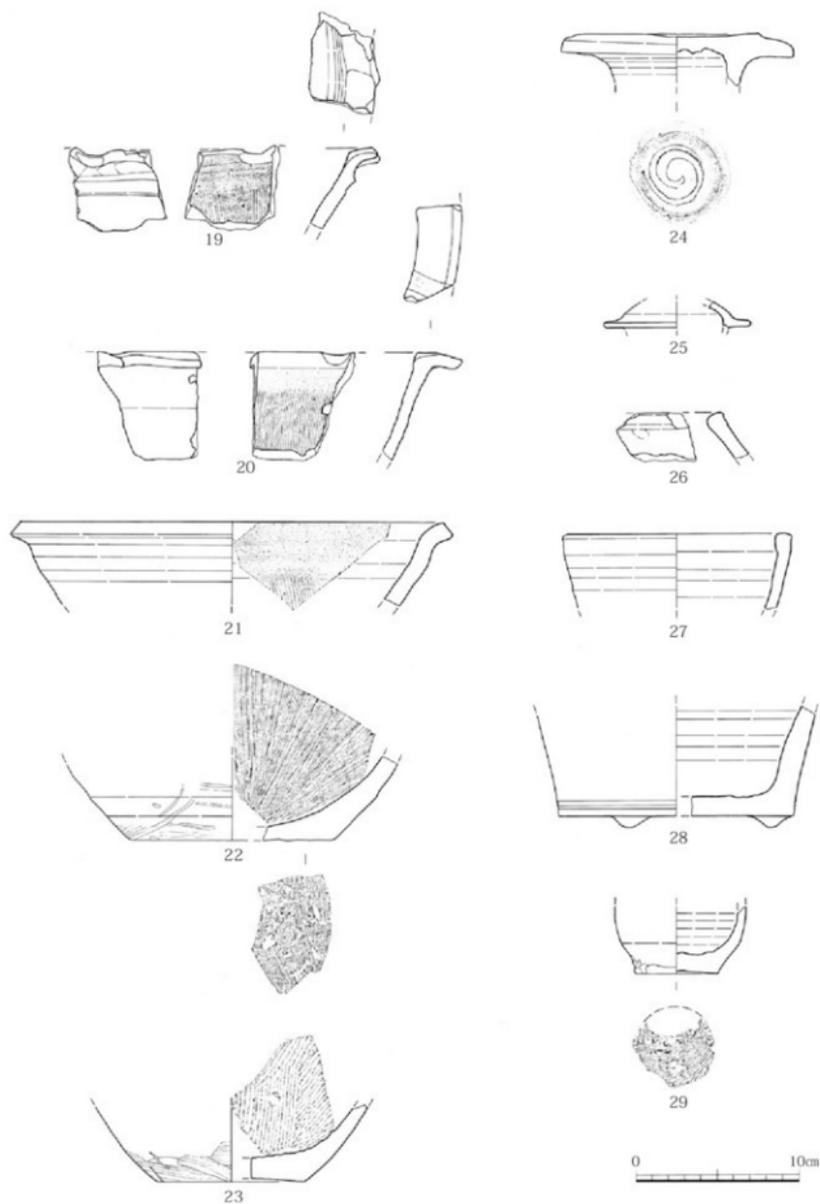
図版 42 沖縄産無釉陶器 1



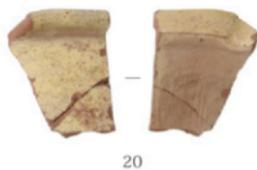
第42図 沖縄産無釉陶器2



図版 43 沖縄産無釉陶器 2



第43図 沖縄産無釉陶器3



図版 44 沖縄産無釉陶器 3

11 陶質土器（第12表、第44図、図版45）

陶質土器とは、壺屋で「アカモノ」と称される一群である。轆轤成形により仕上げられ、素地は橙色～鈍黄色で細かく、混入物に白色粒や赤色粒、ガラス質粒を含む。焼成は弱く、軟質のものもあるが、まれに陶器のような焼成が良いものもある。本地区では538点が出土している。器種は鉢・鍋・急須・火炉・火取・蓋（鍋・急須・壺）がある。以下、器種毎に概観し、詳細は観察表に記載する。

①鍋・壺（1～4）

1～3は鍋の蓋である。高台状の撮みで、1は小形となる。4は鍋の口縁部片で、「く」字状口縁となる。

②急須・蓋（5・6）

5・6は急須の蓋で、5は蓋の撮み部分で丸く成形されている。6は庇～袴部である。

③壺・蓋（7～11）

7～11は壺の蓋と考えられる。撮みは無く底上面は平たく成形される。8は底上面に糸切り痕がみられる。沖縄産無釉陶器製であるが、類似するものが首里城御内原北地区（沖縄県立埋蔵文化財センター2010）や壺屋古窯群（那覇市教育委員会1992）にて出土している。

④火炉（12～17）

12～14は火炉の口縁部片で、12は内湾する器形で口縁内に突起がみられる。13は直口口縁で、外面に線刻で鋸歯状文様を描き白土で装飾している。14は外反口縁で口縁断面は丸く、口縁内に断面「L」字状の突起を貼付する。

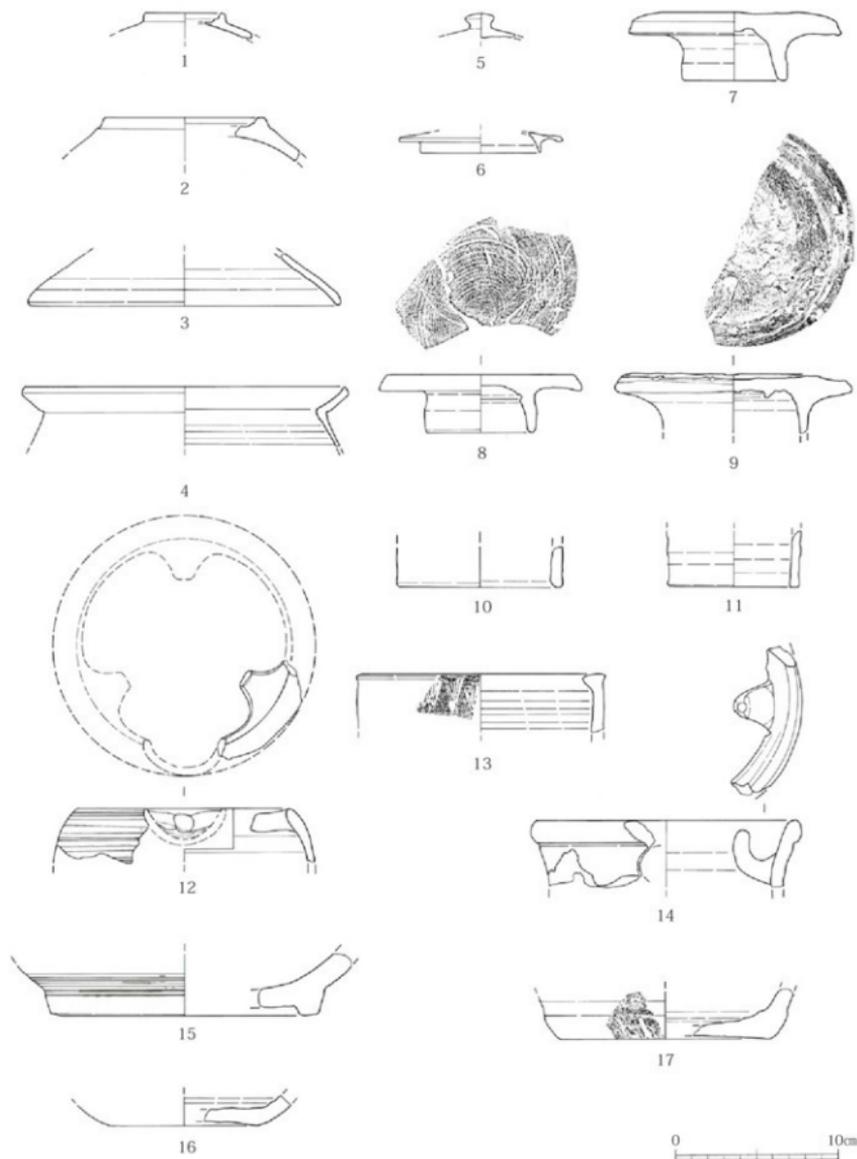
15～17は底部片で、15は高台を持ち外面に白土の圏線がみられる。16・17はベタ底となる。

第12表 陶質土器観察一覧1

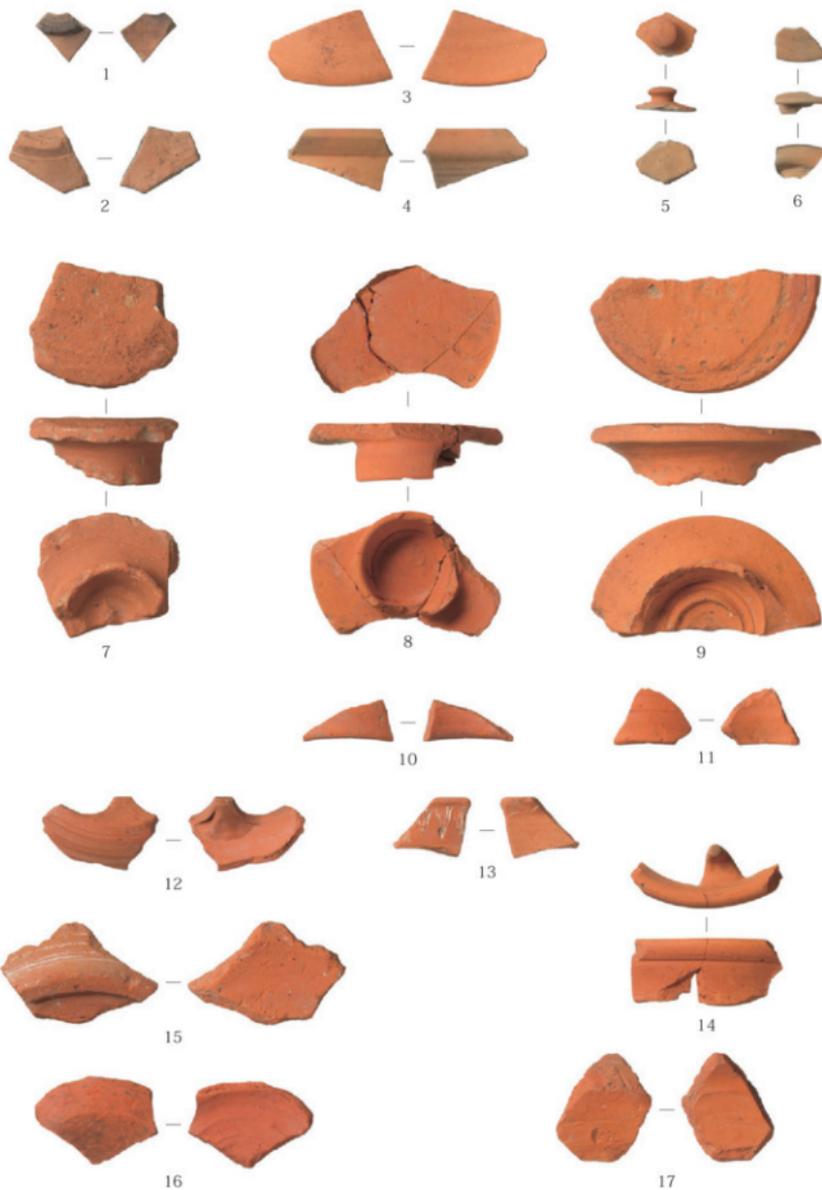
図・図版番号	番号	器種	用途	部位	法量 (cm)			器色	素地 (色・質・混和材)	成形・調整・文様等	グリッド・層
					口径	器高	底径				
第44図 図版45	1	蓋	鍋	撮	5.0	—	—	外面：鈍黄橙色 内面：鈍橙色	灰黄色で軟質。白色粒、赤色粒、黒色粒、ガラス質粒（多量）含む。	鍋の蓋か。轆轤成形。高台状撮み。	D-5 攪乱
	2	蓋	鍋	撮	9.8	—	—	鈍橙色	灰色で軟質。白色粒、赤色粒、黒色粒、ガラス質粒（多量）含む。	鍋の蓋か。轆轤成形。高台状撮み。	C-9 II層
	3	蓋	鍋	底	19.0	—	—	橙色	橙色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	鍋の蓋か。轆轤成形。断面は舌状。	攪乱
	4	鍋		口縁部	10.0	—	—	橙色	灰色でやや軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	轆轤成形。「く」の字状口縁の蓋受けとする。	C-9 II層
	5	蓋	急須	撮	—	—	—	外面：橙色 内面：鈍黄色	鈍黄色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	急須の蓋か。轆轤成形。撮み丸く成形。	攪乱

第12表 陶質土器観察一覧2

図・図版 番号	番号	器種	用途	部位	法量 (cm)			器色	素地 (色・質・混和材)	成形・調整・文様等	グリッド ・層
					口径	器高	底径				
第44図 図版45	6	蓋	急須	底 袴	—	—	7.4	外面：浅黄色 内面：鈍黄色	灰黄色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	急須の蓋か。轆轤成形。底・袴断面丸い。	攪乱
	7	蓋	壺	底 袴	底 130	425	袴 6.4	橙色	橙色でやや軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	壺の蓋か。轆轤成形。掘みは無く底上面は平たい。	D・E ・F3 攪乱
	8	蓋	壺	底 袴	底 12.4	3.6	袴 6.8	橙色	橙色でやや軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	壺の蓋か。轆轤成形。掘みは無く底上面は平たく糸切り痕あり。底部断面方形。袴内面に沈線。内底に「J」字線刻か。	C8 東比 II層
	9	蓋	壺	底 袴	14.6	—	—	明褐色	明褐色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒含む。	壺の蓋か。轆轤成形。掘みは無く底上面は平たい。	B9 東比 II層
	10	蓋	壺	袴	—	—	100	明赤褐色	明赤褐色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒含む。	壺の蓋か。轆轤成形。袴断面は丸い。	C8 東比 II層
	11	蓋	壺	袴	—	—	100	明赤褐色	灰色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	壺の蓋か。轆轤成形。袴端部は平坦。	攪乱
	12	火 が	—	口 縁 部	13.2	—	—	橙色	橙色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	轆轤成形。内湾口縁で口縁断面丸く、口縁内突起三か所か。外面に白土の圏線。	F5 ピット内
	13	火 が	—	口 縁 部	15.2	—	—	橙色	橙色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	轆轤成形。直口口縁で口縁断面三角形状。外面に線刻で鋸歯状文様を描き白土で装飾。	C9 攪乱2
	14	火 が	—	口 縁 部	16.0	—	—	橙色	橙色でやや軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	轆轤成形。外反口縁で口縁断面は丸く、口縁内に断面「L」字状突起。外面に圏線。	南攪乱
	15	火 が	—	底 部	—	—	16.4	橙色	橙色で軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒（多量）含む。	轆轤成形。外面に白土の圏線。	E8・9 攪乱
	16	火 が	—	底 部	—	—	90	明赤褐色	明赤褐色でやや軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒含む。	火がの底部か。轆轤成形。外面に白土の圏線。	C2 攪乱
	17	火 が	—	底 部	—	—	130	橙色	橙色でやや軟質。白色粒、赤色粒、ガラス質粒含む。	火がの底部か。轆轤成形。外面にへら状調整痕。	D9 攪乱



第44図 陶質土器



圖版 45 陶質土器

12 瓦質土器・土器・カムイヤキ・土製品（第13表、第45・46図、図版46・47）

ここでは種別毎に概観し、詳細は観察表に記載する。

①瓦質土器（1～3）

総数21点が出土しており、器種は植木鉢・火炉・焜炉がある。1の焜炉は口縁部が逆「L」字状に折縁となる。陶質土器であるが、器形が類似する資料が喜友名グスク（沖縄県教育委員会1999）や渡地村跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2007）で出土している。3も焜炉と考えられる資料で内面に器物支えがある。

②土器・カムイヤキ（4～8）

土器は総数110点が出土しており、その内訳はグスク土器95点、バナリ焼1点、硬質土器（焙烙）3点、不明土器11点である。出土資料の殆どが小破片であり、ここでは、グスク土器壺口縁部片（4）、不明土器（5・6）を報告する。

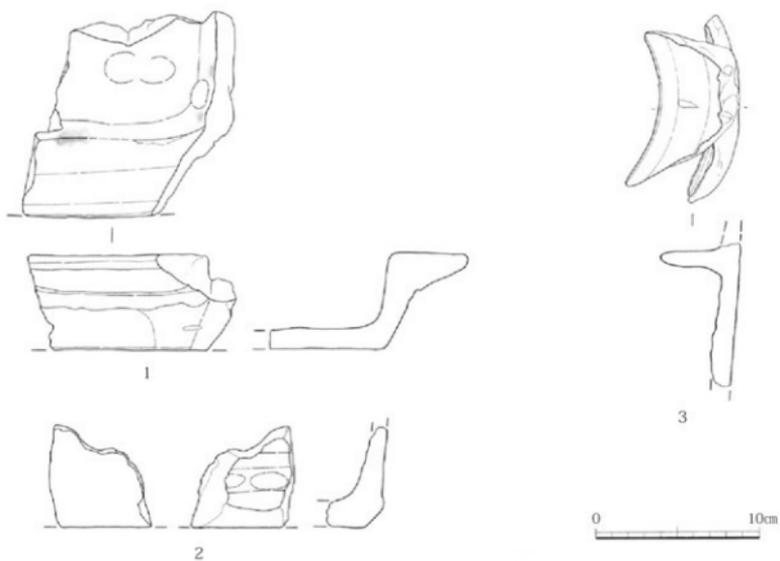
カムイヤキは3点出土している。7・8は壺の胴部片で器面調整の叩き目と当て具痕がみられる。

③土製品（9・10）

土製品は4点出土しており、今回は報告する資料はいずれも器種・用途等は不明である。9は棒状で断面長方形状に面取りされた資料で、10は表裏面に線刻による装飾がみられる。

第13表 瓦質土器・土器・カムイヤキ・土製品観察一覧

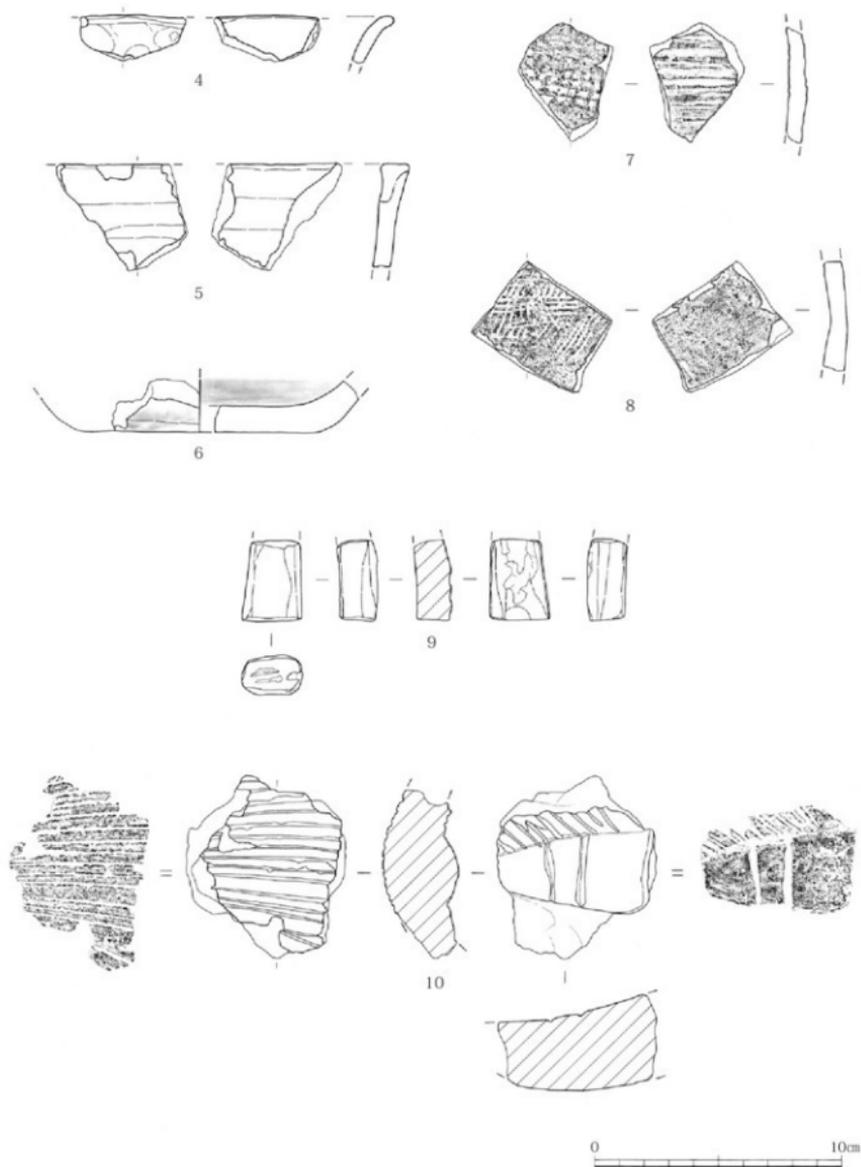
図・図版番号	番号	種別(分類)	器種	部位	法量 (cm・g)				観察事項				グリッド・層
					口径	器高	底径	重量	器色	胎土	素地(色・混和材) / 混入物	器面調整・所見	
第45図 図版46	1	瓦質土器	焜炉	口 底	—	59	—	—	褐色	—	灰黄色で赤色粒、白砂細粒。ガラス質粒を含む。	ナデ調整。口縁部は逆「L」字状。口縁上部部は平坦。	B9 掘丸
	2	瓦質土器	焜炉	底部	—	—	—	—	褐色	—	灰黄色で赤色粒、白砂細粒。ガラス質粒を含む。	同様に、ナデ調整	C9 掘丸2
	3	瓦質土器	焜炉か	胴部	—	—	—	—	褐色	—	鈍褐色で赤色粒、白砂細粒。ガラス質粒を含む。	同様に、ナデ調整。内面に器物支えの段々。	南掘丸
第46図 図版47	4	土器 (グスク土器)	壺	口 縁部	9.0	—	—	—	外面：鈍黄色 内面：暗灰黄色	混 質	黒色鉱物、雲母、赤色土粒、白色細粒	エビナデ、外面に指痕。	C5 掘丸
	5	土器 (不明土器)	器種 不明	口 縁部	—	—	—	—	外面：鈍褐色 内面：褐色	混 質	白色砂粒を多量。	同様にナデ。口縁部平坦。	掘丸
	6	土器 (不明土器)	器種 不明	底部	—	—	10.0	—	外面：褐色 内面：黒色(煤か)	混 質	黒色鉱物、雲母、赤色土粒、白色細粒	内底煤により黒色。外底部にも煤付着	C9 東比 皿層
	7	カムイヤキ	壺	胴部	—	—	—	—	内外面：灰色 断面：鈍赤褐色	須 虫質	白色砂粒。	外面に叩き目、内面当て具痕。	掘丸
	8	カムイヤキ	壺	胴部	—	—	—	—	内外面：灰色 断面：灰色	須 虫質	白色砂粒。	外面に叩き目、内面へら削り痕。	C3 掘丸
	9	土製品 (不明)	器種 不明	—	—	—	—	—	明赤褐色	混 質	赤色土粒	断面長方形状に面取り	C9 皿層 瓦面
	10	土製品 (不明)	器種 不明	—	—	—	—	—	明赤褐色	混 質	白色砂粒を多量。	表裏面線刻による装飾	D9 掘丸



第45図 瓦質土器



図版46 瓦質土器



第46図 土器・カムイヤキ・土製品



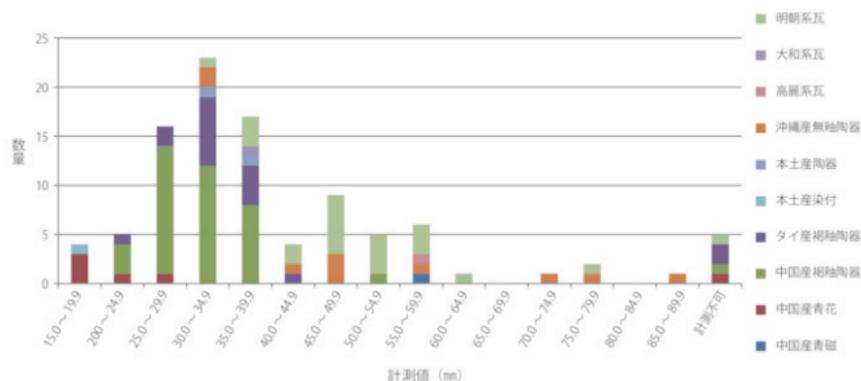
図版 47 土器・カムイヤキ・土製品

13 円盤状製品（第14表、第47・48図、図版48）

円盤状製品は陶磁器や瓦等を円盤状に再加工した二次製品で、おはじき等の遊具としての機能が想定されている。本調査では総数99点が出土した。種類別の内訳は中国産青磁1点、中国産青花6点、中国産褐釉陶器38点、タイ産褐釉陶器17点、本土産陶磁器3点、沖縄産無釉陶器10点、瓦24点と、中国産陶器（褐釉）製が多い。この中で特徴的な資料12点を報告する。

第47図は円盤状製品の最大径を計測し、大きさと数量をグラフ化したものである。中国産・本土産染付製は2～3cm前後、中国産・タイ産褐釉陶器製は3～4cm前後、瓦や沖縄産陶器など5cm以上と、素材により大きさが異なる傾向が認められる。殆どが陶磁器の胴部片や瓦の筒部を素材として利用しているが、1は中国産青磁の底部を利用している。

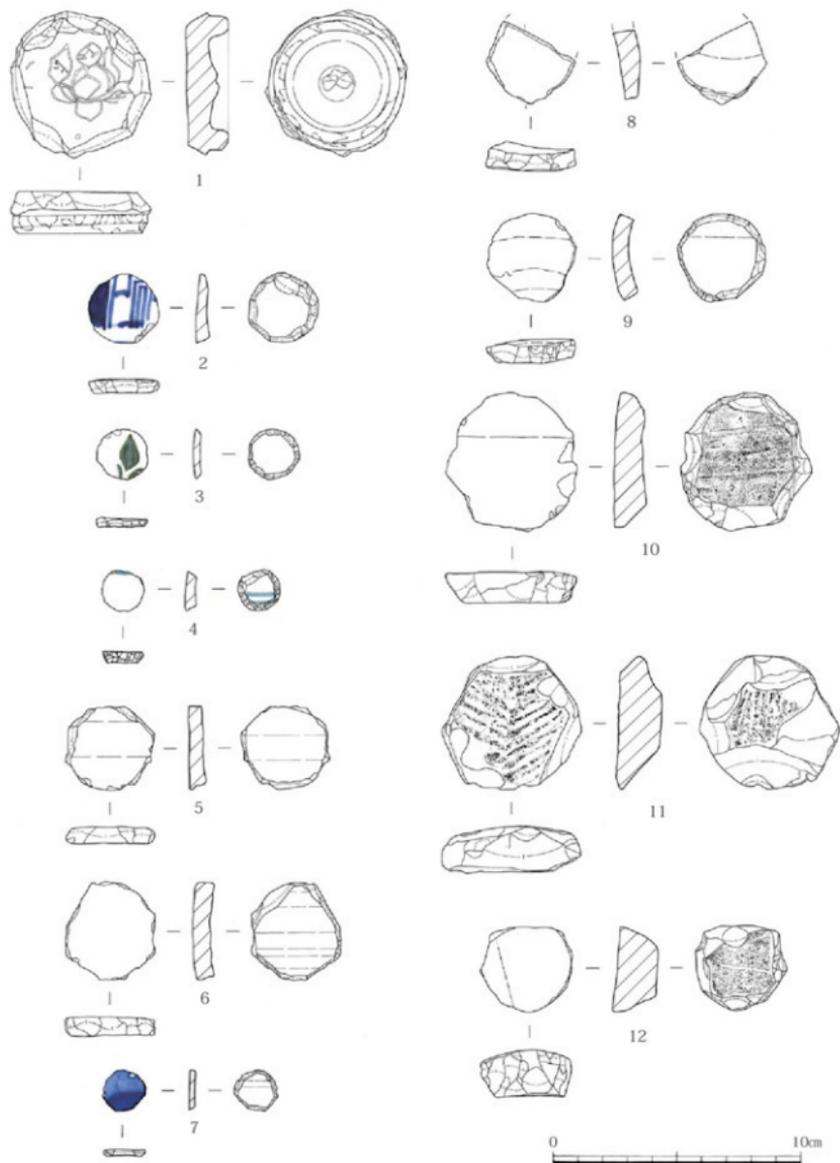
加工方法としては片面(外面・内面)または内外両面から調整するものがある。磁器など薄手のものは片面(外面)から調整し、瓦など厚手のものは両面から調整している。平面形は円形・楕円形が認められ、円形のもの丁寧なつくりである。



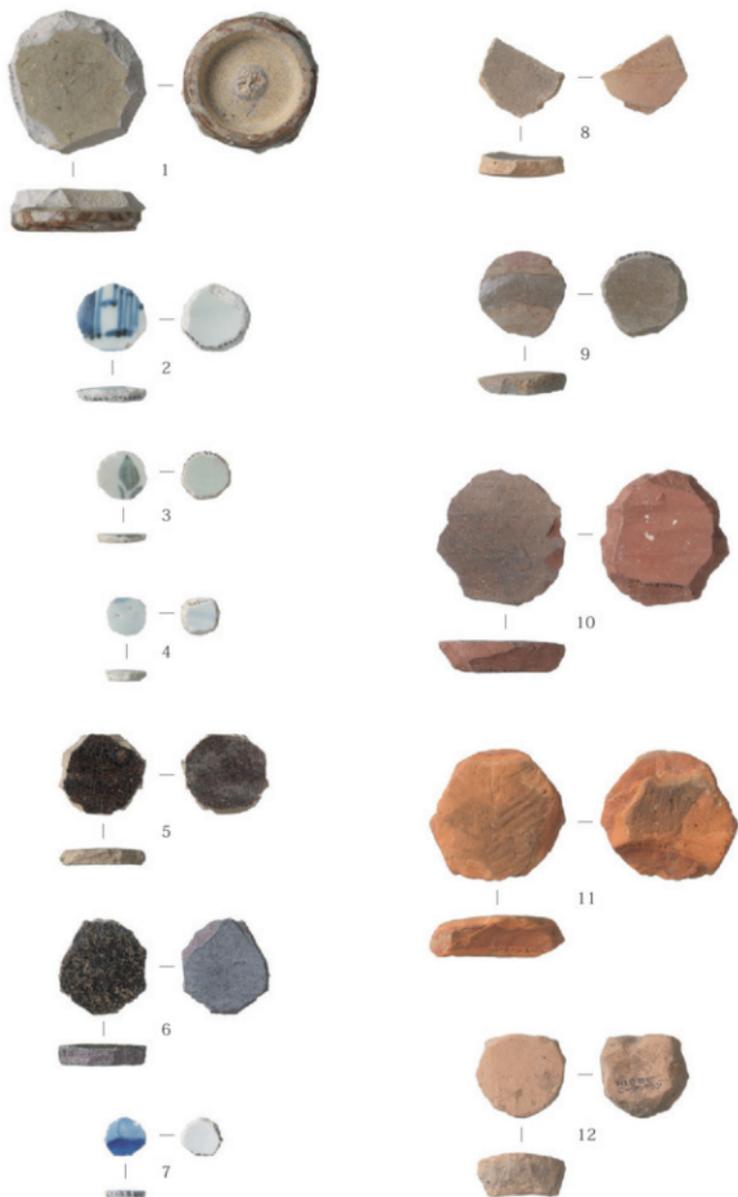
第47図 円盤状製品の最大径と数量の相関

第14表 円盤状製品観察一覧

図・図版 番号	番号	素材 (産地・年代)	器種	法量 (cm・g)				観察事項			グリッド ・層
				縦	横	厚	重量	加工面	平面形	その他特徴	
第48図 図版48	1	中国産青磁 (龍泉・15c)	碗	5.8	5.7	1.75	63.4	内外面	円形	印花文(見込) 草花文	C-9 Ⅲ層
	2	中国産青花 (福建・18c)	碗	2.8	2.9	0.55	5.8	外面	円形	—	C-8 攪乱2
	3	中国産青花 (福建・18c)	碗	2.05	2.05	0.3	1.9	外面	円形	草花文	攪乱
	4	中国産青花 (福建・18c)	碗	1.6	1.7	0.5	1.6	内外面	円形	—	攪乱
	5	中国産褐釉陶器 (明代)	壺	3.4	3.6	0.7	12.0	内外面	楕円形	—	C-2 攪乱
	6	タイ産褐釉陶器 (15～16c)	壺	4.0	3.6	0.8	16.6	内外面	楕円形	—	D-6 方形石組 束刺3層
	7	本土産染付 (備前系・19c 後)	袋物	1.7	1.75	0.25	1.2	外面	楕円形	—	D-9 攪乱
	8	本土産 (備前系唐津・ 1590～1630)	皿	—	3.6	0.9	(10.4)	内外面	楕円形	—	C-7 Ⅲ層
	9	本土産 (南九州・ 18～19c)	袋物 (土服か)	3.6	3.6	0.7	12.6	内外面	楕円形	—	C-9 Ⅱ層
	10	沖縄産 無釉陶器 (17c 後～18c 前)	壺か甕	5.5	5.3	1.3	52.7	外面	楕円形	—	南攪乱
	11	高麗系瓦	—	5.45	5.6	1.8	48.3	内外面	楕円形	—	C-2 攪乱
	12	大和系瓦	—	3.5	3.7	1.8	25.1	内外面	楕円形	摩耗している。	C-9 攪乱



第48図 円盤状製品



図版 48 円盤状製品

14 煙管 (第15表、第49・50図、図版49)

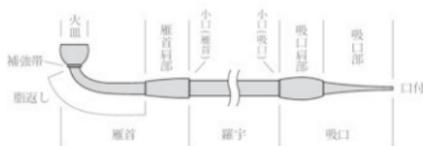
煙管は総数11点出土している。素材ごとの内訳は沖縄産施釉陶器製1点、沖縄産無釉陶器製7点、瓦質製品製1点、金属製2点となる。形態的にみると、石井分類(石井2011)の柱状形とパイプ形に大別できる。ここでは特徴的な資料4点を形態ごとに分けて報告する。

①柱状形煙管(1)

柱状形は瓦質製の資料が出土している(1)。

②パイプ形煙管(2~4)

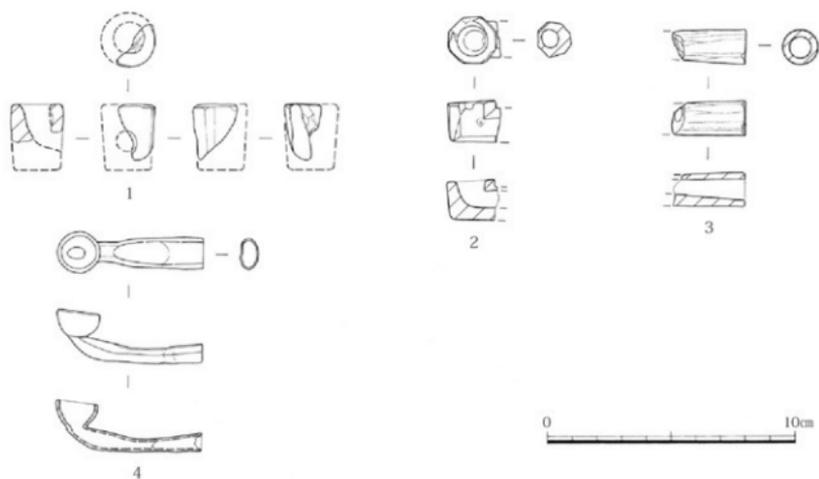
パイプ形は火皿と肩部が作り出されたもので、沖縄産陶器製、金属製の資料が出土している。沖縄産陶器製は無軸の雁首と吸口が得られており、2の雁首は泥軸が掛かる。金属製の雁首(4)は、肩部に羅字らしきものが残る。



第49図 煙管の部位名称(石井2011)

第15表 煙管観察一覧

図・図版番号	番号	部位	形態/材質	素地/軸	法量 (cm・g)				観察事項		グリッド・層
					火皿 外径 内径	小口 外径 内径	長さ 高さ	重量	断面 形状	その他特徴	
第50図 図版49	1	雁首	柱状形/ 瓦質	鈍黄色	2.2 1.2	0.8 —	—	残存 (3.4g)	[横] 円形	下部欠損。	C-8 III層
	2	雁首	パイプ形/ 初期沖無	鈍赤褐色/ 無軸	1.9 1.2	(1.5) (0.7)	— 1.7	残存 (7.3g)	[縦] 八角形	幅広面取り。	C-8 II層
	3	雁首	パイプ形/ 初期沖無	鈍赤褐色/ 無軸	—	1.4 0.9	—	残存 (6.3g)	[縦] 円形	線状面取り。	C-9 II層
	4	雁首	パイプ形/ 青銅	—	1.7 1.3	—	5.9 2.2	13.5g	[縦] 円形	鍛造で側面に接合部。 羅字残存か。	表採



第50圖 煙管



圖版49 煙管

15 金属製品 (第16表、第51～56図、図版50～53)

金属製品は1,267点出土している。材質は鉄製と青銅製、銀製と思われる資料が得られており、鉄製が1,204点で大半を占めている。この中で特に多く出土したのが釘で、1,072点が得られている。ここでは、用途別に解説を行い、個別の説明は観察表で行う。

① 建具類

・釘 (1～9)

平成25年度報告の御原原北地区による分類を参考に、完形で得られた資料を対象に釘をサイズ別に分類した(沖縄県立埋蔵文化財センター2013)。まず、Ⅰ：4cm以下、Ⅱ：4～7cm、Ⅲ：7～10cm、Ⅳ：10～15cm、Ⅴ：20cm以上の6種類に分けた。中でも多く出土しているのはⅠの4cm以下、次に多いのはⅡの7cm以下であり、小型の釘が多いことが確認できた。

今回図示した釘の多くは角釘である。1は軸部のみを残す資料で大型の鉄釘であったことが窺える。5もまた軸部のみを残す資料であるが、1と異なり小型である。6は頂部～軸部の資料で、断面方形、薄いつくりの皆折れ釘である。8は頂部を丸く成形する笠釘である。



第51図 釘の部位名称

・鏡・鉾・蝶番 (10～18)

鏡は両端を「L」字に湾曲させた資料(10・11)と一端のみを「L」字状に湾曲させた資料(12)がある。12は頂部が三角形、軸部断面は方形を呈し、端部は欠損している。この資料を鏡に分類したのは、類似資料として「目鏡」や「目違い鏡」と呼ばれる金具があるためである。目鏡は寺院などの木造建築の床材を留める際に使用される。目鏡は全体が扁平な板状で一端は直角に折れて先端が尖り、もう一端は小孔が二つあいたものである。12はD-18Ⅱ層から出土しており、本層はその他釘なども出土している。鉾は頭部の形がさまざまで、円形・葵形・方形・三角形などが得られた。いずれの資料も金鍍金が施された痕が残り、軸部は割ピン状を呈する。

18は蝶番と考えられる資料で、心棒や鉾を通す孔が設けられる。

② 道具・工具 (19～21)

道具・工具類では、蝶番や刀子、釣針などが得られた。19は刀子と考えられるが錆に覆われ外から刃部を確認することができない。20は工具の柄と考えられるが頭部は欠損しており用途は不明である。端部にかけて徐々に薄くなる様に加工され、中央部には二本の溝をもつ。21は頭部が欠損し端部に返しがつく釣り針である。

③ 飾り金具 (22～28)

22～24は鐙状に成形した飾り金具と考えられる。25は薄く伸ばした後両面に金鍍金を施す。文様などは確認できない。26は一見、丁寧な文様を施している様に窺えるが、魚々子が重なっている箇所や鑿の入れ方が雑な箇所が見える。そのため、琉球で製作されたものではないかと考えられる。27は表に「吉」と描き周囲に魚々子を施す。また、裏面中央部に鯛付けの痕跡が確認できる。28は覆輪と考えられる資料である。表面に金鍍金を施し、「コ」の字状に湾曲させていることから、器物等の縁に付けて使用していたと思われる。

④ 武器・武具類

・甲冑関係 (29～37)

29は鐙形台の一部で湾曲しながら立ち上がり、端部は欠損している。両端を裏に折り曲げて成形している。また、表に花文が彫られ周囲に魚々子、猪目透かしを施す。表面に金鍍金が施されたことが窺える。30は茱萸金具で、一枚の板を筒状に繋ぎ合わせ成形している。全体に金鍍金が施される。31の笠鞆はやや弓なりに湾曲し二つの孔を持ち、金鍍金が施される。32の責鞆は一枚の板を「八」の字に繋ぎ成形し、表面に金鍍金を施す。30～32の茱萸金具や鞆などは鐙の肩の部分で使用される金具である。33は八双金具と考えられ、表面に花文が施される。また、周りに魚々子を打つ。34～35は小札で34は完形である。札頭を斜めに打つ。二行11孔確認できる。35は二つの小札が重なっていることがわかる資料である。

・銃火器類（38～47）

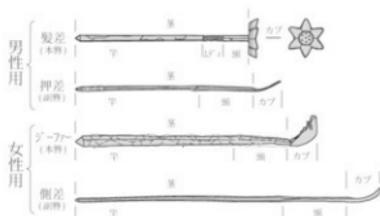
銃火器類では、弾丸（38）や薬莢（39～41）、摩擦管（42）、雷管（43～46）などの資料が出土している。38は直径1.5cmの弾丸で、首里城跡他地区においても報告例がある（沖縄県立埋蔵文化財センター2010ほか）。薬莢類はいずれも底部資料である。40は薬莢の残存状態からリムの部分が二層になっていることが窺える資料である。42は砲弾を撃つ際の着火時に使用される摩擦管と考えられる資料である。43～46は雷管と呼ばれる薬莢などの起爆装置である。43～44は、断面「コ」の字状に閉じていたものが使用後に変形し開いたものではないかと考えられる。また、45～46は前記した39～41と同じ薬莢の雷管の可能性もある。これらの遺物はその形状から、西南戦争遺跡出土の遺物と類似しており、（熊本市教育委員会2011・2012、玉東町教育委員会2012）、首里城内からも出土例がある（沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。図版52-47は、砲弾の信管に使用される部品と考えられる製品である。円盤状で外面にネジ山を有し、内部に2か所孔をあける。

これら銃火器類の出土地は、攪乱層以外で近代の層としている第Ⅱ層を中心に出土していることから、熊本鎮台沖縄分遣隊の装備品の可能性がある。

⑤装身具・銅鏡

・装身具（48～51）

装身具では男性用の簪4点を図示している。48は完形の男性用の押差（副差）である。一部に銀色が窺える為、材質は銀製の可能性がある。49～51は破損した男性の髪差（本差）である。49・50はカブと呼ばれる箇所が欠損している。両資料を比較すると49はムデイの残りが良好である。51はカブのみを残す資料である。男性用の意匠とされる花形を呈する。前記した49・50の上部に付くことが考えられる。



第52図 簪の部位名称

・銅鏡（52）

銅鏡は周縁をやや丸く肥厚させ成形する。一部バリを取った痕跡が残る。文様は認められない。

⑥その他（53～57）

その他では、鉄板や管状製品などが出土している。55は青銅製品と考えられ、頭部が欠損している。また、部位により断面の形状が異なり、端部に抉りが入る。56は何らかの未成品か他の製品を製作する際に排出されたものと考えられるが、用途は不明である。57は断面菱形を呈し、両端部が欠損し用途不明である。

第16表 金属製品観察一覧1

図・図版番号	番号	種類	材質	器種	完成部位	法量 (cm・g)					加工法	所見	グリッド・層	
						頭部		縦	横	厚				重量
						径	厚							
第53図 図版50	1	建具	鉄	釘	軸部	—	—	15.7	0.75	0.7	638	鍛造	大型の角釘。頭部及び端部欠損。軸部断面方形。	複見
	2	建具	鉄	釘	頭部	—	—	9.75	0.4	0.4	21	鍛造	頭部、軸部の錆跡れが著しい。軸部断面方形。	C8 II層
	3	建具	鉄	釘	完形	1	0.95	7.3	0.6	0.6	16.7	鍛造	頭部を一方へ折る角釘。断面方形。全体的に錆化が著しい。	C7 III層
	4	建具	鉄	釘	頭部	0.8	1.35	5.3	推0.4	推0.3	28.8	鍛造	全体的に錆跡れが著しい。角釘。断面方形。	C3 新造成
	5	建具	鉄	釘	軸部	—	—	2.5	0.35 0.65	0.3 0.35	1.1	鍛造	頭部が一方へ折れる釘と考えられるが、欠損している。断面方形。頭部はやや扁平になる。	C4 新造成
	6	建具	鉄	釘	頭部	2	1.25	7.1	1.55 1.0	0.4 0.2	23.3	鍛造	頭部を一方へ折る。扁平に成形されており、断面長方形。	南複見
	7	建具	鉄	釘	軸部	—	0.6	3.65	1.3 1.0	0.4 0.25	8.1	鍛造	扁平に成形されており、断面長方形。	C4 新造成
	8	建具	青銅	笠釘	完形	1.7	0.2	4.1	0.7	0.75	12.1	鍛造	扁平な頭部を持つ。断面はやや歪な円形。	C2 複見
図版50	9	建具	青銅	釘はか	—	—	—	—	—	441.2	—	釘の軸部が多く、釘の頭部や扁平な頭部を持つ釘が僅かに見られる。建具とともに石灰が付着する。	表採	
第53図 図版50	10	建具	鉄	鋸	完形	—	—	12.4	0.1 1.5	0.7	108.3	鍛造	大型の鋸。断面長方形。	D6 方形石皿 東側3層
	11	建具	鉄	鋸	完形	—	—	1.75	1	0.2	3.2	鍛造	小型の鋸。扁平に形成されており、断面長方形。	B9 V層
	12	建具	鉄	目鋸	破片	—	—	4.3	5.1	下部径 0.7	16.7	鍛造	「く」の字状に湾曲する製品。上部は三角状で端部が窄まる。下部は断面円形。	D8 II層
第54図 図版51	13	建具	青銅	鋸	完形	0.9	0.5	2.1	0.25	0.18	1.1	鍛造	円柱状の頭部を持ち、表面に鍍金が施される。割りピン状。	E6 複見
	14	建具	青銅	鋸	完形	0.8	0.8	1.95	0.2	0.25 0.10	0.9	鍛造	笠状の頭部を持ち、表面に鍍金が施される。割りピン状。	C9 III層
	15	建具	青銅	鋸	完形	—	—	1.2	1.3	0.35	1.5	鍛造	菱形の頭部を持ち、表面に鍍金が施される。文様は葉脈を形り込んでいる。割りピン状。鋸のため頭部の一部を欠く。	C3 造成

第16表 金属製品観察一覧2

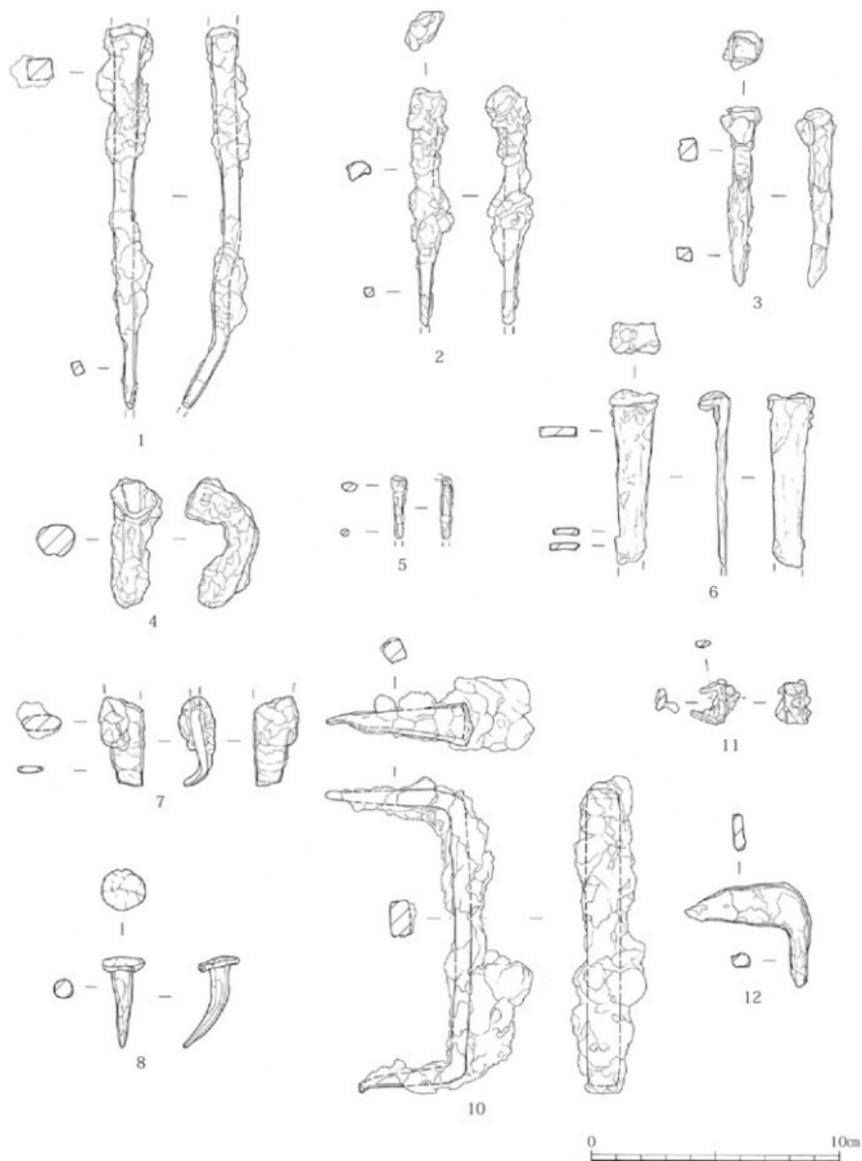
図・図版番号	番号	種類	材質	器種	完成部位	法量 (cm・g)					加工法	所見	グリッド・層	
						頭部		縦	横	厚				重量
						径	厚							
第54図 図版51	16	建具	青銅	鉤	頭部	—	—	1.1	1.1	0.2	1.1	鍛造	平面部分が方形の頭部を持ち、表面に鍍金が施される。割りピン状。	D-8 II層
	17	建具	青銅	鉤	頭部	—	—	1.05	1	0.4	0.7	鍛造	三角の頭部を持ち、表面に鍍金が施される。文様は判然としない。中央に孔をあけ鉤を付ける。割りピン状。	D-9 根丸
	18	建具	鉄	蝶番	完形	—	—	1.3 2.65	7.6	0.7 1.2	92.4	鑄造	心棒径1.1cm。鉤孔径0.19cm。	D-3 根丸
	19	工具	鉄	刀子か	完形	—	—	8.1	2.1	0.4 1.0	65.3	鍛造	頭部がやや丸くなる。端部にかけて薄くなる。	C-8 III層
	20	工具	青銅	柄	破片	—	—	10.15	1.1	0.10～ 0.40	18.4	鑄造	工具の柄だと考えられる資料。端部は丸く、薄く形成。中央に2列の溝をつくる。	根丸
	21	道具	鉄	釣り針	破片	—	—	4.4	2.6	0.30～ 0.35	3.3	鍛造	取り付け部分をやや扁平に形成。断面は方形。	根丸
	22	飾り金具	青銅	輪金具	完形	—	—	5.15	3.85	0.4	10.7	鍛造	楕円状に帯を形成。成形時のものか、全体的に軽が残る。繋ぎ目が確。	根丸
	23	飾り金具	青銅	輪金具	完形	—	—	2.3	2.3	0.3	3.3	鍛造	円状に帯を形成。繋ぎ目が丁寧。	C-9 II層
	24	飾り金具	青銅	輪金具	完形	—	—	1.65	0.8	0.20 0.15	0.5	鍛造	別帯に帯を通す資料と考えられる。別帯は2つに折り曲げ輪を作り、帯を通しての。	D-9 II層
	25	飾り金具	青銅	不明	破片？ 半欠？	—	—	2.8	3.3	0.02	2.8	鍛造	内面に鍍金を施す。厚削のためか文様は判然としない。	表採
第55図 図版52	26	飾り金具	青銅	長ビツ等の箱物or 建物用	破片	—	—	9.5	—	—	24.3	鍛造	菱形の青銅板の中央に方形の孔をあけ、それを中心に花文を施す。四隅に雲文、花草文、魚々子を密に施す。形が確。魚々子同士が切りあう箇所が所々みられる。	根丸
	27	飾り金具	青銅	鉤か	頭部	—	—	2	2	高さ0.3 厚さ0.1	2.2	鍛造	表面に鍍金を施す。「吉」の字を彫り、その周辺に魚々子を施す。裏面中央に願付けの痕がある。	B-9 東拡 IV層
	28	飾り金具	青銅	覆輪	破片	—	—	3.15	0.8	0.30～ 0.55	1.5	鍛造	表面に鍍金を施す。	D-5 根丸
29	武具	青銅	鎌形台	破片	—	—	2.9	4	0.08～ 0.30	6.6	鍛造	端部を魚尾状に加工。猪目透しをあけ表面に鍍金を施す。文様は猪目透かし周辺に魚々子を打つほか、菊花文も施されるが判然としない。	E-6 方形石組 下層	

第16表 金属製品観察一覧3

図・ 図版 番号	番号	種類	材質	器種	完成 部位	法量 (cm・g)					加工 法	所見	グリッド ・層	
						頭部		縦	横	厚				重量
						径	厚							
第55回 図版52	30	武器	青銅	菜英 金具	完形	—	—	0.9	1.65	0.1	2.9	鍛造	外面に鍍金を施す。切断面、繋ぎ目が丁寧。	粗見
	31	武器	青銅	笠輪	完形	—	—	2.7	0.8	0.4	2.7	鍛造	鍍金を施す。断面はやや弓なり状。	E4 粗見
	32	武器	青銅	真輪	完形	—	—	0.9	1.65	0.45～ 0.50	1.8	鍛造	鍍金を施す。中央部分に繋ぎ目が確認できることから、1つの板を「ハ」の字形に加工したと考えられる。	E6 方形石箱 下層
	33	武器	青銅	八双 金具	破片	—	—	2.5	3.4	0.1	5.2	鍛造	両面に鍍金を施す。鎖孔が2カ所あり、1カ所に新が残る。鎖孔に合わせて文様が施されるが判然としない。	D5 粗見
	34	武器	鉄	小札	完形	—	—	6.1	2	0.2	6	鍛造	全体的に錆化が進んでいるため、一部孔が塞がっている箇所がある。孔数は2行11孔確認できる。札頭は斜めに形成される。並小札。	D6 方形石箱 東側3層
	35	武器	鉄	小札	破片	—	—	3.4	2.2	0.2	8	鍛造	小札頭が欠損の小札。孔数は2行6孔確認できる。両端のみ重なっている。	表探
	36	武器	鉄	踏輪子	破片	—	—	4.5	2.2	—	7.7	鍛造	踏を繋ぎ踏状にする資料。踏は最大外径0.51cm、幅0.15cm。	E6 方形 石箱内
	37	武器	鉄	踏輪子	破片	—	—	3.3	4.5	—	9	鍛造	踏を繋ぎ踏状にする資料。踏は最大外径0.58cm、幅0.2。	E6 方形 石箱内
	38	武器	青銅	弾	完形	—	—	1.65	1.55	1.55	17.88	鍛造	使用した際の衝撃のためか、やや歪な形をしている。周囲に付着物が多い。	表探
	39	武器	青銅	菜英	底部	—	—	0.9	1.95	0.05	4.4	鍛造	菜英径1.48mm、リム径1.72mm、高さ0.68の菜英。雷管の残りが良好。	C9 II層
	40	武器	青銅	菜英	底部	—	—	0.8	1.9	0.1	4.1	鍛造	使用した際の衝撃のためか、底の部分が湾曲する。	D9 II層
	41	武器	青銅	菜英	破片 底部	—	—	0.9	1.9	0.05	4.4	鍛造	菜英径1.48mm、リム径1.72mm、高さ0.69の菜英。使用済みではあるが、雷管の残りが良好。	粗見
42	武器	青銅	摩擦管	破片	—	—	2.05	1.1	0.65	1.6	鍛造	大塚に使われていた摩擦管と考えられる資料。L型摩擦管の一部。	C2 粗見	
43	武器	青銅	雷管	完形	—	—	1.2	1.3	0.65	0.4	鍛造	使用済みの雷管。	E9 粗見	

第16表 金属製品観察一覧4

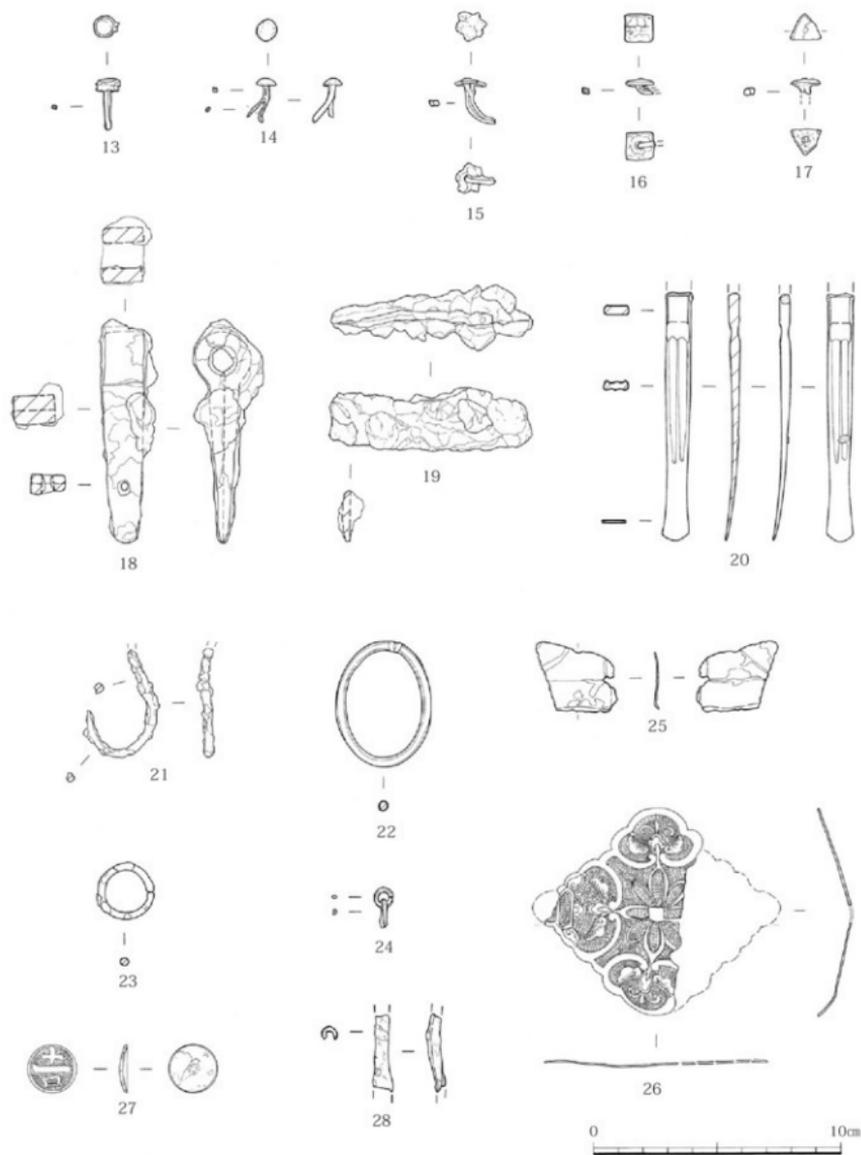
図・図版番号	番号	種類	材質	器種	完破部位	法量 (cm・g)					加工法	所見	グリッド・層	
						胴部		縦	横	厚				重量
						径	厚							
第55図 図版52	44	武器	青銅	雷管	完形	—	—	0.5	1.1	高さ 0.70 厚さ 0.05	0.4	鍛造	使用済みの雷管。	E9 掘丸
	45	武器	青銅	銃弾関係	完形	—	—	0.65	0.65	0.05	0.1	鍛造	№39～41の薬莖の一部である可能性がある。	C9 II層
	46	武器	青銅	銃弾関係	完形	—	—	0.65	0.65	0.05	0.1	鍛造	№39～41の薬莖の一部である可能性がある。	C9 II層
図版52	47	武器	青銅	信管部品	破片	外径 5.0	器高 2.0	—	—	—	173	不明	中央部とその傍の2方所孔をあける。下部にネジの粗跡あり。	B7 南7E II b層・ C8 III層
第56図 図版53	48	装身具	青銅	簪	完形	—	—	10.6	0.5	0.20 0.35	5	鍛造	耳かき状。頸断面円、竿断面六角。先を丸く成形する。頸長26mm。	B9 II層
	49	装身具	青銅	簪	頭～竿	—	—	10.5	0.4	0.35 0.45	12.9	鍛造	カブ欠損。頸断面六角、竿断面方形。ムディの捻り明瞭。	掘丸
	50	装身具	青銅	簪	頭～竿	—	—	残存長 8.25	0.45	0.20 0.45	5.2	鍛造	カブ欠損。頸断面六角、竿断面方形。ムディの捻り不明瞭。	掘丸
	51	装身具	青銅	簪	地板	—	—	1.8	1.55	0.02 0.08	0.5	鍛造	カブのみの資料。六弁花形のカブで、花弁の残りが強く、歪んでいる。	D3 掘丸
	52	装身具	青銅	鏡	破片	—	—	径 13.2	—	0.35 0.20	15	鑄造	鑄造の鏡と考えられ、縁をやや丸く成形する。一部、バリを取った痕がある。	D8 掘丸
	53	その他	鉄	鉄板	完形	—	—	5.8	5.9	0.3	74.1	鍛造	錆化が著しいが方形の板状製品と考えられる。	C3 新造成
	54	その他	鉄	管状製品	破片	—	—	2	1	0.2	2.7	鍛造	細い鉄材を巻き上げて管状に形成されたもの。錆跡が著しい。	D6 方形石組 東側3層
	55	その他	青銅	不明部品	破片	—	—	11.6	1.15	0.85	54.6	鑄造	上部が折れる形状の青銅製品。上部断面円形。下部断面方形。下部の中央付近から挟りがはいる。	E9 II層
	56	その他	青銅	不明製品	破片	—	—	2.25	5	0.05～ 0.70	30.7	不明	丸い面と平らな面をもつ。用途は不明。	C3 造成
57	不明	鉄	不明製品	破片	—	—	3.4	13.6	1.25	144.6	鍛造	断面が菱形を呈する。上下に突起する箇所がある。上部にだけ方形に挟りが入る。	E9 掘丸	



第53図 金属製品1



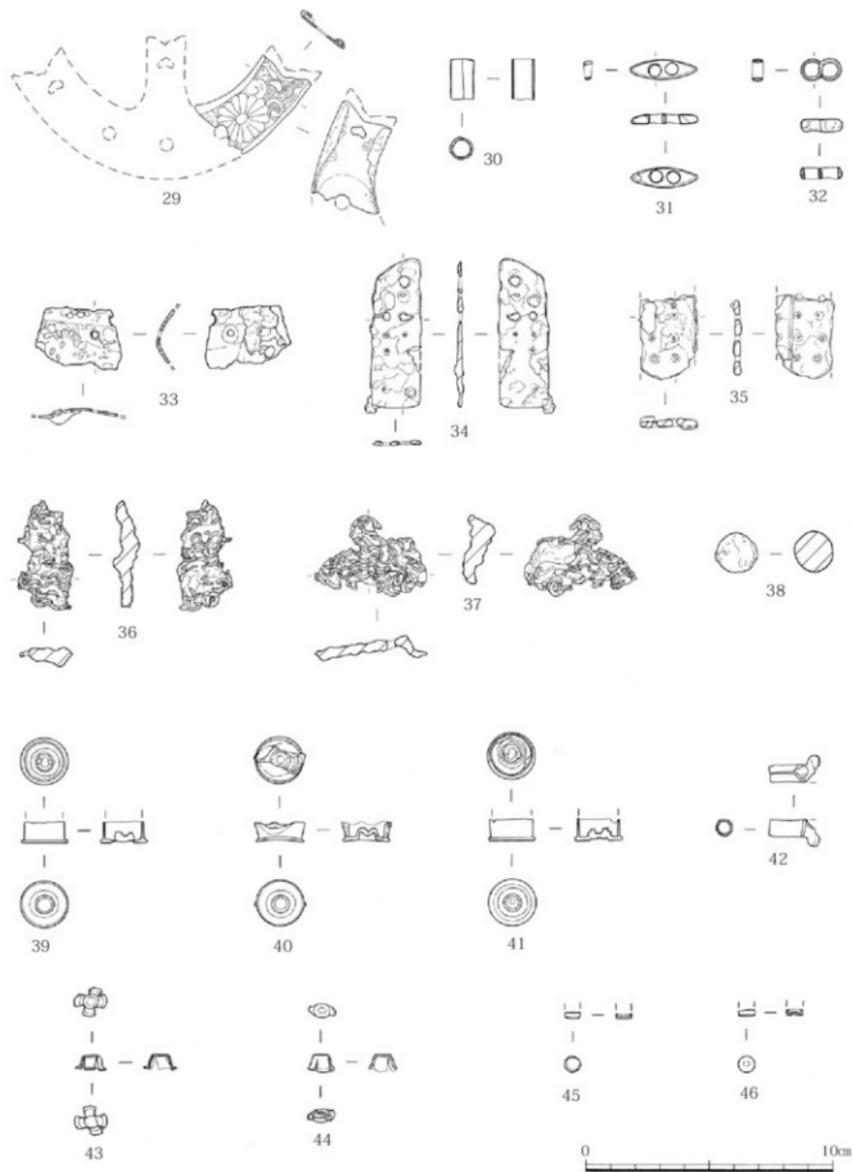
圖版 50 金屬製品 1



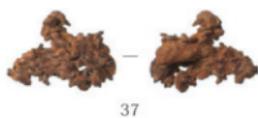
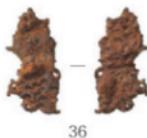
第54図 金属製品2



図版 51 金属製品 2

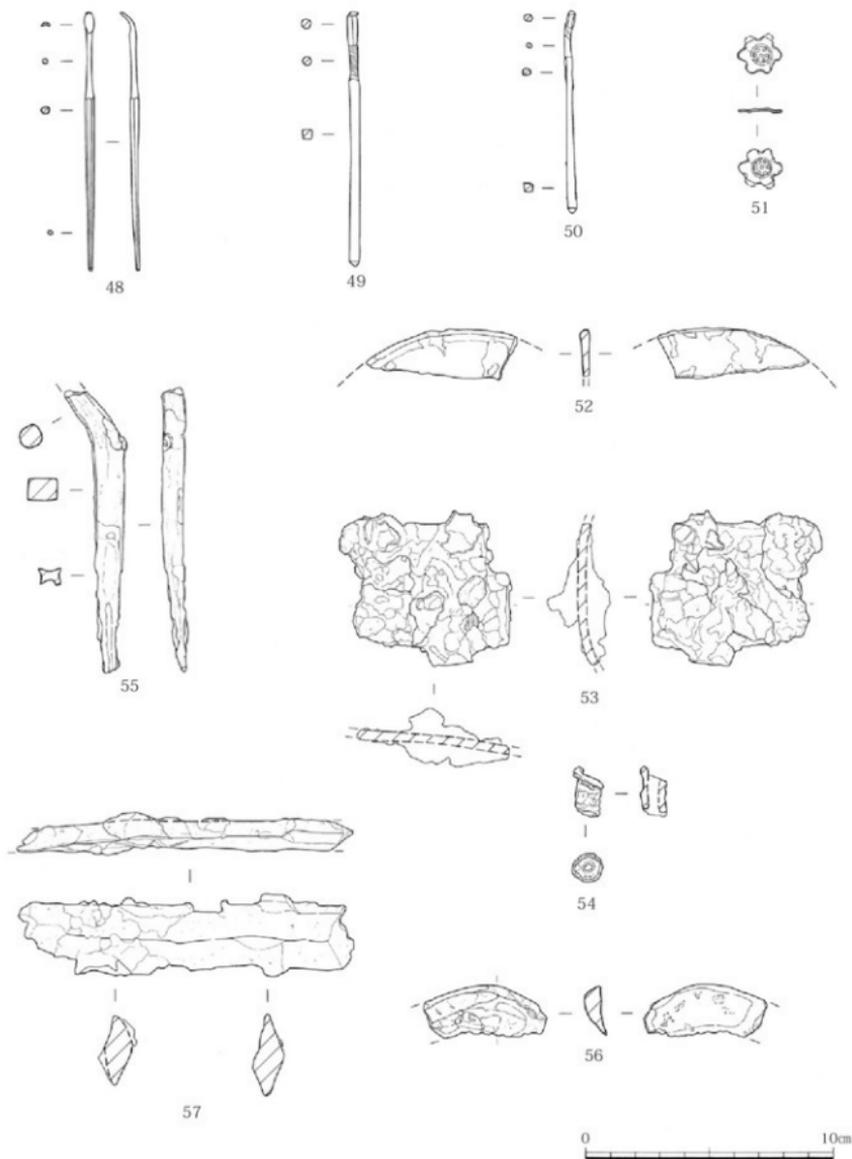


第55図 金属製品3

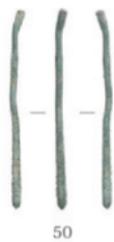


47





第56図 金属製品4



16 銭貨 (第17表、第57～60図、図版54～57)

銭貨は総数3,723点(うち残存径1/2以上は2,105点)出土している。種別は銅銭・鉄銭・雁首銭と大きく分けられ、内訳は銅銭では有文銭が360点、無文銭62点、輪銭2,951点、近代・現代銭5点、判読不明336点、鉄銭が5点、雁首銭4点である。銭種の判断は実見及び拓本により行った。

有文銭は北宋銭を中心に中国銭が多く、日本銭は少量みられる。銭種が特定できたもので数量が多いのは皇宋通寶である。中国銭で最も古いものは後漢代の五銖銭(1)で、次に唐代の開元通寶(2・3)が出土している。特筆されるものとしては、大型銭(大銭)の崇寧重寶(27)、縁を研磨した磨輪銭(16・46)、穿孔するもの(29・40)がある。有文銭は破片資料が多く、完形の資料は少ない。

無文銭では、輪銭がC・7・8ゲリッドⅡ層～Ⅲ層にかけて多く出土している(残存径1/2以上1,960点)。輪銭は径の大きさから大(10mm以上)、中(8～10mm)、小(8mm以下)と分類し集計を行った。残存径1/2以上のものでは、大が33点、中が209点、小が1,718点と小サイズのものが多い。バリが残る輪銭もある(51)。無文銭・輪銭は比較的残りが良い。

鉄銭は5点出土しているが銭文は不明。雁首銭は煙管の雁首(火皿)を平たくつぶし、銭貨の代用品としたものとされ4点出土している。

第17表 銭貨観察一覧1

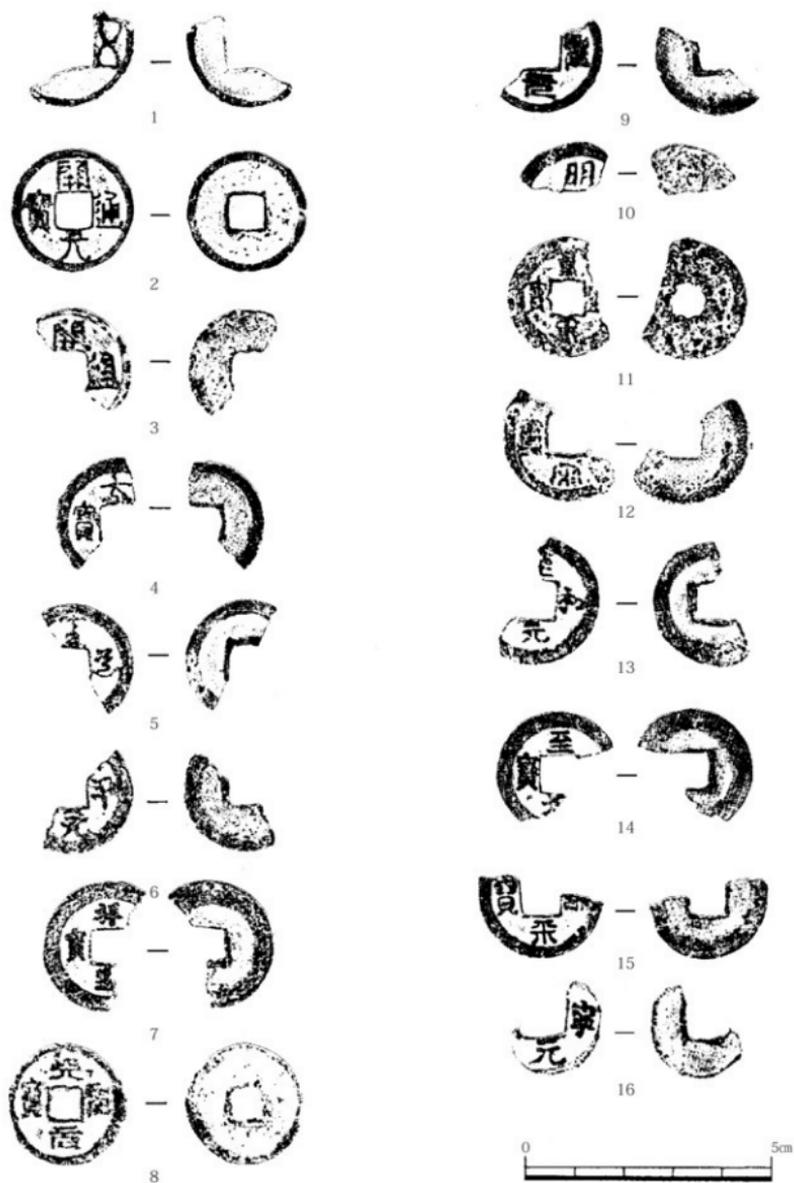
※()は推定値

図・図版番号	番号	銭貨名/ 銭文	銭種	国・ 王朝	初鋳年	法量 (m・g)				備考	グリッド・層
						外径	内径	厚さ	重量		
第57図 図版54	1	五銖銭	五銖銭	後漢	24	(23.8)	—	1.2	1.00	—	C2造成
	2	開元通寶	開元通寶	唐	621	25.0	6.0	1.0	262	—	C2造成 (具集中)下層
	3	開〇通〇	開元通寶か	唐	621	24.0	—	1.4	1.57	—	C2模乱
	4	太〇〇寶	太平通寶か	北宋	976	(24.0)	—	1.1	1.46	—	C2模乱
	5	至道〇〇	至道元寶か	北宋	995	24.6	—	1.2	1.49	草書	C2模乱
	6	〇平元〇	咸平元寶か 治平元寶か	北宋	998 1064	(25.0)	—	1.1	1.46	—	D5模乱
	7	祥〇通寶	祥符通寶か	北宋	1009	26.0	6.0	1.4	2.60	—	C2模乱
	8	天聖元寶	天聖元寶	北宋	1023	24.2	5.2	1.5	3.48	篆書	C2模乱
	9	〇聖元〇	天聖元寶か	北宋	1023	(25.0)	—	1.2	1.92	篆書	C2模乱
	10	明〇〇〇	明道元寶か	北宋	1032	—	—	0.6	0.74	真書	C2模乱
	11	皇宋〇寶	皇宋通寶か	北宋	1038	24.5	6.1	1.3	3.03	真書	C2模乱
	12	〇宋〇寶	皇宋通寶	北宋	1038	(26.1)	—	1.8	2.30	篆書	E6 レキしき内
	13	至和元〇	至和元寶か	北宋	1054	25.7	—	1.4	2.92	真書	C2模乱
	14	至〇元寶	至和元寶か	北宋	1054	24.9	6.2	1.0	1.87	真書	C2模乱
	15	〇平通寶	治平通寶か	北宋	1064	24.7	7.1	1.0	2.06	篆書	C3造成
	16	〇寧元〇	熙寧元寶か	北宋	1068	—	—	1.3	1.40	真書 磨輪銭	C2模乱
第58図 図版55	17	熙〇〇寶	熙寧元寶か	北宋	1068	25.5	—	1.5	1.99	篆書	C2模乱
	18	熙寧〇〇	熙寧元寶か	北宋	1068	24.3	—	1.4	2.00	篆書	C2模乱
	19	元豊〇〇	元豊通寶か	北宋	1078	(24.0)	—	1.1	1.51	行書	C2模乱
	20	元豊〇〇	元豊通寶か	北宋	1078	—	—	—	—	篆書	C2造成(フ9)
	21	元豊〇〇	元豊通寶か	北宋	1078	(24.0)	—	1.3	1.30	篆書	C4新造成
	22	〇豊〇〇	元豊通寶か	北宋	1078	—	—	1.0	0.73	篆書	C2造成(粘上)
	23	元〇通寶	元祐通寶	北宋	1086	25.0	6.9	1.2	2.02	篆書	B8模乱
	24	元祐〇寶	元祐通寶	北宋	1086	25.8	6.4	1.4	2.20	篆書	C2模乱
	25	〇祐通〇	元祐通寶か	北宋	1086	—	—	—	9.28	5枚溶着	C2模乱

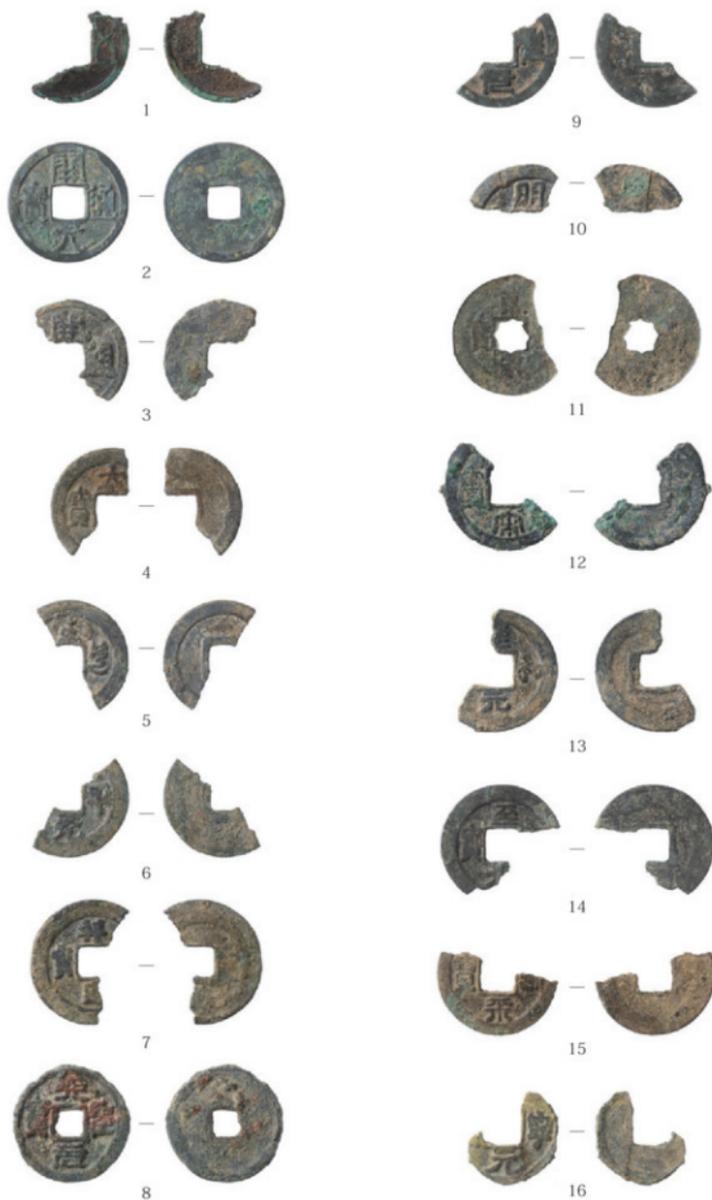
第17表 銭貨観察一覧2

※()は推定値

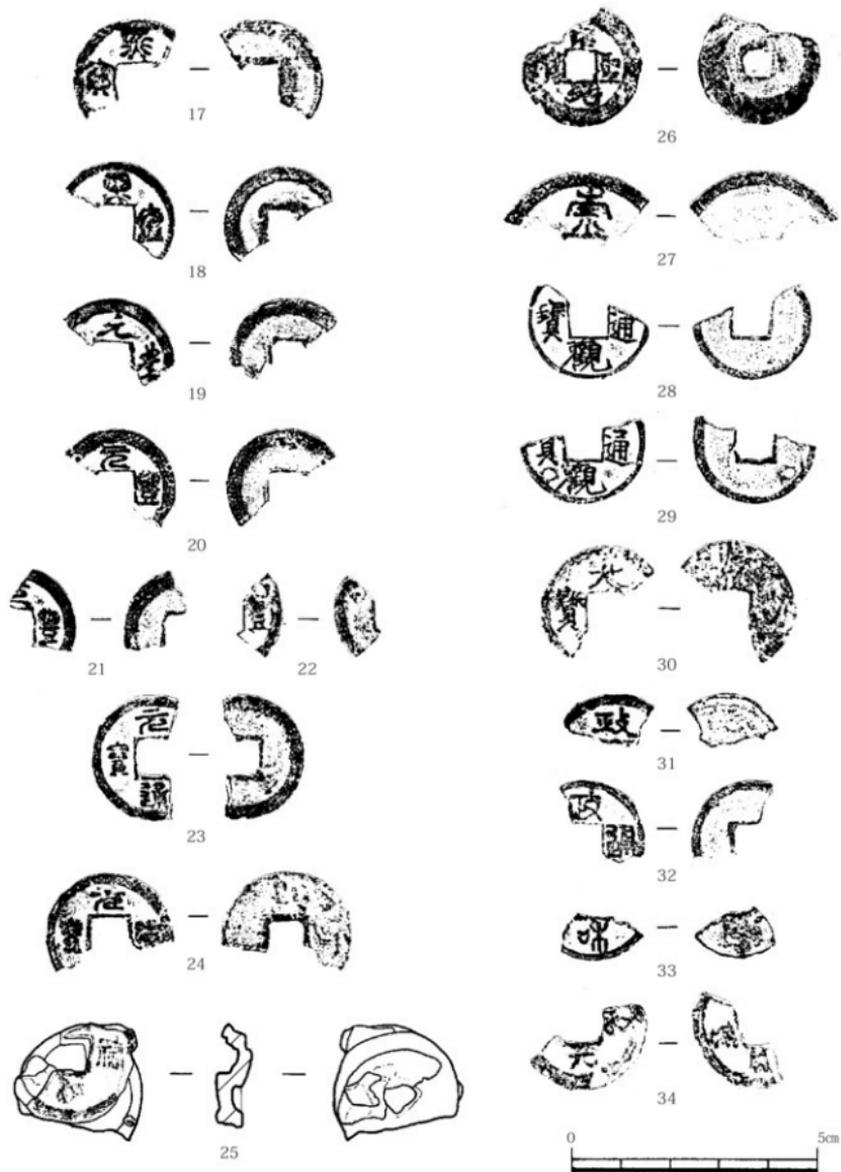
国・図版番号	番号	銭貨名/ 銭文	銭種	国・王朝	初鋳年	法量 (mm・g)				備考	グリッド・層
						外径	内径	厚さ	重量		
第58国 図版55	26	紹聖元寶	紹聖元寶	北宋	1094	25.2	4.9	1.4	3.97	行書	C2視乱
	27	崇○○○	崇寧重寶か	北宋	1103	—	—	1.8	3.10	大銭	C2視乱
	28	○観通寶	大観通寶	北宋	1107	24.3	7.2	1.1	1.64	—	C2視乱
	29	○観通寶	大観通寶	北宋	1107	24.9	6.9	1.3	1.82	左下穿孔	C2視乱
	30	大○〇寶	大観通寶か	北宋	1107	25.5	—	1.2	1.76	—	C2視乱
	31	政○〇〇	政和通寶か	北宋	1111	—	—	1.3	0.86	文楷	C2視乱
	32	政○通○	政和通寶か	北宋	1111	(22.0)	—	1.4	1.51	篆書	C2視乱
	33	○和○〇	政和通寶か 宣和通寶か	北宋	1111か 1119	—	—	—	—	篆書	C3視乱
34	(表?)○和元○	至和元寶か	北宋	1054	25.1	—	1.6	3.54	2枚溶着	C2視乱	
	(裏?)□〇〇□	—	—	—	—	1.7					
第59国 図版56	35	淳○〇〇	淳熙元寶か 淳祐元寶か	南宋	1174 1241	—	—	1.3	0.90	真書 背「十」字	C2視乱
	36	皇○〇寶	皇宋元寶	南宋	1253	29.4	—	1.1	2.59	背「八」字	C2視乱
	37	洪武〇寶	洪武通寶か	明	1368	22.9	5.9	1.0	1.79	—	C9 II層
	38	洪武通○	洪武通寶	明	1368	23.1	4.4	1.4	2.49	—	C2視乱
	39	永□□寶	永業通寶か	明	1408	24.7	5.1	1.1	2.73	—	C2視乱
	40	○業〇寶	永業通寶か	明	1408	(25.0)	—	0.9	1.81	右下穿孔か	C2視乱
	41	○業〇〇	永業通寶か	明	1408	—	—	1.6	0.80	背点か	C3造成
	42	○熙通○	康熙通寶か	清	1662	(24.0)	—	0.5	0.60	普通文字	D9 II層
	43	(古)寛永通寶	(古)寛永通寶	江戸	1636	22.9	5.1	1.4	3.80	—	C9 II層
	44	(新)寛永通寶	(新)寛永通寶	江戸	1697	23.4	5.4	1.1	3.07	—	C9 II層
	45	(新)寛永通寶	(新)寛永通寶	江戸	1697	24.6	5.7	1.3	3.68	—	C3視乱
	46	□□元○か □元□□	—	—	—	22.5	6.3	0.6	1.68	磨輪銭	視乱
	47	○平○寶	—	—	—	24.0	—	0.8	1.35	—	C8視乱
第60国 図版57	48	無文銭	—	—	—	15.4	8.5	1.0	0.50	—	F5ビツ内
	49	無文銭	—	—	—	20.0	8.5	1.1	1.70	—	C2視乱
	50	無文銭	—	—	—	13.1	6.5	0.6	0.37	—	D8 II層直上
	51	輪銭	—	—	—	6.5	3.5	0.9	0.09	バリが残る	C3造成
	図版57	輪銭	—	—	—	—	—	—	—	—	C7 II層
第60国 図版57	53	鉄銭	—	—	—	—	—	—	3.10	—	F5ビツ内
	54	鉄銭	—	—	—	—	—	—	2.70	—	南極乱
	55	雁首銭	—	—	—	—	—	—	2.61	—	D9 II層
	56	雁首銭	—	—	—	—	—	—	0.94	—	C9 II層
	57	雁首銭	—	—	—	—	—	—	0.98	—	C9 II層
	58	雁首銭	—	—	—	(21.4)	—	0.6	0.90	—	D・E・F2視乱
	59	半銭	—	—	明治10年	22.2	—	1.1	3.19	近代銭	視乱
	60	半銭	—	—	明治18年	22.2	—	1.1	3.31	近代銭	C9 II層
	61	五銭	—	—	明治31年?	20.6	—	1.6	4.25	近代銭	D・E・F2・3 視乱



第57図 銭貨1



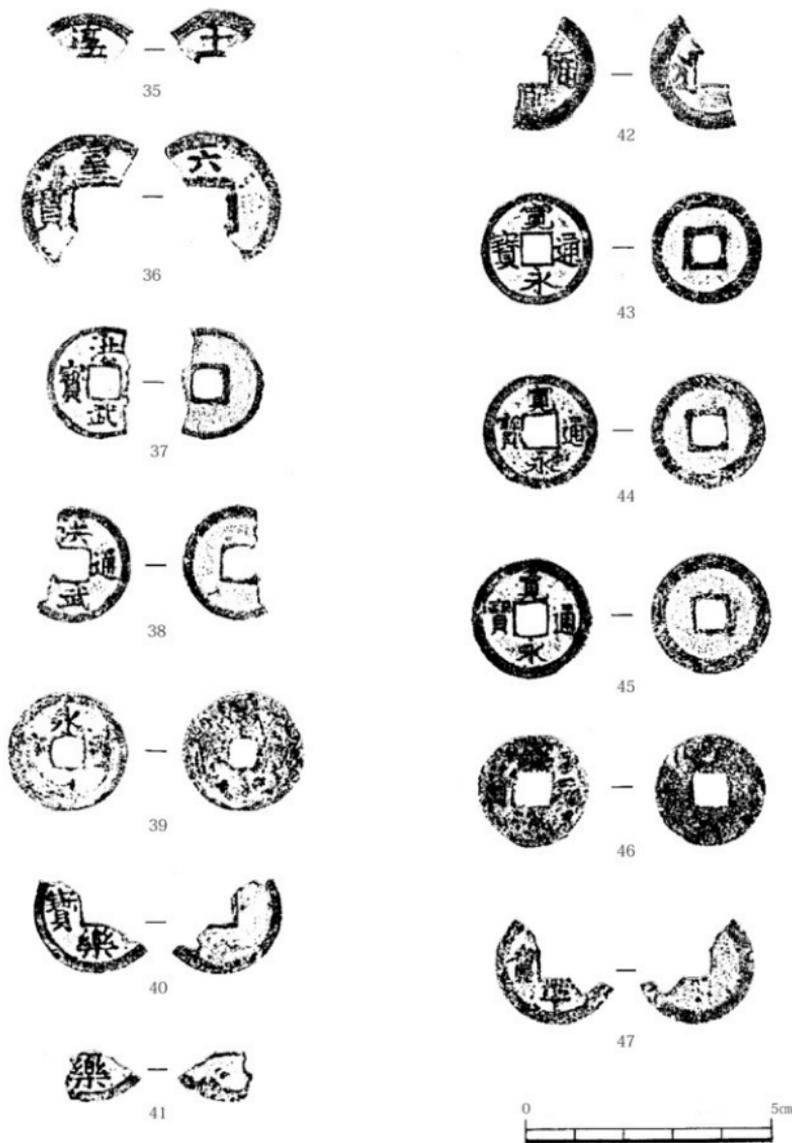
圖版 54 錢貨 1



第58図 銭貨2



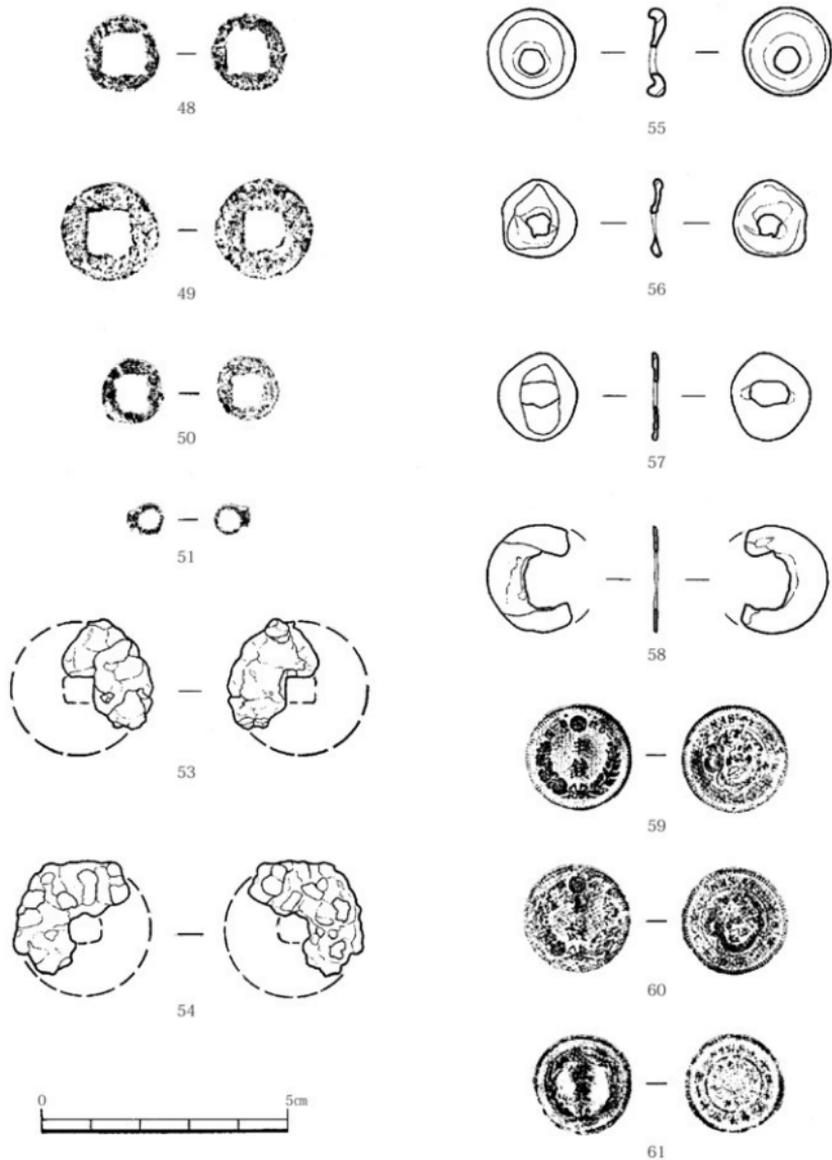
図版 55 錢貨 2



第59図 錢貨3



図版 56 錢貨 3



第60図 銭貨4



48



55



49



56



50



57



51



58



52



59



53



60



54



61

17 漆製品（第18表、図版58）

首里城跡の発掘調査において、土中より朱色及び黒色の被膜が出土することがある。これらは漆の塗膜と思われ、かつて調度品や器物のほか、建造物等に塗布されていたものと思われる。木胎部は腐食により失われ、表面の漆塗膜のみが土中に残されたものである。

本地区の調査区では、第18表に示した地点から出土している。これによると、16世紀代以降の各時期の層から出土していることがみえ、漆がコンスタントに使用されていたことをうかがわせている。

出土は断片的で、造成土等に陶磁器類や瓦とともに出土する傾向にある。大きさは数mm～数cmと小規模であることから、確認後は注意深く検出して範囲を特定し、土砂ごと取り上げを行っている。

塗膜は朱色や黒色の単色漆のほか、黒地に朱色の文様が施された資料も確認されている（図版58）。この内、C-3グリッド造成層中より回収された赤色漆片の科学分析を行い、第4章第2節にて結果報告を行った。

第18表 漆出土状況一覧

グリッド	層序
C-1	造成
C-3	造成
C-3	新造成
C-3	新造成（貝集中）
C-3	攪乱
C-4	新造成
C-8	Ⅱ層
D-6	方形石組東側上層
E-6	方形石組内 南攪乱



1. C-3 造成層内 漆片検出状況 1



2. C-3 造成層内 漆片検出状況 2



3. C-3 造成層内 漆片検出状況 3



4. C-3 造成層内 漆片検出状況 4

図版 58 漆塗膜出土状況

18 石製品・石造物（第61～67図、図版59～63）

石製の製品を、文具類・遊具等の小型製品を石製品とし、礎石や欄干等の建材として使用されたと思われる製品及び、石碑等の大型製品と、その未成品・石材剥片資料を石造物として報告する。そのほか、石製の勾玉片1点が得られているが、今回は「19. 玉・ガラス製品」の中で報告する。

①石製品（1～13）

石製品には文具・遊具のほか、器物や道具として加工・使用された製品が出土している。

1～5は文具に分類できる資料である。1・2は粘板岩製の硯で、1は赤褐色を呈すことと、裏面に「関」の銘が刻まれることから、長州赤間関（現山口県下関）産と思われる資料である（岩崎2005、有路2011、大堀・金城2011）。

3は粘板岩製の石版と思われる破片である。表面は丁寧に磨かれ、銀孔と思われる孔が1点穿たれる。破片上端は切断後に粗く研磨される。表面には縦方向に微細な線状痕がみられるため、剥離した砥石の可能性も考えられるが、2.1mmと均一に薄手であることから、ここでは石版とした。

4・5は石筆である。灰白色を呈し、蠟石製で軟質のため、破損した状態で首里城内からしばしば出土する。首里城は琉球処分を経て、熊本鎮台沖繩分遣隊が撤収する1896（明治29）年以降、沖繩戦により破壊されるまで、各種学校として使用される。これらの文具類は、その間に使用された可能性がある。

6は結晶質石灰岩製の石形製品である。小片であることと被熱による変形のため、当初の形状や文様・用途は不明であるが、首里城跡や中城御殿跡では、これに類する製品の出土例があり（沖繩県立埋蔵文化財センター2004、2010、2011、2012ほか）、何らかの器物や装飾品として考えられる。

同図7は軽石製品で「大」の字が線刻される。13は琉球石灰岩製の台形状製品、11・12は石彈あるいは石球として報告例がある。これらはいずれも用途について判然としなない。

同図8～10は粘板岩製の碁石である。9は断面レンズ状で丁寧な造り。8・10は断面扁平で粗製。

②石造物（14・15～18）

a. 未成品

石造物の未成品と思われる資料が4点得られている。資料は全て細粒砂岩製である。14は、5cm大の隅丸三角形に粗く加工した製品である。全面にハンマーによる加工痕がみられる。宝珠を意識して製作した可能性があるが、用途は不明である。

15・16は、楕円形あるいは方形・柱状の製品を意図して加工されたものと思われる。15は母岩から削り出すように粗削りされた状態の未成品である。表面にはハンマーによる調整痕が多数残ることと、下部に折れた痕跡がみられることから、加工中に破損したため製作を断念し廃棄された可能性が考えられる。16は方形か柱状石造物の未成品である。これらの製品は主に17世紀前半と考えられる第Ⅲ層から出土しており、一帯には石材剥片が堆積することから、当地で石造物の加工を行っていたことが考えられる。

b. 建築材

17は植物の葉と蔓をレリーフにした製品である。彫刻は深く奥行きがあり、表面は丁寧に磨いて仕上げられる。高欄羽目石の一部の可能性もある。

石高欄の部材、東石の握連片が1点出土している（18）。前・側面に連の葉脈が深く彫刻され、上面には笠石をはめ込む溝が彫られている。細粒砂岩製であることから、1709年の火災後、1712年に再建され、戦前まで存在した高欄の部材である可能性がある（それ以前は青石とよばれる輝緑岩製とされる）。なお、この意匠は日本の禪宗様の建築様式とされるが、石高欄は中国宮殿の建築様式を倣ったものであることが「百浦添之欄干之銘」に記されている（首里城公園友の会編2003）。

c. 石材剥片資料

第Ⅱ層下部～第Ⅲ層にかけて、多量の砂岩片が面的に広がる状況が確認できた。

砂岩片は打割られて大小の破片が混在し、鋭い角を有する。破片の表面には、打割痕及び表面調整の際の線状痕や撃痕等の加工痕がみられ（図版59-4）、その中に石造物の未成品と思われる資料が含まれる（第65・66図14～16）。なお線状痕については、石工が用いる「歯ピシャン」と呼ばれる刃部に歯列状の凹凸が付いたハンマー状工具やタガネで加工した痕跡と考えられる（図版59-3・4）。

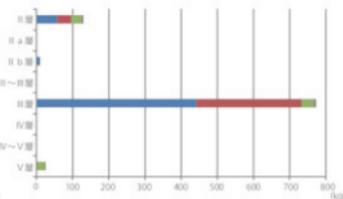
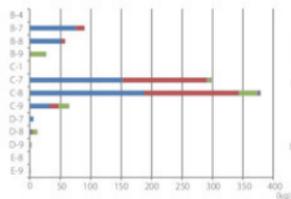
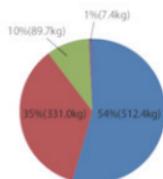
この砂岩の細片については、ピックアップでの取り上げが困難なことから土砂ごと回収し、調査区南側においてフローテーション作業により遺物の回収を行った（図版59）。回収した資料は、その一部に関し砂岩、琉

琉球石灰岩・その他遺物の3種に選別作業を行い、平成26(2014)年度資料整理作業段階で計量を実施した。

その結果、回収後に仕分けを行った資料の合計が940.5kg(100%)であった。このうち、砂岩の重量が512.4kg(54%)、砂岩と石灰岩細片が331.01g(35%)、琉球石灰岩が89.6kg(10%)、その他遺物(瓦、陶磁器・鉄製品等)が7.4kg(1%)となっている(第61図)。グリッド別だとC-7・8グリッドの第Ⅲ層を中心に出土している(第62・63図)。この結果から、砂岩片が本層の遺物の大半を占めていることがわかる。首里城周辺の地質からすると、このような細粒砂岩は多産しないと思われることから、外部からの持ち込みであることが考えられる。この点と石材表面の加工痕及び、石造物の未成品が含まれている点をあわせて考えると、当地で石造物や石製品を加工していたことが考えられる。

なお、この砂岩片とともに、初期沖縄産無軸陶器や中国産青花等の陶磁器が出土しており、その年代から17世紀前半になるものと思われる。

色凡例 ■ 砂岩 ■ 砂岩・石灰岩細片 ■ 石灰岩 ■ その他



第61図 種別別出土状況

第62図 グリッド別出土状況

第63図 層別出土状況



1. フローテーション作業状況



2. 回収した遺物



1



2



4. 剥片の表面に各種加工痕がみられる

3. 石材剥片 (1:粗割りされた石材片、2:彫刻・微調整時の剥片)

図版59 石材剥片関係画像

d. 石碑 (19)

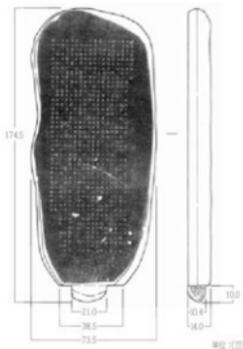
平成 18 年度調査の表土掘削時に、細粒砂岩（ニービスフニ）製の石碑が 1 点得られている。出土したのは調査区の南西側、D-4 グリッド付近で、石碑上部を南に向け、表を上にした状態で検出された。石碑の周辺はまだ表土が残り、除去する必要があることから、石碑の周囲を掘り下げて浮かせ、ロープで結わえて調査区東側の樹木下に移動した。その後、石碑に刻まれた銘文を書写し、現場から埋藏文化財センターへ運搬後、表裏面の拓本採取、写真撮影を行い取藏庫へ取めた（図版 3-3・4、図版 60）。

石碑は楕円形の扁平な細粒砂岩を用い、文字を刻む表裏面を平坦に加工すると、台座に差し込む下部をホゾ状に加工する以外は自然面を残す。サイズは縦 174.5cm、横 73.5cm、厚さ 14cm を測る。ホゾ部分の幅は 21cm、高さ 10.4cm、奥行 10cm である（第 64 図）。台座部分は確認されていない。

石碑はその大きさのため、通常の計量機器での計量が難しいことから、県内の石材業者より細粒砂岩の単位重量（2.4 t / m³）と計算法（m³ × 単位重量）の情報を入手して重量を算出したところ、約 430kg であった。

表裏面に刻まれた文字は楷書体で、表に首里至聖廟が復興された経緯と撰文者名・日付が、漢字と片仮名 769 文字により、漢文調の文語体で刻まれ、裏面には復興事業代表者名と竣工日が 49 文字で刻まれている。この文字以外に装飾はみられない。この碑文内容と昭和 11 年とする年号から、本石碑は、1936 年に首里桃原町から首里城銭蔵跡に移転してきた首里至聖廟の復興を記念し、建立されたものであることがわかる。

なお、首里至聖廟に関する石碑としては、国学前に 1837 年に建立された「首里新建聖廟碑文」があるが、今回出土した石碑についての記録としては、沖縄縣師範学校校友会が発行した『龍潭』第 31 号「至聖廟落成記念誌」に、建立に至る経緯や経費、揮毫・篆刻者の情報が記されている（訳文作成：沖縄県教育庁文化財課資料編集班 小野まさ子、外間みどり）。



第 64 図 石碑の量算



1. 石碑出土状況



2. 石碑検出作業状況



3. 碑文書写作业状況



4. 石碑移動作業状況

図版 60 石碑関係画像

碑文原文

(一) 首里至聖廟復興の碑
 孔夫子道ハ古クテ貫キ地ハ天地ニ配シ化育長ヘ二後世ニ垂レ風教源也東方二城ル地鳴呼嗚呼ル哉
 首里至聖廟ハ天保八年尚育王ノ創建ニ係リ初メ龍潭湖畔ノ國學ニ在リ代々釋奠ヲ舉行シ久クテ教學ノ中心
 ナリ明治初年ノ後國學ニ廢セラレタルモ聖廟ハ尚依然トシテ禮容ヲ存スリ然ルニ明治二十年隣接セル神
 戶縣師範學校敷地擴張ノ爲メ聖廟移轉ノ己テ無キニ至リ浦添朝志喜宮場盛文等相謀リテ浦添区内ニ遷シ朝
 志ノ新廟普大開助宣等ヲ其ノ第一任ニ春林ノ野記ヲ慕フザリシガ爲メシク浦次朝宇ノ移居ヲ要スル
 アリ偶ニ普大開助宣ノ開通ニ由リ朝志ノ母乃ルニ及ビ神護日新社其ノ地ヲ去リ建本心ニ其ノ移
 築ヲ期スル會同各中等學堂學務友會同僚會首里市郡縣市長新聞社編輯朝日新聞社編輯教育報社協
 會同僚長會同各中等學堂學務友會同僚會首里市郡縣市長新聞社編輯朝日新聞社編輯教育報社協
 日刊神護新聞社ノ熱誠ナル贊助ニ由リ内外ノ有志者ヨリ喜宮場全ヲ購得テ地ノ首里城内隣接セル下
 シ昭和九年十月三十日辰時二時零五分九月十九日落成ノ典ヲ便シ同僚會首里市郡縣市長新聞社編輯朝日新聞社編輯教育報社協
 會同僚長會同各中等學堂學務友會同僚會首里市郡縣市長新聞社編輯朝日新聞社編輯教育報社協
 本石ヲ遷移シ移築ノ爲メ聖廟ヲ其ノ地ニ再建スル事ヲ可ナリ
 今チ中ノ森ニ高ク聳ユ至聖廟ハ又ニ倍シシテ丹雘ヲ輝ハ四週翠松緑樹ト相映シク教道弘布ノ宗
 社タルニ嗚呼ス夫子ノ聖業業々爲ニ段ノ光輝ヲ如ヘタルヲ覺シ是レ聖廟代ノ遺蹟ニ由ルニ雖モ亦國民
 力ク協力一攸シテ此ノ事業ニ滿シタル結果ニ外ナラザリ余願シク廣式ニ附シテ國民ノ誠意ニ感ス
 ルアリ茲ニ不文ヲ辭セズ聖廟復興ノ額未ヲ記シテ不朽ニ傳ヘ且後人ヲ勵メシムト云爾
 昭和十一年二月二十五日 東京帝國大學教授正四位勲一等文部博士鹽谷温敬識

昭和十一年五月建之 首里至聖廟復興事業代表者

沖繩縣師範學校校長 長谷川龜太郎
 沖繩縣師範學校學友會長

碑文訳文

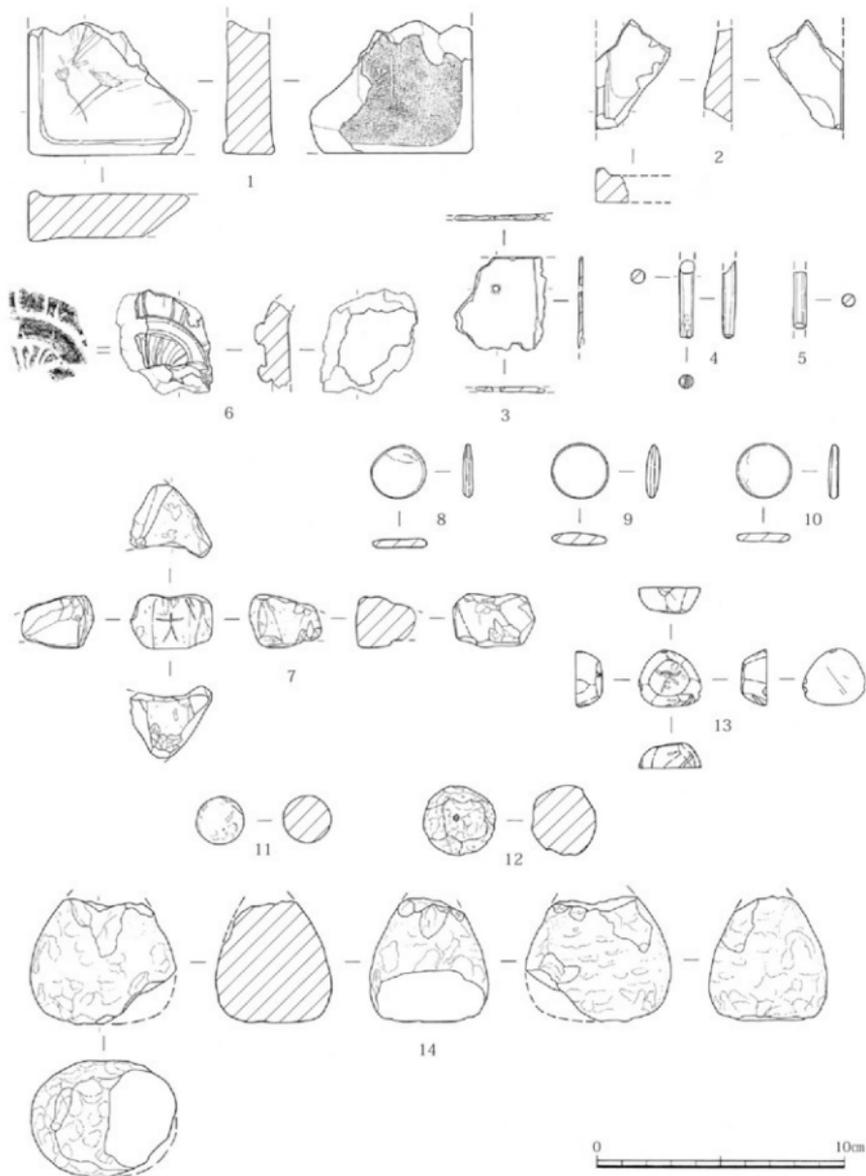
(一) 首里至聖廟(孔子廟)復興の碑
 孔子(孔子先生)の儒教の教えは、昔から現在まで及び、(孔子先生の)徳は天地(全世界)に広がり、その影響は長く後世に及びされ、その教えは遠く東方の日本にまでもたらされた。なんと盛んで素晴らしいことだ。
 首里の至聖廟(孔子廟)は天保八年(一八三七年)尚育王により創建されたもので、初めは龍潭の池畔にあった国学(琉球王国の最高学府)の内に在って、代々、釋奠(孔子を讃える祭り)を行い、国学の教えの中心となっていた。
 明治政府の威政による琉球王国の廃止(廢琉置縣)の後、国学は廃止されたが、聖廟(孔子廟)はそのまま、その地で威政を保つてきた。
 然しながら、明治三十年(一八九七年)に、隣接する沖繩縣師範學校の敷地拡張のために、聖廟(孔子廟)は移転せざるを得なくなった。そこで、浦添朝志と喜宮場盛文等が検討して、浦添家の邸内に(孔子廟を)遷し、朝志の子朝志普大開助宣等が、もつぱらその管理を行い、春林の(孔子の)祭祀を営む事を行ってきたが、年月もたち、次第に廟の建物の移換が必要となってきた。
 ちょうど、その折、首里と普大開の間に開通する鉄道が、屋敷内の孔子廟の敷地に敷かれ、敷地を削らざるを得なくなったため、神護日報社やその他の有志が熱心なその移築を提唱してきた。そこで、師範學校の龍潭同窓会と同僚友会が發起して、孔子廟の(本来の)復興を計画し、沖繩縣教育会、同郷士協会、同町村長会、同各中等學校学友会、小学校校長協会、首里市、那覇市、琉球新報社、神護朝日新聞社、神護日報社おひび日刊神護新聞社の熱心な賛助協力の下に、県内外の有志から寄付金を募り、一万余円を獲得する事ができた場所を確保し、同僚會に聖廟(孔子廟)の維持と、儒教の普及を目的として、孔子教學会の発会式をも挙行された。これは誠に県教育界にこれまでなかった盛事である。それだけでなく、男女學生生徒授業の合同に目的の本石を遷移して、移築のために努力した様子は、また、神護日報の教育史上に特筆すべきことである。
 その朱い草と社は、周囲の緑の松に映え、孔子の教えとその普及のための中心の社として屹立することがない(ふさわしい)、夫子(孔子先生)の偉大なる徳や業績にも、歴史の光輝を加えてはならないと思われる。これは偏に孔子先生の偉大なる恩恵によるものではあるけれども、また、國民が加えた政治力として、この事業に尽力した結果にはかならない。私は親しく落成式に列席し、國民の誠意に感激した。
 ここにつたない文ではあるが、聖廟(孔子廟)の復興の額未を記して、永久に伝え、また後世の人を励ましたい。
 昭和十一年二月二十五日 東京帝國大學教授正四位勲二等文部博士鹽谷温敬識

昭和十一年五月建之 首里至聖廟復興事業代表者

沖繩縣師範學校校長 長谷川龜太郎
 沖繩縣師範學校學友會長

第19表 石製品・石造物観察一覧

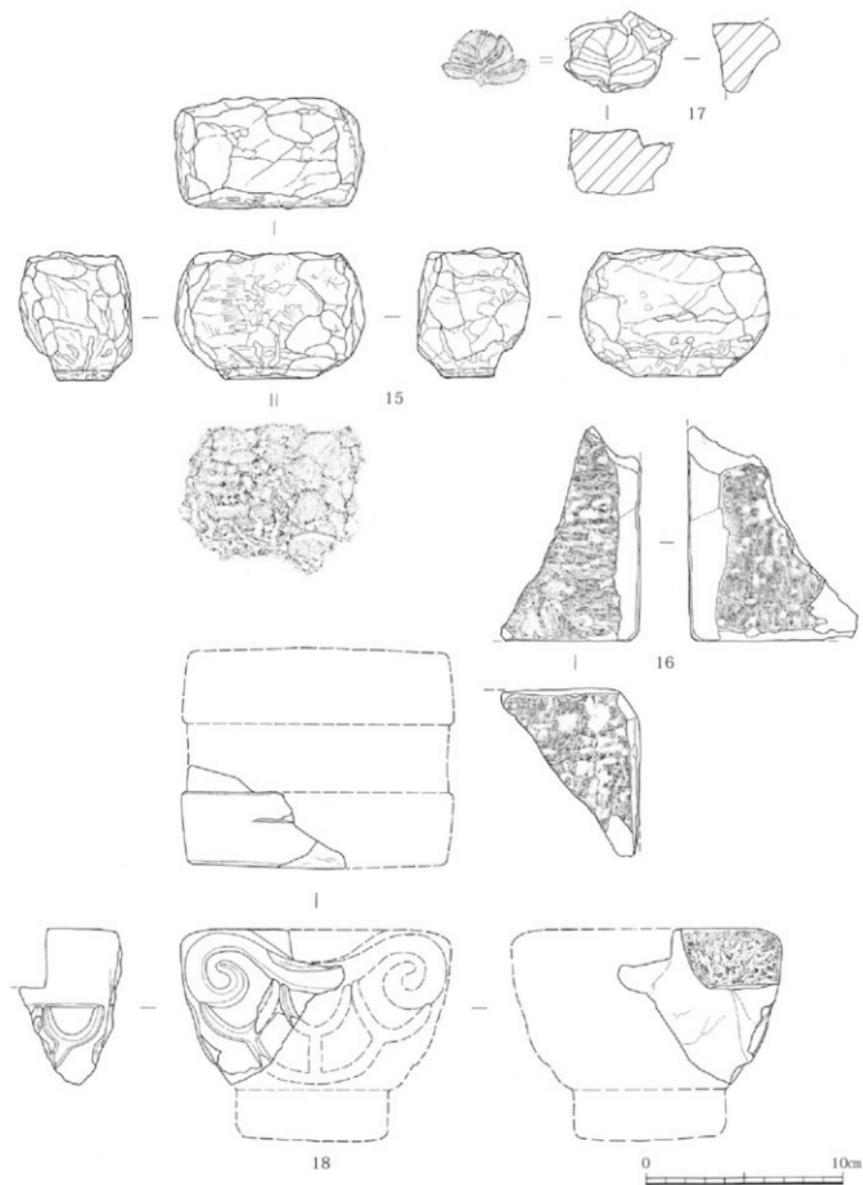
図・図版番号	番号	器種	部位	石材	法量 (cm・g)		観察事項				グリッド・層
					縦横厚さ/高さ	重量	加工痕	使用痕	装飾	その他	
第 65 図 図版 61	1	甕	甕内 胴部	粘板岩	5.4	119.6	内部に削り痕。全面を丁寧に研磨。	なし。	裏面に「間」の痕が刻まれる。	長州赤銅器と思われる原料。灰白色目が取り込まれる。	ⅧB層
					6.6						
					1.7～2.2						
	2	甕	甕内 胴部	粘板岩	4.9	142	胴部に削り痕。全面を丁寧に研磨。	なし。	なし。	灰褐色地に一部赤褐色の素材を用いた甕。	C8 B層
					0.0						
	3	石版	端部	粘板岩	3.81	52	表面は丁寧に磨かれ鋭孔と思われる孔が1点穿孔される。	縦方向に微細な線状痕。	なし。	石版と思われるが、剥離した砥石の可能性もある。4・5の石事で文字が書ける。孔径0.25cm。	D9 B層
					3.69						
					0.21						
	4	石事	端部	板石	0.2	18	加工・調整時の線状痕が縦位に走る。	端部角が割減。	なし。	石事の端部。3の石版に文字が書け、拭くと消える。	C7 B層
					0.6						
					0.55						
	5	石事	軸部	板石	0.3	09	加工・調整時の線状痕が縦位に走る。	なし。	なし。	石事の端部。3の石版に文字が書け、拭くと消える。	C7 B層
					0.5						
					0.5						
	6	石製品	胴部	結晶質 石灰岩	4.26	248	表裏面に微細な研磨痕多数。	なし。	縦切で帯状・花弁状に彫刻。	焼熱して変色し亀裂入る。	E4 ⅧA層
					3.62						
					最大1.4						
	7	石製品	完形	輝石	0.0	52	一定方向に線状痕走るが、使用痕の可能性あり。	一定方向に線状痕走るが、加工痕の可能性あり。	「大」の字が刻まれる。	溝曲面に「大」の字が刻まれ、朱色の顔料が付着。	C4 新造成
					0.3						
2.2											
8	礫石	完形	粘板岩	2.2	37	全面を丁寧に研磨。	なし。	なし。	断面扁平で粗製。黒色地に赤褐色の痕が貫入。	ⅧA層	
				2.3							
				-							
9	礫石	完形	粘板岩	2.25	33	全面を丁寧に研磨。	なし。	なし。	断面レンズ状で丁寧に造り。	ⅧA層	
				2.2							
				0.35							
10	礫石	完形	粘板岩	2.2	32	全面を粗く研磨。	なし。	なし。	断面扁平で粗製。	ⅧA層	
				2.2							
				0.25～0.4							
11	石碑	完形	珪質 石灰岩	1.95	88	全面を丁寧に研磨。	なし。	なし。	ややいびつな球体だが丁寧に研磨された製品。	C8 B層	
				1.9							
				1.9							
12	石碑	完形	珪質 石灰岩 (サンゴ 石灰岩)	2.9	260	全面を粗く磨打により成形。	なし。	なし。	いびつな球体で成形も雑な製品。	B8 ⅧA層	
				2.9							
				2.6							
13	器種 不明	完形	珪質 石灰岩	2.3	71	全面を丁寧に研磨。	なし。	なし。	細かな石灰岩の製品。用途不明。	D9 B層	
				2.5							
				1.0							
14	石造物 未成品	完形	凝結 砂岩	0.1	108.9	全面を粗く磨打により成形。	なし。	なし。	圓丸三角形製品。全面に加工痕。気味を意識して製作か。	C7 ⅧA層 B層	
				0.0							
				4.8							
第 66 図 図版 62	15	石造物 未製品	不明	凝結 砂岩	13.2	4620.0	ハンマーで粗削りし。タガネや歯ビシャンで調整。	なし。	なし。	楕円形あるいは方形製品を意識して加工か。	ⅧA層
					19.1						
					11.4						
	16	石造物 未製品	不明	凝結 砂岩	21.9	332	方形に加工し表面を少し磨く。	なし。	なし。	方形・柱状の製品を意識して加工か。一部内は面取りを行う。	ⅧA層
14.1											
17	石造物 未成品	不明	凝結 砂岩	8.1	580.0	彫刻は深く表面は丁寧に磨かれる。	なし。	量と量をレリーフにした製品。	高麗輝石の一部か。	C8 B層	
				10.8							
				6.7							
18	石造物	上部	凝結 砂岩	16.0	2080.0	彫刻は深く表面は丁寧に磨かれる。	なし。	帯の痕を意識して製法が関係。	東石の製法。	C5 ⅧA層	
				16.6							
				10.5							
第 67 図 図版 63	19	石碑	完形	凝結 砂岩	17.45	約 430,000	表裏面を平滑にして磨き、下部を凸状に加工しノミ痕明確。	なし。	文字のみ。	昭和11年都の首正平聖廟復興記念碑。	南西隅 表土
					73.5						
					14.0						



第65図 石製品・石造物1



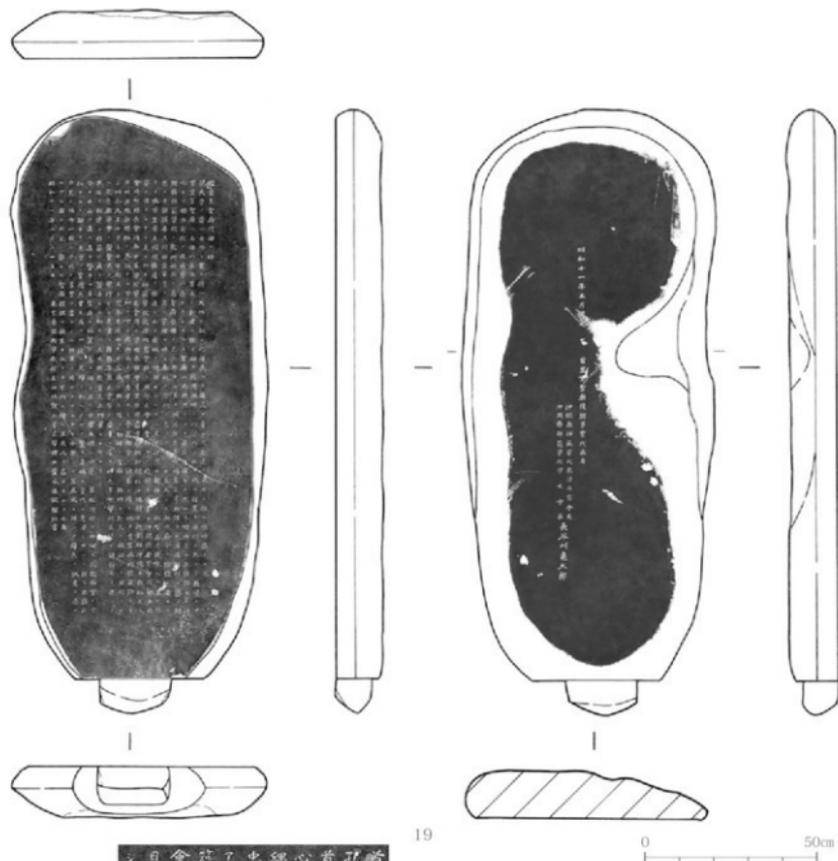
図版 61 石製品・石造物 1



第66図 石製品・石造物2



図版 62 石製品・石造物 2



19

0 50cm



拓本部分拡大1



拓本部分拡大2

第67図 石碑



19



碑文部分拡大1



碑文部分拡大2

19 玉・ガラス製品 (第20表、第68図、図版64)

① 玉 (1～13)

玉は総数で36点が得られている。材質は、石製1点以外はガラスが占めている。形状は大半が丸玉であるが、勾玉になると思われる製品が、石製・ガラス製で各1点含まれる。この内27点は、新造成層の木炭・貝類集中土壌をフレイにより水洗選別(フローテーション)して得られたものである。

破損を含むガラス製35点を色調で分類すると、黒色が22点と最も多く、次いで青色が6点、白4点、赤2点、緑1点となっている。出土層位は新造成層及び第Ⅲ層を中心とするため、17世紀前半以降のものになると思われる。

この中で特筆できるのは、13に示した石製勾玉の尾部である。蛇紋岩製で明青灰色地に青灰色の脈が入る。全面が精緻に磨かれ光沢を成す。

また、今回水洗選別により回収された資料の中に、微小なサイズのガラス製玉が23点確認されている(図版64-9～12)。内訳は丸玉22点、勾玉状1点である。色調は丸玉が黒色、勾玉状は表面が黒色、断面が青色を呈すことから、丸玉の黒色部分は表面のみで、内部は青色等になる可能性がある。

この微小玉のサイズは、最小で高さ0.7mm、直径1.6mm、孔径0.9mmとなっており、その他製品も直径2mm以内となっている。これらは風化により表面が剥落したわけではなくさうなので、当初からこのサイズを意図して製作した可能性がある。詳細は第20表の観察表に譲る。

② ガラス製品 (14～31)

玉以外のガラス製品をまとめた。種別としてボタン状製品・おぼじき・ランプのホヤ・ポッペン(びいどろ)・瓶・蓋・管がある。以下に概要を記し、詳細は第20表にまとめた。

14～18はガラス製のボタン状製品である。片面が扁平になる資料14・16～18と断面レンズ状の資料15がある。14～17は黒色ガラスを用い、18は白色で風化が著しい。片面扁平資料は、溶解したガラスを滴状に落として固めたと思われる、表面にはラミナ状の流文や気泡が残り、扁平部には製作台の凹凸が転写される。19は半透明の白色ガラスに黄色ガラスをマーブル状に施したおぼじきと思われる資料である。片面に「㊦」の陽刻がされる。なお、15は第1期とした16世紀代、18は第2期とした17世紀前半の造成層内から出土している。

20はランプのホヤと思われる製品である。透明ガラス製で口縁部が外反する形状。吹吹きにより製作されたとみられる。F-5ピット内から出土していることから、本ピットを近代の遺構とした。

21はガラス製の玩具、ポッペン(びいどろ)のパイプ部分と思われる資料である。本資料は実験器具にしては極端に薄く、表面が銀化している点、また、他府県の出土例からポッペンとした(京都市埋蔵文化財研究所編2004、長崎県教育委員会2005)。

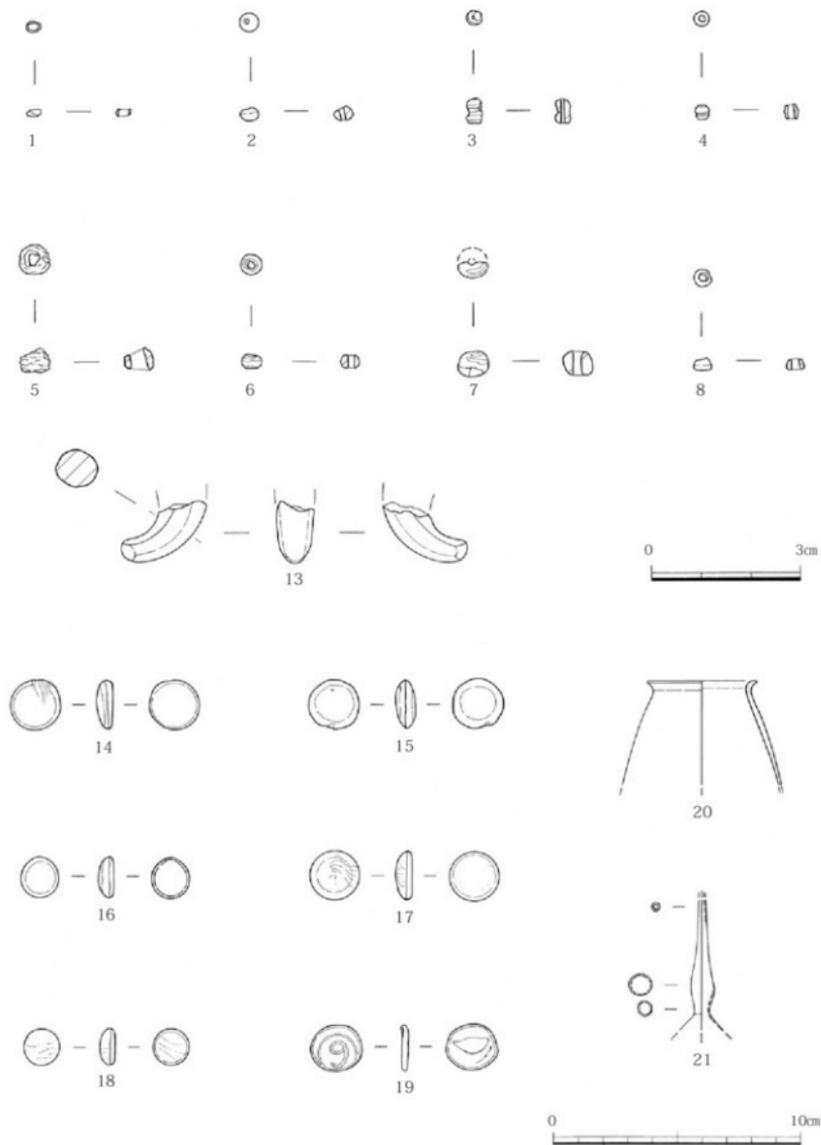
図版64-22～31に示したのはガラス瓶や蓋・管である。ガラス瓶は底部に「㊦」のエンボスから丸蓋製と思われる。23・24は蓋。25～31は理化学実験用のガラス管である。当地には琉球大学当時、第1理学校舎や教養教室が存在していたことから(第6図)、これらはその遺物と考えられる。

第20表 玉観察一覧

図・図版番号	番号	材質	色	法相 (mm ^φ)				観察事項	グリッド・層
				高さ	最大径	孔径	重量		
第68図 図版64	1	ガラス	青	1.5	3.0	2.0	0.01	焼熱・変形するコイル状の玉。焼熱のため透明度は低い。	
	2	ガラス	青	3.0	3.0	1.0	0.02	半透明の丸玉。表面は風化によりただれ、気泡が目立つ。横位に巻きつけ技法の製作跡である細長紐がみられる。	Ⅷ風
	3	ガラス	青	5.0	3.0	0.5	0.09	コイル状の玉が2点接着する資料。焼熱のため透明度はなく、表面もマット。	E-5 Ⅷ風
	4	ガラス	緑	3.0	3.0	1.0	0.06	3と類似するコイル状の資料。焼熱のため透明度はなく、表面はマットで気泡多い。	Ⅷ風
	5	ガラス	白	5.0	6.0	3.0	0.18	全面が風化により剥落。気泡多く、縦線状の巻きつけの痕跡がみられる。	D-8 Ⅷ風
	6	ガラス	白	2.8	3.9	1.5	0.08	風化により全面が白濁した玉。	C-8 Ⅷ新成
	7	ガラス	白	5.0	6.0	1.5	0.20	平欠品。全面に風化したガラスの塊が覆う。横位に巻きつけの痕跡がみられる。	C-3 新造成 貝類集中土層上
図版64	8	ガラス	赤	2.5	3.5	2.0	0.04	横位に巻きつけの痕跡がみられる。透明度はなく、ややマットで気泡みられる。	C-3 新造成
	9	ガラス	黒	1.3	2.0	0.8	0.10	黒色の微小玉。透明度はなく、表面はマットでクレーター状の気泡多い。	
	10	ガラス	黒	0.7	1.6	0.9	0.08	黒色の微小玉。透明度はなく、表面はマットでクレーター状の気泡多い。	
	11	ガラス	黒	0.9	1.7	0.7	0.07	黒色の微小玉。透明度はなく、表面はマットでクレーター状の気泡多く、石灰質の小塊が付着する。	C-3 新造成 貝類集中土層上
	12	ガラス	青	-	-	-	0.02	勾玉状の微小玉製品。全面が風化し茶色に変色するが、縦断面から青色ガラスであることが確認できる。	
第68図 図版64	13	石	青	0.7	0.70 0.75	-	1.50	蛇紋岩製の勾玉尾部。明青灰色地に青灰色の脈が入る。全面が精緻に磨かれ光沢を成す。	C-7 Ⅲ期

第20表 ガラス製品観察一覧

国・ 図版 番号	番号	色調	種類	法量 (m・g)				観察事項	グリッド・層
				口径	器高	胴径/ 厚さ	重量		
第68図 図版64	14	黒	ボタン状	2.1	—	0.60	4.9	片面扁平の丸餅状のボタン状製品。表面はマットでラミナ状の流文みられる。透明度はなく、縁辺は磨滅している。	C9 II層
	15	黒	ボタン状	2.0	—	0.78	4.8	断面レンズ状の製品。焼熱により表面はただれて一部変形し、酸化がみられる。出土層位から15～16世紀になる可能性がある。	C2造成(貝集中) 半蔵②(北側)
	16	黒	ボタン状	1.7	—	0.65	2.7	片面扁平の製品。黒色だが強明にかざすと暗緑色に透過する。風化みられず破損。	C9 II層
	17	黒	ボタン状	2.0	—	0.65	4.2	片面扁平の製品。黒色だが強い強明にかざすと暗緑色に透過する。風化により一部酸化して剥落する。	C9 破損
	18	白	ボタン状	1.5	—	0.65	1.1	片面扁平の製品。全面が風化して白濁するが、破損面から黒色のガラスが確認できる。出土層位から17世紀前半になる可能性がある。	C3新造成 貝集中上土 サンプル
	19	白	おはじき	2.1	—	0.25	1.5	扁平なおはじき状製品。白色ガラスに黄色ガラスがマーブル状に混入。片面に※の陶刻印あり。	D-E-F3 破損
	20	透明	ランプ のぼや	4.4	—	—	7.2	口縁部が反する形状。宙吹きにより製作されたと思われる、わずかな歪みと横位にラミナ状編模様を確認できる。	F5 ビット内
21	透明	ポッペン (ひいどろ)	残存長 (5.0)	最大径 0.9	パイプ 最小径 0.4	2.1	ガラス製の玩具。ポッペン（ひいどろ）のパイプ一節の付根部分か。器壁はパイプ部で0.7mm、球体の薄部で0.3mmと薄い。やや黄色の透明ガラスで気泡を含み、表面がわずかに酸化する。	C2 破損	
図版64	22	透明	瓶	2.0	6.4	5.2	96.2	マルゼン製のインク瓶。型成形で側面に縦位にバリが残る。口縁はスクリューキャップで底部に※、「2oz」のエンボス。	破損
	23	透明	蓋	9.0	4.6	—	70.3	型成形の蓋。上部中央に宝珠様の掘込みが付く。側面は摺りガラス状に加工であることから、摺り合わせ瓶の蓋になると思われる。	破損
	24	茶	蓋(栓)	5.0	3.7	—	65.2	摺り合わせ瓶の栓。上部は傘状で栓部は円柱状の摺りガラス。	B7 破損
	25	透明	棒	残存長 (6.1)	胴径 0.4	—	2.1	実験器具の摺り棒か。端部丸く、焼熱により一部変形する。	破損
	26	透明	管	残存長 (14.0)	最大径 2.4	最小径 0.5	16.2	実験器具のガラス管。茶色の「25ml (1LINE)」の文字と社名がACL印刷される。	B2・3 破損
	27	透明	管	残存長 (14.2)	0.9	—	8.7	「L」字に加工された実験器具のガラス管。	B8 破損
	28	透明	管	残存長 (6.0)	1.3	—	5.6	表面に目盛と数字がACL印刷されるガラス管。試験管か。	B6 埋土
	29	透明	管	残存長 (5.0)	最大径 1.4	最小径 0.8	7.0	実験器具と思われる摺り合わせガラスの管。連結して分岐するための部位か。	破損
	30	透明	管	残存長 (5.7)	最大径 0.7	最小径 0.2	2.0	端部が細くなる実験器具と思われるガラス管。	C2 破損
	31	透明	管	残存長 (5.9)	最大径 1.2	最小径 0.5	5.1	実験器具のガラス管。胴部が歪むつくり。	破損



第68図 玉・ガラス製品



図版 64 玉・ガラス製品

20 骨製品・貝製品 (第21・22表、第69・70図、図版65・66)

①骨製品 (1～7)

骨製品は完品のボタン (1・2) が2点出土している。3は魚骨を加工した製品で中央が穿孔される。御内原北地区でも類品が出土している。4・5は哺乳類骨を加工したハブブラシでブラシ部のみのもので、柄部の部分がそれぞれ出土している。6は鎌で刃部は断面菱形である。丁寧に研磨され、表面は光沢をなす。御内原北地区では完品が出土しており、同様の製品と考えられる。7は半月状製品で全体に研磨調整がされる。両面の刃縁部には線状痕が多くみられるため、使用時の痕跡の可能性が高い。詳細は個々の観察表に記入する。

②貝製品 (1～10)

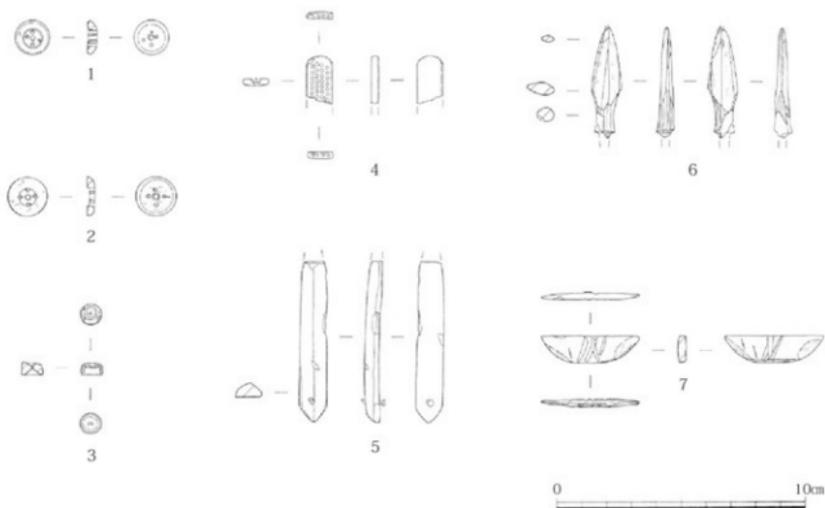
貝製品はマガキガイ製の独楽が出土している。今回の発掘調査では、独楽が数点出土しているが、ほぼ完形に近い状態の製品 (1)、一部使用時の破損がみられる製品 (2・3)、螺頭・螺旋部分が破損している製品 (4)、螺頭・螺旋部分の破損部分を研磨する製品 (5) があり、独楽の使用過程がうかがえる製品が出土している。ヤコウガイ製で、穿孔された製品 (6・7) も出土している。ヤコウガイ製の貝匙が出土しており、研磨される小型の製品 (8)、ほとんど研磨されない大型の製品 (9) がある。ハマグリ製の碁石が出土している (10)。こちらは断面中央部分が厚くなるレンズ状の形態をしている。貝製、小型製品ということから、囲碁用の碁石の可能性が高い (上原 2004)。

第21表 骨製品観察一覧

図・図版番号	番号	種類	完破・部位	材質	法量 (cm/g)				観察事項	グリッド・層
					縦	横	高さ/厚さ	重量		
第69図 図版65	1	ボタン	完品	骨	1.4	1.4	0.4	0.8	哺乳類骨を加工したボタン。円盤状で表面中央部分に沈陥を認らせ、その内部がくぼみ、系通し孔が5点穿孔。内面とも丁寧に磨かれている。蓋状の道具で穿孔しているため、表面部分の孔は大きく、裏面部分は小さくなっている。	D-9 Ⅱ層
	2	ボタン	完品	骨	1.6	1.6	0.4	0.7	哺乳類骨を加工したボタン。円盤状で中央部分にくぼみ、その部分に系通し孔5点穿孔。系通し孔の中心のサイズがすべての孔より最も大きい。表面は丁寧に磨かれ、裏面はやや粗。	C-9 Ⅱ層
	3	ビード?	破片	骨	0.85	0.85	0.5	0.2	魚骨を加工した製品。中央部分が穿孔により孔があらわれている。全体を斜めに切られている部分があり、その痕跡が残っている。ビードか?	C-3 新造 目次集中土 サンプル
	4	歯ブラシ	破片 ブラシ部	残存 (1.9g)	1.1	0.3	0.6	0.6	牛骨製か、ブラシ部分が残存しており、横毛4列28溝確認できる。上端部からの穿孔があることから、櫛毛の塊にくるようになるように作成されている。全面、丁寧に磨かれている。残存部は幾何学的形状を呈している。	D・E・F-2 Ⅱ層
	5	歯ブラシ	破片 柄部	残存 (6.5)	1.1	0.6	0.6	0.2	牛骨製か、柄の部分が残存している。断面三角形形状を呈している。全面丁寧に磨かれている。柄端部に穿孔され、蓋製の痕跡が若干みられる。	C-9 Ⅱ層
	6	鎌	破片 刃部	残存 (4.5)	最大幅	—	2.3	—	ジュゴン骨を加工した鎌。刃部は円形で刃部は断面菱形を呈している。刃部は一部欠けている。舌部分は一部のみ残存しており、刃の小さな遺跡で附られ、刃縁が確認できる。丁寧に研磨され、光沢がある。刃縁部はより丁寧に磨かれている。	C-6 Ⅴ層
	7	刀子状 製品	完品	骨	1.1	4.0	0.35	1.6	半月状で両端部が薄くなる製品。全面丁寧に磨かれている。両面とも中央部分に先端が平たい道具で穿けられた太目の沈陥が認められる。両面の刃縁部に線状痕が多く見られる。	D-1 Ⅳ底以下

第22表 貝製品観察一覧

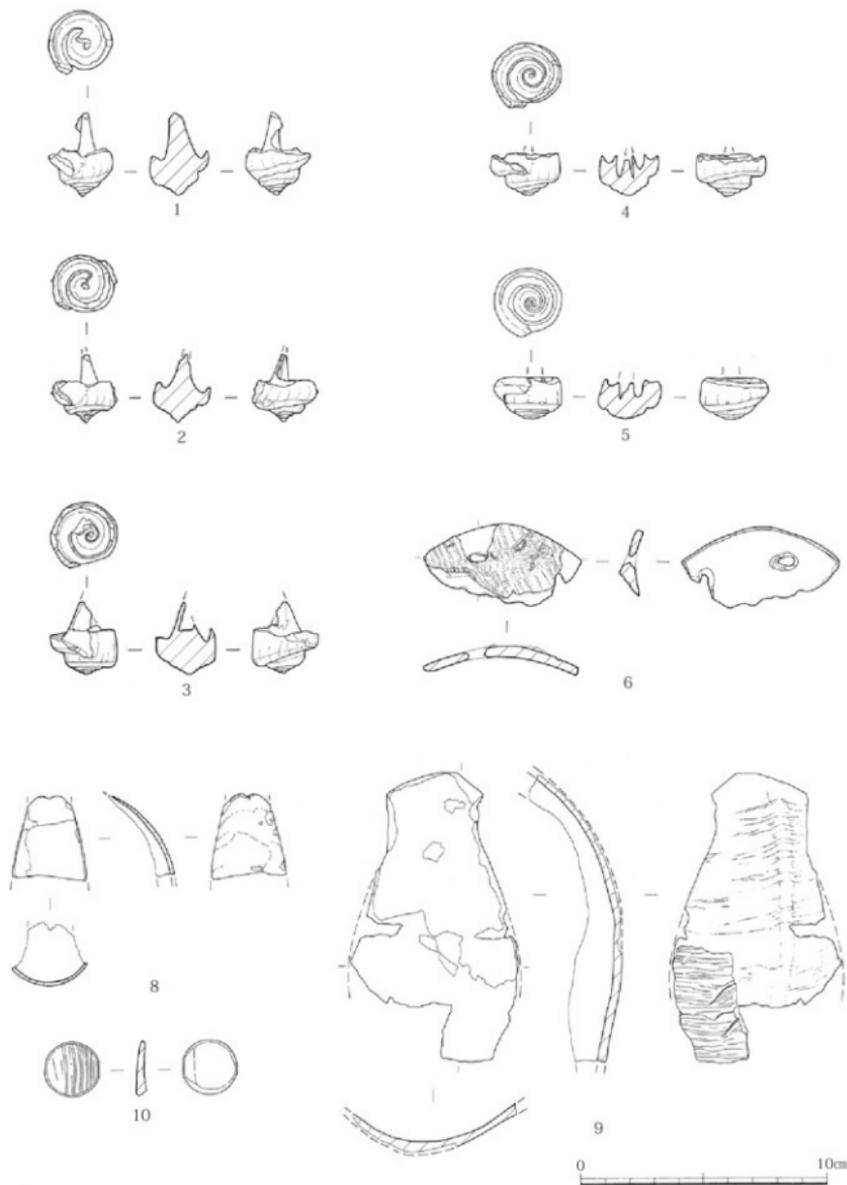
図・図版番号	番号	種類	材質	法量 (cm/g)				観察事項	グリッド・層
				縦	横	高さ/厚さ	重量		
第70図 図版66	1	独楽	巻貝	—	2.6	3.4	11.0	マガキガイ製の独楽。体殻部を打削除去し、螺頭・螺盤中心を残している。外面殻長部も残存している。	C-4 新造
	2	独楽	巻貝	—	2.5	残存 (2.8g)	10.5	マガキガイ製の独楽。体殻部を打削除去し、螺頭・螺盤中心を残している。外面殻長部も残存している。	C-3 新造
	3	独楽	巻貝	—	2.7	残存 (2.8g)	10.6	マガキガイ製の独楽。体殻部を打削除去し、螺頭・螺盤中心を残すように製作。螺頭・螺盤部は一部破損。殻長部はやや欠けている。	E-6 方形石目 Ⅳ底2層
	4	独楽	巻貝	—	2.85	残存 (1.7)	11.7	マガキガイ製の独楽。体殻部を打削除去し、螺頭・螺盤中心も打削除去されている。殻長部もやや欠けている。	C-3 新造
	5	独楽	巻貝	—	2.7	残存 (1.7)	15.3	マガキガイ製の独楽。体殻部を打削除去し、螺頭・螺盤中心も除去し、平たく研磨が行われている。外面も一部磨削が行われている場所がある。外面殻長部はつるれ、縁に磨かれている。	C-3 新造
	6	有孔製品	巻貝	残存 (3.4)	残存 (6.4)	残存 (0.5)	12.6	ヤコウガイ製。孔径0.7cm。孔が2点あり、1点は一部破損している。2点とも内面の約縁が大きいので、外面からの穿孔が行われている。用途不明	C-9 Ⅲ底瓦面
	7	有孔製品	巻貝	残存 (9.7)	残存 (7.0)	高さ (2.0)	61.2	ヤコウガイ製。1点孔がつけられ、孔径は(縦)0.7cm、(横)2.2cm。内面の約縁が大きいので、外面からの穿孔が行われている。	C-4 新造
	8	貝匙	巻貝	残存 (3.5)	残存 (3.0)	0.15	3.8	ヤコウガイ製貝匙の基部と思われる製品。外表面は研磨され、真珠殻が露出している。基部の残存状況から小型の貝匙製品と考えられる。	C-3 新造 目次集中土 サンプル
	9	貝匙	巻貝	残存 (11.9)	残存 (8.8)	残存 (0.3)	41.3	ヤコウガイ製貝匙の基部から柄部と思われる部分が残存している製品。外面は真珠殻が露出しているが、一部は外面が残り、内面にもあるため磨削は行われていない。	C-4 新造
	10	碁石	二枚貝	2.25	2.2	—	3.4	ハマグリ製の碁石。断面中央が薄く、断面凸凹する碁石の製品。全面丁寧に磨かれている。貝製品であることや断面形状などから碁石であると推定される。	Ⅱ層



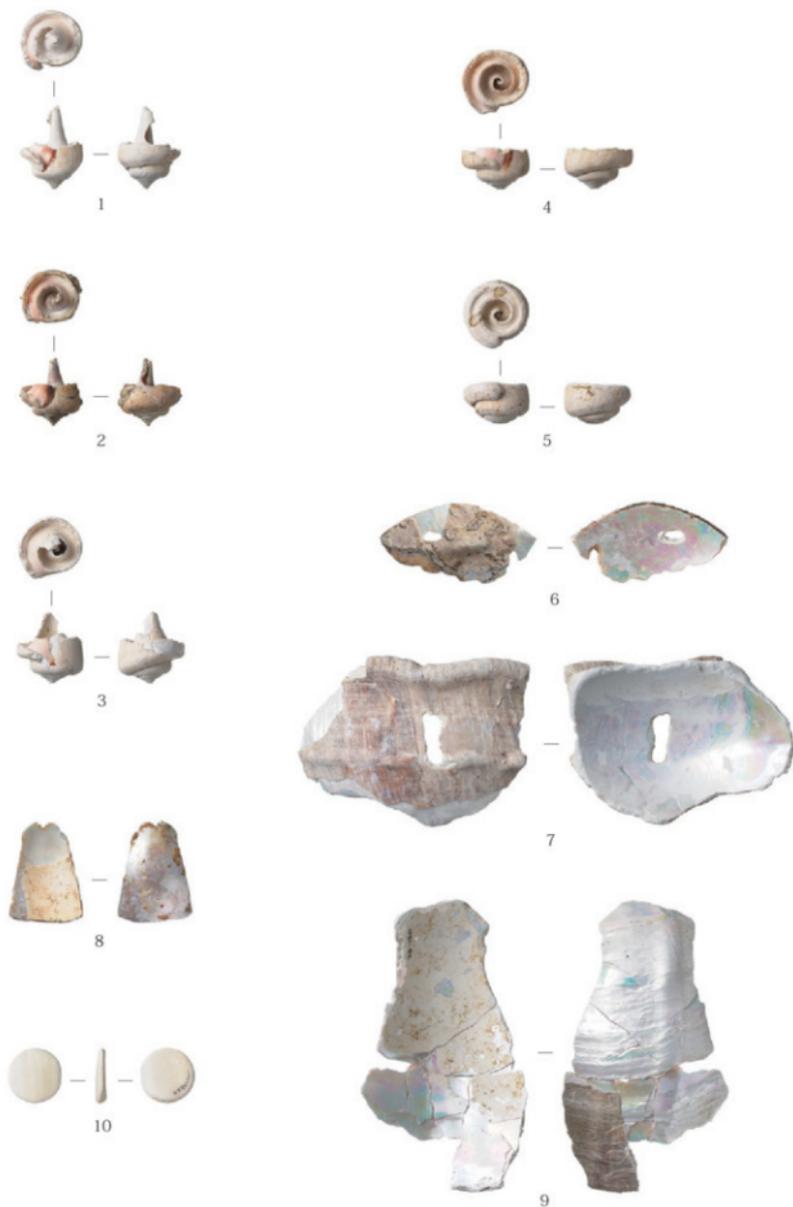
第69圖 骨製品



圖版 65 骨製品



第70図 貝製品



圖版 66 貝製品

21 壁面材（図版 67）

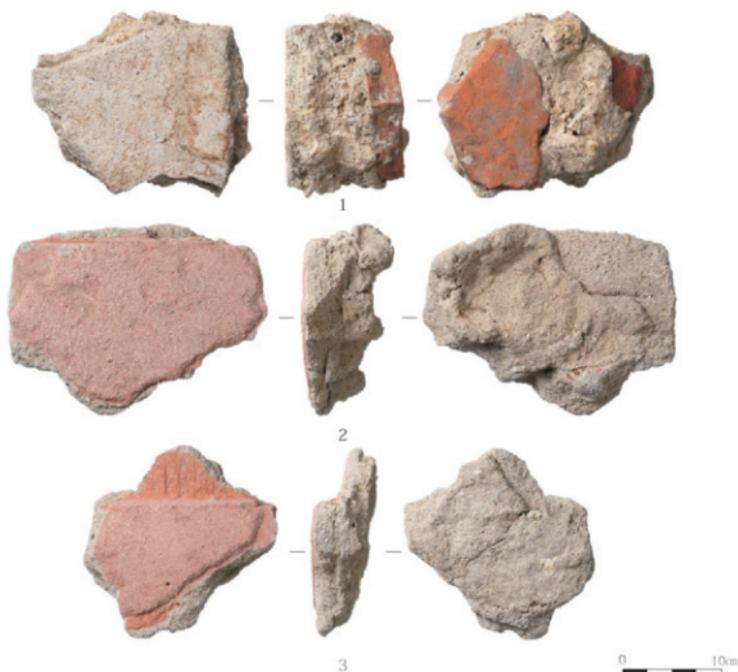
漆喰あるいはモルタルの壁面材と思われる資料が、表土及び第Ⅱ層を中心に多数出土している。これらの多くは小片で出土するが、中には塊で出土する例もあり、その断面から構造や施工の工程を確認することができた。ここでは後者を3点抽出して報告する。

資料の構造は大きく3層に分けることができる。まず下地として、施工箇所に①琉球石灰岩や瓦等の骨材を混和材とした層を厚く施す。次に②砂粒を混入した層を15mm前後の厚さで施すことにより、表面を平坦にする。③仕上げとして朱色に着色した層を5mm前後の厚さで塗り広げる。

図版 67 に示した資料の重量は、1 が 5,380g、2 が 3,140g、3 が 1,640g である。

この赤色の壁に関する情報として、平成 18 年度調査時の表土掘削時に出土した石碑の銘文に手掛かりが読める（第 67 図拓本部分拡大 2、図版 63 写真部分拡大 2）。「其ノ丹壁朱櫓ハ四邊ノ翠松緑樹ト相映ジ孔教弘宣ノ宗社タルニ耻ズ・・・」とする一文であるが、この中の「丹壁朱櫓」が、「丹塗りの壁・朱色の柱」を意味しており、首里至聖廟の施設として、丹色・朱色に彩色された建物が存在していたことを示している（沖縄縣師範学校校友会 1937）。

なお、戦前のモルタルについては、平成 22（2010）年度の中城御殿跡発掘調査において、石造遺構の表面や目地として多用される状況が確認されていることから（沖縄県立埋蔵文化財センター 2012）、戦前のある時期から使用されていたことがわかる。しかし、今回出土した資料は中城御殿出土資料と異なり白色及び朱色であることから、今報告では漆喰かモルタルとしたが、この成分については今後分析により解明していく必要がある。



図版 67 壁面材

22 瓦 (第23～29表、第71～81図、図版68～76)

屋瓦は本地区から7,440点が出土した。これらはほとんどが破片で、その特徴から造瓦技術別に大別すると、グスク時代の高麗系瓦及び大和系瓦と、近世以降の明朝系瓦、近代大和系瓦の4種類に分けることができる。出土量は高麗系瓦が約1% (57点)と最も少なく、次いで大和系瓦 (近代大和瓦含む) が約4% (268点)、明朝系瓦が約95% (7,115点)と最多である。この結果は本地区における建造物が、明朝系瓦主体であったことを示しているといえる。以下に、種類別に内容を紹介するが、これらの分類は、隣接する首里城御原北地区の報告で上原静が行った概念 (沖縄県立埋蔵文化財センター2010) に準じた。次に造瓦技術・機能別の概要を述べるが、個々の特徴については観察表に示し、上原静による沖縄県出土瓦の概念整理を行った成果から分類可能な資料を記載している (上原2013)。

A. 高麗系瓦

高麗系瓦の出土量はわずかで、攪乱層か一部遺構内やⅢ層から出土するが、今調査では本瓦主体の層や遺構は確認されていない。その種類も丸瓦・平瓦の2種類のみである。

A-1. 丸瓦: 高麗瓦特有の羽状打捺文様がみられる。

A-2. 平瓦: 平瓦片は51点出土している。凸面側に羽状打捺文様、格子状の文様があるものが出土している。

B. 大和系瓦

大和系瓦も高麗系瓦と同様に、攪乱層か造成層から出土している。種類は軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦の4種類がみられた。胎土や色調などから、明朝系瓦の技法で製作された大和系瓦で、第二の大和系瓦 (上原2013) と呼称されるものが出土している。

B-1. 軒平瓦: 瓦当部の破片資料が5点出土している。瓦当文様は、唐草文様の1種類を確認することができた。

B-2. 丸瓦: 丸瓦は80点出土している。ほとんどが破片資料のため、玉縁部、筒部、端部の3部分に分けて集計した。以下に色調、凸面の文様、凹面の処理、個体数に分けて、それぞれの特徴についてみていきたい。

- ・色調: 灰色と褐色の2種類に分けられる。
- ・文様: 丸瓦の凸面に認められる叩き文様の種類は、縄目文と、不明文様が確認された。
- ・凹面痕跡: 丸瓦に特徴的な刺網状圧痕が確認された。布目圧痕が確認できるものもある。
- ・端部成形: 端部面取りは1cm以下から7.1cm以上の8段階に分けて観察した。
- ・個体数: 1個体につき、左右の角を1つとして、端部角の総数を2で割った数を個体数とした。しかし、端部角が残存する資料が少数のため個体数の算出はできなかった。

B-3. 平瓦: 平瓦は142点出土している。基本的に撫で成形が全体になされるが、凸面に糸切痕が残るものがある。

- ・色調: 灰色と褐色の2種類に分けられる。
- ・大きさ: 破片資料が多いため、大きさをおさえられる資料は少ない。ただ、厚みに着目すると3種類に分類される。このことは平瓦の大きさに反映していることも考えられる。
- ・厚み: 平瓦の大きさに反映していると推定され、3種類に分類した。基準は次の薄手: 1.1～1.4cm、中手: 1.5～2.5cm、厚手: 2.1～2.5cmである。
- ・側面: 側面は形態的な違いがみられる。a～dの4種類に分類した (第23表)。
- ・端部成形: 端部面取りについては、丸瓦と同様に1cm以下から7.1cm以上の8段階に分けた。
- ・個体数: 1個体につき、4つの角があることから、端部角の総数を4で割った数を個体数とした。しかし、端部角が残存する資料はみられないので個体数の推定はできなかった。

第23表 大和系平瓦側面部の種類と説明

分類説明		説明
形態	記号	
	a	側面のナデ成形時に余りの粘土を凹面側に押し上げたもの。
	b	側面が二面の様になるもの。下面側に削り取り痕が残されている。
	c	側面の全ての角がナデ調整され、スムーズな曲面をなすもの。
	d	側面のコーナーが削り取りのままに近い様をつくるもの。

B-4. 雁振瓦：雁振瓦はその大きさや形態から2種類に分けられる（第100図）。

I型（小形）は丸瓦部が小さく、その両側に平坦な平瓦が付く形の瓦である。

II型（大形）は丸瓦部が大きく、その両側に大きく湾曲した平瓦が付く形の瓦である。

B-5. 役瓦：2点の破片資料があるが、破片資料のため詳細は不明。

B-6. 近代大和系瓦：丸瓦（18）、平瓦（21）のほか、重ね痕から平瓦とは葺き方が異なり、棧瓦状になる可能性のあるもの（9）が出土している。



第71図 雁振瓦の分類

C. 明朝系瓦

明朝系瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の4種類がみられた。そのうち、軒丸瓦と軒平瓦については、上原静の分類（上原2008, 2010）を参考にしている。個別の観察表には、上原2013の分類を（上原：式）記載している。

C-1. 軒丸瓦：軒丸瓦は206点出土している。色調別には灰色系と赤色系（褐色を含む）に分けられる。

その比率は、73対133で赤色系が多い。

瓦当文様は、花を横から見た構図の側視型、花を正面から見た正視型に大別され、側視型はさらに花や茎、子葉まで全体を表現する側視1型、茎やその他の部分を省略し花部分のみを大きく強調する側視2型に分かれる。今回は御内原北地区では出土しなかった正視型も出土している。

さらに細かくみていくと、草花文側視1型は文様の系統（花芯、茎、葉、珠文などの表現のバリエーション）によりA・B群に細分される。側視2型は2種類である。また、色調と文様との関係のみをみると、灰色系及び赤色系ともに牡丹文様となっている。

以下、それぞれ細分した瓦の種類を整理すると、草花文側視1型のA群は4種類、B群は7種類、草花文側視2型は2種となり、正視型は2種で、全部で15種類に細分された（第24表）。

C-2. 軒平瓦：軒平瓦は181点出土している。色調別には軒丸瓦と同様に灰色系と赤色系（褐色を含む）に分けられる。その比率は、50対131で赤色系が多い。瓦当文様は草花文側視1型及び側視2型がみられた（第25表）。前者は文様の系統（花芯、花弁、茎、葉などの表現のバリエーション）によりA・B・C群の3種類に分けられる。また、文様は牡丹とその他の花の2種類がみられ、色調との関係では草花文側視1型は灰色が多く、側視2型は赤色のみ確認される。

C-3. 丸瓦：丸瓦は2,817点出土している。そのほとんどが破片資料のため、玉縁部、筒部、端部の部位別に集計を行った。以下に、色調、付着物の状況、ヘラ描き印に分けて概観する。

- ・色調：灰色系と赤色系（褐色含む）に分けられ、その比率は1,202対1,615である。
- ・付着物：漆喰が付着する資料が確認された。
- ・ヘラ描き印：横線や斜線、線を交差させて描いたものなど、様々な種類のヘラ描き印がみられた。

これらが描かれた部位について注目すると、玉縁部、筒部、玉縁部と筒部の両方という3パターンがみられた。そこで、玉縁部に施すものをA群、筒部に施すものをB群、玉縁部と筒部の両方に施すものをC群とし、線の種類の違いで細分した。その結果、A群が9種類と最も多く、B群は8種類、C群は2種類であった（第72図・第26～28表）。

C-4. 平瓦：平瓦は3,911点出土している。破片資料が多いため、広端部、狭端部、筒部の部位別に集計を行った。灰色系と赤色系（褐色含む）に分けられ、その比率は1,904対2,007で赤色系が多い。

- ・色調：灰色系と赤色系（褐色含む）に分けられる。赤色瓦の中には、器表面にマンガン釉を施すのみがみられる。
- ・付着物：漆喰の付着する資料がある。
- ・その他：凸面に文様の一部と考えられる線描きのみがみられるものがある。

第24表 軒丸瓦分類表

草花文側視1型

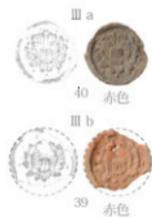
A群



B群



草花文側視2型

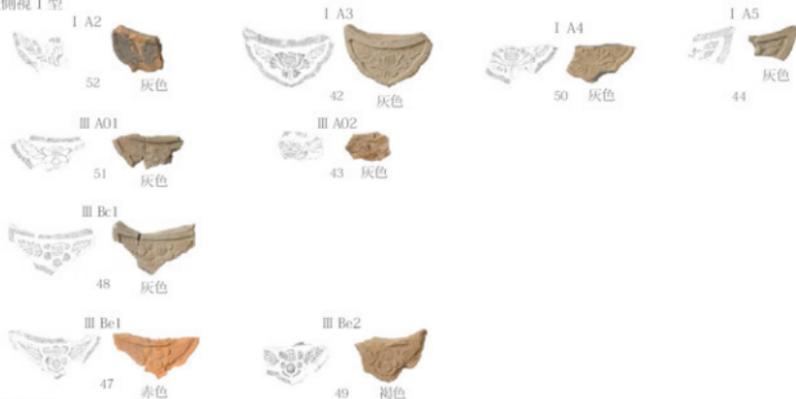


草花文正視型



第25表 軒平瓦分類表

草花文側視1型



草花文側視2型



その他



役瓦(雲形)



役瓦?



第72図 へら描き印の位置

第26表 丸瓦のへら描の種類と説明

形態	記号	分類説明	説明	刻印位置	形態	記号	分類説明	説明	刻印位置
横線	1本線	—	水平方向の線描	Aa Ab	斜線	2本線	∖	左上から右下方向へのめの二本線	Aa Ab B
	2本線	==	水平方向の平行する二本線の線描	Aa Ab		3本線以上	≡	斜め方向に三本以上組み合わせる線描	Ab
縦線	1本線		垂直方向の線描		交差線	2本線	×	二本線を「×」状に交差した線描	Ab Ac B
	1本線	/	右上から左下方向への斜め線描	Aa Ab Ac B		3本線以上	⊗	右下から左下方向の二本線と左上から右下方向への二本線の組合せ	Ab
斜線	1本線	\	左上から右下方向への斜め線描	Aa Ab B	山形	1本線	∧	山形状の線描	
	2本線	//	右上から左下方向へのめの二本線	Aa Ab B		その他			その他の線描

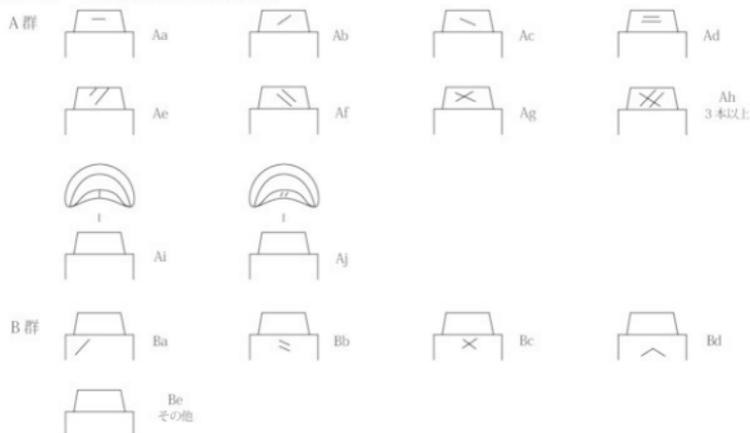
第27表 丸瓦の色調とへら描1

色調	位置	分類	横線		斜線			交差線		山形	その他	合計	
			1本	2本	1本	2本	3本以上	2本	3本以上	1本			
灰色瓦	A群	a	3		3	1	1	2				10	
		b	4	1	1	6		3	1	5	3	24	
		c			1	2				1		4	
	B群			2	1	1	1		2		1	9	
	計	7	1	7	10	2	6	1	8	3	1	47	
褐色瓦	A群	a	2		1	1	1					5	
		b	4		1	8		2	7	2		24	
		c				1			3			4	
		a+b					1					1	
	B群			1	4	1	1				3	10	
計	6	0	3	14	3	3	0	10	2	0	3	44	
赤色瓦	A群	a	1									1	
		b	1		2	5		1				9	
		c				1						1	
	B群			1							1	2	
計	2	0	3	6	0	1	0	0	0	0	1	13	
合計		15	1	13	30	5	10	1	18	5	1	5	104

第27表 丸瓦の色調とへら描2

色調	位置	分類	横線		斜線		交差線		合計
			1本	2本	2本	2本	1本	3本以上	
灰色瓦	A群	a	—		—	—		—	4
		b	//		×	≡		×	
		計	1		1		1		
褐色瓦	C群	a+b			—				2
		b					×		
		B					//		
		計			1			1	
合計									6

第28表 明朝系丸瓦(印あり分類表)



第29表 瓦観察一覧1

図・図版番号	番号	技術	種類	分類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量、土原分類	グリッド・層
第73図 図版68	1	高麗系	丸瓦	—	端部	灰	凸面羽状文で端部まであり、一部ナデ。凹面布目直、端部まであり、布のシワ跡が残る。厚み1.8cm。	C9 Ⅲ層
	2	高麗系	平瓦	—	狭端部	灰	凸面羽状文、凹面布目直、細細瓦痕あり、狭端面取り。厚み1.6cm。	D3 覆瓦
	3	高麗系	平瓦	—	広端部	灰	凸面羽状文でナデ、一部破損。凹面布目直、糸切痕あり。広端に狭い面取、側面分割目安あり。厚み2.05cm。	C8 覆瓦2
	4	高麗系	平瓦	—	筒部	灰	凸面格子状文か？。一部分割目安残る。凹面細かい筋状痕。一部に太い線状の瓦痕あり。厚み1.4cm。	D9 覆瓦
	5	大和系	軒平瓦	—	破片	灰	瓦当部片、右側部分で角残存。唐草文、瓦当面に白砂がわずかに付着。顎附付。瓦当裏面タテズリ、ヨコナデあり。	E4 覆瓦
	6	大和系	軒平瓦	—	破片	灰	瓦当部片。唐草文一部残存。顎部分が破損。顎附付の接合面に、接合強化のための×状掻き痕あり。	C4 新造成
	7	大和系	軒平瓦	—	破片	灰	瓦当部片。唐草文、中心飾りが3枚残存。瓦当面に白砂付着。顎附付。瓦当裏面ヨコナデ。	C4 新造成
	8	大和系	雁振瓦	Ⅱ	筒部	灰	平瓦部が多く残り、丸瓦部分がわずかに残存。凸部ナデにより甲き跡がわずかのみ残存。凹面には布目痕あり。	D5 覆瓦
	9	近代 大和系	棧瓦	—	端部	灰	凸面に漆喰と瓦を重ねた痕跡が残存し、凸面を上位に重ねていた可能性がある。棧瓦か。凹面に太目のタテナデ痕あり。凹面に白色粒、黒色粒が多く見られる。	南覆瓦
第74図 図版69	10	大和系	丸瓦	—	筒部	灰	凸面に羽状文や縄目ではないタイプの甲き目が残る。4面の面取あり。凹面に斜し細状瓦痕、布目瓦痕あり。白砂が付着。端部向の残存なし。	D6 方形石組 西側3層
	11	大和系	丸瓦	—	筒部	黒	側面あり。凹面に甲き目あり。凹面に縦位の瓦痕、布目瓦痕あり。大量の白砂が付着。端部向なし。側面は面取される。	C2 造成
	12	大和系	平瓦	d	側面部	灰	凸面糸切痕あり。凹面糸切痕あり。凹面の側面付近はナデ調整がされる。厚み約1.5cm；中手。	C2 造成 (粘土)
	13	大和系	丸瓦	—	端部	灰	凸面に縄目文、端部側はナデ消し。凹面に布目瓦痕が残る。凹面端部はヘラズリで面取、わずかに側面が残存。	C4 新造成
	14	大和系	平瓦	c	側面部 ～端部	灰	凸面糸切痕あり。大量に白砂付着。凹面に白砂付着。側面面取なし。厚み約1.5cm；中手。	C4 新造成
	15	大和系	平瓦	—	端部	灰	凹面に布目瓦痕あり。凹面狭端部側は面取(1～2cm)。凸面は一部ナデあり。厚み約1.5cm；中手。	C9 東片 Ⅲ層
	16	大和系	平瓦	d	側面部 ～端部	黒	凹面に糸切痕あり。凹面狭端部面取(2～3cm)。凸面に縦位瓦痕が3条あり。厚み約1.7cm；中手。	C9 Ⅳ層
	17	大和系	丸瓦	—	玉縁欠	灰	玉縁部の上部破損。筒部上部に縄目文あり。凹面側面、筒部内側縁にヘラ調整痕あり。端部向1残存。	C8 覆瓦2
	18	近代 大和系	丸瓦	—	筒部	灰	凸面丁寧にナデ。凹面に細い横位瓦痕あり。側面、筒部内側縁にヘラ調整痕あり。	覆瓦 + 南覆瓦
	19	大和系	平瓦	c	側面部 ～端部	黒	凹面にわずかに糸切痕あり。凹面に糸切痕あり。凹面中央部はナデ。凹面広端側の面取なし。白砂付着。厚み約1.8cm；中手。	C2 覆瓦
	20	大和系	平瓦	b	側面部 ～端部	灰	凸面指ナデ成形痕あり。凹面一部ナデあり。凹面狭端部に面取不明瞭。厚み約1.5cm；中手。	D9 覆瓦
	21	近代 大和系	平瓦	—	端部	灰	凸面糸切痕あり。凸面広端部面取(2.8cm) 凹面ナデあり。凹面広端部面取(2cm)。厚み約1.6cm。	D9 覆瓦

第29表 瓦観察一覧2

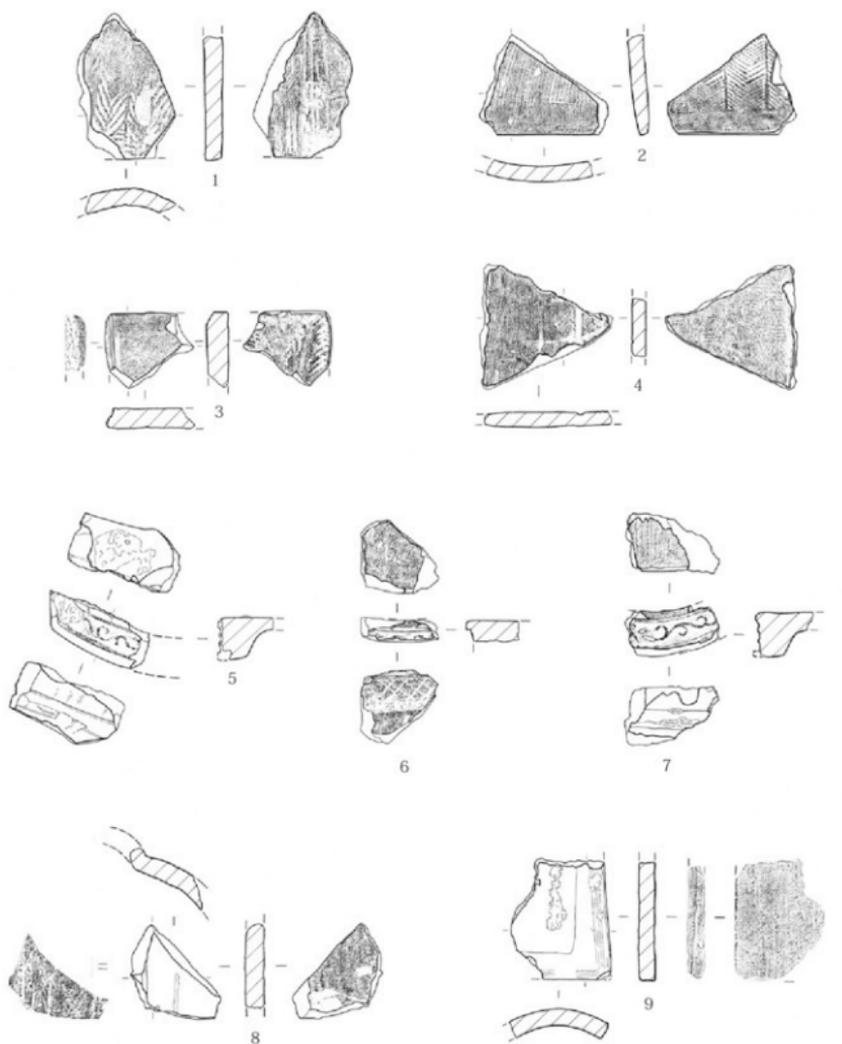
図・図版番号	番号	技術	種類	分類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量、上原分類	グリッド・層
第74図 図版60	22	大和系	平瓦	a	側面部 ～端部	灰	凸面糸切痕あり。凸面に白砂付着。凹面側面は、側面に面取りした際の粘上がはみだしている。凹面糸切痕の一部が指ナデにより消される。凹面端部面取なし。厚み約2.1cm；厚手。	C-6 根瓦
	23	大和系	平瓦	c	側面部 ～端部	灰	凸面に糸切痕あり。凹面に糸切痕。凹面狭端部はヘラケズリで面取(2～2.5cm)。わずかに白砂付着。厚み約1.6cm；中手。	D-9 根瓦
第75図 図版70	24	明朝系	軒丸瓦	I Aa03	破片	灰	瓦当上部に范バリが残り、下部は成形される。文様不明。瓦当裏面はヘラナデ後、指ナデを行っている。丸瓦との接合部が剥離した資料。厚み2.5cm。上原：浦田1 Ab02 式。	D-6 方形 石組上原
	25	明朝系	軒丸瓦	I Aa01	破片	灰	范バリ成形が不十分。瓦当裏は指面圧痕あり。厚み3.0cm。瓦当文様は凸凹の範範あり。上原：I Ab01。	C-4 新造成
	26	明朝系	軒丸瓦	I Ab02	破片	灰	瓦当外縁が破損。瓦当裏面に指面圧痕が残る。厚み3.1cm。上原：浦田1 Ac04 式。	C-4 新造成
	27	明朝系	軒丸瓦	I Bb02	破片	灰	瓦当外縁に范バリが残る。瓦当文様不明。瓦当裏面はナデ成形。厚み2.0cm。上原：浦田1 Ba01 式。	C-3 新造成
	28	明朝系	軒丸瓦	I Ae03 の図柄天 地逆?	破片	赤	瓦当裏面上部に接着痕跡が残ることから、瓦当文様が天地逆の資料と考えられる。瓦当文様不鮮明。瓦当裏面指オサエ痕。厚み2.2cm。上原：円鏡1 Ae01 式か首直1 Ae03 式。	C-3 造成
	29	明朝系	軒丸瓦	I Ac03	破片	褐	范バリ成形が一部不十分。瓦当文様の一部破損により不鮮明。瓦当裏面上部はナデ成形、下部は指面圧痕あり。厚み2.1cm。上原：天界1 Ad01～04 系か。	C-3 造成
	30	明朝系	軒丸瓦	I A02	破片	赤	范バリ成形丁寧。瓦当文様の一部不鮮明な部分あり。瓦当裏面ナデ成形。丸瓦部分に漆喰付着。厚み1.7cm。上原：円鏡IV 01、02 系か。	D-8 II層
	31	明朝系	軒丸瓦	I C	破片	赤	范バリ成形。瓦当文様鮮明。瓦当裏面はナデ成形。厚み1.7cm。上原：円鏡1 B02 式。	C-8 II層
	32	明朝系	軒丸瓦	I Ba01	破片	灰	瓦当部部の資料。瓦当文様の量が実写的。厚み1.7cm。上原：首直1 Ba01 式か。	B-4 V層
	33	明朝系	軒丸瓦	I A01	破片	灰	瓦当部部の資料。瓦当裏面わずかに指面圧痕がみられる。瓦当文様に筆がある。厚み2.3cm。瓦当文様の花芯は円形状か。上原：浦田1 01 系か。	根瓦
第76図 図版71	34	明朝系	軒丸瓦	I Aa03	破片	灰	瓦当部上部に范バリ残る。文様鮮明。瓦当裏面に指オサエ痕あり。厚み3.0cm。上原：浦田1 Ab02 式。	根瓦
	35	明朝系	軒丸瓦	I Bb04	破片	赤	瓦当部范バリ成形。瓦当裏面ナデ成形。厚み1.6cm。上原：I 文様系 B 式系か。	根瓦
	36	明朝系	軒丸瓦	I Bb03	破片	赤	瓦当部范バリ成形。瓦当裏面指オサエとナデ。やや軟質。厚み1.6cm。上原：天界1 Bb03 式系か。	D-8 根瓦
	37	明朝系	軒丸瓦	I Bb01	破片	灰	瓦当部范バリ成形。瓦当裏面指オサエ痕がわずかに残り。厚み1.8cm。上原：円鏡1 b01 式か。	D-5 根瓦
	38	明朝系	軒丸瓦	I Bb03	破片	褐	瓦当部范バリ成形。瓦当文様が破損により不鮮明。瓦当文様の花弁が短い。厚み1.4cm。上原：浦田1 Bb03 式か。	C-3 根瓦
	39	明朝系	軒丸瓦	2型Ⅲ b	破片	赤	瓦当部范バリ成形。一部范バリが残る。瓦当文様がやや不鮮明。瓦当裏面は指面圧痕をナデ消しするが、凸凹が残る。厚み2.0cm。瓦当部が薄く、花芯上部に赤白があり花芯刻みは3本。上原：円鏡Ⅲ b01 式か。	根瓦
	40	明朝系	軒丸瓦	2型Ⅲ a	破片	赤	瓦当部范バリ成形。瓦当裏面指ナデ痕あり。瓦当文様は花芯刻みが5本。瓦当裏面側部がやや薄くなる。厚み2.5cm。上原：円鏡Ⅲ a01 式。	根瓦
41	明朝系	軒丸瓦	I A02	破片	赤	瓦当部范バリ成形。文様鮮明。瓦当裏面指ナデ。厚み1.3cm。上原：円鏡IV 01、02 式。	D-8 根瓦	

第29表 瓦観察一覧3

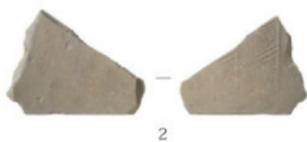
図・図版番号	番号	技術	種類	分類	部位	色調	製作技術、形造的特徴、文様、法量、上原分類	グリッド・層
第77図 図版72	42	明朝系	軒平瓦	IA3	破片	灰	瓦当部范バリ成形。瓦当文様不明。瓦当裏面はナメナデ成形。平瓦部の桶板張り組圧痕は窪みとして残るが、一部粘土層付後のナデで埋まる。厚み2.7cm。上原：首木Aa01式。	C3 新造成
	43	明朝系	軒平瓦	III A02	破片	灰	瓦当文様は比較的詳細だが、見にくい。瓦当裏面はナメナデ成形。厚み2.0cm。上原：首石1 B01式に類似。	C3 造成
	44	明朝系	軒平瓦	IA5	破片	灰	瓦当部范バリ成形。瓦当文様の花弁が内厚。瓦当裏面横ナデ後、ナメナデ。厚み1.6cm。上原：草花文飾型1型1 A系か。	C3 新造成
	45	明朝系	軒平瓦	その他	破片	褐	瓦当文様不詳明。瓦当裏面はわずかにナメナデが確認できる。厚み2.5cm。上原：不明。	C3 造成
	46	明朝系	軒平瓦	2型IA1	破片	赤	瓦当部范バリ成形。瓦当文様は葉の部分で内厚。瓦当裏面はナメナデ、わずかに指面圧痕が残る。厚み1.6cm。上原：不明。	C8 東比目層
	47	明朝系	軒平瓦	III Be1	破片	赤	瓦当部范バリ成形。瓦当文様不明。瓦当裏面は横ナデとナメナデ。厚み1.9cm。上原：御茶目 B01 - 02式。	C8東アで II b層 + B7 覆瓦
	48	明朝系	軒平瓦	III Bc1	破片	灰	瓦当部范バリがわずかに残る。瓦当文様はやや不詳明。平瓦部の桶板張り組圧痕の窪みは粘土貼付後のナデで埋まる。瓦当裏面はナデがみられるが、一部指オサエ痕あり。厚み2.6cm。上原：首石目 B01式。	C8 II層 + C9 III層
第78図 図版73	49	明朝系	軒平瓦	III Be2	破片	褐	瓦当部范バリ成形。瓦当文様はやや不詳明。瓦当裏面はナメナデ成形。厚み2.2cm。上原：御茶目 B01 - 02式。	C9 III層瓦面
	50	明朝系	軒平瓦	IA4	破片	灰	瓦当上部なし。瓦当文様不明。瓦当裏面は横ナデ、ナメナデ成形。一部布目圧痕がある部分あり。厚み2.8cm。上原：湧田1 Aa01式。	D6 覆瓦
	51	明朝系	軒平瓦	III A01	破片	灰	瓦当部范バリ成形。瓦当裏面粗めのナデ。厚み1.6cm。上原：識名目 A式か。	C3 覆瓦
	52	明朝系	軒平瓦	IA2	破片	灰	瓦当部范バリ成形。瓦当文様右側がズレ。平瓦部の桶板張り組圧痕は窪みとして残る。瓦当裏面は指面圧痕があり凸凹している。厚み2.0cm。上原：首石1 Aa01式か天界1 Aa01式。	E4 覆瓦
	53	明朝系	役瓦 (雲形)	-	破片	赤	文様は凸凹を明瞭につけた雲形。裏面は破損するが、一部平坦面が残る。裏面から側面全体に漆喰が付着。厚み(大)5.0cm(小)3.4cm。	覆瓦
	54	明朝系	役瓦?	-	破片	灰	三角形状になるとと思われる製品。側面丁寧なナデ。	D9 覆瓦
	55	明朝系	丸瓦	-	玉縁部	灰	玉縁裏の側面面取。筒部凸面上部は横方向の成形。下部は縦方向の成形。筒部凹面は玉縁部まで布目圧痕あり。厚み2.3cm。	D6 方形 右組上面
第79図 図版74	56	明朝系	丸瓦	Ba	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。筒部凸面上部は横方向の成形。下部は縦方向の成形。凹面は玉縁部まで布目圧痕あり。横位の布筒痕。縦位の縫い痕あり。厚み2.0cm。	C9 III層
	57	明朝系	丸瓦	Be	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。筒部凸面に曲線状のへら描あり。凹面は玉縁部まで布目圧痕あり。凹面玉縁部には横位の布筒痕あり。縦位の縫い痕あり。厚み2.2cm。	C9 III層
	58	明朝系	丸瓦	AgG	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。筒部凸面の成形はやや粗い。凹面は玉縁部まで布目圧痕が確認できるが、玉縁部は不詳明。厚み2.7cm。	C9 III層瓦面
	59	明朝系	丸瓦	Ab(b)	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。筒部凸面の成形は粗く凸凹が残る。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残るが、玉縁部は不詳明。厚み2.3cm。	C9 III層瓦面
	60	明朝系	丸瓦	Bd	筒部	灰	凸面に山形のへら描き。凹面に布目圧痕が残る。曲線状に布目のシワが残る。厚み1.4cm。	C6 III層
	61	明朝系	丸瓦	Ab(b)	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。玉縁中央部に横位のへら描き。筒部凸面端部付近は横位の成形。下位は縦位の成形。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残り厚み2.3cm。	C9 III層瓦面
第80図 図版75	62	明朝系	丸瓦	-	玉縁部 ~ 端部	灰	玉縁裏の側面面取。筒部には瓦釘孔あり。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残るが、玉縁部はやや不詳明。玉縁部との境目に横位の布筒痕あり。凹面端部に面取。	覆瓦

第29表 瓦観察一覧4

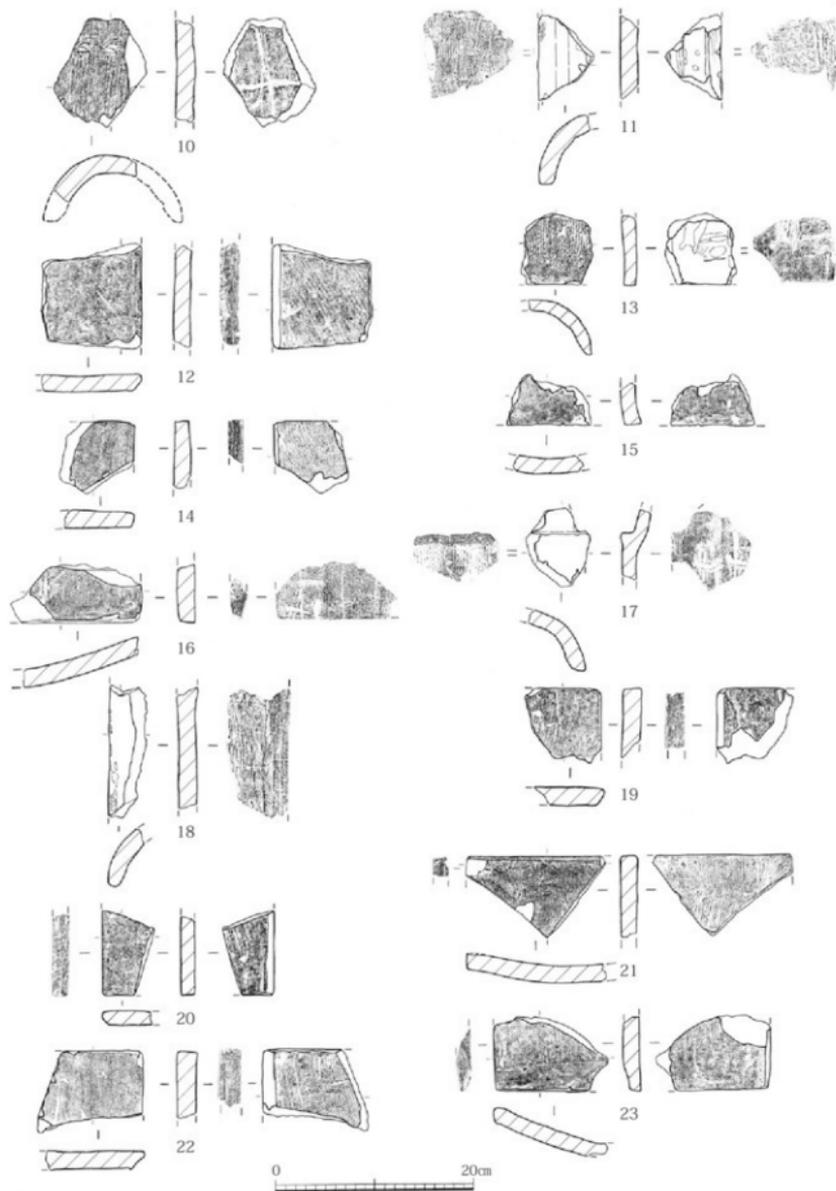
図・図版番号	番号	技術	種類	分類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量、上原分類	グリッド・層
第80図 図版75	63	明朝系	丸瓦	Agb)	玉縁部	灰	玉縁裏の側面面取。玉縁中央部に「十」状のへら描きあり。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残る。厚み1.7cm。	C3 視乱
	64	明朝系	丸瓦	Agb)	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。玉縁中央部に「×」字状のへら描きあり。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残る。横位の布目痕が残る。玉縁厚み1.5cm。	C3 視乱
	65	明朝系	丸瓦	Agc)	玉縁部	灰	玉縁裏の側面面取。玉縁段部に「×」字状のへら描きあり。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残る。玉縁部との境目付近に横位の布目痕あり。厚み2.1cm。	C3 視乱
	66	明朝系	丸瓦	Adb)	玉縁部	灰	玉縁裏の側面面取。玉縁中央部に二本線のへら描き。凹面は玉縁部まで布目圧痕あり。布目痕あり。玉縁裏には横位の細い痕あり。厚み1.7cm。	C3 視乱
	67	明朝系	丸瓦	Be	筒部	褐	凸部にへら描き。凹面に布目圧痕あり。厚み1.6cm。	B8 視乱
	68	明朝系	丸瓦	Be	玉縁部	褐	玉縁裏の側面面取。筒部凸部にへら描き。瓦釘孔あり。凹面は玉縁部まで布目圧痕がある。玉縁裏付近に布目痕あり。厚み1.9cm。	C3 視乱
	69	明朝系	丸瓦	Be	筒部	灰	凸面に円形、「十」字状、横位の一本線といった数種のへら描きあり。凹面に布目圧痕が残る。厚み1.6cm。	視乱
70	明朝系	丸瓦	Be	玉縁部	赤	凸面に横位のへら描きがあり、三角形状に一本線が交差するものもあり。凹面は玉縁部まで布目圧痕が残る。布目痕、横位の細い痕がある。厚み2.3cm。	C8 視乱	
第81図 図版76	71	明朝系	平瓦	—	広端部～ 狭端部	灰	凸面広端側は幅広いの成形。狭端はやや狭い成形。凹面は布目圧痕が残るが、広端付近はなし。両端に桶組廻り圧痕あり。長さ24.4cm、厚み1.4cm。	C-4 新造成
	72	明朝系	平瓦	—	狭端部	灰	凸面狭端付近は横位の成形、それ以外は縦位の成形。凹面にある圧痕は布目圧痕ではないため、製作時に別のものを置いていた可能性がある。厚み1.2cm。	C-4 新造成
	73	明朝系	平瓦	—	筒部	灰	凸面に「大」のスタンプあり。凹面に布目圧痕がわずかに残る。厚み1.8cm。	C8 Ⅱ b層
	74	明朝系	平瓦	—	狭端部	赤	凸面狭端に深い横位の線あり。凹面には布目圧痕が残る。狭端付近の桶組廻り圧痕は埋められる。厚み1.6cm。	C8 Ⅱ b層
	75	明朝系	平瓦	—	広端部	灰	凸面広端に横位の長い一本線のへら描き。凹面は布目圧痕が残るが、広端付近にはなし。桶組廻り圧痕あり。厚み1.9cm。	C6 V層
	76	明朝系	平瓦	—	広端部	灰	凸面広端に横位の一本線のへら描き。その下位にはやや円弧状のへら描きあり。凹面には布目圧痕が残るが、広端付近にはなし。桶組廻り圧痕がある。厚み1.7cm。	C6 V層
	77	明朝系	平瓦	—	広端部	赤	凸面に多くの細い線刻あり。凹面には布目圧痕が残る。厚み1.5cm。	D8 視乱
	78	明朝系	平瓦	—	狭端部	灰	凸面に「×」字状のへら描き後、斜め方向のへら描き。凹面には布目圧痕が残る。布目痕と思われる横位の圧痕あり。狭端に桶組廻り圧痕がわずかに確認できる。厚み1.3cm。	E-4 視乱
	79	明朝系	平瓦	—	広端部～ 狭端部	赤	凸面広端側の一部は、泥輪の影響で光沢が残る部分あり。狭端側の横位成形は凹線状になる。凹面には布目圧痕あり。広端側に桶組廻り圧痕があるが、一部は埋められる。狭端側にも桶組廻り圧痕の痕があるが不明瞭。長さ24.5cm、厚み1.7cm。	C8 視乱2
	80	明朝系	平瓦	—	広端部	灰	凸面に二本一組の突帯を二条掛け、その後線状になるようにナデが行われている。凹面には布目圧痕が確認できる。桶組廻り圧痕は埋められるがわずかに確認できる。厚み2.0cm。	C3 視乱
	81	明朝系	平瓦	—	筒部	赤	凸面にモチーフ不明の線刻あり。凹面には布目圧痕がある。厚み1.2cm。	E9 視乱



第73図 高麗系丸瓦・平瓦 大和系軒平瓦・雁振瓦



図版 68 高麗系丸瓦・平瓦 大和系軒平瓦・雁振瓦



第74図 大和系丸瓦・平瓦



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



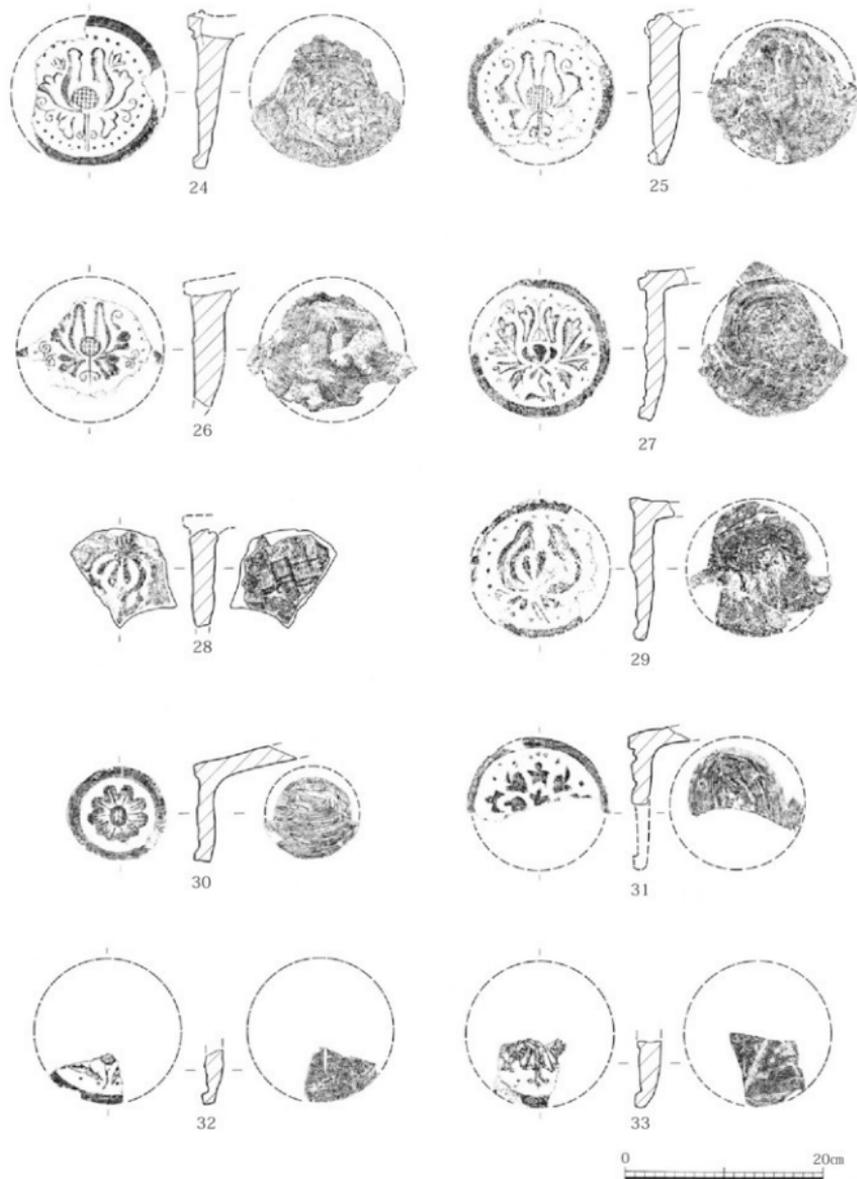
21



22



23



第75図 明朝系軒丸瓦1



24



25



26



27



28



29



30



31

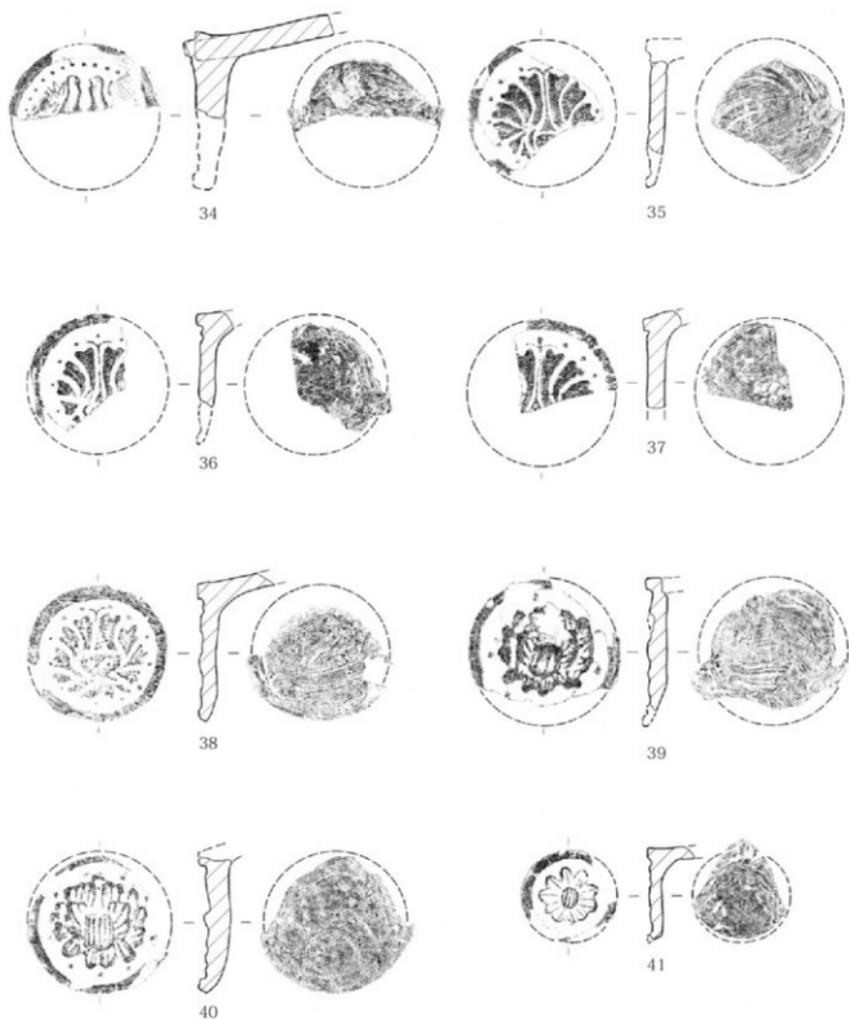


32



33

图版 70 明朝系軒丸瓦 1



第76図 明朝系軒丸瓦2



34



35



37



36



39



38

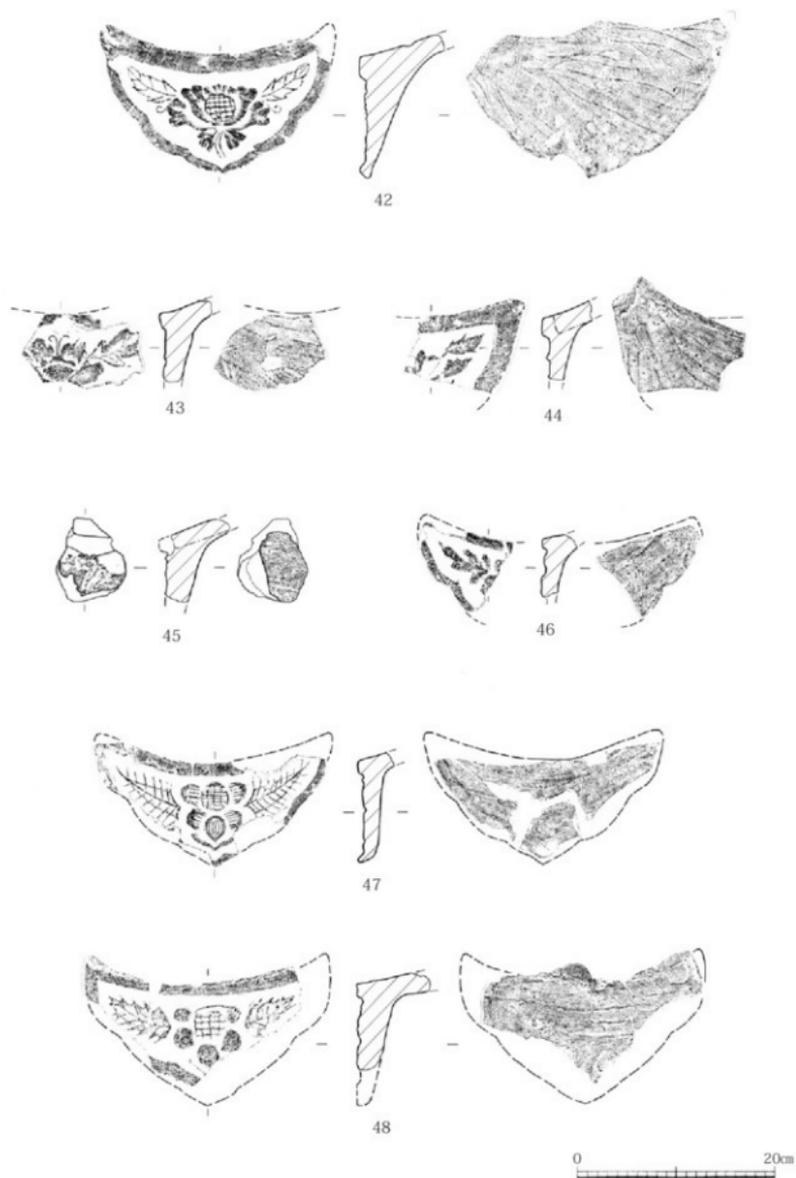


40

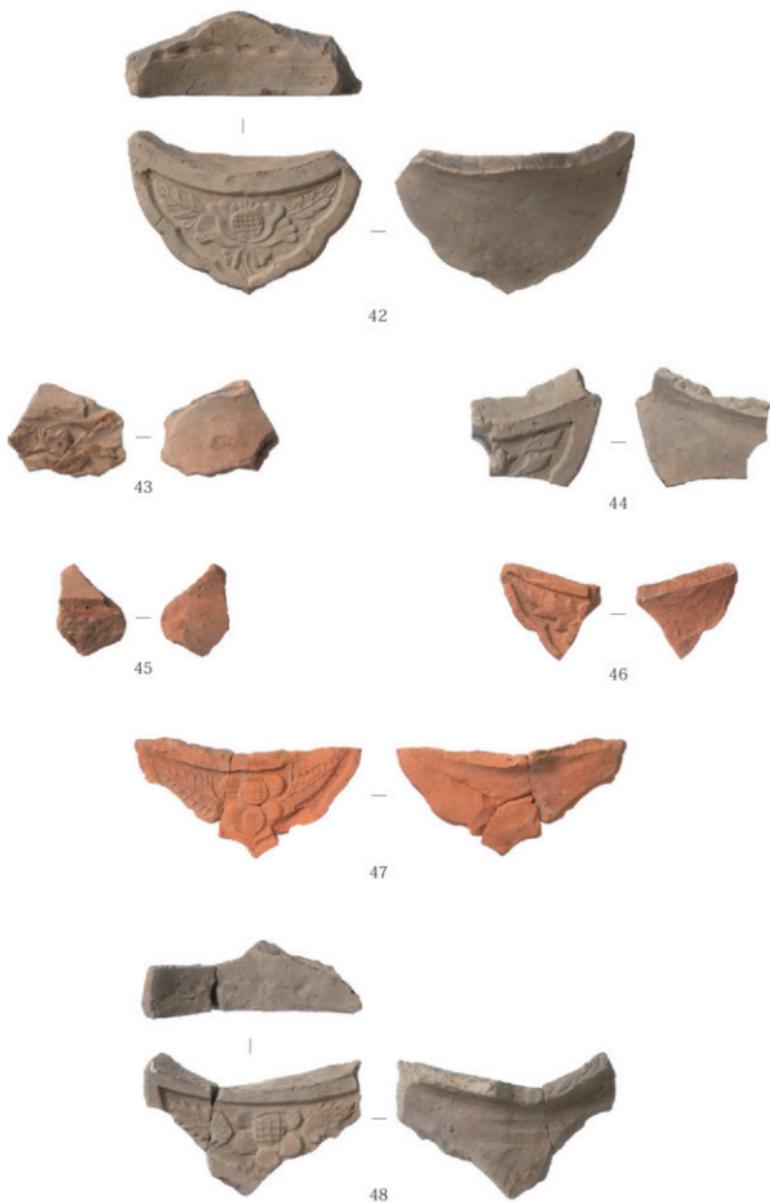


41

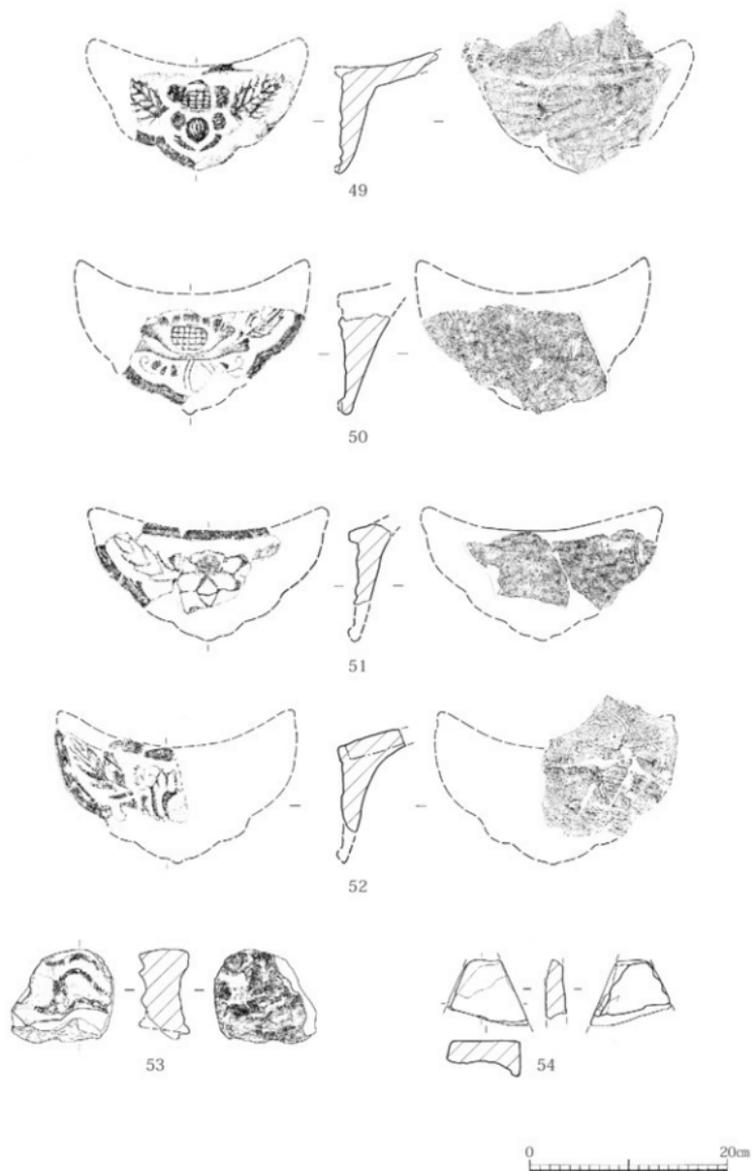
図版 71 明朝系軒丸瓦 2



第77図 明朝系軒平瓦1



图版 72 明朝系軒平瓦 1



第78図 明朝系軒平瓦 2



49



50



51



52

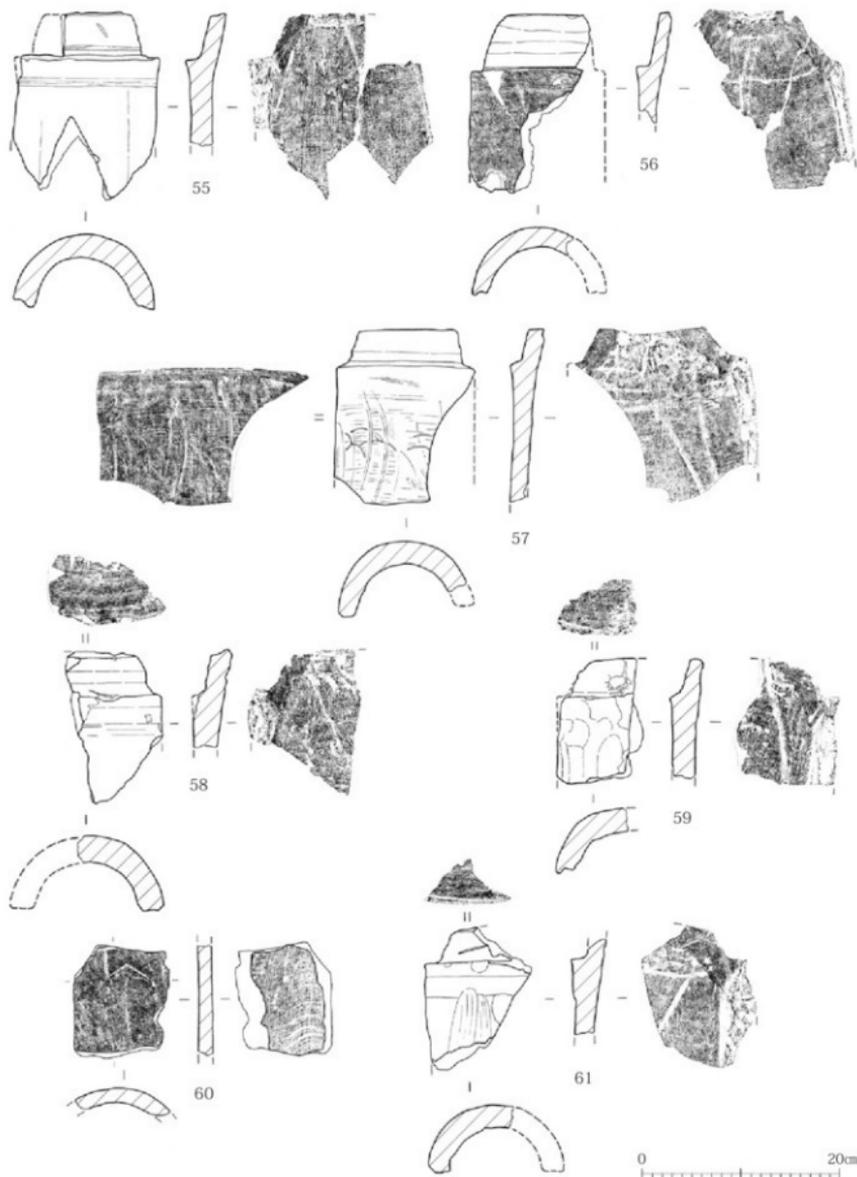


53



54

図版 73 明朝系軒平瓦 2



第79図 明朝系丸瓦1



55



56



57



58



59

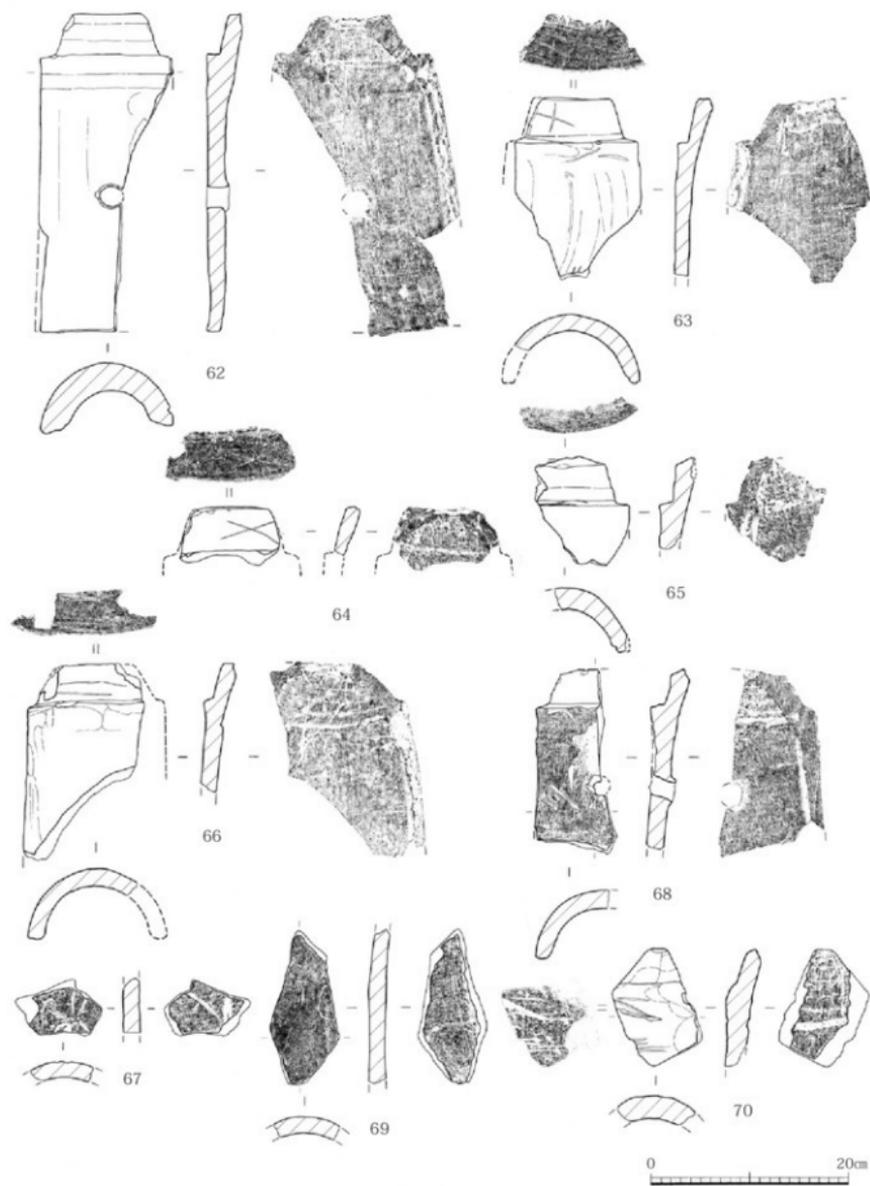


60



61

図版 74 明朝系丸瓦 1



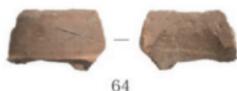
第80図 明朝系丸瓦 2



62



63



64



65



66



68



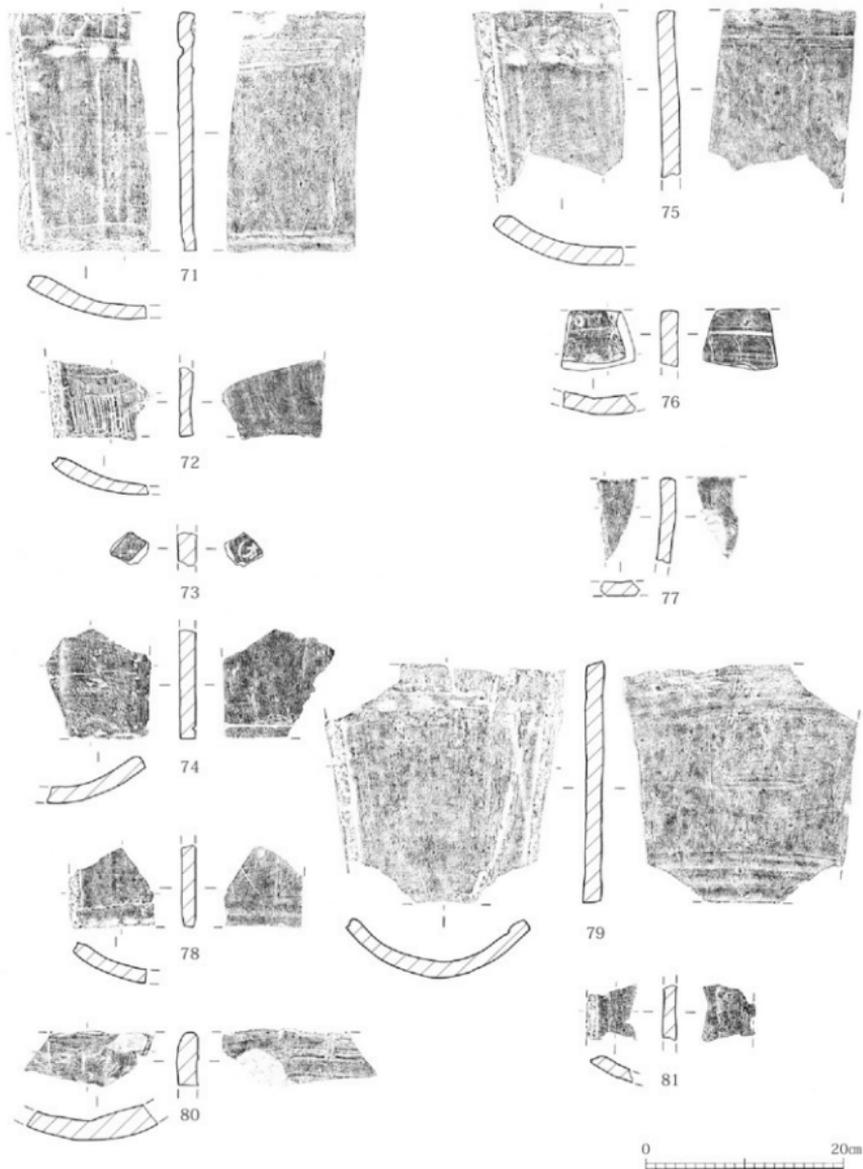
67



69



70



第81図 明朝系平瓦



71



75



72



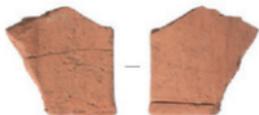
76



73



77



74



79



78



80



81

図版 76 明朝系平瓦

23 埠 (第30～32表、第82～88図、図版77～82)

埠は総数で593点出土した。これらはその機能と平面形態から、I～Vまでの5種に大別される。Iは平面形が長四角形を呈し、複数を組み合わせて使用するものである。IIは下駄状の突起を有するものである。IIIは平面的に敷いて使用するもので、平面形が正方形と三角形の2種が存在する。IVは平面形が長方形で、漆喰などの接合材を併用して複数を積み上げて使用するタイプで、Vは近代以降の製品と思われるレンガを指す。これらはさらに、色調や刻印・線刻により分類が可能である。なお、ここでの分類は、首里城御内原北地区の報告で上原静が行った概念(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)を基準に分類を行う。それに加え、上原2011を参考に(上原:式)と報告する。以下に分類別に概観し、個々の特徴は観察表に示した。

分類

I. 端部噛み合わせタイプ(上原Ⅲ式)

平面形が一般的に長方形で、長軸か短軸の側面に段を成形し、それぞれを噛み合わせて使用する。当該製品はその他の製品に比べ、厚みがあるものもみられる。その用途としては、排水処理を目的として、地下に埋設される暗渠や溝の部材としての機能が考えられる。

II. 下駄状タイプ(上原Ⅳ式)

平面形が長方形または三角形を呈し、下駄状の突起が付くものである。突起は、使用時の掛かりを意識したものとされ、棒状を呈するものやカギ状を呈するものがある。切妻形になる製品も出土している。このタイプは灰色製品及び酸化炭焼成の赤色製品が出土している。その用途としては、玉陵の屋根にみられる事例より、屋根材としての機能が提示されている。

III. 平面敷き用タイプ(上原Ⅰ式)

平面形は正方形と三角形を呈するものである。灰色製品と赤色製品の2種類に分けられ、灰色製品が多い。以下に、厚み、その他成形方法により細分を行った。その用途としては、地面及び壁に使用されるタイプで、床材や壁の舗装化粧材として利用される。

・灰色製品

正方形 A a類: 4.5～6cm台の最も厚みのあるタイプである。ヘラ描きが見られるものがある。

A b類: 3～4.4cmの薄手のタイプである。スタンプ文を押すものがある。

三角形 B a類: 厚みが4.5～6cm台の厚みのあるタイプである。

B b類: 3～4.4cm台の薄手のタイプである。表面に「大」のスタンプ文を押すものや、ヘラ描きが見られるものがある。

・赤色製品

正方形 A a類: 4.5～6cm台の厚みのあるタイプである。

A b類: 3～4.4cm台の薄手のタイプである。スタンプ文を押すものがある。

三角形 B a類: 4.5～6cm台の厚みのあるタイプである。

B b類: 3～4.4cm台の薄手のタイプである。スタンプ文を押すものがある。

IV. 積み重ね用タイプ(上原Ⅱ式)

重ねて使用するために造られた埠と考えられる。出土量は5点と少ない。灰色製品と赤色製品の2種類に分けられ、そのほとんどが長方形を呈する。このタイプの埠は、大きさや厚みなどから数種類に分けられる。その用途としては壁材としての利用が提示されている。

・灰色製品

大きさよりA～Cの3種類に分けられ、それぞれに厚みの違いがみられる。

A類: 横12cm、縦23.8cm、厚み3.4cmのもので、小形である。

B類: 横16～18cm、縦29～34.2cm、厚み3.3～4.1cm。この種類は長軸の側面に削りがあり、湾曲した側面を特徴とする一群がある。それで、Ba1・Bb1に細分される。

C類：横 22～22.5cm、縦 32.5～34.5cm、厚み 4.0～4.4cmの厚いものと、大きさはほぼ類似する横 22～22.5cm、縦 32～34cm、厚み 3.5～3.8cmの薄いものでそれぞれを Ca1・Cb1 とする。

・赤色製品

大きさよりA・Bの2種類に分類される。赤色製品も灰色製品同様に大きさや厚みにより、さらに細分される。

A類：横 11cm～11.5cm。縦 31cm。厚み 4.0～4.5cmのもの。

B類：明らかに厚みに違いがあることから二分される。a類は横 15.5～17.0cm、厚み 3.5～3.8cmの薄手、

b類は横 17cm、縦 33～34cm、厚み 4.2～4.4cmの厚手である。中には側面の角を取り除き、丸みを帯びるものがある。

・スタンプ文及びへら描

埴には、スタンプ文やへらによる手描きの記号が施されるものがある。

まず、スタンプ文は第30表に示した2種類が確認された。押印は表面にみられる。へら描は、様々な種類のものがあり、今回は15種類を確認できた。色調の違いでみると、灰色製品で14種類、赤色製品で6種類がみられた(第31表)。



第82図 埴の刻印位置(側面模式図)

第30表 埴の刻印・へら描の種類と説明

形態	記号	分類説明	説明	刻印位置			形態	記号	分類説明	説明	刻印位置			
				表	側	裏					表	側	裏	
刻印	記号	○	照像のみのタイプ	○			3本線	H	「H」字状の線を描くタイプ		○			
		⊕	「大」字を照像で囲む	○					A	「A」字状の線を描くタイプ			○	
へら描	1本線	—	横位の1本線を描く	○	○	○	へら描	∞	サハニ(舟)のブンドー形の線描			○		
		≡	横位の平行する二本線を描く	○	○	○		∞	ブンドー形の崩れた形で下部にも線描があるタイプ			○		
	2本線	≡	三角形状の二本線を描くタイプ			○		4本以上	∞	右上から左下方向への二本斜線と、左上から右下方向への二本斜線の組合せ			○	
		≡	「×」字状に交差するタイプ			○			∞	二本線と三本線が描かれるタイプ			○	
	3本線	≡	横位の平行する三本線を描く	○	○	○			∞	四角形が崩れたような線描			○	
		∞	左上から右下方向への二本斜線と右上から左下方向への斜線の組合せ			○		その他	∞	その他の線描が描かれるタイプ			○	
		∞	左上から右下方向への斜線と「v」字状の線を描く			○								

第31表 埴の色調と刻印・へら描

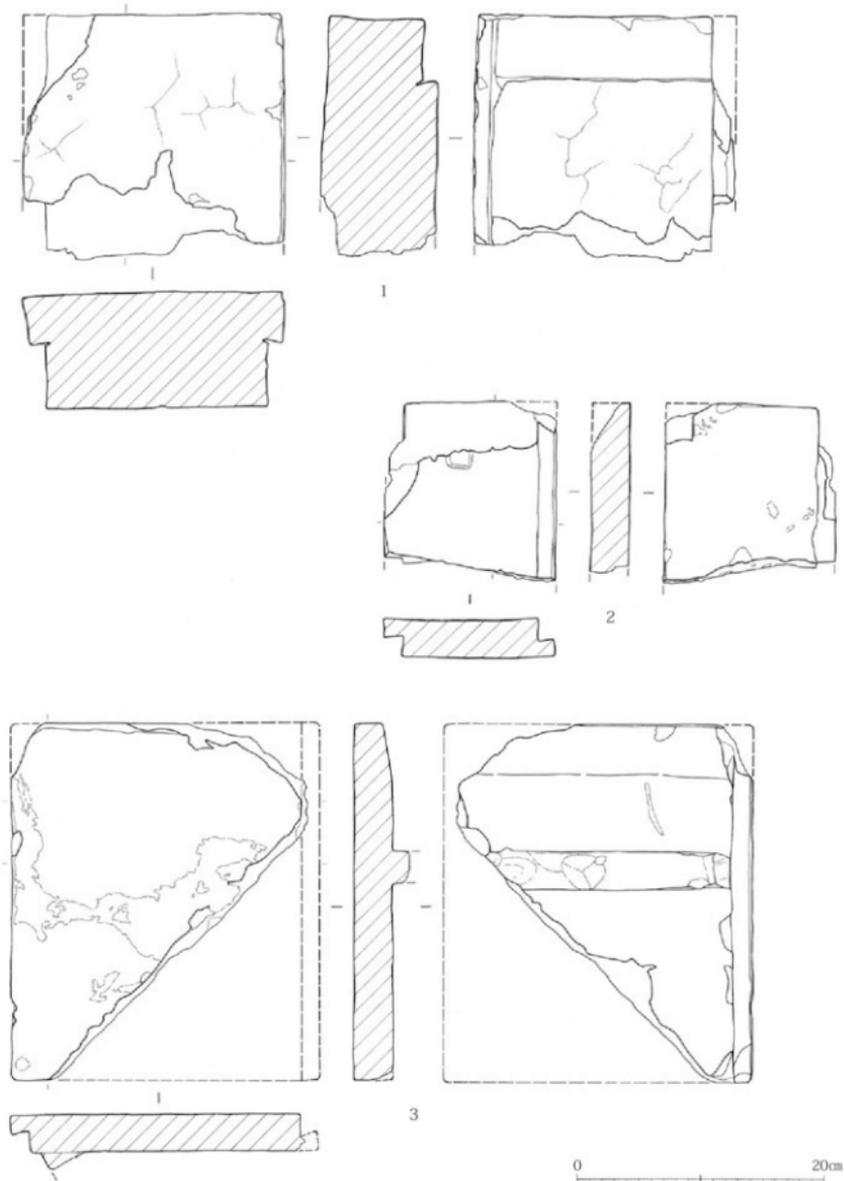
分類	色調	位置	刻印		へら描										合計				
			記号	1本線	2本線	3本線			4本以上				その他						
灰色(褐色)	表面	○	⊕	—	≡	≡	∞	∞	H	A	∞	∞	∞	∞	∞	1	10		
	側面			5	2	1	2		1	1	1					1	15		
	裏面			2			1										3		
	計			1	4	8	2	1	0	4	0	1	1	1	1	1	0	1	28
	表面			1			1											2	
赤色	側面			1	1		1		1						1		5		
	裏面				1												1		
	計			0	1	1	3	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	8	
合計			1	5	9	5	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	36	

第32表 博観察一覧1

図・図版番号	番号	分類	残存状況	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量	グリッド・層
第83図 図版77	1	I類 A	角2	灰	平面形は長方形状。上部、両側に噛み合わせの段差あり。非常に厚い。厚み9.5cm。	C3 新造成
	2	I類 C	破片	灰	平面形は長方形状。表面に方形状のスタンプあり。両側に噛み合わせの段差あり。裏面に漆喰が僅かに付着。厚み3.1cm。	C4 新造成
	3	II類	角2	灰	平面形は長方形状。両側に噛み合わせの段差あり。長軸に対し垂直に突起あり。上部部薄く斜めに切られる。表面に漆喰付着。厚み3.0cm。	C4 新造成
第84図 図版78	4	II類	角1	灰	平面形は長方形状。両側に噛み合わせの段差あり。長軸に対し垂直のL字状突起あり。突起部は両側が斜めに加工し。上部部は薄く斜めに切られる。突起部に3本の太い沈線あり。厚み7.0cm。側面にへら掻きあり。	C4 新造成
	5	II類	角2	灰	平面形は長方形状。両側に噛み合わせの段差あり。長軸に対し垂直のL字状突起あり。突起部側面は斜めに加工し、太い沈線が1条あり。厚み2.9cm。漆喰あり。	C4 新造成
	6	II類		灰	平面形は三角形状。両側にかみ合わせの段差あり。全体に漆喰あるが、表面に集中。裏面下部の側面に対し水直上に下駄状突起があった可能性あり。厚み2.9cm。	C4 新造成
第85図 図版79	7	II類	角1	灰	平面形は長方形状。側面に噛み合わせの段差あり。長軸に対し垂直にL字状突起があり。側面は斜めに加工。厚み8.0cm。漆喰あり。側面と裏面にへら掻きあり。	C4 新造成
	8	III類 Aa	角1	灰	平面形は方形状か。表面撫で調整丁寧、裏面雑。厚み4.35cm。	C4 新造成
	9	III類 Ab	角1	赤	平面形は方形状か。表面撫で調整丁寧、裏面雑。厚み3.9cm。	C4 新造成
	10	III類 Ab	角1	灰	平面形は方形状か。表面撫で調整丁寧、裏面雑。表面に刻印有り。厚み3.9cm。	C4 新造成
第86図 図版80	11	III類 Ab	角2	赤	平面形は方形状か。表面撫で調整丁寧、裏面雑。厚み3.9cm。	C4 新造成
	12	III類 Ba	角1	灰	平面形は三角形状。表面撫で調整丁寧、裏面雑。斜部が裏面にかけて斜めに加工され、丁寧に磨かれる。厚み4.4cm。	C4 新造成
	13	III類 Ba	角1	赤	平面形は三角形状。表面撫で調整丁寧、裏面雑。斜部が裏面にかけて斜めに加工され、丁寧に磨かれる。厚み4.45cm。	C4 新造成
	14	III類 Bb	角1	赤	平面形は三角形状。表面撫で調整丁寧、裏面雑。斜部が裏面にかけて斜めに加工され、丁寧に磨かれる。厚み3.9cm。	C9 III層
	15	III類 Bb	角1	灰	表面に刻印。側面にへら掻き有り。厚み4.0cm。	C4 新造成

第32表 博観察一覽2

図・図版番号	番号	分類	現存状況	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量	グリッド・層
第87図 図版81	16	Ⅲ類 B b	角1	赤	表面撫で調整丁寧、裏面雑。表面に刻印有り。厚み4.35cm。	C4 新造成
	17	Ⅲ類 A B b	破片	赤	表面撫で調整丁寧、裏面雑。表面に沈線1条あり。厚み3.95cm。	C4 新造成
	18	Ⅳ類 か?	角1	赤	面取り有り。全体的に撫で調整なし。厚み4.8cm。	B6 埋上
	19	Ⅱ類	角1	灰	上面切妻形に傾斜する2面構成。裏面残存下部に突起が僅かに残存、内側に噛み合わせの段差あり。厚み2.9cm。表面にへら描きあり。	C4 新造成
第88図 図版82	20	Ⅲ類 A B b	破片	灰	両面撫で調整されるがやや粗い。表面に刻印有り。厚み3.9cm。	視見
	21	Ⅲ類 A B b	破片	灰	表面丁寧に撫で調整、裏面雑。表面に刻印有り。厚み4.0cm。	D4 視見
	22	Ⅲ類 A B b	角1	灰	表面撫で調整、裏面雑。裏面に3条のくぼみあり、すべりどめか、側面にへら描き有り。厚み4.0cm。	C8 視見2
	23	Ⅲ類 A B b	角1	灰	表面撫で調整、裏面雑。側面にへら描き有り。厚み4.0cm。	E9 視見
	24	Ⅲ類 AB か	破片	灰	表面撫で調整丁寧。側面にへら描き有り。	C4 新造成
	25	Ⅲ類 ABb	破片	赤	表面撫で調整丁寧、一部剥落。裏面雑。側面にへら描き有り。厚み3.8cm。	視見
	26	Ⅱ類	破片	灰	表面撫で調整。表面にへら描き有り。段差があるため、突起部の可能性あり。	C9 Ⅱ層
	27	Ⅲ類 B a	角1	灰	表面撫で調整、裏面雑。表面にへら描き有り。側面に一条の沈線あり。厚み4.5cm。	C4 新造成
	28	Ⅲ類 A B b	角1	灰	表面撫で調整丁寧、裏面雑。側面にへら描き有り。裏面一部色調が異なる部分あり。焼成時の形質ではないため、使用時のものか。厚み4.2cm。	B7 埋上
	29	Ⅲ類 A B b	角1	灰	表面撫で調整丁寧、裏面雑。側面にへら描き有り。厚み4.45cm。	視見



第83図 埴1



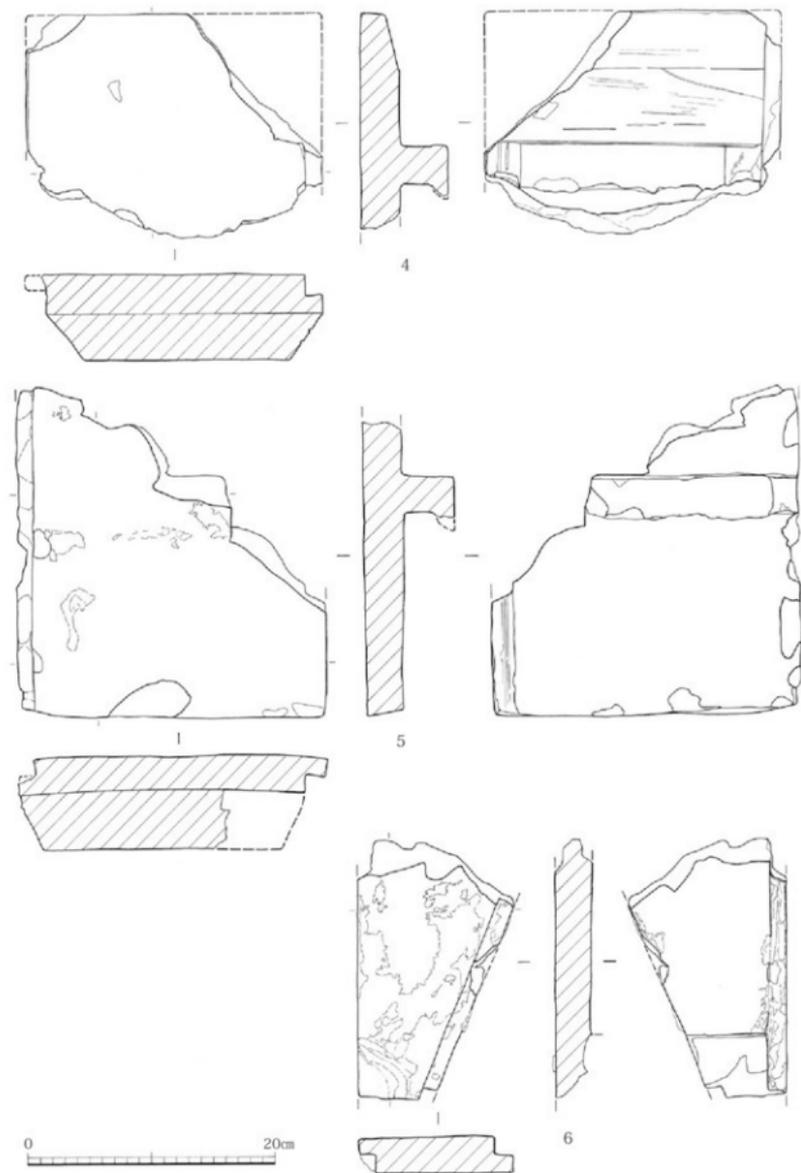
1



2



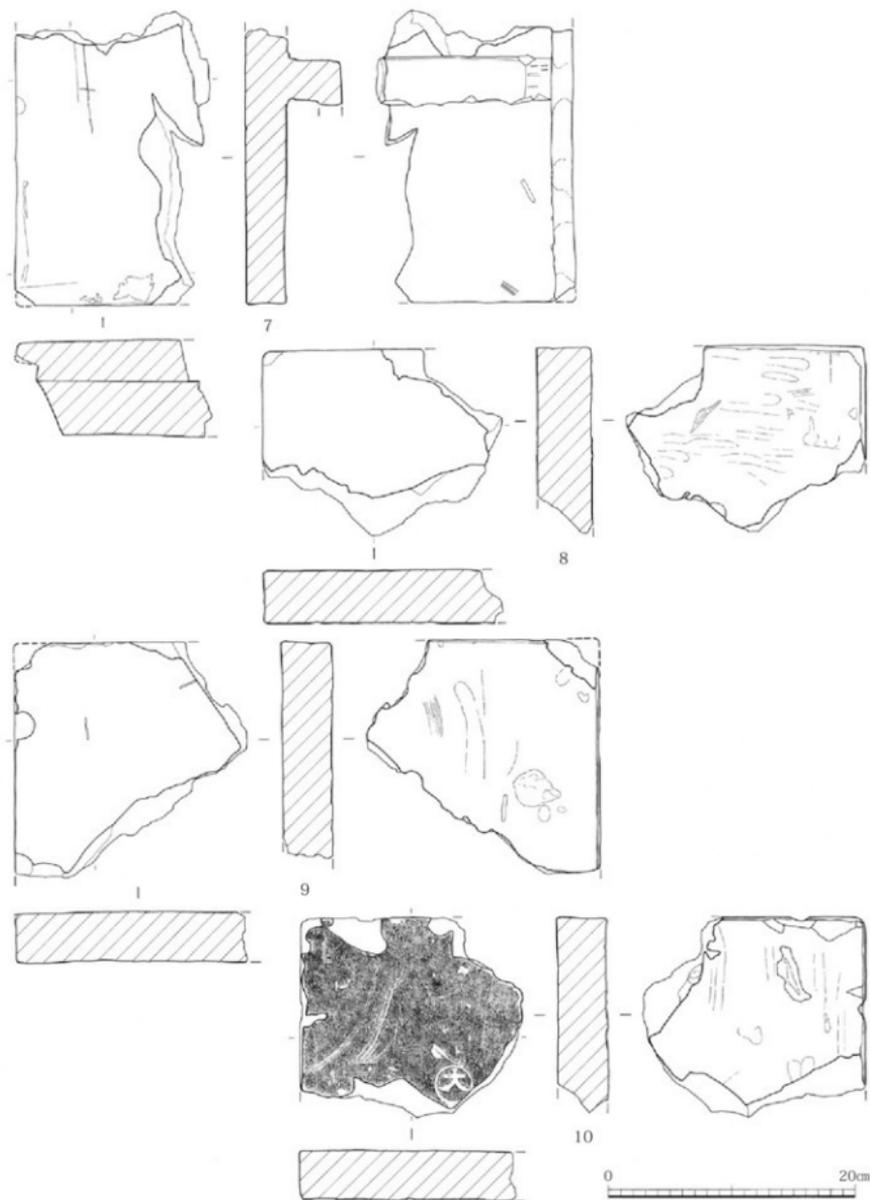
3



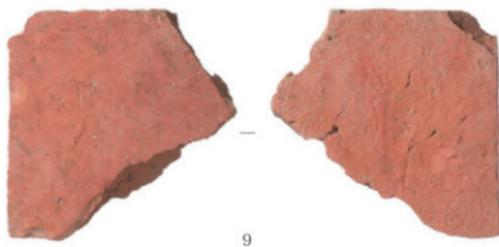
第84図 埴2

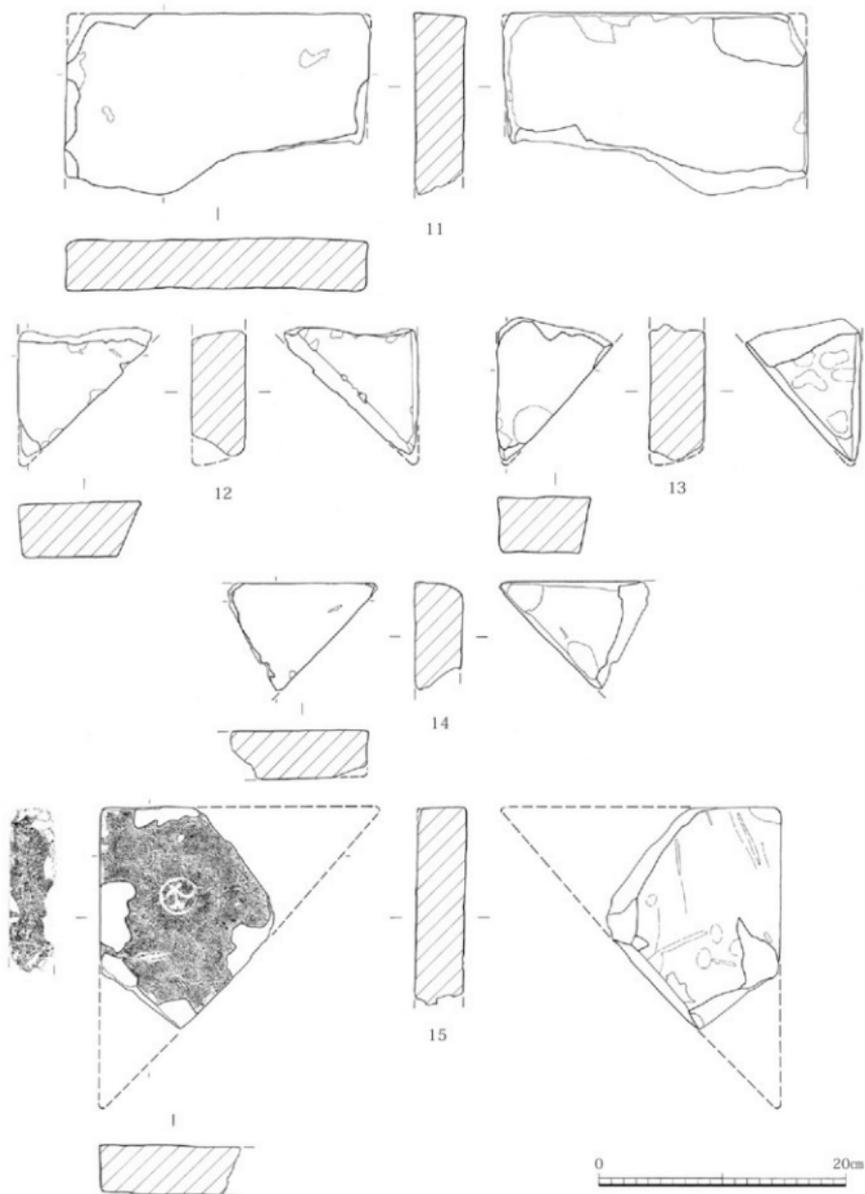


図版 78 埴 2

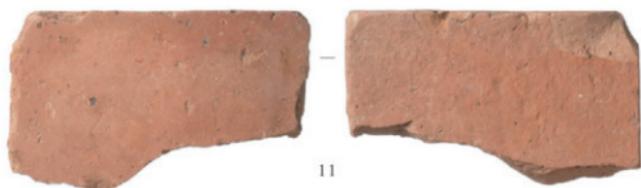


第85図 埴3





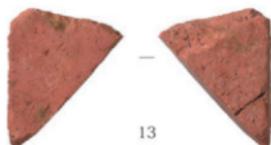
第86図 埴4



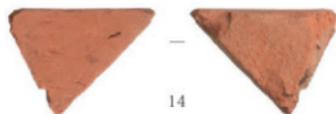
11



12



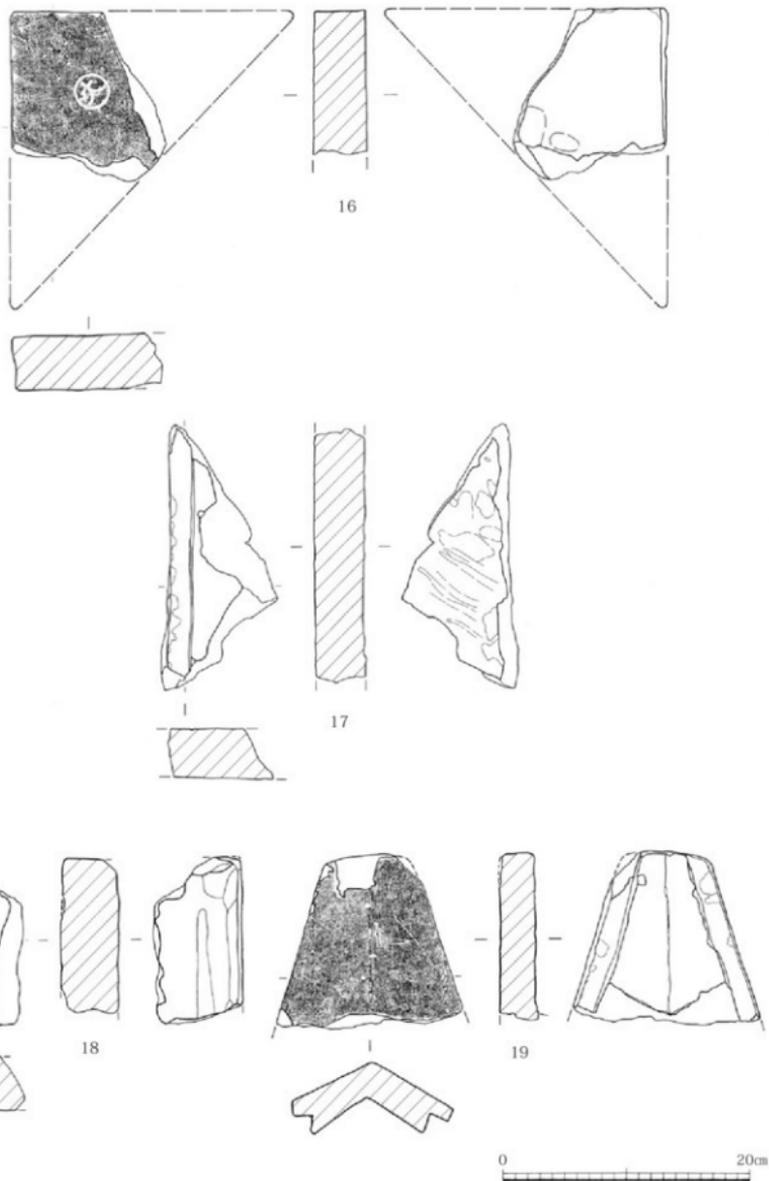
13



14



15



第87図 埴5



16



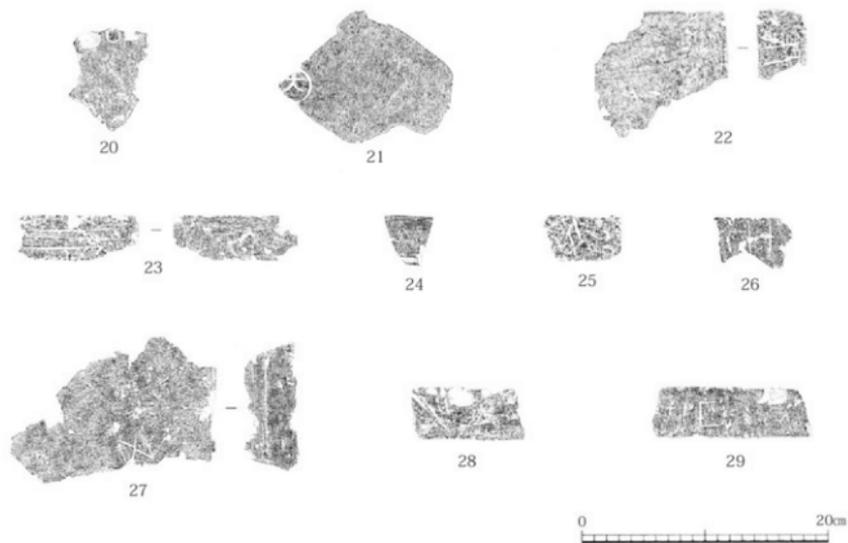
17



18



19



第88図 埴6



図版 82 埴6

24 その他の遺物（第89図、図版83）

ここでは人工遺物のうち、本節23までの項目に該当しない資料を、その他の遺物としてまとめた。詳細は観察表にまとめるが、概要を以下に報告する。

1・2は、陶磁器焼成時に使用する窯道具である。1はハマと称される窯道具で、復元した直径は15cm、熔着を防ぐため、上面に同心円状、側面には横位に櫛描きによる細かい溝を多数施す。

本資料は初期沖繩産無釉陶器製と思われるが、沖繩県内の古窯跡各所から出土している（沖繩県教育委員会1992、那覇市教育委員会1992・1997、石垣市教育委員会1993ほか）。ハマは焼成室内に製品を立体的に積み上げる際の台として、量産を目的に使用される（佐賀県立九州陶磁文化館2007）。

2はチャツと呼ばれる窯道具である。粗い耐火粘土製で、下面をくぼませる。平成21（2009）年度の首里城御内原北地区発掘調査では、中国産青磁碗の底部に付着した状態で出土しており（沖繩県立埋蔵文化財センター2013）、本資料と材質が類似することから中国産の可能性もある。その他類例として、那覇市の渡地村跡からは17点が出土しており、輸入陶磁器とともに搬入されたと想定されている（那覇市教育委員会2012）。チャツは陶磁器の高台内に付け、豊付を浮かせた状態で焼成することにより熔着を防ぐほか、豊付に施した製品を製造することが可能となる（佐賀県立九州陶磁文化館2007）。

3は白磁製の罫子である。型押し成形のため、製品全面に粘土シワが残る（佐賀県立九州陶磁文化館2007）。資料はノップ罫子とされるもので、低圧電気を屋内に配線するために用いられる。

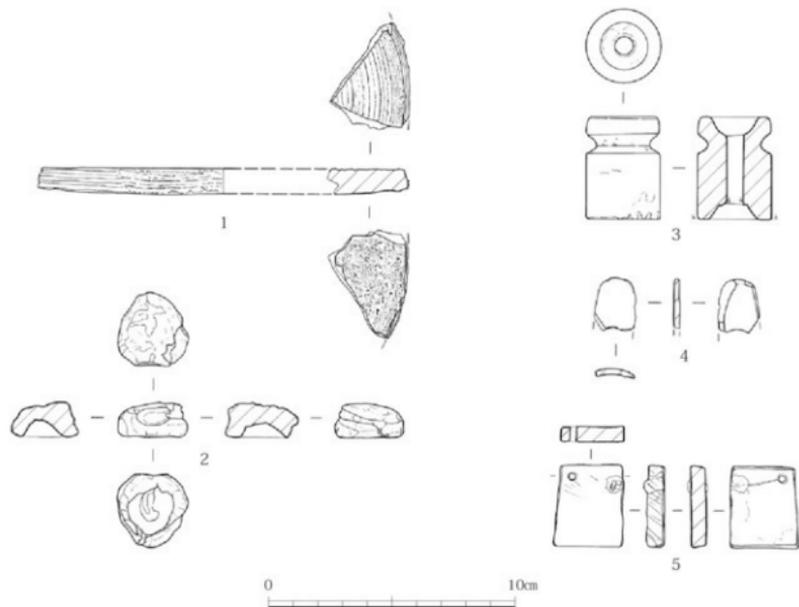
4は炭化した木製品と思われる資料で、1点がC-8グリッド第Ⅲ層から出土している。形状は指の爪状で、先端部を丸く成形する。横断面は湾曲することから、材質は竹になる可能性がある。下部は破損しているとみられ、用途は不明である。

5は炭素板である。縦3.4cm、横2.8cm、厚さ0.6cmのサイズで、上部に孔が2点みられ、ひとつは錆びた鉄で埋まっている。全面に切斷・加工時の線状痕が残り、形状から実験用炭素板の可能性もある。当該地には琉球大学当時、第1理学校舎や教養教室が存在していたことから（第6図）、この施設と関連する遺物の可能性がある。

図版83・6・7はC-1グリッド造成層中より出土した炭化種子である。大きさや形状からイネの可能性もある。なお、京の内跡土壌SK01内からは57点の数種の炭化種子が出土しており、その中にイネが含まれている（沖繩県立埋蔵文化財センター2009）。

第33表 その他の遺物観察一覧

図・図版番号	番号	分類	法量 (cm・g)					観察事項	グリッド・層		
			縦	横	厚さ	孔径	重量				
第89図 図版83	1	窯道具	ハマ	径 15.0	—	高さ 0.9	—	(16.1)	初期沖繩産無釉陶器製と思われる製品。熔着を防ぐため、上面に同心円状、側面には横位に櫛状工具による細かい溝を多数施す。	D-9 II層	
	2		チャツ	3.0	1.4	高さ 2.8	—	0.4	粗い耐火粘土製で、下面をくぼませる。中国産の可能性もある。	C-3 新造成	
	3	罫子	(9f)	4.2	(10)	3.0	—	0.65	51.7	近現代の白磁製の罫子。型押し成形のため、製品全面に粘土シワが残る。資料はノップ罫子とされるもので、低圧電気を屋内に配線するために用いられる。	覆乱
	4		木製品	(22)	1.65	0.25	—	0.4	炭化した木製品と思われる資料。形状は指の爪状で、先端部を丸く成形。横断面は湾曲することから、竹になる可能性がある。	C-8 III層	
	5	炭素板	3.4	2.80	0.60	0.25	9.1	上部に孔が2点みられ、ひとつは錆びた鉄で埋まる。全面に切斷・加工時の線状痕が残る。実験用炭素板の可能性あり。	B-3 覆乱		



第89図 その他の遺物



図版83 その他の遺物

25 貝類遺体・微小貝 (第34・35表、第90～92図、図版84～87)

本調査地区より出土した貝類遺体は、腹足綱(巻貝)がピックアップ35科65種、水洗選別18科26種、斧足綱(二枚貝)がピックアップ17科39種、水洗選別12科22種、さらに微小貝などが確認されている(第34表)。これらの種別・層別・グリッド別検出状況及び生息場所類型組成を示した(第90図～第92図)。

最少個体数の特定は、以下の方法で行った。

①巻貝

完形(全体の様相が確認でき、かつ僅かな欠けであれば完形とする)と殻頂部の確認されるものとを合計した点数を最少個体数として扱う。なお、検出が破片のみである場合にはすべて1個体として扱うこととする。

②二枚貝

左右に分類し、それぞれの完形・殻頂を合計した点数の多い方を最少個体数として扱う。また、巻貝と同様に破片のみの場合には1個体として扱っている。

第34表 貝類遺体の分類と生息場所類型1

腹足綱 Gastropoda		生息場所類型	腹足綱 Gastropoda		生息場所類型
33/99 (H) Littorididae			41/20科 Bivalviae		
1	リュウキュウノアシ <i>Panella saccharina</i>	1-0-a	46	オネニシ <i>Bera hufnisi doherty</i>	1-3-a
2	カサガイ目 科不明		47	シオボラ <i>Cyprinus murianus</i>	1-2-a
3	ニシキウズ <i>Trochus maculatus</i>	1-2-a	48	ホウガイ <i>Chama tritona</i>	1-4-a
4	ムラサキウズ <i>Trochus rufatus</i>	1-3-a	49	フジツガイ科 不明	
5	ボンタカハマ <i>Trochus pinnatus</i>	1-4-a	7/11 (H) Muricidae		
6	サササハガイ <i>Trochus nitidus</i>	1-4-a	50	コガンゼキボラ <i>Chama pinnatus</i>	1-4-a
7	オネニシイシダタミ <i>Morodona lili</i>	II-1-b	31	ウネレイシダマン <i>Cyprina margaritacea</i>	1-1-b
8	ニシキウズガイ科不明		52	ウレシクワシドモキ <i>Mactolapa fusca</i>	1-1-a
9	ヤコガイ目 <i>Turbo turbinatus</i>	1-4-a	53	ツルイシ <i>Mactinella suberosa</i>	1-3-a
10	ヤコガイ目の属 <i>Turbo mammosus</i>	1-4-a	54	シラケガイ <i>Thais (Stomatia) arriaga</i>	1-3-a
11	チャウセンサザエ <i>Turbo argyromus</i>	1-3-a	55	ツルイシ <i>Thais (Stomatia) argyrea</i>	1-1-a
12	チャウセンサザエの属 <i>Turbo argyromus</i>	1-3-a	56	フツキガイ科 不明	
13	カンゴウ <i>Lanella crenata crenata</i>	II-1-b	47/17 (H) Vastidae		
14	カンゴウの属 <i>Lanella crenata crenata</i>	II-1-b	57	コオニコブシ <i>Favos verbeulani</i>	1-2-a
15	リュウテン科 不明		7/20 (H) Columbelloidea		
16	マングローブアマガイ <i>Nerita undulata</i>	III-1-b	58	フトコガイ <i>Eupha scripta</i>	II-2-d
17	マルアマオブネ <i>Nerita spinulata</i>	III-1-c	40/17 (H) Nassariidae		
18	アマオブネガイ <i>Nerita abicilla</i>	1-1-b	17/1 (H) Buccinidae		
19	ニシキアマオブネ <i>Nerita (Lamneria) polita</i>	1-1-c	60	ノシガイ <i>Eugina mendicaria</i>	1-1-a
20	オニツノガイ <i>Cerithium madrasense</i>	1-2-c	61	シマベッコウガイ <i>Apurthia cingulata</i>	II-1-c
21	コオニツノガイ <i>Cerithium columbianum</i>	1-2-c	47/14 (H) Fasciolaridae		
22	イワカニモリ <i>Clypeomorus batillariaformis</i>	II-1-c	62	イトマキボラ <i>Platytylia japonica</i>	1-2-a
23	ヒメウカニモリ <i>Cerithium azanum</i>	II-2-d	63	ナガイトマキボラ <i>Platytylia flammula</i>	1-2-a
24	カヤノミカニモリ <i>Clypeomorus bilocata</i>	1-0-a	11 (H) Conidae		
25	クワノミカニモリ <i>Clypeomorus perona chermaniana</i>	1-1-a	64	アンボンクワザメ <i>Conus litoreus</i>	1-2-c
26	フシカニモリ <i>Rhaxoloxys (Rhaxoloxys)</i>	1-4-c	65	ササギタヒモ <i>Conus millari</i>	1-1-a
27	オニツノガイ科 不明		66	ハツワイモ <i>Conus (Fuscovorus) ponsaldi</i>	1-1-a
28	ゴマフニナ <i>Planaxidae</i>	1-0-a	67	ツヤヒモ <i>Conus (Strophovorus) borisica</i>	1-2-a
29	リュウキュウミニナ <i>Bastillaria flexuosipinnata</i>	II-1-c	68	アジロヒモ <i>Conus pinnatus</i>	II-2-c
30	スグカウニナ <i>Thais uniformis</i>	IV-5	69	イモガイ科 不明	
31	フトヘナタリ <i>Cerithium rhizophoranum</i>	III-0-d	70	タケノコガイ <i>Turbo subulata</i>	1-2-c
32	カウアイ <i>Cerithiopsis distansensis</i>	III-1-c	71	ヒクナツメグルマ <i>Helicis (Helicis) variegata</i>	1-4-a
33	シジマギキ <i>Strombus gibberulus gibberus</i>	II-1-c	72	クルマガイ科 不明	
34	オハクログガイ <i>Strombus arcuatus</i>	1-0-a	17/18 (H) Pyramulidae		
35	マガキガイ <i>Strombus luhuanus</i>	1-2-c	73	シノミクチキレ <i>Opeleus miralis</i>	1-1-c
36	トンボガイ <i>Turbo verbeulani</i>	II-2-c	74	ナツメガイ <i>Bulla venosus</i>	1-2-c
37	カワチドリ <i>Hippocis foliacea</i>	1-3-a	75	サケツノガイ <i>Fanatia sippensis</i>	VI-11
38	スズメガイ <i>Hippocis trigona</i>	1-1-a	75/17 (H) Clausidae		
39	ムカデガイ科 不明		76	ツヤギセルガイ <i>Lachryphloeus p. procerus</i>	V-8
40	コメンダカラ <i>Cyprina crenata</i>	1-1-a	77/2 (H) Cyclophoridae		
41	ハナビシダカラ <i>Cyprina omaha</i>	1-1-a	77	オキナヤマタニシ <i>Cyclophorus nequidus nequidus</i>	V-8
42	ハナマルスキ <i>Cyprina capensisperis</i>	1-3-a	77/11 (H) Achatinidae		
43	タカラガイ科 不明		78	アフリカマイマイ <i>Achatina fulica</i>	V-9
44	ホウシュノタマ <i>Natica gushertiana</i>	II-1-c	72/17 (H) Camaenidae		
45	リスガイ <i>Morondia melanostoma</i>	1-2-c	79	シュリマイマイ <i>Succinea mercatoria mercatoria</i>	V-8
			80	ハンダナマイマイ <i>Bradybaena cincta</i>	V-8
			81	マイマイ科 不明	
			82	ヘビガイの一属 <i>"Serphele" sp.</i>	1-2-a

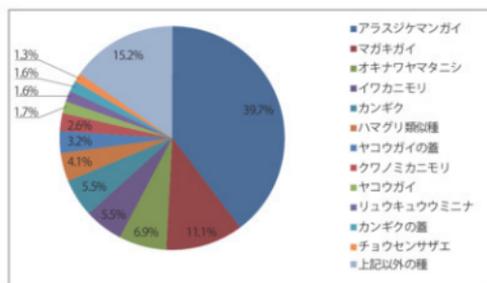
第34表 貝類遺体の分類と生息場所類型2

	原記載 Gastropoda	生息場所類型		二枚貝類 Bivalvia	生息場所類型
	環形動物門 Annelida		394 科 Chamaidae		
	多毛類 Polychaeta				
83	ゴカイ類棲管 (枝口部) <i>Bolita, sp. sp. (Tabe)</i>	N-11	17 シシガシラキウザル	<i>Chama scrippsii</i>	II-1-a
84	巻貝不明		18 カネツクザル	<i>Chama zanzana</i>	II-1-a
			19 キタザル科不明		
	節足動物門 Arthropoda		4 科 Cardidae		
	軟甲類 Malacostraca		20 リュウキュウザル	<i>Agonara florum</i>	II-2-c
	7科 Grapsoidea		21 カワラガイ	<i>Flagium unale</i>	II-2-c
90	モクスズガニ		22 ヒメシヤコガイ	<i>Tridacna ovata</i>	I-2-a
	棘皮動物門 Echinodermata		23 ヒレシヤコガイ	<i>Tridacna japonica</i>	I-2-c
	ウニ類 Echinoidea		24 オキシラナミ	<i>Tridacna murina</i>	I-2-a
	5科		25 シヤコガイ科不明		
91	ウニ	I-3-a			
	9科 5科 Toxopneustidae		5 科 Mactridae		
92	シラヒゲウニ? <i>Tiponeus granita?</i>	I-2-c	26 リュウキュウバカガイ	<i>Mactra maculata</i>	II-2-c
	頭足類 Cephalopoda		9 科 Mesodesmatidae		
	2科 Sepiidae		27 イソハマダリ	<i>Atarctia striata</i>	I-1-c
93	コブシメ	I-2-c	28 ナミノコマスオ	<i>Davila plana</i>	I-1-c
94	巻貝不明		29 リュウキュウナミノコ	<i>Lanusa faba</i>	I-1-c
	二枚貝類 Bivalvia		2997 科 Psammobidae		
	7科 Arcidae				
1	フネガイ <i>Arca erudita</i>	I-2-a	30 マスオガイ	<i>Psammotus elongata</i>	II-1-c
2	エガイ <i>Barbatia (Barbatia) lima</i>	I-1-a	31 リュウキュウマスオ	<i>Asaphis violaceus</i>	II-1-c
3	ベニエガイ <i>Barbatia (Urosalpinx) fusa</i>	I-2-a	32 シレナシジミ	<i>Gelusa ovata</i>	III-0-c
4	リュウキュウサルボウ <i>Anadara antiquata</i>	II-2-c	33 ヤマトシジミ	<i>Cochlicopa japonica</i>	III-2-c
5	ハイガイ <i>Tegulus granosa</i>	II-2-c	34 シジミ科不明		
6	フネガイ科不明		763 科 Vermetidae		
	9科 Glycymerididae				
7	ソメウケグリ <i>Glycymera (Hilomena) rosei</i>	II-2-c	35 ヌノメガイ	<i>Polydora puerpera</i>	II-1-c
	8 科 Mytilidae		36 カノコアサリ	<i>Glycydona muricea</i>	I-2-c
8	リュウキュウヒバガイ <i>Mediolina carolinata</i>	I-1-a	37 アラスジケマンガイ	<i>Gelbarium tumidum</i>	III-1-c
	99 科 Pectinidae		38 ホソジイナミガイ	<i>Gelbarium pectinatum</i>	II-1-c
9	ミドリアオリ <i>Pinctada japonica</i>	I-1-a	39 ウウカゲハマグリ	<i>Pitar cinnamom</i>	II-2-c
	10 科 Pectinid		40 マルオミナエシ	<i>Lacuna costensis</i>	I-2-c
10	イタヤガイ科不明		41 オノノカガミ	<i>Bucconina hirta</i>	II-2-c
	5 科 Grypharidae		42 イキウハマグリ	<i>Pitar solomon</i>	II-1-c
11	ベニガキ <i>Heteris chemnitzii</i>	I-2-a	43 リュウキュウアサリ	<i>Tapes literata</i>	II-2-c
	10 科 Ostreidae		44 スダレハマグリ	<i>Kimysia japonica</i>	II-1-c
12	シマガキ <i>Crassostrea lineata</i>	II-2-c	45 ハマグリ類群	<i>Meretrix sp. cf. laevis</i>	II-2-c
13	ニセマガキ <i>Saxostrea chinata</i>	II-1-b	46 トユドユマリハマグリ	<i>Meretrix sp. cf. laevis</i>	II-2-c
14	イタボガキ科不明		47 ダテオキシジミ	<i>Cyclina sp. cf. nitens</i>	III-1-c
	7科 Lucinidae		48 マルスダレガイ科不明		
15	ウラキツキガイ <i>Gadusa paysonorum</i>	II-2-c	49 二枚貝科不明		
	7科ガイ科不明				

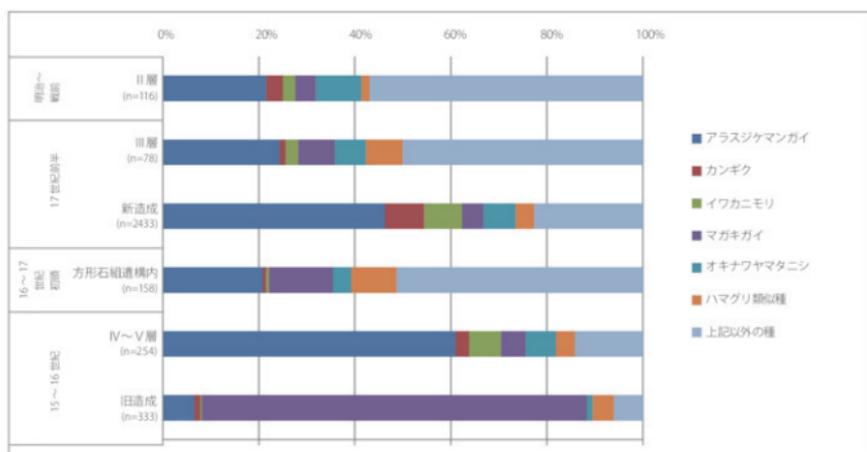
第35表 貝類遺体の生息場所類型表 (黒住 1987)

大区分	小区分	底質等
I: 外洋・サンゴ礁域	0: 潮間帯上部 (1・ノッチ、Ⅲ・マングローブ)	a: 岩礁、岩盤
II: 内湾・船石域	1: 潮間帯中・下部 2: 準潮間帯上縁部 (1・イノー内)	b: 船石
III: 河口下流・マングローブ域	3: 干瀬 (1にのみ適用) 4: 微斜面	c: 岩礫底、砂泥底、砂底
IV: 淡水域	5: 止水 6: 流水	d: 河川礫底
V: 陸域	7: 林内 8: 林内・林縁部 9: 林縁部 10: 海浜部	e: 淡水の流入する礫底
VI: その他	11: 打ち上げ物 12: 化石	

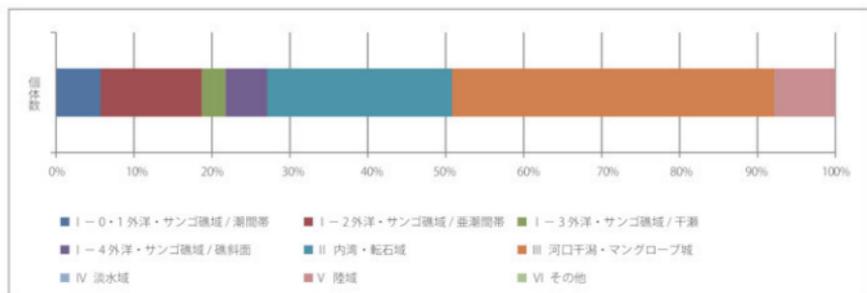
※第35表は、沖縄県文化財調査報告書第84集「古我知原貝塚 (本文編)」1987を参考に作成



第90図 貝類遺体種別検出状況



第91図 貝類遺体層別検出状況



第92図 貝類遺体生息場所類型組成



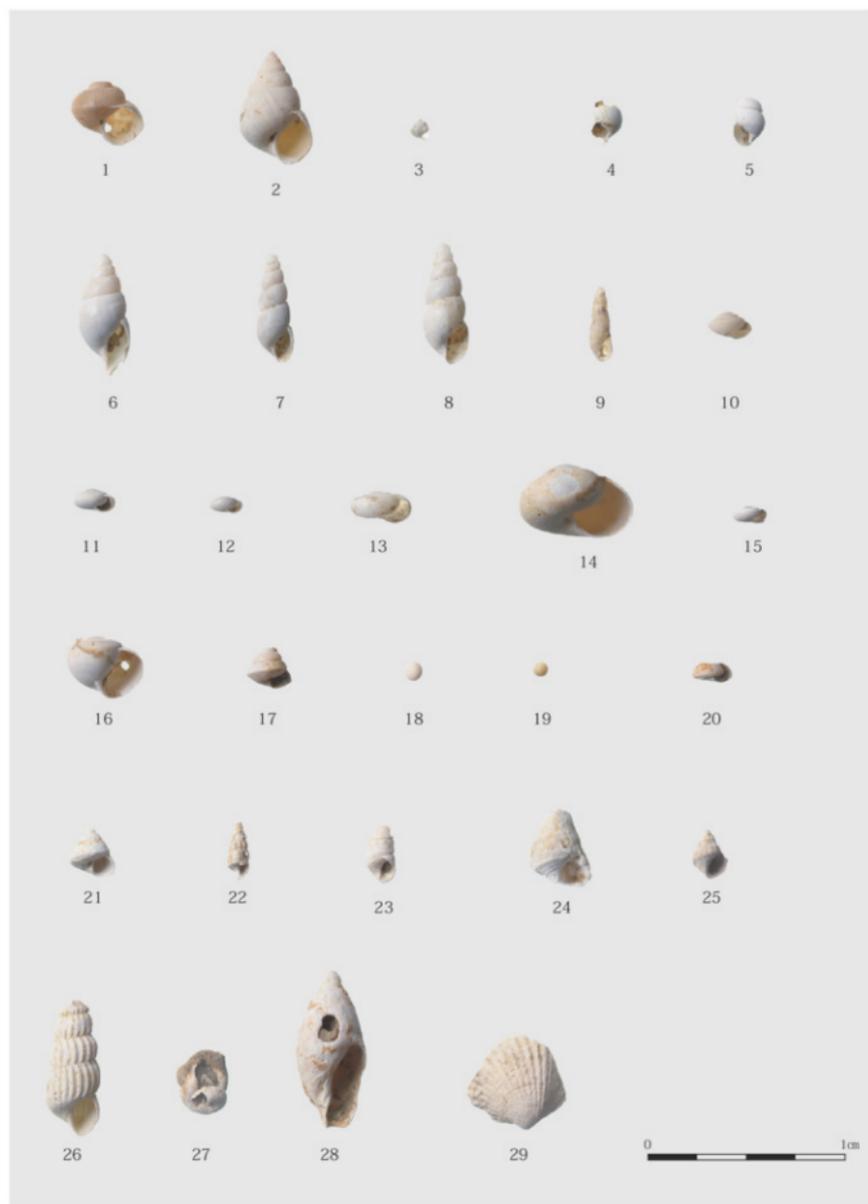
図版 84 貝類遺体 1 巻貝 (番号は第 34・79・81 表と一致)



図版 85 貝類遺体 2 巻貝 (番号は第 34・79・81 表と一致)



図版 86 貝類遺体 3 二枚貝 (番号は第 34・80・82 表と一致)



図版 87 貝類遺体 4 微小貝 (番号は第 83 表と一致)

27 脊椎動物遺体 (第36～42表、第93～96図、図版88～92)

資料の概要

本報告の資料は、「ピックアップ(PU)資料」と「水洗選別資料」の2種類に分かれる。PU資料は、平成18～20年度発掘調査時に現場において手で拾い上げられた資料である。水洗選別資料は、平成20年度に貝や炭の集中する堆積物から採取した土壌サンプルを、フローテーション処理し、水洗処理後堆積物から微小骨を回収した資料である。堆積物サンプルは便宜上、袋別にサンプル番号を付し、水洗前の堆積物サンプルの重量を計量した(詳細は第37表)。

分析方法

脊椎動物遺体の種同定には、現生動物標本との比較を基本とした。用いた現生標本は、筆者が個人的に作製した標本のほか、沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵の標本を参照した。現生標本との直接比較ができないものは、菅原(2013)、樋泉(2013)の記載を参照した。魚類の同定対象は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を主とした。これに加え、咽頭骨・口蓋骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨なども分類群によって、同定に有効である場合は適宜対象とした。両生爬虫類・鳥獣類遺体は、部位同定が可能な資料を主に対象とした。四肢骨骨幹破片のうち、骨幹の全周を残さないものは基本対象外としたが、部位の判定可能な箇所が残存している資料は同定対象とした。また、同定・分析において、早稲田大学樋泉岳二氏に多大なご協力・ご助言を頂いた。

出土脊椎動物遺体の同定・記載

上記の分析方法に基づく種同定により、本資料からは軟骨魚綱2群、硬骨魚綱35群、両生綱1群、爬虫綱2群、鳥綱1群、哺乳綱12群が得られた。分類群も部位も特定できないものは「破片」とし、種同定はできないが、部位を特定できるものは部位名のみで集計した。魚類遺体はPU資料・水洗選別資料ともに、同定標本数(NISP)とその重量を集計した。また、水洗選別資料において、微小かつ破片数が多い資料は、重量計測のみに留めた(第38表一小計②)。両爬・鳥獣類遺体の残存位置の名称は、加藤(1990)、松岡ほか(2009)に従った。

魚類

サメ類:メジロザメ科、ネズミザメ科の椎骨が出土した。

イットウダイ科:PU資料から歯骨・角骨が1点ずつ出土した。アカマツカサの可能性が高い。

ハタ科:前上顎骨・歯骨・前鰓蓋骨を「マハタ型」と「スジアラ型」に分けて同定した。その他の細別が難しい部位は、ハタ科として一括した。

アジ科:主上顎骨・椎骨が出土し、サイズによって判別できるため、大型と小型に分けて同定した。

フエダイ科・タイ科:主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・主鰓蓋骨が出土した。タイ科の角骨1点以外は、クロダイ属に同定された。

フエフキダイ科:前上顎骨が大きな歯をもつなどの特徴からヨコシマクロダイに同定し、歯列形状から「ハマフエフキ型」と「アマミフエフキ型」に分けて同定した。残りの良くない前上顎骨やその他の部位は、現生標本との比較から「フエフキダイ属」「フエフキダイ科」に一括した。カットマークがある主上顎骨が1点確認された(図版89-77)。

ベラ科:上下咽頭骨の歯列形状から、菅原(2013)を参考に「シロクラベラ型」「タキベラ型」「ベラ科(B)」「ベラ科(その他)」と細分して同定された。前上顎骨・歯骨は明確な区分ができる「キツネベラ型」が同定され、それ以外はベラ科とした。椎骨は現生標本との比較から、樋泉(2013)を参考に「シロクラベラ型」として定された。

ブダイ科:前上顎骨・歯骨・上下咽頭骨の歯列の形状から、イロブダイ属とアオブダイ属に同定された。その他の部位はブダイ科として一括した。

モンガラカワハギ科:同定の比較的容易な背鰭棘と、前上顎骨・椎骨が同定された。

その他は、ボラ科・サヨリ科・ダツ科・カマス科・タチウオ科・シイラ属・サバ科・カツオ/マグロ類・ニザダイ科・アイゴ属を椎骨で同定した。コショウダイ類の歯骨が1点、ハリセンボン科の前上顎骨または歯が1点出土している。

両生・爬虫類

カエル類(無尾目)は大腿骨が1点、ヘビ類(有鱗目)は多数の椎骨が確認された。C-8 Ⅲ層から、ハブ

属の牙が1点と、1個体分と思われる連結した椎骨が出土している（図版22-7）。

鳥類

分類群を特定できたのはニワトリのみである。鳥口骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・大腿骨・脛足根骨・足根中足骨で同定した。成鳥のみが確認される。上腕骨・大腿骨1点にスパイラル・フラクチャーが見られた。

哺乳類

完存や残りの良い資料は遊離歯や四肢骨の一部で、ほとんどは破片であった。遊離歯や四肢骨が主に同定対象になり、欠損している椎骨や肋骨はほぼ同定できなかった。ウマ・イノシシ/ブタ・ウシの四肢骨や寛骨片に、カットマーク（図版中の矢印）やスパイラル・フラクチャーの認められる資料が散見される。

ネズミ科：住家棟のクマネズミ属の頭骨が1点出土している。その他確認された下顎骨・遊離歯はネズミ亜科、椎骨・四肢骨・寛骨はネズミ科までの同定が限界であるが、サイズからクマネズミ属である可能性は高い。

ウマ：遊離歯が多く、肋骨・中手骨・寛骨・大腿骨が出土している。

イノシシ/ブタ：頭蓋破片や遊離歯・椎骨・四肢骨など概ね全身の部位が出土している。特に四肢骨が最も多く、骨端が未癒合の状態が確認される若齢個体がおおよそ半数を占める。四肢骨や体幹骨に対して、顎骨・遊離歯の数が極端に少ない点は、他の首里城調査地区や中・近世の遺跡から出土するイノシシ/ブタの部位の比率とは異なる。その理由については今後の検討課題である。下顎骨1点（図版91-24）においては、歯列が萌出中のM₂から側側に傾いている特徴から、この個体をブタと同定した。その他のイノシシ骨は、形態から判別が困難であったため、「イノシシ/ブタ」とした。

ヤギ：遊離歯が確認された。ヤギの幼獣と思われる四肢骨6点が、E-6 方形石組遺構から2個体分出土している。

ウシ：角芯・遊離歯・椎骨・四肢骨などが出土しているが、遊離歯以外はほぼ破片である。

その他に、ネコの中足骨が2点、イヌの焼骨？が1点、イルカ類の椎骨が1点、ヒトの歯が1点出土した。また、分類群不明の四肢骨？（サイズはイノシシまたはシカ大）が確認された（図版92-62）。

脊椎動物遺体の組成（第93～96図）・まとめ

層位の対応する時期に従って、Ⅱ層（明治～戦前）、Ⅲ層・「新造成」（17世紀前半）、「方形石組遺構内」（16～17世紀初頭）、Ⅳ～Ⅴ層・「旧造成」（15～16世紀）に区分し、脊椎動物遺体の出土組成の傾向を窺った。層位の詳細は第38～41表を参照された。

脊椎動物分類群全体において、両資料ともに最も同定標本数（NISF）の多いのは魚類であり、PU資料においては5～7割程度、水洗選別資料ではおおよそ9割を占め、哺乳類がそれに次ぐ。Ⅲ層の両生・爬虫類で数を占めるヘビ類は自然遺散である可能性が高い。PU資料で、魚類遺体はほぼ全時期を通して、ブダイ科、フエフキダイ科、ハタ科、ベラ科の順に多い。17世紀前半以降にのみサメ類が確認されている。鳥獣類遺体ではイノシシ/ブタが最もNISFが多く、次いでニワトリ、ウマ、ウシが数を占める。それぞれの時期による組成の変化に若干の変動はあるが、大きな傾向の変化は認められない。Ⅱ層は組成が大きく異なるが、資料数が少ないため、Ⅱ層の傾向の特長を反映していないと思われる。水洗選別資料では、主にC-3-C-4「新造成」の貝・炭が集中する区画で採取された堆積物サンプルから、多くの魚類遺体が回収された。種構成はフエフキダイ科、ブダイ科が主体である。ボラ科、サヨリ科、タチウオ科、アジ科（小型）、サバ科、アイゴ属は水洗選別のみで回収された。

本資料における脊椎動物遺体の出土組成の傾向をまとめると、魚類はフエフキダイ科やハタ科・ベラ科・ブダイ科などのサンゴ礁性やその周辺に棲息する沿岸性の魚類が主体である。さらに、回遊魚など多くの分類群も確認されている。鳥獣類は、家禽・家畜を主体とし、その中でもイノシシ/ブタの出土が多い。首里城の他地区の調査報告を窺うと、本資料の出土傾向は他地区とほぼ一致しているといえる。このような組成や解体痕のある骨が見られることから、銭蔵地区の動物骨利用の主体は魚類や家畜類の食糧残渣であり、一部骨製品の素材や小動物の自然遺散が混入したと考えられる。

第36表 脊椎動物遺体出土分類群一覧

軟骨魚類	Chondrichthyes
メジロザメ科	Carcharhinidae
ネズミザメ科	Lamnidae
硬骨魚類	Osteichthyes
イットウダイ科	Holocentridae
ボウ科	Mugilidae
サヨリ科	Hemiramphidae
ダツ科	Bektiidae
カマス科	Sphyraenidae
タチウオ科	Trichuridae
ハタ科(マハタ型)	Serranidae cf. <i>Epiplatys</i>
ハタ科(スミアラ型)	Serranidae cf. <i>Plectropterus</i>
アジ科	Carangidae
アジ科(大型)	Carangidae(large)
シラウ属	Coryphaenae sp.
コショウダイ属	<i>Plectropterus</i> sp.
フエダイ科	Kyphosidae
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.
タイ科	Sparidae
ヨコシマクロダイ	<i>Morone chirocentrus</i>
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	Lethrinus cf. <i>Lethrinus</i>
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)	Lethrinus cf. <i>Lamamensis</i>
フエフキダイ属	<i>Lethrinus</i> sp.
フエフキダイ科	Lethrinidae
ベタ科(ロウケラベラ型)	Labridae cf. <i>Chromis olivaceus</i>
ベタ科(カハベラ型)	Labridae cf. <i>Bodianus jenkinsi</i>
ベタ科(キツネベラ型)	Labridae cf. <i>Bodianus hikidai</i>
ベタ科(他)	Labridae (B)
ベタ科(その他)	Labridae (others)
ベラ科	Labridae

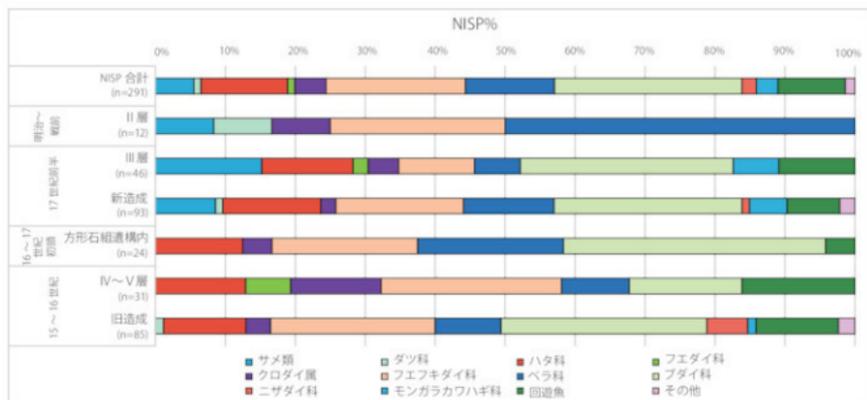
硬骨魚類	Chondrichthyes
イロブダイ属	<i>Balsongnus</i> sp.
アオブダイ属	<i>Sauria</i> sp.
フダイ科	Scorpaenidae
サハ甲	Scarus
カツオ・マグロ類	<i>Katsuwonus</i> ・ <i>Thunnus</i>
ニガダイ科	Acanthuridae
アイゴ属	<i>Siganus</i> sp.
モンガラカワハダ科	Baliscidae
ハリセンボン科	Diodontidae
両生類	Amphibia
カエル類	Anura
爬虫類	Reptilia
ハブ属	<i>Pseudobuts</i> sp.
ヘビ類	Ophidia
鳥類	Aves
ニワトリ	<i>Gallus gallus</i>
哺乳類	Mammalia
クマネズミ属	<i>Rattus</i> sp.
ネズミ亜科	Murinae
ネズミ科	Muridae
ネコ	<i>Felis concolor</i>
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ウサギ	<i>Lepus capensis</i>
イナシシ/ブタ	<i>Sus scrofa</i> / <i>S. var. domestica</i>
ヤギ	<i>Capra hircus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>
イルカ類	Odontoceti
ジュゴン	<i>Dugong dugong</i>
ヒト	<i>Homo sapiens</i>

第37表 水洗選別堆積物サンプルの一覧

グリッド	層序	サンプル袋 No.	メッシュ (mm)	水洗前サンプルの量		備考
				総重量 (g)	総体積 (cc)	
C-2	造成(貝塚中) 平残土(南側)	472	1.0	1,740	2,000	
C-2	造成(貝塚中) 平残土(中央)	473	1.0	3,550	3,500	
C-3	新造成	2051	1.0	800	900	炭化物を多く含む
C-3	新造成	2055	1.0	60	計測不可	
C-3	新造成	2056	1.0	3,840	3,000	炭化物を多く含む
C-3	新造成	2057	1.0	2,100	2,000	炭化物を多く含む
C-3	新造成	2085	1.0	590	600	炭化物を多く含む
C-3	造成	2053	1.0	420	< 500	
C-3	造成	2059	1.0	1,460	1,200	
C-3	新造成(貝塚中土)サンプル	2058, 2087 ~ 2092, 2094, 2095	1.0	32,950	30,100	9区分 炭化物を多く含む
C-4	新造成	2050	1.0	1,600	1,500	炭化物を多く含む
C-4	新造成	2052	1.0	< 10	計測不可	
C-4	新造成	2093	1.0	2,650	2,500	炭化物を多く含む
E-6	方形石組土層(民説)	2026	1.0	510	< 500	炭化物を多く含む
E-6	方形石組土層(民説)	2061	1.0	1,610	1,500	炭化物を多く含む
F-8	不明	2010	1.0	60	計測不可	



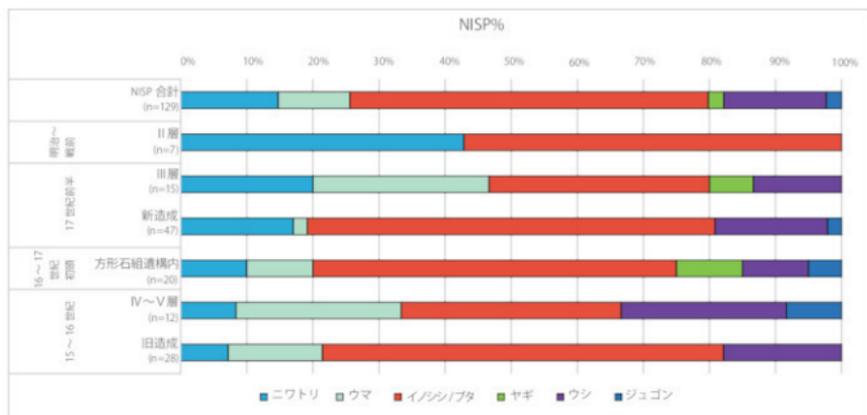
第93図 脊椎動物遺体(ピックアップ資料)の組成(NISP比)



第94図 魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP比）



第95図 魚類遺体（水洗選別資料）の組成（NISP）



第96図 鳥類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP比）

第38表 魚類遺体(ピックアップ資料)出土状況一覧5

※()内は検出率(%)を示す

分類群	グリッド		時期										F5	合計	
	グリッド		D-5	D-6	D-8	D-Ep-2	E-2	E-6	E-8	E-9	F-5	F5			合計
	部位	群位	検出	検出	検出	検出	検出	検出	検出	検出	検出				
アサギ	群位	—	1 (0.6)					1					20	114.2	
アサギ	群位	—										1 (0.7)	1	10.2	
アサギ	群位	—											31	11.0	
アサギ	群位	—											5	12.6	
アサギ	群位	—											2	12.6	
アサギ	群位	—											4	14.9	
アサギ	群位	—											2	16.7	
アサギ	群位	—											1	19.0	
アサギ	群位	—											3	22.9	
アサギ	群位	—											2	26.7	
アサギ	群位	—											1	29.0	
アサギ	群位	—											2	33.8	
アサギ	群位	—											4	42.1	
アサギ	群位	—											2	49.0	
アサギ	群位	—											3	56.8	
アサギ	群位	—											4	64.6	
アサギ	群位	—											5	72.4	
アサギ	群位	—											6	80.2	
アサギ	群位	—											7	88.0	
アサギ	群位	—											8	95.8	
アサギ	群位	—											9	103.6	
アサギ	群位	—											10	111.4	
アサギ	群位	—											11	119.2	
アサギ	群位	—											12	127.0	
アサギ	群位	—											13	134.8	
アサギ	群位	—											14	142.6	
アサギ	群位	—											15	150.4	
アサギ	群位	—											16	158.2	
アサギ	群位	—											17	166.0	
アサギ	群位	—											18	173.8	
アサギ	群位	—											19	181.6	
アサギ	群位	—											20	189.4	
アサギ	群位	—											21	197.2	
アサギ	群位	—											22	205.0	
アサギ	群位	—											23	212.8	
アサギ	群位	—											24	220.6	
アサギ	群位	—											25	228.4	
アサギ	群位	—											26	236.2	
アサギ	群位	—											27	244.0	
アサギ	群位	—											28	251.8	
アサギ	群位	—											29	259.6	
アサギ	群位	—											30	267.4	
アサギ	群位	—											31	275.2	
アサギ	群位	—											32	283.0	
アサギ	群位	—											33	290.8	
アサギ	群位	—											34	298.6	
アサギ	群位	—											35	306.4	
アサギ	群位	—											36	314.2	
アサギ	群位	—											37	322.0	
アサギ	群位	—											38	329.8	
アサギ	群位	—											39	337.6	
アサギ	群位	—											40	345.4	
アサギ	群位	—											41	353.2	
アサギ	群位	—											42	361.0	
アサギ	群位	—											43	368.8	
アサギ	群位	—											44	376.6	
アサギ	群位	—											45	384.4	
アサギ	群位	—											46	392.2	
アサギ	群位	—											47	400.0	
アサギ	群位	—											48	407.8	
アサギ	群位	—											49	415.6	
アサギ	群位	—											50	423.4	
アサギ	群位	—											51	431.2	
アサギ	群位	—											52	439.0	
アサギ	群位	—											53	446.8	
アサギ	群位	—											54	454.6	
アサギ	群位	—											55	462.4	
アサギ	群位	—											56	470.2	
アサギ	群位	—											57	478.0	
アサギ	群位	—											58	485.8	
アサギ	群位	—											59	493.6	
アサギ	群位	—											60	501.4	
アサギ	群位	—											61	509.2	
アサギ	群位	—											62	517.0	
アサギ	群位	—											63	524.8	
アサギ	群位	—											64	532.6	
アサギ	群位	—											65	540.4	
アサギ	群位	—											66	548.2	
アサギ	群位	—											67	556.0	
アサギ	群位	—											68	563.8	
アサギ	群位	—											69	571.6	
アサギ	群位	—											70	579.4	
アサギ	群位	—											71	587.2	
アサギ	群位	—											72	595.0	
アサギ	群位	—											73	602.8	
アサギ	群位	—											74	610.6	
アサギ	群位	—											75	618.4	
アサギ	群位	—											76	626.2	
アサギ	群位	—											77	634.0	
アサギ	群位	—											78	641.8	
アサギ	群位	—											79	649.6	
アサギ	群位	—											80	657.4	
アサギ	群位	—											81	665.2	
アサギ	群位	—											82	673.0	
アサギ	群位	—											83	680.8	
アサギ	群位	—											84	688.6	
アサギ	群位	—											85	696.4	
アサギ	群位	—											86	704.2	
アサギ	群位	—											87	712.0	
アサギ	群位	—											88	719.8	
アサギ	群位	—											89	727.6	
アサギ	群位	—											90	735.4	
アサギ	群位	—											91	743.2	
アサギ	群位	—											92	751.0	
アサギ	群位	—											93	758.8	
アサギ	群位	—											94	766.6	
アサギ	群位	—											95	774.4	
アサギ	群位	—											96	782.2	
アサギ	群位	—											97	790.0	
アサギ	群位	—											98	797.8	
アサギ	群位	—											99	805.6	
アサギ	群位	—											100	813.4	
アサギ	群位	—											101	821.2	
アサギ	群位	—											102	829.0	
アサギ	群位	—											103	836.8	
アサギ	群位	—											104	844.6	
アサギ	群位	—											105	852.4	
アサギ	群位	—											106	860.2	
アサギ	群位	—											107	868.0	
アサギ	群位	—											108	875.8	
アサギ	群位	—											109	883.6	
アサギ	群位	—											110	891.4	
アサギ	群位	—											111	899.2	
アサギ	群位	—											112	907.0	
アサギ	群位	—											113	914.8	
アサギ	群位	—											114	922.6	
アサギ	群位	—											115	930.4	
アサギ	群位	—											116	938.2	
アサギ	群位	—											117	946.0	
アサギ	群位	—											118	953.8	
アサギ	群位	—											119	961.6	
アサギ	群位	—											120	969.4	
アサギ	群位	—											121	977.2	
アサギ	群位	—											122	985.0	
アサギ	群位	—											123	992.8	
アサギ	群位	—											124	1000.6	
アサギ	群位	—											125	1008.4	
アサギ	群位	—											126	1016.2	
アサギ	群位	—											127	1024.0	
アサギ	群位	—											128	1031.8	
アサギ	群位	—											129	1039.6	
アサギ	群位	—											130	1047.4	
アサギ	群位	—											131	1055.2	
アサギ	群位	—													

第39表 魚類遺体（水洗選別資料）出土状況一覧

※1：遺体は複数個体を示す

分類群	時期		新選出			方形石製遺体内		瓦製遺体内		合計								
	サブタイプ		C-3	C-3	C-4	E-6	C-2	C-2	C-3									
	部位	経緯	新選出	新選出 （呂宋島中上 ワタモ	新選出	方形石製上層 （同属）	造成（呂宋島中 平取上・中取）	造成（呂宋島中 平取上・中央）	造成									
メソロサメ科	横骨	—	3	(0.6)						3	(0.6)							
メソサメ科	横骨(背側)	—	1	(0.2)						1	(0.2)							
サヨリ科	横骨	—	30	(1.6)					2	(0.1)	32	(1.7)						
サヨリ科?	横骨	—	1	(0.4)						1	(0.4)							
アサギ科	横骨	—	2	(0.6)	1	(0.3)				3	(0.9)							
ウツス科	横骨	—	20	(1.5)						20	(1.5)							
ウツス科?	横骨	—	1	(0.1)						1	(0.1)							
ワハタ型	横骨	L	1	(0.7)						1	(0.7)							
		R						1	(1.3)	1	(1.3)							
		L	1	(0.7)						1	(0.7)							
		R	1	(2.6)						1	(2.6)							
		R	1	(0.2)						1	(0.2)							
		L	1	(0.4)						1	(0.4)							
		L	1	(0.4)				1	(0.7)	1	(0.4)							
		R								1	(0.2)							
		横骨	14	(7.9)			1	(0.4)		2	(0.5)	17	(8.8)					
		第一横骨	1	(0.1)							1	(0.1)						
ハヤシ科?	横骨	—	3	(0.2)	1	(0.8)				4	(1.0)							
アソ科(大型)	横骨	—	3	(4.1)						3	(4.1)							
アソ科(小型)	横骨	—	19	(2.6)						19	(2.6)							
アソ科(小型)?	横骨	—				1	(0.1)			1	(0.1)							
シメツル	横骨	—	9	(9.7)						9	(9.7)							
アスダ科	横上横骨	L	1	(0.2)						1	(0.2)							
		R	1	(1.2)						1	(1.2)							
カドダ目	横骨	R	1	(3.1)						1	(3.1)							
		L	2	(0.6)						2	(0.6)							
メギ科	横骨	R	1	(0.3)						1	(0.3)							
ハブアソコ型	横上横骨	L	1	(1.5)						1	(1.5)							
アソコ型	横上横骨	L	1	(2.8)						1	(2.8)							
アソコ型?	横上横骨	L	1	(0.5)						1	(0.5)							
アソコ型?	横骨	R	1	(0.6)					1	(0.1)	2	(0.7)						
		L	1	(0.4)						1	(0.4)							
		R	2	(1.7)						2	(1.7)							
		L	4	(5.0)						5	(5.7)							
		L	1	(0.1)						1	(0.1)							
		L	1	(1.1)						1	(1.1)							
		R	2	(1.1)						2	(1.1)							
		L	1	(0.2)						1	(0.2)							
		R	1	(0.4)						1	(0.4)							
		横骨	97	(20.6)			1	(1.4)		1	(0.2)	99	(22.2)					
		第一横骨	4	(0.8)							4	(0.8)						
アソコ型?	第一横骨	—	1	(0.1)						1	(0.1)							
貝目(五折)科	横骨	—	7	(5.7)						7	(5.7)							
シロクサベシ型	下横骨	—	3	(14.7)						3	(14.7)							
	横骨	—	20	(16.0)				6	(2.2)	26	(18.2)							
キツネベシ型	横骨	L	1	(0.3)						1	(0.3)							
		R	1	(2.3)						1	(2.3)							
		L	1	(3.9)						1	(3.9)							
		R				1	(0.9)			1	(0.9)							
		L	1	(0.1)						1	(0.1)							
		R				1	(0.3)			1	(0.3)							
		第一横骨	1	(0.1)				1	(0.4)	2	(0.5)							
		L	2	(0.8)						2	(0.8)							
		R	4	(3.1)						4	(3.1)							
		L	5	(7.5)						5	(7.5)							
		R	3	(6.2)						3	(6.2)							
		L	4	(2.9)						4	(2.9)							
		R	1	(0.4)						1	(0.4)							
		L	1	(1.8)						1	(1.8)							
		R	1	(0.4)						1	(0.4)							
		L	1	(1.0)						1	(1.0)							
		L			2	(0.9)				2	(0.9)							
		横骨	3	(1.7)	104	(34.7)			2	(1.9)	1	(0.3)	110	(38.6)				
		第一横骨	4	(1.4)							4	(1.4)						
		横骨	1	(0.4)							1	(0.4)						
		ニギサ目	19	(3.0)					2	(0.3)	21	(3.3)						
		横骨	1	(0.1)							1	(0.1)						
		横骨	1	(1.1)						1	(1.1)							
		L	1	(1.3)						1	(1.3)							
		L	1	(0.1)						1	(0.1)							
		R	1	(0.2)						1	(0.2)							
		L	1	(1.8)						1	(1.8)							
		R	2	(0.5)						2	(0.5)							
		不明	1	(0.1)						1	(0.1)							
		背縁線	64	(15.4)						64	(15.4)							
		横骨	1	(0.1)	75	(19.5)	5	(0.8)		1	(0.1)	82	(20.4)					
		第一横骨	1	(0.1)					1	(0.1)	1	(0.1)						
		尾端線	4	(2.1)					2	(0.6)	6	(2.7)						
		尾端	19	(6.5)				1	(0.8)		20	(7.3)						
		部位不明	1	(0.3)							1	(0.3)						
		横骨	9	(4.7)	611	(230.2)	9	(2.8)	1	(0.1)	5	(4.0)	14	(7.2)	10	(1.8)	659	(250.6)
ハヤシ科	横骨	破片			1	(0.1)					1	(0.1)						
カドダ目	横上横骨	破片			1	(2.6)					1	(2.6)						
ハヤシ科	横骨	破片			0	(0.0)					0	(0.0)						
アソコ型	下横骨	破片			4	(1.1)					4	(1.1)						
	下横骨	破片			1	(0.5)					1	(0.5)						
	上横骨	破片			0	(0.0)					0	(0.0)						
	横上横骨	破片			0	(0.0)					0	(0.0)						
	横上横骨	破片			1	(1.6)					1	(1.6)						
	横骨	破片			7	(0.1)					7	(0.1)						
	背縁線	破片			0	(0.0)					0	(0.0)						
	横骨	破片			0	(0.0)					0	(0.0)						
	部位不明	破片			0	(0.0)					0	(0.0)						
小計			9	(4.7)	611	(230.2)	9	(2.8)	1	(0.1)	5	(4.0)	14	(7.2)	10	(1.8)	659	(250.6)
小計			9	(4.7)	611	(230.2)	9	(2.8)	1	(0.1)	5	(4.0)	14	(7.2)	10	(1.8)	659	(250.6)
合計(小計①+小計②)			9	(4.7)	611	(230.2)	9	(2.8)	1	(0.1)	5	(4.0)	14	(7.2)	10	(1.8)	659	(250.6)

第40表 両爬・鳥獣類遺体（ピックアップ資料）出土状況一覧2

分類群	部位	LR	数	検出位置	出土位置		備考	時期
					アフリッド	掘り・溝跡		
大塚町	埋没	L 1 1d	C4	新築成	新築成	新築成	新築成	
		R 1 m	B7	高アサギ土層	埋没	新築成	新築成	
	露出	R 1 m	B7	埋没	埋没	新築成	新築成	
		R 1 1d	B7	埋没	埋没	新築成	新築成	
	掘り	L 1 1p	m	C4	新築成	新築成	方石右側溝内	
		L 1 m	C4	新築成	新築成	新築成	新築成	
	新築	R 1 1d	B8	高アサギ土層	埋没	新築成	新築成	
		R 1 m	C4	新築成	新築成	新築成	新築成	
	新築	L 1	C9	埋没下部	埋没	新築成	新築成	
		R 1 1d	C9	埋没下部	埋没	新築成	新築成	
	埋没	R 1 1d	E6	方石右側溝上層	方石右側溝内	新築成	新築成	
		R 1	D6	方石右側溝上層	方石右側溝内	新築成	新築成	
伊豆山/アサギ	中央/東側	L 1 1	C4	新築成	新築成	新築成	新築成	
		R 1 sp → d	C3	造成	新築成	新築成	新築成	
	中央/西側	L 1 p	m	B6	埋土	新築成	新築成	
		R 1 p	m	B4	埋土	新築成	新築成	
	東側/西側	R 1 1p	B-C5-6	埋没	不明	不明	不明	
		R 1 sp → m	E6	方石右側溝内	方石右側溝内	新築成	新築成	
	東側/西側/中央/東側	R 1 1d	C4	新築成	新築成	新築成	新築成	
		R 1 m	C3	新築成	新築成	新築成	新築成	
	東側/西側	R 1 1d	E7	埋石直下	方石右側溝内	新築成	新築成	
		R 1 1d	E6	方石右側溝内	方石右側溝内	新築成	新築成	
	東側/西側/中央/東側	R 1 1d	C2	埋没	不明	不明	不明	
		R 1 1d	C4	新築成	新築成	新築成	新築成	
東側/西側	R 1 1d	B-C5-6	埋没	不明	不明	不明		
	R 1 1d	C4	新築成	新築成	新築成	新築成		
東側/西側	R 1 1d	C4	新築成	新築成	新築成	新築成		
	R 1 1d	C4	新築成	新築成	新築成	新築成		
埋没	R 1 1p → d	C4	新築成	埋没	新築成	新築成		
	R 1 1p → d	C4	埋没	不明	不明	不明		
東側/西側	R 1 sp → d	C3	造成	新築成	新築成	新築成		
	R 1 1p	C2	埋没	不明	不明	不明		
下層	— 1 埋没部	C7	埋没	埋没	埋没	埋没		
	— 1	C8	埋没	埋没	埋没	埋没		
上層	R 1 1d	C2	造成直上	造成直上	造成直上	造成直上		
	R 1 1d	E6	埋没	埋没	埋没	埋没		
上層埋没	R 1 1p	E6	埋没	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内		
	R 1 1p	E6	埋没	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内		
埋没	L 1 1p	E6	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内		
	L 1 1p	m	E6	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内		
新築	R 1 m	B-C5-6	埋没	不明	不明	不明		
	R 1 m	B7	B8	埋没	不明	不明		
西側	R 1 1p	C4	新築成	新築成	新築成	新築成		
	R 1 1p	D6	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内		
上層埋没	L 1 1p	D3	埋没	不明	不明	不明		
	L 1 1p	D3	埋没	不明	不明	不明		
埋没	L 1 1p	C2	埋没	不明	不明	不明		
	L 1 1p	C2	埋没	不明	不明	不明		
下層埋没	R 1 1p	C9	埋没	不明	不明	不明		
	R 1 1p	D-d-F3	埋没	不明	不明	不明		
埋没	R 1 1p	D7	埋没	不明	不明	不明		
	R 1 1p	D7	埋没	不明	不明	不明		
東側埋没	R 1 1p	E6	埋没	方石右側溝内	方石右側溝内	方石右側溝内		
	— 1 埋没	C4	新築成	新築成	新築成	新築成		
埋没	L 1 1p	C3	造成	不明	不明	不明		
	L 1 1p	C2	造成(粘土)	不明	不明	不明		
新築	R 1 1p	C2	造成(粘土)	不明	不明	不明		
	R 1 m	C9	埋没	不明	不明	不明		
中央/西側	R 1 1p	B9	埋没	埋没	埋没	埋没		
	R 1 1p	C3	造成	不明	不明	不明		
大塚町	R 1 m	C9	埋没	埋没	埋没	埋没		
	R 1 m	D7	埋没	不明	不明	不明		
新築	— 1 埋没	C6	V層	埋没	埋没	埋没		
	— 1 埋没	C6	V層	埋没	埋没	埋没		

分類群	部位	LR	数	検出位置	出土位置		備考	時期
					アフリッド	掘り・溝跡		
ウツノ	埋没	不明	不明	新築成	C9	東上層	埋没	
		第一層	L 1 1	新築成	C4	新築成	新築成	
	掘り	L 1 1p	埋没	C4	新築成	新築成	新築成	
		R 1	1p	埋没	C4	新築成	新築成	
	埋没	R 1	1p	埋没	C6	方石右側溝上層	方石右側溝内	
		R 1	1p	埋没	E6	方石右側溝下層	方石右側溝内	
	新築	R 1	1p	埋没	B-C5-6	埋没	不明	
		不明	1	埋没	B7-B8	埋土	不明	
	新築	不明	1	埋没	B9	埋没	埋没	
		不明	1	埋没	C9	埋没	不明	
	埋没	不明	1	埋没	B9	埋没	不明	
		不明	1	埋没	B9	埋没	不明	
新築	不明	1	埋没	C2	造成(土層)	土層		
	不明	3	埋没	C2	造成	不明		
埋没	不明	4	埋没	C3	新築成	新築成		
	不明	1	埋没	C3	造成	新築成		
埋没	不明	1	埋没	C4	新築成	新築成		
	不明	2	埋没	C4	造成	不明		
埋没	不明	2	埋没	C6	V層	B-V層		
	不明	1	埋没	C9	3層	不明		
埋没	不明	1	埋没	C6	埋没	不明		
	不明	1	埋没	C6	埋没	不明		
上層	L 1	1	埋没	B9	東上層	CM		
	L 1	1p	埋没	D5	埋没	不明		
下層	不明	1	埋没	C3	埋没	不明		
	不明	1	埋没	C4	新築成	新築成		
イノシシ	掘り	— 1	埋没	B8	埋没	CM		
		— 1	埋没	C9	埋没	不明		
	埋没	L 1 1p	B9	V層	埋没	B-V層		
		L 1 1p	C2	埋没	不明	不明		
	掘り	R 1 1p	埋没	C4	新築成	新築成		
		R 1 1p	埋没	E6	方石右側溝下層	方石右側溝内		
	埋没	R 1 1p	埋没	C9	埋没	不明		
		R 1 1p	埋没	D5	埋没	不明		
	埋没	— 1	埋没	C8	埋没	不明		
		— 1	埋没	C8	埋没	不明		
	埋没	— 1	埋没	C8	埋没	不明		
		— 1	埋没	C8	埋没	不明		
埋没	— 1	埋没	D6	方石右側溝上層	方石右側溝内			
	— 1	埋没	D6	埋土	不明			
埋没	— 1	埋没	C2	埋没	不明			
	— 1	埋没	C2	埋没	不明			
埋没	— 1	埋没	C4	新築成	新築成			
	— 1	埋没	埋没	不明	不明			
埋没	L 1 1p	D8	埋没	埋没	不明			
	L 1 1p	C2	埋没	不明	不明			
埋没	L 4	埋没	C4	新築成	新築成			
	L 2	埋没	埋没	不明	不明			
埋没	L 1 1p	B3	埋没	不明	不明			
	R 1 1p	C2	埋没	不明	不明			
埋没	R 3	埋没	C4	新築成	新築成			
	不明	1	埋没	B-C5-6	不明			
埋没	不明	1	埋没	C3	新築成			
	不明	1	埋没	C4	埋没	不明		
埋没	不明	1	埋没	C8	埋没	不明		
	不明	1	埋没	C8	埋没	不明		
埋没	不明	1	埋没	C2	造成(粘土)	不明		
	不明	4	埋没	C2	造成(粘土)	不明		
埋没	不明	1	埋没	C2	造成(粘土)	不明		
	不明	1	埋没	C3	新築成	新築成		
埋没	不明	2	埋没	C9	埋没	不明		
	不明	2	埋没	C9	埋没	不明		
埋没	不明	2	埋没	D6	方石右側溝上層	方石右側溝内		
	不明	2	埋没	D6	方石右側溝内	方石右側溝内		
大塚町	L 1 1d	C2	埋没	不明	不明			
	L 1 1p	C3	造成	不明	不明			
掘り	不明	1	埋没	C3	造成	不明		
	不明	1	埋没	C3	造成	不明		
掘り	不明	1	埋没	C6	埋没	不明		
	不明	1	埋没	C6	埋没	不明		
掘り	不明	1	埋没	D6	方石右側溝上層	方石右側溝内		
	不明	1	埋没	D6	方石右側溝内	方石右側溝内		

※検出位置の凡例：w 文庫、p 5号倉庫、m 西側、d 溝跡、f 覆土、埋没 埋没部中の埋没、埋没 1p → d 1p埋没未整合層、sp → d → 西側の未整合層

[] は埋没の埋没部、△は埋没部、() は出土の南

※備考：CM=カットマー、埋没=イノシシ、△=イノシシ、* = クラウマー

第41表 両爬・鳥獣類遺体（水洗選別資料）出土状況一覧

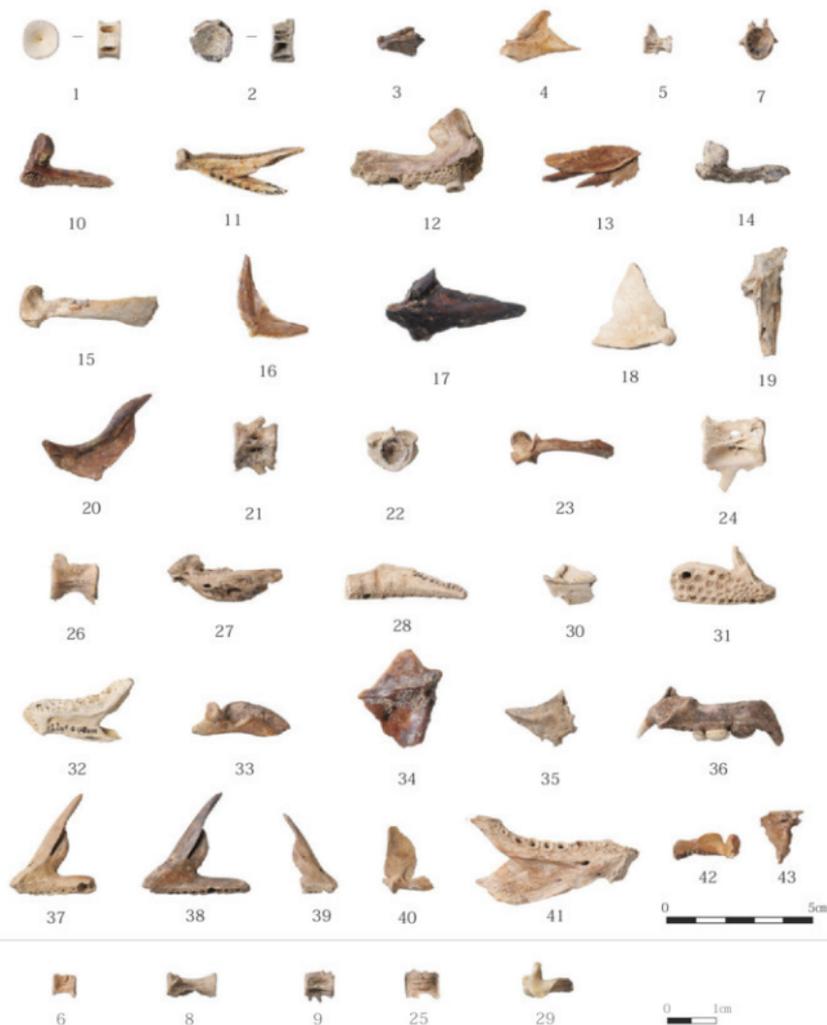
分類群	部位	LR	数	検出位置	出土位置		備考	時期
					アフリッド	掘り・溝跡		
ニブツ	掘り	L 1 1d	C3	新築成	新築成	新築成	新築成	
		C3	新築成	新築成	新築成	新築成		
下層埋没	R 5 M	C3	造成	不明	不明	不明		
	不明	1 w	C3	造成	不明	不明		
埋没	— 1	埋没	C3	新築成	新築成	新築成		
	不明	1	埋没	C3	新築成	新築成		
上層埋没	L 1 1p	C3	新築成	新築成	新築成	新築成		
	L 1 1p	C3	新築成	新築成	新築成	新築成		
上層	L 1 1d	C3	新築成	新築成	新築成	新築成		
	L 1 1d	C3	新築成	新築成	新築成	新築成		

※検出位置の凡例は第40表と同じ。備考：CM=カットマー

第42表 脊椎動物遺体の層位別同定標本数 (NISP)・最少個体数 (MNI) 一覧

分類群	NISP										MNI				
	ビュッアップ資料					水洗選別資料									
	目録	目録	新造成	方形石器遺体内	N-V層	旧造成	不明	ビュッアップ合計	新造成	方形石器遺体内		旧造成	不明	水洗選別合計	合計
メソゾサメ科	1	7	8				4	20	3				3	23	1
ネズミサメ科							1	1						1	1
イットウダイト									2					2	1
ボウ科									1				1	1	1
サヨリ科									30		2		32	32	1
サヨリ科?									11				11	11	-
タツ科	1		1			1		3	3				3	6	1
カマス科		5				1		6	30				30	36	1
タヌキ目									1				1	1	1
ハタ科 (マハタ型)			2	2	2	4	6	16	1		1		2	18	7
ハタ科 (スジアラ型)							1	1	2					2	1
ハタ科	6	11	1	2	5	12	37	20			4		24	61	-
ハタ科?			9	2	1	9	4	25	4				4	29	-
アサ科 (大型)			6	1	3	4	1	15	3				3	18	2
アサ科 (小型)									19				19	19	1
アサ科 (小型)?											1		1	1	-
シイラ属			1		1	4	3	9	9				9	18	1
コシヨウダイ属			1					1						1	1
フエダイ属	1				2			3	1				1	4	1
クロダイ属	1	2	2	1	4	3	4	17	4				4	21	7
タイ科									1				1	1	1
ヨコシマケロダイ				1				1					1	1	1
フエフキダイ属 (ハマフエフキ型)			1	2	1			2	6	1			1	7	3
フエフキダイ属 (アマミフエフキ型)		2			1	2		5	1				1	6	3
フエフキダイ属	1	1	5	1		2	1	11	2		1		3	14	-
フエフキダイ科	2	4	9	1	6	16	4	42	115		2		117	159	-
フエフキダイ科?							1	1	1				1	2	-
タイ科 or フエフキダイ科			1		2	7	4	14	7				7	21	-
ペラ科 (シロケラペラ型)	2	1	2	3	1	2	3	14	23		6		29	43	8
ペラ科 (タキペラ型)	1		1				1	3					3	3	2
ネツネペラ型			1					1			1		1	2	1
ペラ科 (魚)		1				1	1	3					3	3	-
ペラ科 (その他)								1					1	1	1
ペラ科	3	1	8	1	2	5	3	23	4		3		7	30	-
フダイ属 (イロフダイ属)			1					2	3				2	3	1
フダイ属 (アオブダイ属)	2	18	5	4	13	5	47	20					20	67	19
フダイ科	12	6	4	1	12	7	42	115		3			118	160	-
ウチノ目								0	1				1	1	-
カワウ・マダコ類					1	1		2					2	2	1
ニザダイ科		1			5	2	8	19		2			21	29	1
アイゴ属								1					1	1	1
モンガラカワハギ科	3	5		1				9					9	9	4
ハリセンボ科			1					1					1	1	1
魚類 (種不明)	21	52	112	31	21	83	61	381	177		4		181	562	-
魚類合計	33	98	215	57	55	184	133	775	628	1	29		658	1433	70
カエル類								1						1	1
ハブ属								1					1	1	1
ヘビ類		92			1			93	7				7	100	1
両生・爬虫類合計		94			1			95	7				7	102	3
ニワトリ	3	3	8	2	1	2	9	28	1				1	29	3
ニワトリ?	3		2	1		2	4	12					12	-	-
鳥類 (同定不可)	3	1	1		2	1	8						8	8	-
鳥類合計	9	3	11	4	1	6	14	48	1				1	49	3
クマネズミ属		1						1					1	1	-
ネズミ科	3	4						7					7	7	-
ネズミ科	14	19	1	1	1			36	2		5		7	43	5
ネズミ科?		1						1					1	1	-
ネコ					1	1		2					2	2	1
イヌ							1	1					1	1	1
ウマ	4	1	2	3	4	4	4	18	1				1	19	2
ウマ?		1						1	2				2	2	-
ウサ						1		1					1	1	1
イノシシ/ブタ	4	5	29	11	4	16	29	98	5		1		6	104	2
イノシシ?	1				1	1		3	2				2	5	-
キジ	1			2				3					3	3	1
キジ?			6					1	7				7	7	-
ウシ	2	8	2	3	5	15	35						35	35	2
ウシ?					2			2					2	2	-
ウシ/ウマ	1	2	12	5	5	2	12	39					39	39	-
イノカ属		1						1					1	1	1
ジュゴン			1	1	1			3	6				6	6	1
ヒト		1						1					1	1	1
哺乳類 (同定不可)	4	2	24	7		9	15	61	7			47	54	115	-
哺乳類合計	26	44	77	36	21	42	79	325	17	0	5	48	70	395	18

※「不明」は疑瓦層などの時期不明の層序



図版 88 脊椎動物遺体 1 魚 (1)

メジロザメ科 1. 椎骨 ネズミザメ科 2. 椎骨 イットウダイ科 3. 左歯骨 4. 右角骨 ボラ科 5. 椎骨 (背側)
 サヨリ科 6. 椎骨 ダツ科 7. 椎骨 カマス科 8. 椎骨 タチウオ科 9. 椎骨 マハタ型 10. 右前上顎骨 11. 右歯骨
 スジアラ型 12. 左前上顎骨 13. 左前鰓蓋骨 ハタ科 14. 右前上顎骨 15. 左主上顎骨 16. 右前鰓蓋骨 17. 右角骨
 18. 右方骨 19. 右舌顎骨 20. 左振鎖骨 21. 椎骨 22. 第一椎骨 アジ科 (大型) 23. 右主上顎骨 24. 椎骨
 アジ科 (小型) 25. 椎骨 シイラ属 26. 椎骨 コショウダイ属 27. 左歯骨 フエダイ科 28. 右前上顎骨 29. 左主上顎骨
 30. 右角骨 クロダイ属 31. 左前上顎骨 32. 右歯骨 33. 右主上顎骨 34. 左主鰓蓋骨 35. 左角骨
 ヨコシマクロダイ 36. 右前上顎骨 ハマフエキ型 37. 右前上顎骨 アマミフエキ型 38. 右前上顎骨
 フエキダイ属 39. 左前上顎骨 40. 左方骨 フエキダイ科 41. 左歯骨 42. 左主上顎骨 43. 左主鰓蓋骨



図版 89 脊椎動物遺体 2 魚 (2)

フエフキダイ科 44. 右角骨 45. 右口蓋骨 46. 椎骨 47. 第一椎骨 シロクラベラ型 48. 右上咽頭骨 49. 下咽頭骨
 50. 椎骨 タキベラ型 51. 左上咽頭骨 キツネベラ型 52. 左前上顎骨 ベラ科 (B) 53. 下咽頭骨
 ベラ科 (その他) 54. 下咽頭骨 ベラ科 55. 左前上顎骨 56. 左歯骨 57. 左角骨 58. 第一椎骨
 イロブダイ属 59. 右前上顎骨 60. 右歯骨 アオブダイ属 61. 左前上顎骨 62. 左歯骨 63. 左上咽頭骨 64. 下咽頭骨
 ブダイ科 65. 左上上顎骨 66. 左方骨 67. 椎骨 68. 第一椎骨 カツオ・マグロ類 69. 尾椎 ニザダイ科 70. 椎骨
 アイコ属 71. 椎骨 モンガラカワハギ科 72. 右前上顎骨 73. 椎骨 74. 背鰭棘 ハリセンボン科 75. 前上顎骨/歯骨
 種不明 76. 尾部棒状骨 フエフキダイ科 77. 右主上顎骨 (CM)



図版 90 脊椎動物遺体 3 獣骨 (1)

- ヘビ類 1. 椎骨 ハブ属 2. 左右不明牙
 ニワトリ 3. 右上腕骨 4. 右尺骨 5. 左大腿骨 6. 右脛足根骨 7. 右足根中足骨
 クマネズミ属 8. 前頭骨 ネズミ亜科 9. 左下顎 I
 ネズミ科 10. 右上腕骨 11. 右寛骨 12. 左大腿骨 13. 右脛骨
 イヌ? 14. 左右不明 横骨 ネコ 15. 左第三中足骨 16. 左第五中足骨
 ウマ 17. 左右不明 I' 18. 左 P³/~ /M² 19. 右 P₃/~ /M₂ 20. 左 M₃
 21. 右中手骨 22. 左寛骨 23. 右大腿骨



図版 91 脊椎動物遺体 4 獣骨 (2)

ブタ 24. 左下顎骨

イノシシ/ブタ 25. 左 $M^{1/2}$ 26. 軸椎 27. 左肩甲骨 28. 右上腕骨 29. 左上腕骨

30. 左橈骨 31. 左尺骨 32. 左中間手根骨 33. 左第四手根骨 34. 左第三中手骨 35. 左第四中手骨

36. 左寛骨 37. 左大腿骨 38. 右膝蓋骨 39. 左脛骨 40. 右脛骨 41. 左第三中足骨 42. 右踵骨

43. 左右不明 基節骨 44. 左右不明 末節骨

ヤギ 45. 右 M^1

ヤギ? 46. 右橈骨 (幼獣) 47. 左大腿骨 (幼獣)



図版92 脊椎動物遺体5 獣骨(3)

- ウシ 48. 左右不明角芯 49. 左 dm^3 50. 右 M^3 51. 左 $I52$. 右 P^3 53. 右 M_1
 54. 胸椎 55. 右上腕骨(幼獣) 56. 右桡骨 57. 左右不明中手骨
 イルカ類 58. 椎骨
 ジュゴン 59.60. 左 肋骨 61. 左右不明 肋骨
 哺乳類(同定不可) 62. 左右不明四肢骨?
 ヒト 63. 右 M^3

出土遺物集計表

第43表	中国産青磁出土状況一覧
第44表	中国産白磁出土状況一覧
第45表	中国産青花出土状況一覧
第46表	中国産褐釉陶器出土状況一覧
第47表	その他の中国産陶磁器・土器出土状況一覧
第48表	その他の輸入陶磁器・土器出土状況一覧
第49表	本土産陶磁器出土状況一覧
第50表	沖縄産施釉陶器出土状況一覧
第51表	初期沖縄産無釉陶器出土状況一覧
第52表	沖縄産無釉陶器出土状況一覧
第53表	陶質土器出土状況一覧
第54表	土製品出土状況一覧
第55表	瓦質土器出土状況一覧
第56表	土器・カムィヤキ・埴塼出土状況一覧
第57表	円盤状製品出土状況一覧
第58表	煙管出土状況一覧
第59表	金属製品出土状況一覧
第60表	銭貨出土状況一覧
第61表	石製品・石造物出土状況一覧
第62表	玉出土状況一覧
第63表	ガラス製品出土状況一覧
第64表	骨製品出土状況一覧
第65表	貝製品出土状況一覧
第66表	壁面材出土状況一覧
第67表	高麗系瓦出土状況一覧
第68表	大和系軒平瓦出土状況一覧
第69表	大和系丸瓦・平瓦出土状況一覧
第70表	大和系雁振瓦出土状況一覧
第71表	大和系役瓦出土状況一覧
第72表	近代大和系瓦出土状況一覧
第73表	明朝系軒丸瓦出土状況一覧
第74表	明朝系軒平瓦出土状況一覧
第75表	明朝系丸瓦出土状況一覧
第76表	明朝系平瓦出土状況一覧
第77表	埴塼出土状況一覧
第78表	その他の遺物出土状況一覧
第79表	貝類（巻貝等・ピックアップ）出土状況一覧
第80表	貝類（二枚貝等・ピックアップ）出土状況一覧
第81表	貝類（巻貝等・水洗選別）出土状況一覧
第82表	貝類（二枚貝等・水洗選別）出土状況一覧
第83表	微小貝出土一覧

第44表 中国産白磁出土状況一覧1

出土地	グリッド	B4	B7	B8	B9	B-C 5-6	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8				C9		
													磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石
図例・部位・装	形状	石臼 内磨 V磨		東江 N-V磨		東江 N-V磨		東江 N-V磨		東江 N-V磨		東江 N-V磨		東江 N-V磨		東江 N-V磨			
		磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨			
南	11423	景徳鎮					1						1				1		
		加津							1								1	1	
	福建・広東								1								1	1	
	製器	景徳鎮						1	1	1	1		1	1		1	1	1	
北	11423	景徳鎮	1		1	1							1	1	1			1	
		加津																	1
小崎	11423	景徳鎮																	
		加津																	
北	11423	景徳鎮								2									
		加津・広東																	1
	製器	景徳鎮						1											
	北	11423	景徳鎮																
小北	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮																	
		加津																	
	製器	景徳鎮																	
	北	11423	景徳鎮																
南	11423	景徳鎮		</															

第46表 中国産袖陶器出土状況一覽1

品目	B2 (A)		B3		B4		B6		B7		B8		B9		C1 (C)		C2		C3		C4		C4		C4		C4										
	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類			
肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	
注																																					
計	1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1

第46表 中国産袖陶器出土状況一覽2

品目	C6		C7		C8		C9		C10		C11		C12		C13		C14		C15		C16		C17		C18		C19		C20		C21		C22		C23		C24		C25				
	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類			
肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯									
注																																											
計	1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1

第46表 中国産袖陶器出土状況一覽3

品目	D8		D9		D10		D11		D12		D13		D14		D15		D16		D17		D18		D19		D20		D21		D22		D23		D24		D25		D26		D27		D28					
	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類	数量	種類				
肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯	1	肩・小帯		
注																																														
計	1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1	

第64表 骨製品出土状況一覧

出土地	グランド	C3	C6	C9	D1	D9	D-E-1,2	合計
種類・分類	期序	新造成 貝炭集中 土サンプル	V層	II層	掘瓦 直下	掘瓦	掘瓦	
種		1		1		1		3
黒ウラン								
黒ブラス				1			1	2
刀子等類					1			1
ビニール(70-70-70)		1						1
計		1	1	2	1	1	1	7

第65表 貝製品出土状況一覧

出土地	グランド	B-8	C3	C4	C5	C9	E-4	E6	E-8	掘瓦	合計	
種類・分類	期序	掘瓦	新造成	新造成 貝炭集中土 サンプル	新造成	掘瓦	II層 瓦面	掘瓦	石砌内	方形石砌 内側2層	掘瓦	
ヤコウガイ	貝殻		1	1							2	
ハマグリ	有孔製品			1		1					2	
マガキガイ	掘石											
マガキガイ(70-70-70)	貝殻	1	7		1	1	1	1	1	1	14	
	不明製品			1							1	
	コブ		2								2	
	不明製品		1								1	
合計		1	7	4	4	1	1	1	1	1	23	

第66表 壁面材出土状況一覧1

出土地	グランド	B3	B2-3	B4	B8	B9	C2	C3	C4	C5	C7
用途/種類	期序	掘瓦	掘瓦	石砌内側 V層	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦
平瓦・丸瓦		3	2	29	9	2		4	3	1	23
丸瓦		25	113	137	27	107		13	137	22	114
平瓦		1	22	113	27	21		22	11	6	147
赤瓦		1	1	21		1		1	1	1	25
白壁							1	1	1		3
不明製品										1	1
不明							1				1
合計		4	3	38	2	9	4	1	1	2	30

第66表 壁面材出土状況一覧2

出土地	グランド	C7	C8	C8	C8	C8	C8	C8	C8	C8	C9	C9	C9	C9	C9	D3	D4	D5
用途/種類	期序	掘瓦	掘瓦	掘トシ 目録	掘トシ 目録	掘アゴ 目録	掘アゴ 目録	掘アゴ 目録	掘アゴ 目録	掘アゴ 目録	掘瓦							
平瓦・丸瓦				6	5	10	3	2	7	1		4	2					
丸瓦				113	23	119	12	11	113			2	1					
平瓦				2	1	3	1	2	1			1	1					
赤瓦		1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	
白壁																		
不明製品																		
不明																		
合計		1	2	14	7	24	3	3	23	1	3	4	6	9	3	1	6	

第66表 壁面材出土状況一覧3

出土地	グランド	D6	D7	D7	D8	D7	D9	D9	D-E-2	D-E-2	D-E-2	D-E-2	E4	E9	E9	F5	F5	掘瓦	掘瓦	合計	
用途/種類	期序	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦	掘瓦								
平瓦・丸瓦													1		3		10	2		14	
丸瓦													1		1		1			3	
平瓦													1		1		1			3	
赤瓦		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
白壁																					
不明製品																					
不明																					
合計		1	3	2	2	1	2	1	1	2	1	2	2	4	1	8	9	3	24	5	415

第77表 出土土状況一覧1

分類	高土層	ゾナ	B.1	B.6	B.7	B.8	B.9	B.10	B.11	B.12	B.13	B.14	B.15	B.16	B.17	B.18	B.19	B.20	B.21	B.22	B.23	B.24	B.25	B.26	B.27	B.28	B.29	B.30	B.31	B.32	B.33	B.34	B.35	B.36	B.37	B.38	B.39	B.40	B.41	B.42	B.43	B.44	B.45	B.46	B.47	B.48	B.49	B.50	B.51	B.52	B.53	B.54	B.55	B.56	B.57	B.58	B.59	B.60	B.61	B.62	B.63	B.64	B.65	B.66	B.67	B.68	B.69	B.70	B.71	B.72	B.73	B.74	B.75	B.76	B.77	B.78	B.79	B.80	B.81	B.82	B.83	B.84	B.85	B.86	B.87	B.88	B.89	B.90	B.91	B.92	B.93	B.94	B.95	B.96	B.97	B.98	B.99	B.100	B.101	B.102	B.103	B.104	B.105	B.106	B.107	B.108	B.109	B.110	B.111	B.112	B.113	B.114	B.115	B.116	B.117	B.118	B.119	B.120	B.121	B.122	B.123	B.124	B.125	B.126	B.127	B.128	B.129	B.130	B.131	B.132	B.133	B.134	B.135	B.136	B.137	B.138	B.139	B.140	B.141	B.142	B.143	B.144	B.145	B.146	B.147	B.148	B.149	B.150	B.151	B.152	B.153	B.154	B.155	B.156	B.157	B.158	B.159	B.160	B.161	B.162	B.163	B.164	B.165	B.166	B.167	B.168	B.169	B.170	B.171	B.172	B.173	B.174	B.175	B.176	B.177	B.178	B.179	B.180	B.181	B.182	B.183	B.184	B.185	B.186	B.187	B.188	B.189	B.190	B.191	B.192	B.193	B.194	B.195	B.196	B.197	B.198	B.199	B.200	B.201	B.202	B.203	B.204	B.205	B.206	B.207	B.208	B.209	B.210	B.211	B.212	B.213	B.214	B.215	B.216	B.217	B.218	B.219	B.220	B.221	B.222	B.223	B.224	B.225	B.226	B.227	B.228	B.229	B.230	B.231	B.232	B.233	B.234	B.235	B.236	B.237	B.238	B.239	B.240	B.241	B.242	B.243	B.244	B.245	B.246	B.247	B.248	B.249	B.250	B.251	B.252	B.253	B.254	B.255	B.256	B.257	B.258	B.259	B.260	B.261	B.262	B.263	B.264	B.265	B.266	B.267	B.268	B.269	B.270	B.271	B.272	B.273	B.274	B.275	B.276	B.277	B.278	B.279	B.280	B.281	B.282	B.283	B.284	B.285	B.286	B.287	B.288	B.289	B.290	B.291	B.292	B.293	B.294	B.295	B.296	B.297	B.298	B.299	B.300	B.301	B.302	B.303	B.304	B.305	B.306	B.307	B.308	B.309	B.310	B.311	B.312	B.313	B.314	B.315	B.316	B.317	B.318	B.319	B.320	B.321	B.322	B.323	B.324	B.325	B.326	B.327	B.328	B.329	B.330	B.331	B.332	B.333	B.334	B.335	B.336	B.337	B.338	B.339	B.340	B.341	B.342	B.343	B.344	B.345	B.346	B.347	B.348	B.349	B.350	B.351	B.352	B.353	B.354	B.355	B.356	B.357	B.358	B.359	B.360	B.361	B.362	B.363	B.364	B.365	B.366	B.367	B.368	B.369	B.370	B.371	B.372	B.373	B.374	B.375	B.376	B.377	B.378	B.379	B.380	B.381	B.382	B.383	B.384	B.385	B.386	B.387	B.388	B.389	B.390	B.391	B.392	B.393	B.394	B.395	B.396	B.397	B.398	B.399	B.400	B.401	B.402	B.403	B.404	B.405	B.406	B.407	B.408	B.409	B.410	B.411	B.412	B.413	B.414	B.415	B.416	B.417	B.418	B.419	B.420	B.421	B.422	B.423	B.424	B.425	B.426	B.427	B.428	B.429	B.430	B.431	B.432	B.433	B.434	B.435	B.436	B.437	B.438	B.439	B.440	B.441	B.442	B.443	B.444	B.445	B.446	B.447	B.448	B.449	B.450	B.451	B.452	B.453	B.454	B.455	B.456	B.457	B.458	B.459	B.460	B.461	B.462	B.463	B.464	B.465	B.466	B.467	B.468	B.469	B.470	B.471	B.472	B.473	B.474	B.475	B.476	B.477	B.478	B.479	B.480	B.481	B.482	B.483	B.484	B.485	B.486	B.487	B.488	B.489	B.490	B.491	B.492	B.493	B.494	B.495	B.496	B.497	B.498	B.499	B.500	B.501	B.502	B.503	B.504	B.505	B.506	B.507	B.508	B.509	B.510	B.511	B.512	B.513	B.514	B.515	B.516	B.517	B.518	B.519	B.520	B.521	B.522	B.523	B.524	B.525	B.526	B.527	B.528	B.529	B.530	B.531	B.532	B.533	B.534	B.535	B.536	B.537	B.538	B.539	B.540	B.541	B.542	B.543	B.544	B.545	B.546	B.547	B.548	B.549	B.550	B.551	B.552	B.553	B.554	B.555	B.556	B.557	B.558	B.559	B.560	B.561	B.562	B.563	B.564	B.565	B.566	B.567	B.568	B.569	B.570	B.571	B.572	B.573	B.574	B.575	B.576	B.577	B.578	B.579	B.580	B.581	B.582	B.583	B.584	B.585	B.586	B.587	B.588	B.589	B.590	B.591	B.592	B.593	B.594	B.595	B.596	B.597	B.598	B.599	B.600	B.601	B.602	B.603	B.604	B.605	B.606	B.607	B.608	B.609	B.610	B.611	B.612	B.613	B.614	B.615	B.616	B.617	B.618	B.619	B.620	B.621	B.622	B.623	B.624	B.625	B.626	B.627	B.628	B.629	B.630	B.631	B.632	B.633	B.634	B.635	B.636	B.637	B.638	B.639	B.640	B.641	B.642	B.643	B.644	B.645	B.646	B.647	B.648	B.649	B.650	B.651	B.652	B.653	B.654	B.655	B.656	B.657	B.658	B.659	B.660	B.661	B.662	B.663	B.664	B.665	B.666	B.667	B.668	B.669	B.670	B.671	B.672	B.673	B.674	B.675	B.676	B.677	B.678	B.679	B.680	B.681	B.682	B.683	B.684	B.685	B.686	B.687	B.688	B.689	B.690	B.691	B.692	B.693	B.694	B.695	B.696	B.697	B.698	B.699	B.700	B.701	B.702	B.703	B.704	B.705	B.706	B.707	B.708	B.709	B.710	B.711	B.712	B.713	B.714	B.715	B.716	B.717	B.718	B.719	B.720	B.721	B.722	B.723	B.724	B.725	B.726	B.727	B.728	B.729	B.730	B.731	B.732	B.733	B.734	B.735	B.736	B.737	B.738	B.739	B.740	B.741	B.742	B.743	B.744	B.745	B.746	B.747	B.748	B.749	B.750	B.751	B.752	B.753	B.754	B.755	B.756	B.757	B.758	B.759	B.760	B.761	B.762	B.763	B.764	B.765	B.766	B.767	B.768	B.769	B.770	B.771	B.772	B.773	B.774	B.775	B.776	B.777	B.778	B.779	B.780	B.781	B.782	B.783	B.784	B.785	B.786	B.787	B.788	B.789	B.790	B.791	B.792	B.793	B.794	B.795	B.796	B.797	B.798	B.799	B.800	B.801	B.802	B.803	B.804	B.805	B.806	B.807	B.808	B.809	B.810	B.811	B.812	B.813	B.814	B.815	B.816	B.817	B.818	B.819	B.820	B.821	B.822	B.823	B.824	B.825	B.826	B.827	B.828	B.829	B.830	B.831	B.832	B.833	B.834	B.835	B.836	B.837	B.838	B.839	B.840	B.841	B.842	B.843	B.844	B.845	B.846	B.847	B.848	B.849	B.850	B.851	B.852	B.853	B.854	B.855	B.856	B.857	B.858	B.859	B.860	B.861	B.862	B.863	B.864	B.865	B.866	B.867	B.868	B.869	B.870	B.871	B.872	B.873	B.874	B.875	B.876	B.877	B.878	B.879	B.880	B.881	B.882	B.883	B.884	B.885
----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定・樹種同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

首里城は沖縄県那覇市の北東部に位置し、首里台地と呼ばれる石灰岩の丘陵地に所在する。その構造は内部（内側城郭）と外郭（外側城郭）に大きく分けられ、内部は15世紀初頭に、外郭は16世紀中期に完成したとされる。調査を行った銭蔵跡は、北外郭内に位置し、礎石跡や石置遺構、石造製品加工場跡などが検出された。今回の調査ではB-9地区およびD-8地区の土層を対象とし、堆積層の年代観に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施した。また、出土した木材・炭化材について、木材利用に関する情報を得ることを目的として、樹種同定も併せて行った。

1. 試料

B-9地区では、斜面への盛り土による整地層が見られ、その上に銭蔵等の建造物が建てられていたことが想定されている。B-9地区では、最下層のⅦ層（整地前の堆積層）が黒褐色粘土からなり、炭化材・炭化物を多量に含む。黄褐色粘土粒子も含み、場所によっては黄褐色粘土を挟んでいる。Ⅵ層は灰褐色粘土からなり、鳥尻層泥岩（クチャ）起源と思われる青灰色粘土ブロック（最大径5cm）が多量に含まれる。本層は堆積状況から、整地のための盛土と推測される。Ⅴ層は灰褐色粘土からなり、炭化材・炭化物が多量に含まれ、石灰岩片（最大径5mm）も混在する。本層最上部には石置遺構が認められる。最上層のⅣ層はオリブ灰色粘土からなり、石灰岩片（最大径3cm）を含む。

分析に用いる試料は、B-9地区北壁のⅤ層より1点、Ⅶ層より2点の炭化材が採取されている。その他には、D-8地区北壁の旧琉大基礎北側トレンチ黒色土から炭化材1点、B-6地区より埋木1点が採取されている。このうち、B-9地区北壁のⅤ層、Ⅶ層、D-8地区北壁の旧琉大基礎北側トレンチ黒色土より出土した炭化材の計3点について放射性炭素年代測定を実施し、全5点について樹種同定を実施した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）、850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986 - 2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロール（抱水クロール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、

種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第84表に、暦年較正結果を第85表に示す。試料の測定年代(補正年代)は、B-9地区北壁のV層出土炭化材が 360 ± 30 BP、同じくB-9地区北壁のVII層出土炭化材が 620 ± 30 BP、D-8地区北壁の旧琉大基礎北側トレンチ黒色土出土炭化材が 670 ± 30 BPの値を示す。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改訂があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差 $\sigma \cdot 2\sigma$ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、B-9地区北壁のV層はcalAD 1,461-1,634、VII層はcalAD 1,299-1,394、D-8地区北壁の黒色土はcalAD 1,282-1,384である。

第84表 放射性炭素年代測定結果

地点名	層名	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
B-9地区北壁	V層	炭化材	マツ属複雑管束亜属	360 ± 30	-28.90 ± 0.57	430 ± 30	9577-1	IAAA-63016
B-9地区北壁	VII層	炭化材	マツ属複雑管束亜属	620 ± 30	-27.15 ± 0.54	650 ± 30	9577-2	IAAA-63017
D-8地区北壁	旧琉大基礎北側トレンチ黒色土	炭化物	不明	670 ± 30	-26.06 ± 0.66	690 ± 30	9577-3	IAAA-63018

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) BP年代値は、1,950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第85表 暦年較正結果

地点名	層名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
B-9地区北壁	V層	363 ± 31	σ	cal AD 1,461 - cal AD 1,521	cal BP 489 - 429	0.634	9577-1	
				cal AD 1,576 - cal AD 1,582	cal BP 374 - 368	0.040		
			2σ	cal AD 1,591 - cal AD 1,622	cal BP 359 - 328	0.327		
				cal AD 1,449 - cal AD 1,529	cal BP 501 - 421	0.521		
B-9地区北壁	VII層	617 ± 32	σ	cal AD 1,543 - cal AD 1,634	cal BP 407 - 316	0.479	9577-2	
				cal AD 1,299 - cal AD 1,326	cal BP 651 - 624	0.411		
			2σ	cal AD 1,343 - cal AD 1,370	cal BP 607 - 580	0.394		
				cal AD 1,380 - cal AD 1,394	cal BP 570 - 556	0.195		
D-8地区北壁	旧琉大基礎北側トレンチ黒色土	669 ± 31	σ	cal AD 1,293 - cal AD 1,401	cal BP 657 - 549	1.000	9577-3	
				cal AD 1,282 - cal AD 1,304	cal BP 668 - 646	0.565		
			2σ	cal AD 1,365 - cal AD 1,384	cal BP 585 - 566	0.435		
				cal AD 1,274 - cal AD 1,321	cal BP 676 - 629	0.546		
			cal AD 1,349 - cal AD 1,391	cal BP 601 - 559	0.454			

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P.J. Reimer)を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改訂された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を第86表に示す。埋木は、広葉樹のアカギに同定された。一方、炭化材は、D-8区の1点が木材組織の観察ができず、種類不明である。残る3点は、いずれも針葉樹のマツ属複雑管束亜属に同定された。次に各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

・アカギ (*Bischofia javanica Bl.*) トウダイグサ科アカギ属

散孔材で、道管は単独または2-5個が放射方向あるいは塊状に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状・対列状に配列する。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-40細胞高で、時に単列部が長く伸びる。放射組織の外周には鞘状の細胞が認められることがある。

第86表 樹種同定結果

地点名	層名	試料名	樹種	備考
B-6地区		埋木	アカギ	
B-9地区	V層		マツ属複雑管束亜属	9577-1
B-9地区	VII層	炭の層下部	マツ属複雑管束亜属	9577-2
B-9地区	VII層	拾い出し炭化材	マツ属複雑管束亜属	
D-8地区北壁	旧礎大基礎北側 トレンチ黒色土		不明	9577-3

4. 考察

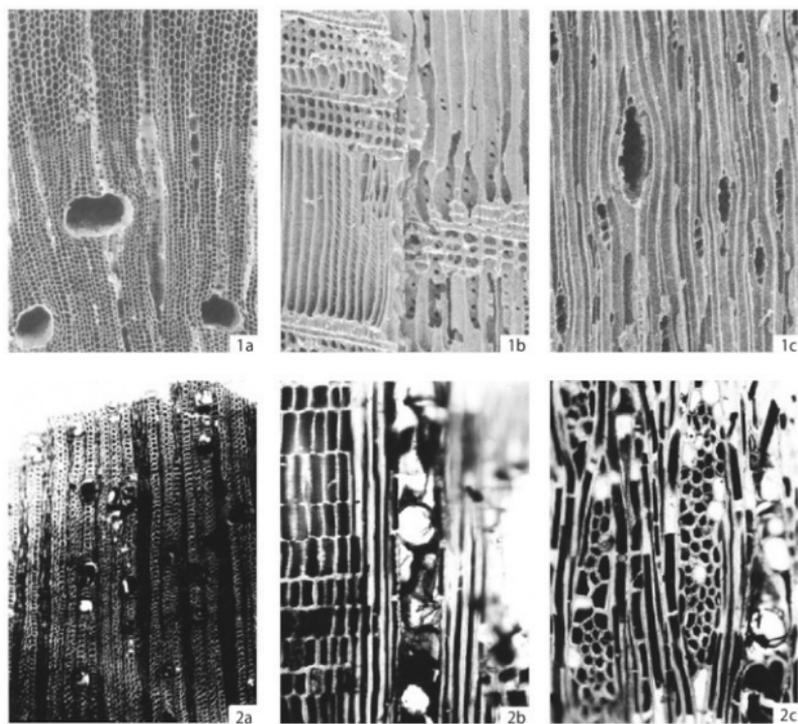
(1) 堆積層の年代観

放射性炭素年代測定を実施したB-9地区北壁のV層は15世紀中葉～17世紀前半(calAD 1,461～calAD 1,634)、VII層は13世紀末～14世紀末(calAD 1,299～calAD 1,394)の年代値を示した。これまで、15世紀初頭に内郭が完成したとされることから、14世紀末の年代値を採用すれば、首里城築城の完成前に関わる何らかの状況を示している可能性がある。また、V層は石置遺構直下に認められることから、測定年代値は遺構構築の年代値を示すものと想定されていた。この整地(V層)の年代は、暦年較正年代で15世紀中葉～17世紀前半の間に想定され、外郭の構築年代とされる16世紀中期とも調和的な値とみることができる。

一方、時期が不明であったD-8地区北壁の黒色土は、13世紀末～14世紀末(calAD 1,282～calAD 1,384)の年代値を示した。この値は、D-9地区のVII層の年代値に概ね一致し、同時期もしくは斜面上に存在する同一の堆積層である可能性があり、D-9地区と同様な状況と考えられる。

(2) 木材利用

B-9地区のV層およびVII層から出土した炭化材は、いずれもマツ属複雑管束亜属(ニヨウマツ類)であった。日本に生育するマツ属複雑管束亜属には3種があるが、沖縄本島に分布しているのはリュウキュウマツのみである。リュウキュウマツは、生育できる環境が広く、周囲での入手は可能であったと考えられる。しかし、加工が容易で樹脂を多く含むために耐水性は比較的高いが、シロアリに弱いため建築材としてはあまり適材ではないとされる。一方、B-6地区の埋木に認められたアカギは、沖縄本島南部の石灰岩地に生育し、重硬で強度が高い材質を有する。



1. マツ属複雑管束亜属 (B-9地区; V層)

2. アカギ (B-6区; 埋木)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μm : 1a
 100 μm : 1b,c
 200 μm : 2a
 200 μm : 2b,c

図版 93 炭化材・木材

第2節 漆塗膜の分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

首里城「銭蔵跡」出土漆片について、漆製品のプロトコルに基づいて分析を進めた。今回は、試料の状況を考慮して、①資料の表裏を写真撮影（クリーニング前）、②蛍光X線分析（クリーニング前）、③クリーニング：熱分解・ガスクロマトグラフィー/質量分析（Py-GC/MS）、④クロスセクションについて分析を行った。

なお分析にあたっては、東京大学総合研究博物館 吉田邦夫氏、明治大学理工学部 本多貴之氏の協力を得た。

1. 試料

試料は、平成20年度銭蔵跡発掘調査において、C-3グリッドの新造成土中より回収された赤色の漆片である。

2. 分析手法

(1) 蛍光X線による顔料などの成分元素の分析

エネルギー分散型蛍光X線分析システム JSX-3201（日本電子KK）を用いて、管電圧30kV・4mA、線束2mmφで、600秒、または1000秒測定する。定性分析により元素の同定を行い、ファンダメンタル・パラメーター法（FP法）を用いて、元素の存在比を半定量的に求めた。

(2) 漆塗膜の成分分析

漆塗膜の主成分ウルシオールなどの脂質成分の分析には、Py-GC/MSを用いた。一般に、有機化合物の種類を決めるためには、液体クロマトグラフィーやガスクロマトグラフィーと質量分析計を組み合わせて使うことが多い。ところが、硬化した漆塗膜は、有機溶媒に溶けないので、この方法は使えない。そこで、硬い有機物を分解するために試料を数百度に加熱し、ガスにしてガスクロマトグラフィーに送り込む方法を使う。熱分解にはフロンティア・ラボ株式会社製ダブルショットパイロライザー HP-2020ID、ガスクロマトグラフはAgilent社製ガスクロマトグラムHP6890、質量分析装置はHPG 5975A、キャピラリー分離カラムはUA-PY1（HT/MS）（100% methyl silicone, 30 m, 0.25 mm, 膜厚は0.25 μm）を用いた。分析に用いた試料量はおおよそ1.0 mgであった。

また、分析条件としてはこれまで漆の分析に広く利用されている条件を用いた。詳細な条件は熱分解温度500°C、イオン化電圧は70 eV、ガスクロマトグラムカラム温度：40°C（2 min Hold）-（12°C/min）-320°C（10 min Hold）、インジェクション温度：280°C、インターフェイス温度：280°C、質量分析計室内温度：180°C、カラム流量：ヘリウム（1.0 mL/min）を用いた。

3. 分析結果

(1) 時代・時期

試料に用いた塗膜片が出土したのは、C-3グリッド新造成層としている17世紀前半に位置づけている堆積層である。

(2) 塗膜の性状

木脂か。粘土質の土塊の中に包み込まれている。

(3) 顔料の種類

水銀朱 [硫化水銀 HgS]：純度が高い（第87表参照）。

(4) 漆の検出

下地も一緒に測定した分析結果を第97図、最表面部分のみを分析した結果を第98図に示す。表面部分からはほぼ水銀のみが検出され、若干の硫黄成分が検出された。おそらく、硫化水銀の硫黄由来ではないかと考えられる。また、下地からは漆に似た構造が検出された。これは、以前よりその存在が示唆されている、炭素鎖6を頂点とするアルキルフェノールが検出される琉球オリジナルの漆（リュウキュウハゼカリュウキュウウルシ）ではないかと思われる。

第87表 XRF一覧表

元素	赤漆	
	赤漆	微小片
Na		
Mg		
Al	1.6	
Si	7.0	1.7
P		
S	3.2	8.7
K	4.3	0.6
Ca	9.7	1.2
Ti	0.9	
V		
Cr		
Mn		
Fe	6.1	0.9
Co		
Cu	0.1	0.3
Zn		0.2
As		
Br		
Sr		
Ru		
Cd		
Sn		
I		1.4
Ba		
Au		
Hg	67.0	85.5
Pb		
計	100	100

※太字は水銀を示す

さらに、漆よりも多くの油成分（パルミチン酸・ステアリン酸）が確認された。このことから、下地には漆と油を混ぜ合わせた素材が利用されていることが予想される。

(5) 断面分析

下地が3層存在し、その上に赤色塗膜が1層塗られている。下地は細かな粒が多く存在している。その中に黒い粒子が散見されるが、これは炭の欠片ではないかと考えている（黒く見える部分は場所により「透過で黒、反射で白」の部分と「透過で黒、反射も黒」の部分がある。前者は鉱物質、後者が炭と予想される）。

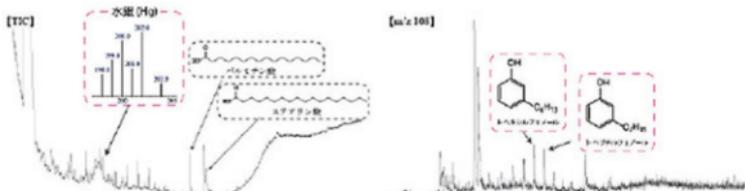
(6) 遺物の樹種同定

造成土より回収された漆片に木材組織は確認できず、樹種同定には至らなかった。

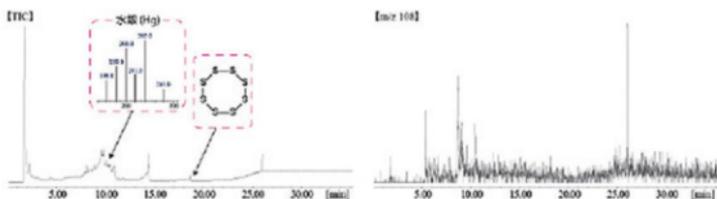
4. 考察

下地は油を多く用いた琉球オリジナル漆を含む下地であるが、リグニン類がPy-GC/MSで検出されていないことから、草木類を利用した下地では無いことが分かる。見た目からはなにかの粉か繊維と思われるが、砥の粉にしてはやや丸みを感じられるので胡粉下地〔CaCO₃〕ではないかと考えている。しかし、カルシウム含有量は、首里城御内原北から出土した漆資料より小さく（吉田邦夫・本田貴之 2013）、下地部分のみについての蛍光X線分析を行う必要がある。下地層の色味は各層間でほぼ同一であることから、1種類の下地材料を複数回塗布した物と思われる。

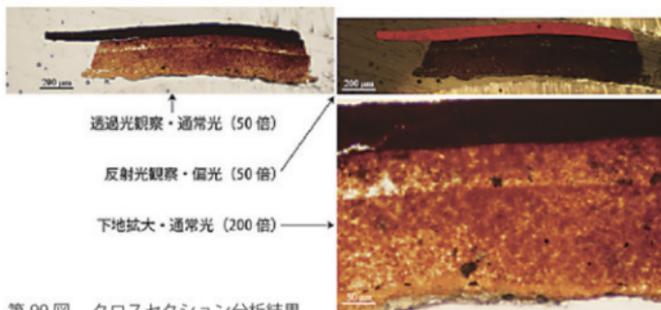
上塗りの朱は水銀朱であり、ほとんど混ぜ物が入っておらず純度が非常に高いことがわかる。この結果は、蛍光X線分析の結果と良く一致する。上塗り層からは漆が検出されていない。それほど古い塗膜ではないので劣化による消失は考えにくい。水銀朱塗膜の塗布方法は不明である。



第97図 Py-GC/MS分析結果（下地層込み）



第98図 Py-GC/MS分析結果（赤色塗膜のみ）



第99図 クロスセクション分析結果

第5章 総括

はじめに

以上、平成18(2006)年度～平成20(2008)年度に実施した銭蔵地区の発掘調査報告を行った。本地区には、首里城が機能した当時、銭蔵と称される2階建ての建造物及び、厩が存在したとされる。この創建については不明であるが、各種史料を基にその変遷を追ってみたい。

銭蔵のみえる絵図資料として、現時点で最古と思われるのが、1700年頃製作とされる「首里古地図」である。絵図には2階建ての銭蔵と、平面が「L」字状の厩が描かれている。その後1853(明治6)年のペリー来琉に際し、随行画家ウィリアム・ハイネにより描かれた右版画(第105図)や、1894(明治27)年に描かれた「首里旧城之図」(第104図)においても、同様な構造がみとれる。

また、明治前期作とされる「横内家資料平面図」(第3・100図)や、1879年の琉球処分から首里城内に駐屯した熊本鎮台沖繩分遣隊の施設配置図である「熊本鎮台沖繩分遣隊配置図」(第4・101図)においても、同様な配置が確認できる。

その後、昭和初期に製作された「首里城平面図」(飯谷図・第5・102図)によると、城内が各種学校として使用される中、銭蔵の一角は「畑地」の表記に変わり、破線により建物跡として銭蔵の区画が示されている。このことから銭蔵の建物は、1896(明治29)年に分遣隊が撤退したのちに解体された可能性が高い。これらの点から、少なくとも18世紀から明治後期までは、銭蔵及び周辺建物の基本的な配置・構造に変化がなかった可能性が考えられる。

なお1935(昭和10)年には、当該地に首里至聖廟が建造されるが(図版94・95)、1945(昭和20)年の沖縄戦により首里城とともに焼失した。そして戦後は、1950(昭和25)年に琉球大学が開学し、銭蔵周辺には5階建ての第1理学校舎や教養教室が建設されることになる(第6・103図)。



第100図 横内家資料平面図(部分)



第101図 旧首里城熊本鎮台沖繩分遣隊配置図(部分)



第102図 旧首里城図(部分)



第103図 旧琉球大学校舎配置図(部分)

首里城跡の発掘調査では、調査区ごとにこれらの変遷に関する情報を収集した上で実施される。しかし、首里城は約500年間もの長期間存続しており、その間各所で拡張・増改築や失火・再建等を繰り返していることが各種記録にみえる。そのため、首里城復元整備にあたっては、失火による1609年の焼失後、1712年に再建された姿を復元の対象として作業を進めている（首里城公園友の会編2003）。したがって、発掘調査もこの時期の遺構確認を目的として進められるが、調査中には戦災や各種開発により破壊された断面から、その変遷を物語る遺構や堆積が重層的に確認される。

1 時期区分ごとの特徴

次に、本調査の対象とした銭蔵地区の遺構は、戦前～戦後にかけて大きく改変されていることから、全体として残りは良くなかった。そのため、銭蔵のもとと確認できる遺構の検出はなかった。

しかしながら、その改変を受けた断面や、確認のために設けたトレンチ掘りにより、首里城が存続した期間に行われた多様な遺構や、盛土などによる堆積層が確認されている。今回は築造の過程や、共存する遺物から3期までの時期区分を行うことができた。ここでは、時期区分ごとに遺構と遺物の特徴及び、自然科学分析をまとめることにより総括としたい。



第104図 首里旧城之図
(1894年 査丕烈図 部分
沖縄県立博物館・美術館所蔵)



第105図 首里城内の眺望
(1853年6月 William Heine 作、ラブ オーシュリほか1987
『青い目が見た大琉球』掲載 那覇市歴史博物館所蔵)



図版94 上棟式
(1934年12月20日 那覇市歴史博物館所蔵)



図版95 至聖廟
(1935年か 那覇市歴史博物館所蔵)

・第1期

第1期は、外郭の拡張が行われたとされる、高真王在位期間中(1477～1526)か、それ以降と考えられる遺構である。造成土中に築造された方形石組遺構や石畳遺構で、陶磁器等の共存遺物から15世紀末～16世紀代と考えられる。

この方形石組遺構については、これまでも首里城内の調査により検出例があるが、その機能については判然としない点が多い。近年の発掘調査では、首里城以外の屋敷跡や集落跡等の遺跡からも確認されている。今後は遺構の形態や内容物について分析を行い、比較・検討すること及び、民俗事例や他地域の情報を得ることににより、その機能が明らかになることが考えられる。

次に、本調査区で最も広範囲に検出された遺構として、石畳遺構をあげることができる。本遺構は、石畳状ではあるが、規則的に弧状にくぼませて築造し、北へ傾斜する構造であることから、排水を考慮した機能が考えられる。しかし、残存が断片的であることから、その機能・性格については判然としない。

本遺構は第2期とした礎石跡や石造製品加工場跡、第3期の集石遺構に破壊された状態であることから、これらの遺構より古いことがわかる。この遺構を、横内家資料平面図に重ねてみた(第106図)。すると、石畳遺構は建物輪郭には符合しないものの、北辺に沿うように築造されているようにみえる。この点と排水機能の可能性を合わせて考えると、本遺構は一帯が冠水しないよう、敷地北側に位置する城郭側へ排水することを目的として築造された可能性がある。

これらの遺構に関連する遺物として、方形石組遺構内部の堆積土及び、石畳遺構下部の造成土からは、15～16世紀代の中国産陶磁器類が出土しており、遺構はこの時期に属すると考えられる。

・第2期

次に第2期は、礎石が沈下しないよう、礎石下部に基礎工事として施工される根固め石(礎石跡)と、石造製品加工場跡が検出されている。本遺構は第1期の石畳遺構を外して築造されていることから、石畳遺構の築造後であることが理解できる。

礎石跡は断片的で、一部が第3期の集石遺構に破壊されるが、約3m間隔で設置されていた可能性がある。この遺構を、横内家資料平面図に重ねてみた(第106図)。すると、礎石跡の一部は建物輪郭内に収まるように見え、断片的ながら銭蔵の遺構になる可能性がある。

また、この一帯からは、石造物に使用される細粒砂岩の石材片が大量に出土しており、中には未成品も含まれている。首里城内には、各所に細粒砂岩を用いた石造物が使用されていることから、当該地で加工し、建築材として供していたことが考えられる。これらの遺構の年代は、初期沖縄産無釉陶器や中国産陶磁器の年代から、17世紀前半と考えられる。

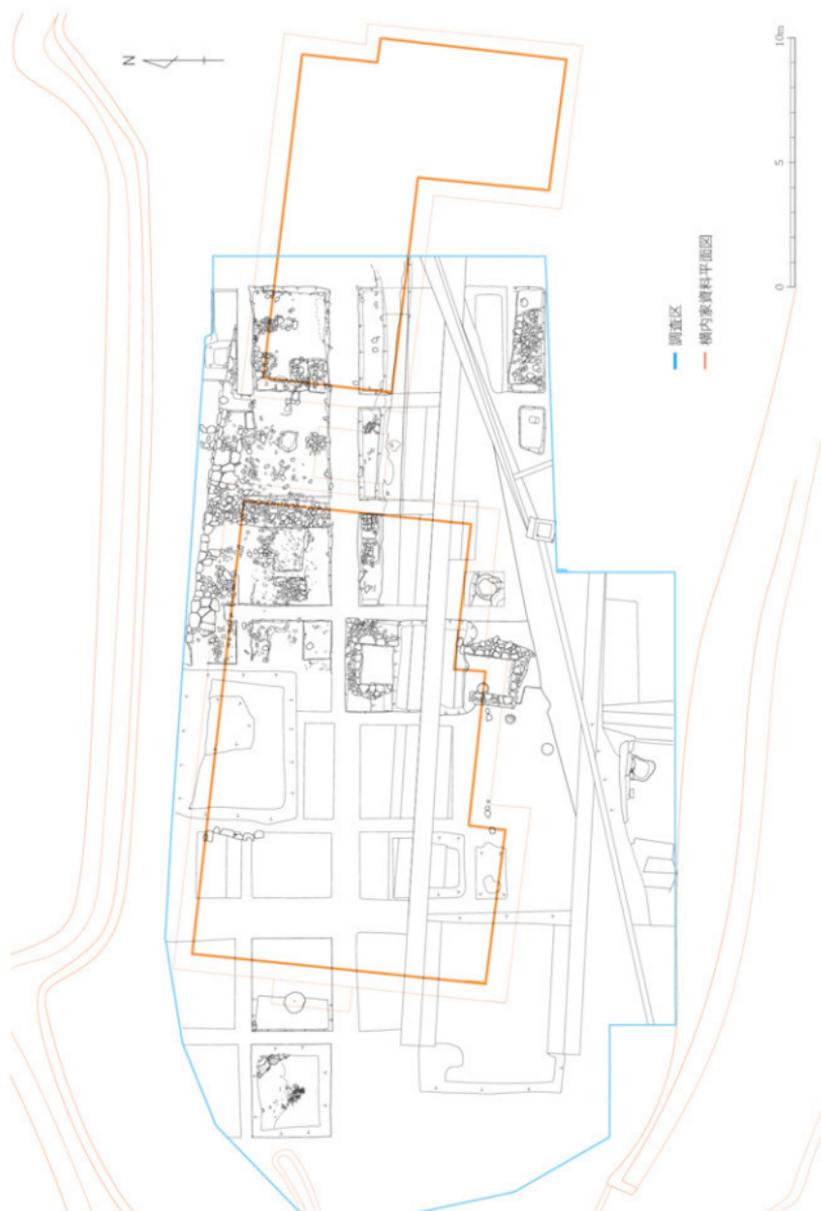
なお、調査中に設定したトレンチ中からは、新田2時期の造成層が確認されている。旧とした造成土は、15～16世紀代の遺物を含むことから第1期に相当し、その後と考えられる新造成土は17世紀前半の遺物を含むことから、第2期に属することが考えられ、何らかの理由により二度の土地造成が行われたことを示している。

・第3期

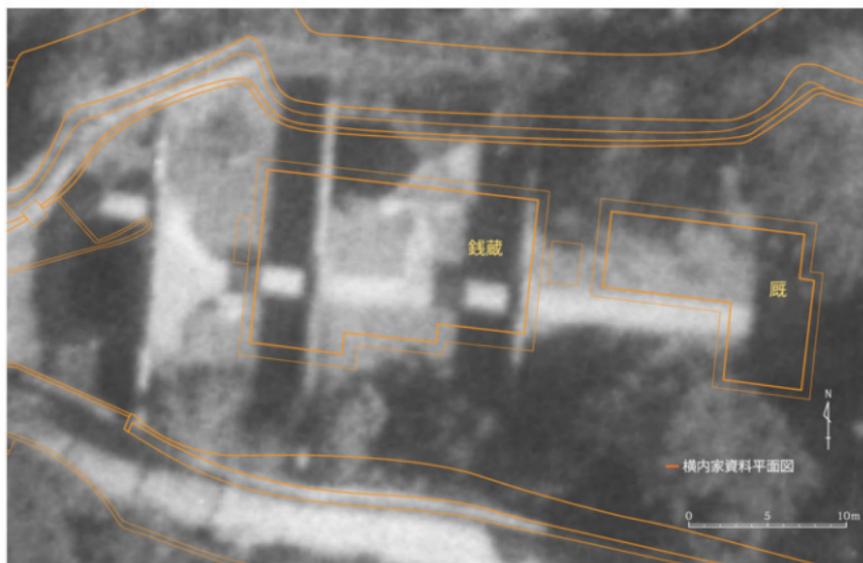
第3期は近代の遺構・層である。首里城は1879(明治12)年の琉球処分により明治政府に接収された。その際、城内は無熊鎮台沖繩分遣隊の施設として、銭蔵の建物も炊事場及び浴場として使用されたと考えられる(第4・101図)。その後、分遣隊撤退後は畑として使用されたと思われる(第5・102図)、建物はそれまでに撤去されたことが考えられる。

これに続き、1935(昭和10)年には首里至聖廟が建造される。第3期の遺構として、琉球石灰岩の集石遺構が帯状に検出されている。この遺構を米軍が撮影した航空写真に重ねてみると、遺構は首里至聖廟の敷地を区画する石積みに沿うようにみえる(第108図)。図版95の古写真には幾重もの瓦石塀が存在したことがみえ、この点と遺構内部から近代の遺物が出土する点から、瓦石塀の根石になる可能性がある。

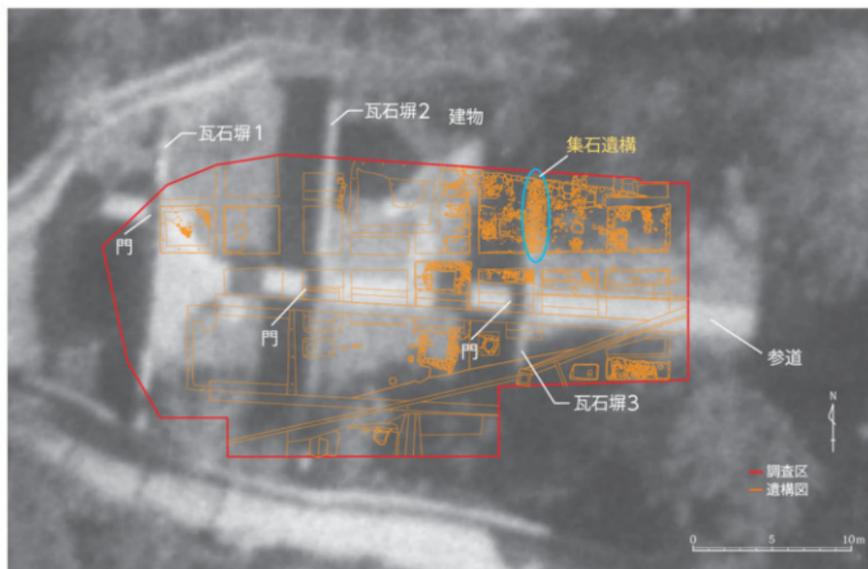
当時の遺物として、近代に製作された陶磁器類と、分遣隊関連としては銃火器の薬莖及び部品が出土している。また、至聖廟関連として、廟の復興を記念して建立された石碑や、着色された壁面材が出土している。このように記録に乏しい近代の情報をも得ることができ、断片的ながら当該地の変遷を追うことができた。



第106図 横内家平面図と遺構平面図の重ね図（建物配置と符合する遺構はみられない）



第107図 米軍撮影航空写真と横内家資料平面図の重ね図（石積み以外で符合する建物はみられない）



第108図 米軍撮影航空写真と遺構平面図の重ね図（集石遺構と瓦石堀3の位置が符合する）

2 遺物

本報告の対象となる出土遺物は、人工遺物で総数 23,310 点、自然遺物を含めた遺物収納用コンテナ数は 266 箱である。その種別は、各地で焼成された陶磁器類のほか、金属製品、石製品及び石造製品、貝・骨製品、ガラス製品、獣魚骨、貝類など多岐にわたる。

遺物全体の傾向としては、首里城御内原（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010・2013 ほか）と比較すると、種別・量ともに乏しく、特に首里城特有の貿易陶磁類が少ない。この理由として、当該地が首里城の中核を成す正殿や、生活の場である御内原から離れた北側外郭に位置する点及び、その機能として、一帯が蔵や厩といった生活の場ではないことに起因することが考えられる。次に、人工遺物と自然遺物に分けてまとめる。

・人工遺物

陶磁器類は中国産をはじめ、東南アジア、朝鮮半島、本土産の輸入陶磁器類のほか、琉球産の陶器が出土している。中国産陶磁器は青磁、白磁、青花、色絵、褐釉陶器等の種別がみられる。器種は碗、皿が多い。年代は 13 世紀～17 世紀と幅広い中、16 世紀代及び 17 世紀前半が中心となっている。特筆できる遺物として、第三層及び新造成層中から、初期沖縄産無釉陶器がまとめて出土している。本遺物はこれまでの調査から 17 世紀前半に位置づけられている資料であり（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010・2013、仲座 2009）、遺構や層の時期特定に寄与している。

金属製品は鉄製と青銅製があり、鉄製の釘が大半を占める。釘については長さを数種に分けて計測・集計した結果、7cm 以下の小型の釘が多いことが確認できた。その他、簪や小札等の武具類の出土があるが、熊本鎮台沖縄分遣隊の装備品と思われるスナイデル銃の莖葉や雷管、摩擦管等の部品が出土しており、駐屯の痕跡を残すとともに、銃火器を使用した可能性を示している。

次に、銭貨は西暦 24 年初鋳の五銖銭から明治時代の近代銭まで、総数 3,723 点が出土している。特筆できるのは輪銭の出土数で、C-7・8 ケット 第二層から第三層にかけて 1,960 点が出土している（残存径 1/2 以上）。この第二層は近代、第三層は近世に属する層で、第二層には首里至聖廟のものと思われる遺構が検出されている。

この廟の建設は、1934（昭和 9）年 11 月に着工、1935（昭和 10）年 5 月に竣工しているが、竣工前後には地鎮祭や棟上式、復興式典が執り行われている。この記録として、沖縄縣師範学校校友会による「龍潭」31号「至聖廟落成記念誌」に関連する記事が残る。これによると、各種儀式に際し、神式の儀礼として「鎮物（しずめもの）」や「献饌（けんせん）」、「撒饌（てっせん）」が行われたことが明記されている。献饌とは神前に物を供え、撒饌は神前の供物を下げることを意味する。この中に供物の内容についての記載はないが、これらの神事に輪銭が供えられた可能性も考えられ興味深い。

なお、近代以降の輪銭に関する情報としては、鎌倉芳太郎により、大正末から昭和初期に沖縄各地で調査した際の写真資料中に、相当数の輪銭が縄で結わえられた状態の資料が写し出されており（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）、使用法の参考になる。この輪銭がいつごろまで使用されたかについては明らかになっていないが、貨幣以外の機能として、近代に至るまで神事等に使用していた可能性がないか、今後さらに関連する記録類を調べる必要がある。

また、この輪銭が集中して出土する付近からは、埋場の可能性がある産地不明製品が第二層から第三層にかけて出土している（第 33 図 27～29）。この周辺からは金属加工の痕跡となる遺物はみられないが、近世の石造製品加工場跡が確認されていることから、関連する工房として、輪銭を含む金属製品の加工も行っていたことが考えられ、さらに分析を進めていく必要がある。

次に特徴的な遺物として、ガラス製品を挙げておきたい。ガラス製品には玉のほか、ボタン状製品やポップン（びいどろ）が出土している。ボタン状製品の中には、15～16 世紀代及び 17 世紀前半の造成層内から出土する資料がみられ、ガラス製品が層別に確認できた数少ない事例となっている。

ガラス製の玩具であるポップンは、攪乱層からの出土であるが、長崎県や京都市での出土例から特定できた資料である。パイプは一部が膨らむ形状で吸い口部は細い。球体の胴部はパイプの付根部分に一部が残存するが、厚さは 0.3mm と極めて薄い。前出例と比較すると、京都市出土品はパイプが直線的な資料で、遺構年代から 18 世紀後半～19 世紀中頃としている（京都市埋蔵文化財研究所編 2004）。これに対し、長崎県出土品のパイプは、胴部に近い部分が膨らんでおり、18 世紀前半以降に位置づけられる SD1 から出土している（長崎県教育委員会 2005）。今回報告した資料は長崎県出土品と類似することから、同時期になる可能性がある。

・自然遺物

自然遺物は貝類と脊椎動物遺体が得られているが、総数は首里城他地区に比べると少ない。貝類は最小個体数でみると、巻貝ではマガキガイやヤコウガイ、リュウキュウミナナのほか、陸産ではリュウキュウヤマタニシが多く、二枚貝ではアラスジケマンガイやハマグリ類似種、シャコガイ科が多い傾向にある。

脊椎動物遺体は哺乳類、魚類、鳥類が中心となり、種の構成はこれまで首里城の調査で得られた結果とほぼ同様な傾向を示す。この中でブタやウシ等の大型哺乳類骨の表面には、カットマークなどの解体痕が残る資料がみられ、食材として用いられたことが想定できる。これらは主に方形石組遺構内や造成層からの出土であり、当時の食材の一端を示している。

3 自然科学分析

銭蔵地区発掘調査にかかる自然科学分析として、放射性炭素年代測定及び炭化材同定ならびに、漆塗膜の成分分析を委託した。その概要を以下にまとめる。

・放射性炭素年代測定

年代測定は3点の木炭資料から分析を行った。その結果、B-9グリッド第Ⅶ層及びD-8グリッド北壁の黒色土は13世紀末～14世紀末、B-9グリッド第Ⅴ層は15世紀中葉～17世紀前半とする数値が得られている。前者は傾斜地の表面に堆積した木炭層の年代であり、その地形から外郭拡張以前あるいは首里城創建以前の可能性が考えられる。

また、後者は15世紀中葉～17世紀前半と年代幅があるものの、出土遺物の年代と種別を合わせて解釈すると、本地区の第Ⅴ層は旧とした造成土で、初期沖縄産無釉陶器等の17世紀前半の遺物が含まれないことから16世紀代に取まることが考えられ、石畳遺構や方形石組遺構の年代もこの範囲にあるものと思われる。

・炭化材同定

次に、木材利用に関しては、B-9グリッド第Ⅴ層・第Ⅶ層、B-6グリッド造成層、D-8グリッド北壁から出土した炭化材5点を試料として分析を行い、4点で結果が得られた。B-9グリッド第Ⅴ層・第Ⅶ層の3点はマツ属複雑管束亜属（ニヨウマツ類）で、リュウキュウマツの可能性がある。しかし、リュウキュウマツは建築材として不適とされることから、薪材などとして利用した可能性がある。その他B-6グリッド造成層から出土した埋木はアカギであった。アカギは建築材としても用いられるが、今調査では未加工の状態で埋没していたことから自然木が埋没し、遺存したことが考えられる。

・漆塗膜分析

C-3グリッド新造成層中から出土した赤色漆片1点の成分分析及び、断面分析を行った。その結果、胡粉下地と思われる下地を、漆と油を混ぜ合わせ複数回塗り、純度が高い水銀朱を上塗りしていることが判明した。この下地に用いた漆は、琉球オリジナルの漆（リュウキュウハゼカリュウキュウウルシ）と考えられることから、首里城内において琉球産の漆を使用していた可能性を示す結果となった。

おわりに

以上、遺構、遺物、分析に分けて総括を行った。今回の調査では、銭蔵のものと考えられる遺構は確認できなかったものの、遺構や堆積・遺物の出土状況から首里城外郭拡張の造成過程や工法の一部をみることであった。その中の特徴的な事象として、当該地の造成層が15～16世紀と17世紀前半の2時期に区分できることが判明し、また、17世紀前半には石造製品を加工していた痕跡が確認されている。

さらに、琉球処分以降に城内に駐屯した、熊本鎮台沖繩分遣隊の遺物や、その後建造された首里至聖廟の遺構・遺物等、近代の状況についても垣間見ることができ、当該地の変遷を辿ることができた。

最後に発掘調査、資料整理、分析、報告書編集作業にあたっては、多くの皆様から協力・指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げたい。

引用・参考文献

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

首里城公園基本計画調査委員会 1993『首里城公園基本計画調査報告書』首里城公園基本計画調査委員会
 沖縄県土木建築部 1994『首里城公園基本設計』沖縄県土木建築部

第2章 位置と環境

沖縄師範学校校友会 1937『龍潭』31号 空聖廟落成記念誌 沖縄師範学校校友会
 嘉手納宗徳 1970『首里古地区』沖縄風土記刊行会
 球陽研究会編 1974『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成5 角川書店
 仲原善忠、外間守善 1978『おもろさうし辞典・総索引』角川書店
 真栄平阿敷 1997『首里城物語』ひるぎ社
 沖縄大百科事典刊行事務局編 1983『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
 平凡社地方資料センター 2002『沖縄県の地名 日本歴史地名体系 48巻』平凡社
 郡築昌子 2005『龍のひそむ島—近世琉球の風水—』『沖縄史各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第3章 調査の方法と成果

第4節 層序と遺構・主な遺物

沖縄大百科事典刊行事務局編 1983『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
 沖縄県教育庁文化課 1992『首里城跡—首里城正殿跡の遺構調査—』沖縄県文化財調査報告書 第107集 沖縄県教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『首里城跡—黄金御殿地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第45集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第5節 出土遺物

1 中国産青磁

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(1)—首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡—遺構確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡(Ⅱ)—首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 新垣力、瀬戸哲也 2005『沖縄における14世紀—16世紀の中国産白磁の再整理 付・14—16世紀の青磁の様相整理メモ』『沖縄学研究3』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡—二階殿地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡—淑順門地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 瀬戸哲也、仁王浩司、玉城靖、宮城弘樹、安座間充、松原哲志 2008『沖縄における貿易陶磁研究』『紀要 沖縄学研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡—臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 森達也、徳留大輔 2012『日本人の愛した中国陶磁 龍泉窯青磁展 龍泉窯青磁展開催実行委員会
 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡—臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査—』那覇市文化財調査報告書 第91集 那覇市教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—淑順門西地区・奉神門埋壊地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『円覚寺跡(2)—右掖門・南側石牆地区の遺構確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第70集 沖縄県立埋蔵文化財センター

2 中国産白磁

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(Ⅰ)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡(Ⅱ)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡―遺構確認調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力 2003『沖縄出土の清朝磁器』『沖縄埋文研究1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力・瀬戸哲也 2005『沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理 付・14～16世紀の青磁の様相整理メモ』『沖縄埋文研究3』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡―淑順門地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡―臨港道路第1期1号線整備に伴う緊急発掘調査報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡―臨港道路第1期1号線整備事業に伴う緊急発掘調査―』那覇市文化財調査報告書 第91集 那覇市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡―淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『円覚寺跡(2)―右掖門・南側石積地区の遺構確認調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第70集 沖縄県立埋蔵文化財センター

3 中国産青花

- 小野正敏 1982『15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 陳建中 1999『徳化民窯青花』文物出版社
- 新垣力 2003『沖縄出土の清朝磁器』『沖縄埋文研究1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(Ⅰ)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡(Ⅱ)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡―遺構確認調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡―淑順門地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡―臨港道路第1期1号線整備に伴う緊急発掘調査報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡―臨港道路第1期1号線整備事業に伴う緊急発掘調査―』那覇市文化財調査報告書 第91集 那覇市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡―淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『円覚寺跡(2)―右掖門・南側石積地区の遺構確認調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第70集 沖縄県立埋蔵文化財センター

4 中国産褐釉陶器

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(Ⅰ)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡(Ⅱ)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡―遺構確認調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡一淑順門地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡一臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間亮・松原哲志 2008『沖縄における貿易陶磁研究』『紀要 沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡一臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査』那覇市文化財調査報告書 第91集 那覇市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡一淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『円覚寺跡(2)一右掖門・南側石牆地区の遺構確認調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第70集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 5 その他の中国産陶磁器・土器
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(1)一首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡(II)一首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡一遺構確認調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力 2003『沖縄出土の清朝磁器』『沖縄埋文研究1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡一二期殿地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡一淑順門地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡一臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡一臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査』那覇市文化財調査報告書 第91集 那覇市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡一淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『円覚寺跡(2)一右掖門・南側石牆地区の遺構確認調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第70集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 6 その他の輸入陶磁器・土器
- 大阪市文化財協会 1992『難波宮跡の研究9』大阪市文化財協会 1992
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・菊御門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 福岡市美術館 2001『福岡市美術館所蔵品目録 本多コレクション』福岡市美術館
- 緒仲一也 2003『堺環濠都市遺跡から出土した産地不明の貿易陶磁器』『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会
- 川江洋平 2003『産地不明の貿易陶磁一対馬・志岐・長崎』『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 7 本土産陶磁器
- 早坂優子 2000『日本・中国の文様事典』株式会社視覚デザイン研究所
- 九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年一九州近世陶磁学会10周年記念』九州陶磁学会

- 瀬戸市歴史民俗博物館 2002『特別企画展 大正二年のせともの屋』瀬戸市歴史民俗博物館
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『雪山道跡・猿引道跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(53) 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ(伊集院IC～市来IC) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『堂平空跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(106) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(1)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 8 沖縄産施釉陶器**
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998『平成10年度企画展 沖縄のやきもの―南海からの香り―』佐賀県立九州陶磁文化館
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(1)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 9 初期沖縄産無釉陶器**
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『堂平空跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(106) 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ(伊集院IC～市来IC) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(1)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力 2013『17世紀前半～中葉の琉球陶器について―「初期無釉陶器」にみる薩摩境の影響―』『鹿児島考古』第43号 鹿児島県考古学会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(V)―平成6年度調査の遺物編(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第73集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 10 沖縄産無釉陶器**
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(1)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 11 陶質土器**
- 那覇市教育委員会 1992『壺屋古窯群―個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査―』那覇市文化財調査報告書 第23集 那覇市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(1)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 12 瓦質土器・土器・カムイヤキ・土製品**
- 沖縄県教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク―宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(1)―』沖縄県文化財調査報告書 第134集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡―臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 14 煙管**
- 石井龍太 2011『琉球諸島出土キセルの基礎的研究～琉球喫煙文化の研究～』『東京大学考古学研究室研究紀要』第25号 東京大学考古学研究室
- 15 金属製品**
- 江戸道跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 久保智康 2005『金色のかざり―金属工芸にみる日本美―』京都国立博物館
- 沖縄県教育委員会 2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第4集・沖縄県文化財調査報告書 第146集 沖縄県教育委員会

- 神縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 49 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 久保智康 2010『琉球の金工』日本の美術 第 533 号（株）ぎょうせい
- 熊本市教育委員会 2011『田原坂Ⅱ—西南戦争遺跡・田原坂第 1 次調査—』熊本市の文化財 第 5 集 熊本市教育委員会
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 熊本市教育委員会 2012『田原坂Ⅱ—西南戦争遺跡・田原坂第 2 次調査—』熊本市の文化財 第 15 集 熊本市教育委員会
- 玉東町教育委員会 2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告書 第 8 集 玉東町教育委員会
- B.A. Temple 1977. The Boxer Cartridge in the British Service. Sole Trader
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（2）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 中原靖夫 2014『建築本構造工作図集』株式会社オーム社
- 16 銭貨
- 永井久美男 1994『中世の出土銭—出土銭の調査と分類』兵庫埋蔵調査会
- 永井久美男 1998『近世の出土銭—分類図版編』兵庫埋蔵調査会
- 17 漆製品
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（2）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 18 石製品・石造物
- 神縄師範学校学友会 1937『龍潭』31 号 至聖南落成記念誌 神縄師範学校学友会
- 上間清 1987『沖縄の石造構造物に関する土木史的研究』上間清
- 福島駿介 1987『沖縄の石造文化』沖縄出版
- 神縄開発行神縄総合事務局国営神縄記念公園事務所 1994『国営神縄記念公園首里城地区建設の記録』国営神縄記念公園事務所
- 首里城公園友の会編 2003『首里城の復元 正殿復元御考方・根拠を中心に』御海洋博覧会記念公園管理財団
- 上原静 2004『考古学からみた神縄諸島の遺産史』『グスク文化を考える』今婦仁村教育委員会
- 岩崎仁志 2005『近世未開視の路について』『山口考古』第 25 集 山口考古学会
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 有路倫子 2011『神縄県内における遺跡出土品』『南島考古』第 30 号 神縄考古学会
- 大塚皓平・金城貴子 2011『神縄いしの考古学』（図録）神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 19 玉・ガラス製品
- 京都市埋蔵文化財研究所 編 2004『平安京左京北辺四坊 第 2 分冊—公家編—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告書 第 22 冊 京都市埋蔵文化財研究所
- 長崎県教育委員会 2005『長崎奉行所跡・岩原目付屋敷跡・弁崎町遺跡』長崎県文化財調査報告書 第 183 集 長崎県教育委員会
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 神縄県教育委員会 2011『神縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』神縄県文化財調査報告書 第 149 集 神縄県教育委員会
- 桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六—書房
- 神縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅱ）—』神縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 神縄県立埋蔵文化財センター
- 20 骨製品・貝製品
- 上原静 2004『考古学からみた神縄諸島の遺産史』『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム（東アジアの城郭遺跡を比較して）の記録』今婦仁村教育委員会編

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 21 壁面材
 上原静 2008『龍潭』31号 至聖廟落成記念誌 沖縄縣師範学校校友会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 22 瓦
 上原静 2008『沖縄諸島における琉球瓦の再編年』『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻第2号(通巻14号) 沖縄国際大学
 石井龍太 2010『鳥瓦の考古学—琉球と瓦の物語—』新典社選書39 新典社
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—叔御門西地区・奉天門埋蔵地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 上原静 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林
- 23 埴
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 上原静 2011『琉球の埴と瓦』『南島考古』No.30 沖縄考古学会
- 24 その他の遺物
 那覇市教育委員会 1992『壺屋古窯群Ⅰ—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査—』那覇市文化財調査報告書第23集 那覇市教育委員会
 那覇市教育委員会 1992『壺屋古窯群Ⅰ—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査—』那覇市文化財調査報告書第23集 那覇市教育委員会
 沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡(1)—県庁舎行政棟建設に伴う発掘調査—』沖縄県文化財調査報告書第111集 沖縄県教育委員会
 石垣市教育委員会 1993『黒石川窯址 沖縄県石垣市黒石川(フーシナー)窯址発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第15集 石垣市教育委員会
 那覇市教育委員会 1997『壺屋古窯群Ⅲ—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査—』那覇市文化財調査報告書第23集 那覇市教育委員会
 佐賀県立九州陶磁文化館 2007『古伊万里の見方』シリーズ4 窯詰め 佐賀県立九州陶磁文化館
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 那覇市教育委員会 2012『渡地村跡—臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査—』那覇市文化財調査報告書第91集 那覇市教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 25 貝類遺体
 沖縄県教育委員会 1987『第6節 軟体動物遺存体』『石川古我知原貝塚—沖縄自動車道(石川—那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)—』沖縄県文化財調査報告書第84集 沖縄県教育委員会
 肥後忠重・奥谷喬司 1994『学生物図鑑 貝Ⅱ 二枚貝・陸貝・イカ・タコほか』株式会社学習研究社
 肥後俊一・後藤芳央 編著 1993『日本及び周辺地域軟体動物総目録』エル貝類出版局
 久保弘文・黒住詔二 1995『生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版
 奥谷喬司 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
 本部町教育委員会 2009『瀬底島・アンチの上貝塚』本部町文化財調査報告書 第9集 本部町教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『白保平根田原洞穴遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 65 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡-淑順門西地区-奉神門埋蔵地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 68 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 26 脊椎動物遺体
- 加藤嘉太郎 1979『家畜比較解剖図説 上巻』株式会社養賢堂
- 中坊敬次 編 2000『日本産魚類検索 全種の同定 第二版』東海大学出版会
- 松岡廣嗣・安部みき子・伊藤恵夫・原島広至・タカワカズヒト 2009『鳥の骨標』株式会社エヌ・ティー・エス
- 菅原広史 2011『第 5 章 第 28 節 脊椎動物遺体』『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 p260-276 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 福原岳二 2013『第 5 章 第 3 節 首里城跡淑順門西地区から出土した脊椎動物遺体』『首里城跡-淑順門西地区-奉神門埋蔵地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 68 集 p201-235 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 菅原広史 2013『第 3 章 第 5 節 27 脊椎動物遺体』『首里城跡-御内原北地区発掘調査報告書(2)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 p.297-326 沖縄県立埋蔵文化財センター

第 4 章 自然科学分析

第 1 節 放射性炭素年代測定・樹種同定

- 林昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81 - 181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66 - 176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83 - 201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30 - 166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 17 - 216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第 2 節 漆塗膜の分析

- 本多貴之・宮腰哲雄 2012『漆製品の科学分析』東京大学総合研究博物館, 吉田邦夫編『アルケオメトリアー考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』pp.231 - 248 東京大学総合研究博物館
- 吉田邦夫・本多貴之 2013『第 2 節 赤色塗膜の自然科学分析』『首里城跡-御内原北地区発掘調査報告書(2)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第 5 章 総括

- 沖縄縣師範学校校友会 1937『龍潭』31号 至聖廟落成記念誌 沖縄縣師範学校校友会
- ラブ オージュリほか 1987『青い目が見た「大琉球」GREAT LEWCHEW DISCOVERED』ニライ社
- 沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 1994『国営沖縄記念公園首里城地区建設の記録』国営沖縄記念公園事務所
- 首里城公園友の会編 2003『首里城の復元 正殿復元の考え方・根拠を中心に』@海洋博覧会記念公園管理財団
- 仲座久宜 2009『シーロ遺構からみる御内原のくらし』『紀要 沖縄埋文研究 6』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡-御内原北地区発掘調査報告書(1)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡-御内原北地区発掘調査報告書(2)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと		
書名	首里城跡		
副書名	銭蔵地区発掘調査報告書		
巻次			
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書		
シリーズ番号	第77集		
編著者名	仲座久宜（編）、宮城淳一、具志堅清大、亀島慎吾、宮里知恵、保久盛 陽、波木基真、バリノ・サーヴェイ株式会社		
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター		
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL：098-835-8752		
発行年月日	平成27（2015）年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
しゅりじょうあと 首里城跡	おきなわのなまほし 沖縄県那覇市 しゅりじょうのちんちん 首里当蔵町	47201	—	26° 13' 2"	127° 43' 11"	① 2006.09.01 ～2007.03.09 ② 2007.09.03 ～2007.10.28 ③ 2008.09.01 ～2009.02.28	約560㎡	首里城復元 整備に伴う 遺構確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	城跡	中世～近世	石畳遺構 方形石組遺構 礎石跡 石列 敷石遺構 ピット 石造製品加工 場跡 集石遺構 造成層	中国産青磁 中国産白磁 中国産青花 中国産褐釉陶器 その他中国産陶磁器・土器 その他輸入陶磁器・土器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 初期沖縄産無釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器 瓦葺土器・土器・カムイヤキ・土製品 円盤状製品・煙管 金属製品・銭貨・漆製品 玉・ガラス製品 石製品・石造物 骨製品・貝製品 埴面材・瓦・埴 その他の遺物 貝類遺体・微小貝 脊椎動物遺体	建物地下構造物や石 畳遺構、石造製品加 工を行っていた痕跡 のほか、外郭拡張時 の造成層が確認され ている。出土遺物は、 13世紀代～近代に 至る各地で焼成され た陶磁器類や武具等 の人工遺物、食料と した自然遺物などが 数多く出土している。

要 約	<p>戦前～戦後の改変により、銭蔵の遺構は確認できなかったが、15～16世紀の造成層とともに、石畳遺構や方形石組遺構等の建物や施設に付随する遺構が検出された。また、17世紀前半の石造製品加工場跡が確認され、当該地で石造物等を加工していた可能性を示した。近代の遺構としては、首里至聖廟の瓦石堀の根石と考えられる集石遺構が確認され、当地の変遷を見ることができた。</p> <p>出土遺物は、多くの輸入陶磁器から、中国や東南アジア、日本と交易を行っていたことがわかった。また、17世紀前半の初期沖縄産無釉陶器も多数出土し、近代の遺物としては首里至聖廟の復興を記念して建立された石碑や壁面材のほか、熊本鎮台沖縄分遣隊が装備していたと思われる銃器の部品等が出土している。自然科学分析として、放射性年代測定と漆塗膜の成分分析を行い、遺構や造成層の概ねの年代と漆の産地、成分を解明することができた。</p>
-----	--

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第77集

首里城跡

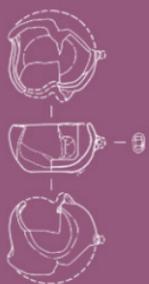
— 銭蔵地区発掘調査報告書 —

発行日 平成27(2015)年3月31日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL: 098-835-8751・8752

印刷 光文堂コミュニケーションズ株式会社
〒901-1111 沖縄県南風原町兼城577番地

表紙：方形石組遺構平面図
裏表紙：中国産色絵刺入札



首 里 城 跡

— 銭蔵地区発掘調査報告書 —

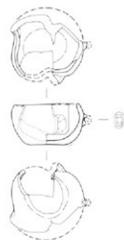
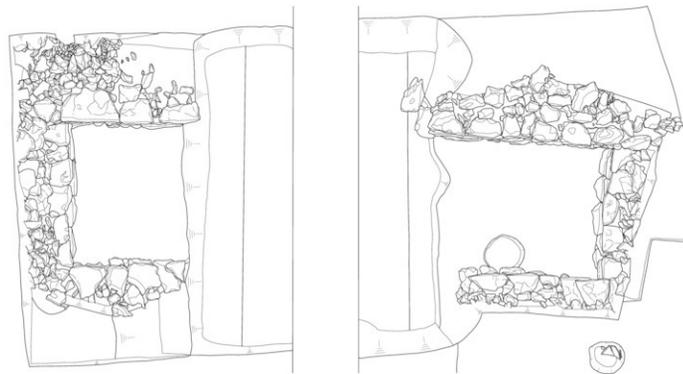


表 紙：方形石組遺構平面図
裏表紙：中国産色鉛筆入札

— 銭蔵地区発掘調査報告書 —

平成二十七年(二〇一五年)三月

沖縄県立埋蔵文化財センター



平成27(2015)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター